－松山市道南北梅本線関連遺跡－

南梅本上方遺跡

１次・２次調査地

南梅本長広遺跡

１次・２次調査地

2007

松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

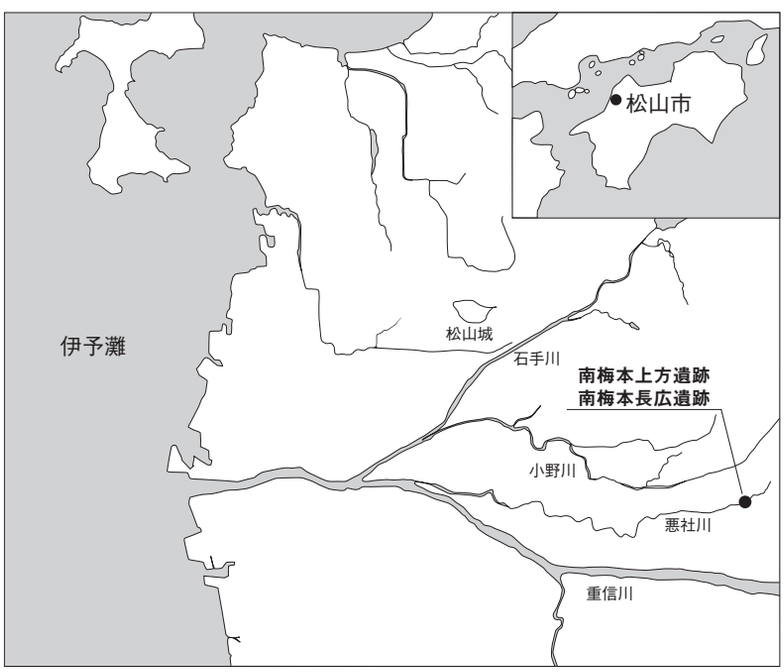
－松山市道南北梅本線関連遺跡－

南梅本上方遺跡

１次・２次調査地

南梅本長広遺跡

１次・２次調査地



２００７

松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

巻頭図版１　調査地遠景（南より）

巻頭図版２　南梅本上方遺跡１区完掘状況　（北東より）

巻頭図版３　南梅本長広遺跡２次調査地　石列・石敷遺構検出状況（東より）

序

本報告書は、平成 15 ～ 17 年度に調査した松山市道「南北梅本線」道路改良工事に伴い発掘調査された南梅本上方遺跡、南梅本長広遺跡の報告書です。

遺跡が位置する松山平野南東部は、木棺が出土し、当時の葬送儀礼が明らかとなった葉佐池古墳をはじめ、近接する播磨塚天神山古墳など古墳時代後期の前方後円墳や円墳が数多く築造されるエリアとして知られています。調査の結果、この遺跡は中世集落跡であることが分かりました。検出された遺構・遺物は、往時の人々が生きいきと暮らしていたことを想像させてくれます。

このような成果をあげることができましたのも、関係者各位の皆様の埋蔵文化財に対する深い御理解・御協力のたまものであり、厚く御礼申し上げます。

本書が、郷土の歴史への理解を深められる際の一助になるとともに、各方面で広く御活用いただければ幸いです。

平成 19 年 3 月 31 日

財団法人松山市生涯学習振興財団
理事長　中　村　時　広

例　　言

1. 本書は、松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが平成15年9月～平成17年9月までに実施した松山市道南北梅本線道路改良工事に伴う事前調査報告書である。

2. 遺構の実測は、担当調査員及び山邊進也、武智洋明、國田克彦、高橋　裕、原見慶太、畑辺友之が担当し、作図・製図は担当調査員及び武智洋明、金子育代、猪野美喜子、岩本美保、木下奈緒美、村上真由美が行い、戸川安子、大庭美鈴、堀眞也の協力を得た。

3. 遺構は呼称を略号で記述した。竪穴住居址：ＳＢ、溝：ＳＤ、畝：ＳＭ、土坑：ＳＫ、柱穴：ＳＰ、掘立柱建物跡：掘立である。

4. 本書にかかる図面の作成は、小笠原善治、武正良浩、金子育代、猪野美喜子、渡邊佐代枝、木下奈緒美、戸川安子、大庭美鈴、國田克彦、堀眞也、浅井茂之が行った。

5. 遺物の接合･復元は青野茂子、西川千秋、松本美代子、渡部英子、金子育代、猪野美喜子、岩本美保、木下奈緒美、村上真由美、伊賀瀬京子が担当した。

6. 遺構図・遺物図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。

7. 本書に使用した方位は真北である。

8. 本書にかかわる遺物及び記録類は、松山市立埋蔵文化財センターに収蔵・保管されている。

9. 出土木製品に関しては山本健一、縄文土器については栗田茂敏、中世に属する遺物に関しては栗田正芳･西村直人・栗田茂敏の協力を得 、近世に属する遺物は神山朋也の指導を賜った。また須恵器に関しては三吉秀充（独立行政法人愛媛大学埋蔵文化財調査室）、の指導を賜った。

10. 本調査における基準点測量は㈱イーエム、㈱ＧＩＳ四国、南海測量設計㈱、航空写真撮影は㈱ウエスコに業務委託した。

11. 本調査における自然科学分析は、㈱古環境研究所に業務委託した。

12. 遺構の写真撮影は大西朋子、相原浩二、小笠原善治、武正良浩、吉岡和哉が行い、遺物撮影及び写真レイアウトは大西朋子が行った。

13. 本書は小笠原善治、武正良浩が分担執筆した。本書の編集は田城武志の指導のもと小笠原善治が行い、相原浩二、河野史知、山本健一、武正良浩の協力を得た。

本　文　目　次

第１章　はじめに　［武正］

１. 調査に至る経過 …… 1
２. 調査･刊行組織 …… 2

第２章　遺跡の概要　［武正］

１. 地理的環境 …… 7
２. 歴史的環境 …… 8

第３章　調査の概要　［武正］

１. 調査の経緯 …… 13

第４章　南梅本上方遺跡　［武正］

１. 調査の経緯 …… 17
２. 層位 …… 21
３. 遺構と遺物 …… 21
４. 小結 …… 34

第５章　南梅本上方遺跡２次調査地　［小笠原］

１. 調査の経緯 …… 45
２. 層位 …… 47
３. 遺構と遺物 …… 53
４. 小結 …… 55

第６章　南梅本長広遺跡　［小笠原］

１. 調査の経緯 …… 59
２. 層位 …… 64
３. 遺構と遺物 …… 71
４. 小結 …… 120

第７章　南梅本長広遺跡２次調査地　［小笠原］

１. 調査の経緯 …… 129
２. 層位 …… 136
３. 遺構と遺物 …… 141
４. 小結 …… 152

第８章　自然化学分析 …… 157

第９章　まとめ　［小笠原］…… 173

挿　図　目　次

第 1 図　調査対象地位置図（縮尺 1 /6,000）…… 1
第 2 図　松山平野の地形分類図（縮尺 1 /200,000）…… 7
第 3 図　調査地周辺の主要遺跡分布図（縮尺 1 /30,000）…… 9
第 4 図　調査地と調査区位置図（縮尺 1 /4,000）…… 13

南梅本上方遺跡

第 5 図　調査区位置図（縮尺 1/1,000）…… 17
第 6 図　１区・２区遺構配置図（縮尺 1/300）…… 18
第 7 図　１区・２区東壁土層図（縮尺 1/40）…… 19
第 8 図　１区遺構配置図（縮尺 1/150）…… 20
第 9 図　掘立１測量図（縮尺 1/60）…… 22
第 10 図　掘立１出土遺物実測図（縮尺 1/3）…… 23
第 11 図　掘立２測量図・出土遺物実測図（縮尺 1/60、1/3）…… 24
第 12 図　掘立３測量図・出土遺物実測図（縮尺 1/60、1/3）…… 25
第 13 図　掘立４・ＳＡ１測量図（縮尺 1/60 ）…… 26
第 14 図　ＳＰ 111 測量図（縮尺 1/20 ）…… 26
第 15 図　掘立４・ＳＡ出土遺物実測図（縮尺 1/3）…… 27
第 16 図　ＳＰ 111 出土遺物実測図（縮尺 1/4）…… 27
第 17 図　ＳＤ２出土遺物実測図（縮尺 1/3）…… 28
第 18 図　ＳＤ４出土遺物実測図（縮尺 1/3）…… 28
第 19 図　ＳＰ 131・132・144 出土遺物実測図（縮尺 1/3）…… 28
第 20 図　ＳＰ 23 出土遺物実測図（縮尺 1/4）…… 29
第 21 図　ＳＫ４出土遺物実測図（縮尺 1/2）…… 30
第 22 図　ＳＸ１・３出土遺物実測図（縮尺 1/3）…… 30
第 23 図　２区遺構配置図（縮尺 1/150）…… 31
第 24 図　ＳＰ 157 出土遺物実測図（縮尺 1/4）…… 32
第 25 図　包含層出土遺物実測図（縮尺 1/3）…… 33
第 26 図　表採遺物実測図（縮尺 1/3、1/2）…… 34

南梅本上方遺跡２次調査地

第 27 図　調査地位置図（縮尺 1/700）…… 46
第 28 図　調査区座標配置図（縮尺 1/300）…… 47
第 29 図　遺構配置図（縮尺 1/150）…… 48

第 30 図　北壁・東壁土層図（縮尺 1/40）……49・50
第 31 図　南壁・西壁土層図（縮尺 1/40）……51・52
第 32 図　掘立 1 測量図（縮尺 1/40）……53
第 33 図　礫群測量図（縮尺 1/60）……54
第 34 図　出土遺物実測図（縮尺 1/3、1/1）……55

南梅本長広遺跡

第 35 図　調査地位置図（1）……60
第 36 図　調査地位置図（2）（縮尺 1/700）……61
第 37 図　遺構配置図（縮尺 1/70）……63
第 38 図　調査区座標配置図（縮尺 1/300）……64
第 39 図　調査区土層図１（縮尺 1/50）……65・66
第 40 図　調査区土層図２（縮尺 1/50）……67・68
第 41 図　調査区土層図３（縮尺 1/50）……69・70
第 42 図　ＳＫ 21・29・32 測量図（縮尺 1/40）……73
第 43 図　ＳＰ（柱穴）測量図（1）・出土遺物実測図（縮尺 1/20、1/4）……75
第 44 図　ＳＰ（柱穴）測量図（2）（縮尺 1/20）……76
第 45 図　ＳＰ（柱穴）測量図（3）・出土遺物実測図（縮尺 1/20、1/3）……77
第 46 図　ＳＸ 1 測量図（縮尺 1/40）……78
第 47 図　ＳＫ３測量図（縮尺 1/40）……79
第 48 図　ＳＤ 10 測量図（縮尺 1/50）……80
第 49 図　ＳＫ４・８測量図（縮尺 1/40）……81
第 50 図　ＳＫ 1 測量図（1）（縮尺 1/50）……82
第 51 図　ＳＫ 1 測量図（2）（縮尺 1/50）……83
第 52 図　ＳＫ 1 出土遺物実測図（1）（縮尺 1/4、1/3）……84
第 53 図　ＳＫ 1 出土遺物実測図（2）（縮尺 1/3）……85
第 54 図　ＳＫ２・５測量図（縮尺 1/40）……86
第 55 図　ＳＫ６・７測量図・ＳＫ６出土遺物実測図（縮尺 1/40、1/3）……87
第 56 図　ＳＫ９・10 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1/40、1/3）……88
第 57 図　ＳＫ 11・12 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1/40、1/3）……89
第 58 図　ＳＫ 13・14・15・16 測量図（縮尺 1/40）……90
第 59 図　ＳＫ 15・16 出土遺物実測図（縮尺 1/3）……90
第 60 図　ＳＫ 17・18 測量図（縮尺 1/40）……91
第 61 図　ＳＫ 17 出土遺物実測図（縮尺 1/3）……92
第 62 図　ＳＫ 18 出土遺物実測図（縮尺 1/3）……92
第 63 図　ＳＫ 19 測量図（縮尺 1/40）……94
第 64 図　ＳＫ 20・22・23 測量図（縮尺 1/40）……95

第 65 図　ＳＫ 22・23 出土遺物実測図（縮尺 1/3）…… 96
第 66 図　ＳＫ 24 測量図（縮尺 1/40）　…… 97
第 67 図　ＳＫ 25・26 測量図（縮尺 1/40）…… 97
第 68 図　ＳＫ 27 測量図・出土遺物実測図（縮尺 1/40、1/3）　…… 98
第 69 図　ＳＫ 30・31 測量図（縮尺 1/40）…… 98
第 70 図　ＳＫ 36・37 測量図（縮尺 1/40）…… 99
第 71 図　ＳＫ 36 出土遺物実測図（縮尺 1/3）　…… 99
第 72 図　ＳＫ 39 測量図（縮尺 1/40）…… 100
第 73 図　ＳＤ１・２測量図（縮尺 1/50）　…… 101
第 74 図　ＳＤ１出土遺物実測図（縮尺 1/3）…… 102
第 75 図　ＳＤ３・４測量図（縮尺 1/40）　…… 102
第 76 図　ＳＤ５・６・７測量図（縮尺 1/40）　…… 103
第 77 図　ＳＤ８測量図（縮尺 1/60）　…… 104
第 78 図　ＳＤ８出土遺物実測図（縮尺 1/3）…… 105
第 79 図　ＳＤ９測量図・出土遺物実測図（縮尺 1/60、1/3）…… 106
第 80 図　ＳＤ 11・12・13 測量図（縮尺 1/40）　…… 107
第 81 図　ＳＤ 14・15 測量図（縮尺 1/40）…… 108
第 82 図　ＳＭ（畝状遺構）配置図（縮尺 1/70）　…… 109
第 83 図　ＳＭ（畝状遺構）測量図（1）（縮尺 1/20）　…… 110
第 84 図　ＳＭ８（畝状遺構）測量図（縮尺 1/20）　…… 111
第 85 図　ＳＭ 10（畝状遺構）測量図（縮尺 1/20）…… 112
第 86 図　ＳＭ（畝状遺構）測量図（2）（縮尺 1/20）　…… 113
第 87 図　ＳＭ（畝状遺構）測量図（3）（縮尺 1/20）　…… 114
第 88 図　ＳＰ 15・57 測量図（縮尺 1/20）　…… 116
第 89 図　ＳＰ 67・92 測量図（縮尺 1/20）　…… 117
第 90 図　ＳＸ４測量図（縮尺 1/40）　…… 117
第 91 図　ＳＸ２・３測量図（縮尺 1/40）　…… 118
第 92 図　ＳＸ５測量図（縮尺 1/40）　…… 119
第 93 図　ＳＰ 15・57・67・92 出土遺物実測図（縮尺 1/3）　…… 120

南梅本長広遺跡２次調査地

第 94 図　調査地位置図１　…… 130
第 95 図　調査地位置図２（縮尺 1/1,000）　…… 131
第 96 図　遺構配置図（縮尺 1/500）　…… 133
第 97 図　Ａ区遺構配置図（縮尺 1/80）　…… 134
第 98 図　Ｂ区遺構配置図（縮尺 1/80）　…… 135
第 99 図　調査区土層柱状図　…… 136

第 100 図　Ａ区土層図（縮尺 1/40）……137・138
第 101 図　Ｂ区土層図（縮尺 1/40）……139・140
第 102 図　ＳＫ１測量図（縮尺 1/40）……141
第 103 図　ＳＤ１出土遺物実測図（縮尺 1/3）……141
第 104 図　ＳＤ１測量図（縮尺 1/60）……142
第 105 図　ＳＤ２・３・４測量図（縮尺 1/40）……143
第 106 図　ＳＸ１測量図（縮尺 1/40）……144
第 107 図　石列（暗渠）測量図（縮尺 1/50）……144
第 108 図　柱穴出土遺物実測図（縮尺 1/3）……145
第 109 図　ＳＫ１・２・３・４測量図（縮尺 1/40）……146
第 110 図　ＳＫ３出土遺物実測図（縮尺 1/3、1/1）……147
第 111 図　集石測量図・周辺出土遺物実測図（縮尺 1/40、1/4）……148
第 112 図　石列・石敷測量図（縮尺 1/50）……149
第 113 図　石列・石敷出土遺物実測図（縮尺 1/4、1/3、1/1）……150
第 114 図　石敷下出土遺物実測図（縮尺 1/4、1/3）……150
第 115 図　ＳＰ８・11・第Ⅱ層出土遺物実測図（縮尺 1/4、1/3、1/1）……150
第 116 図　ＳＰ８・11 測量図（縮尺 1/20）……152

自然科学分析

第 117 図　南梅本上方遺跡における樹種同定結果（1）……160
第 118 図　南梅本上方遺跡における樹種同定結果（2）……161
第 119 図　南梅本上方遺跡における種実遺体……163
第 120 図　南梅本上方遺跡における植物珪酸体分析結果……167
第 121 図　南梅本上方遺跡における植物珪酸体の顕微鏡写真……168
第 122 図　南梅本上方遺跡における花粉・胞子の顕微鏡写真……172

表　目　次

南梅本上方遺跡

表１　遺構一覧……35
表２　出土遺物観察表　土製品……41
表３　出土遺物観察表　木製品……42
表４　出土遺物観察表　金属品……42
表５　出土遺物観察表　石製品……42

南梅本上方遺跡 2 次調査地

表 6　掘立柱建物址一覧 …… 56
表 7　礫群遺構一覧 …… 56
表 8　出土遺物観察表　土製品 …… 56
表 9　出土遺物観察表　石製品 …… 56

南梅本長広遺跡

表 10　土坑一覧 …… 121
表 11　性格不明遺構一覧 …… 122
表 12　溝一覧 …… 123
表 13　畝状遺構一覧 …… 123
表 14　出土遺物観察表　土製品 …… 124
表 15　出土遺物観察表　石製品 …… 126

南梅本長広遺跡 2 次調査地

表 16　A 区土坑一覧 …… 153
表 17　A 区溝一覧 …… 153
表 18　A 区性格不明遺構一覧 …… 153
表 19　A 区石列遺構一覧 …… 153
表 20　A 区出土遺物観察表　土製品 …… 154
表 21　B 区土坑一覧 …… 154
表 22　B 区石製施設一覧 …… 154
表 23　B 区出土遺物観察表　土製品 …… 154
表 24　B 区出土遺物観察表　石製品 …… 156
表 25　B 区出土遺物観察表　銭貨 …… 156

自然科学分析

表 26　南梅本上方遺跡における樹種同定結果 …… 159
表 27　南梅本上方遺跡における植物珪酸体分析結果 …… 166
表 28　南梅本上方遺跡における花粉分析結果 …… 171

図　版　目　次

巻頭図版１．調査地遠景（南より）
巻頭図版２．南梅本上方遺跡１区完掘状況（北東より）
巻頭図版３．南梅本長広遺跡２次調査地　石列・石敷遺構検出状況（南より）

南梅本上方遺跡

図 版 1　１．１区遺構検出状況（北より）
図 版 2　１．１区東壁土層（北西より）　２.掘立１(掘立柱建物跡)検出状況(南東より)
図 版 3　１．ＳＰ 26 遺物出土状況（南西より）　２．ＳＰ２（右）遺物出土状況（南より）
図 版 4　１．ＳＰ 111 木製礎検出状況（北東より）２．ＳＰ 111 木製礎出土状況（北より）
図 版 5　１．１区完掘状況（北東より）　２．掘立１(掘立柱建物跡) 完掘状況(北東より)
図 版 6　１．ＳＤ４完掘状況（北より）
図 版 7　１．２区遺構検出状況（北より）　２．２区完掘状況（北より）
　３．ＳＰ 157 柱根出土状況（南より）
図 版 8　１．掘立１出土遺物（１～７)、掘立２出土遺物（８・９)、掘立３出土遺物（10)
図 版 9　１．掘立４出土遺物（11・12)、ＳＡ１出土遺物（13～15)、ＳＤ２出土遺物（17・18)
　ＳＰ 131 出土遺物（27)、ＳＰ 132 出土遺物（28)、ＳＰ 144 出土遺物（29)
　ＳＸ１出土遺物（32・33)、ＳＸ３出土遺物（34)
図版 10　１．ＳＤ４出土遺物（19～26)
図版 11　１．包含層出土遺物（36～48・50)、表土採集遺物（51～57)
図版 12　１．ＳＰ 111 出土遺物（16)、ＳＰ 23 出土遺物（30)、ＳＰ 157 出土遺物（35)
　ＳＫ４出土遺物（31)、表土採集遺物（58)

南梅本上方遺跡２次調査地

図版 13　１．調査前調査地全景（南より）　２．遺構検出状況（北より）
図版 14　１．遺構完掘状況（南より）　２．掘立１完掘状況（南より）
図版 15　１．掘立１（SP ２）遺物出土状況（南より）　２．掘立１（SP ６）遺物出土状況（南より）
図版 16　１．礫群検出状況（北より）　２．礫群完掘状況（南東より）
図版 17　１．西壁土層（東より）　２．南西壁土層（北東より）
図版 18　１．掘立１出土遺物（１・２)、礫群出土遺物（３)、遺構外出土遺物（４～８）

南梅本長広遺跡

図版 19　1．調査地調査前風景（北より）　2．Ａ区遺構検出状況（北より）
図版 20　1．Ａ区遺構検出状況（南東より）　2．Ａ区遺構検出状況（東より）
図版 21　1．ＳＫ１検出状況（南西より）
　　2．ＳＫ１内礫群および小溝検出状況１（南西より）
図版 22　1．ＳＫ１内礫群および小溝検出状況２（東より）
　　2．ＳＫ１掘り方状況（南西より）
図版 23　1．ＳＫ１内礫群半裁状況（南より）　2．ＳＫ１完掘状況（西より）
図版 24　1．ＳＫ２・３検出状況（西より）　2．ＳＫ４半掘状況（南より）
図版 25　1．ＳＫ６・ＳＤ３半掘状況（東より）　2．ＳＫ７掘り下げ状況（東より）
図版 26　1．ＳＫ 11・12 半掘状況（南より）　2．ＳＫ 11・12 完掘状況（東より）
図版 27　1．ＳＫ 13 掘り下げ状況（西より）
　　2．ＳＫ 14・15・18・19・39 検出状況（東より）
図版 28　1．ＳＫ 14・15・18・19・39 完掘状況（東より）
　　2．ＳＫ 21 完掘・土層状況（南西より）
図版 29　1．ＳＸ４礫群検出状況（西より）
　　2．ＳＸ４礫群除去後ＳＫ 22・23 検出状況（西より）
図版 30　1．ＳＫ 22・23 半掘状況（南西より）　2．ＳＫ 22・23 完掘状況（東より）
図版 31　1．ＳＤ１・２掘り下げ状況１（東より）　2．ＳＤ１・２掘り下げ状況２（東より）
図版 32　1．ＳＸ１掘り下げ状況（東より）　2．ＳＸ１完掘状況（西より）
図版 33　1．Ａ区遺構完掘状況（北より）　2．Ｂ区遺構検出状況（北より）
図版 34　1．ＳＫ 17 掘り下げ状況（東より）　2．ＳＫ 17 遺物出土状況１（北より）
図版 35　1．ＳＫ 17 遺物出土状況２（南より）　2．ＳＫ 25 掘り下げ状況（北より）
図版 36　1．ＳＫ 26 半掘状況（南より）　2．ＳＫ 26 完掘状況（東より）
図版 37　1．ＳＫ 27 掘り下げ状況（北より）　2．ＳＫ 27 完掘状況（南東より）
図版 38　1．ＳＫ 29 掘り下げ状況（東より）　2．ＳＫ 31 半掘状況（東より）
図版 39　1．ＳＫ 31 内礫検出状況（西より）　2．ＳＫ 31･36･37･38 掘り下げ状況（西より）
図版 40　1．ＳＫ 35 掘り下げ状況（南東より）　2．ＳＫ 36 遺物出土状況１（南より）
図版 41　1．ＳＫ 36 遺物出土状況２（南より）　2．ＳＤ８掘り下げ状況（南東より）
図版 42　1．ＳＤ９・10 掘り下げ状況（南より）　2．ＳＤ 10 土層状況（南より）
図版 43　1．ＳＤ 11・13 掘り下げ状況（東より）　2．畝状遺構完掘状況（西より）
図版 44　1．Ｂ区完掘状況（北より）　2．西壁土層１（南東より）
図版 45　1．西壁土層２（東より）　2．西壁土層３（東より）
図版 46　1．調査地遠景（東より）　2．調査地遠景（南より）
図版 47　1．ＳＫ１出土遺物
図版 48　1．ＳＫ６出土遺物（21）、ＳＫ 10 出土遺物（22）、ＳＫ 11 出土遺物（23）
　　ＳＫ 15 出土遺物（25）、ＳＫ 16 出土遺物（26・27）

図版 49　1．ＳＫ 17 出土遺物（28 ～ 32）、ＳＫ 18 出土遺物（33 ～ 36）、ＳＫ 22 出土遺物（37）
ＳＫ 27 出土遺物（39）
図版 50　1．ＳＫ 23 出土遺物（38）、ＳＫ 36 出土遺物（40）、ＳＤ１出土遺物（41・42）
ＳＤ９出土遺物（51）
図版 51　1．ＳＤ８出土遺物（43 ～ 50）、ＳＰ出土遺物（１・52 ～ 55）

南梅本長広遺跡２次調査地

図版 52　1．Ａ・Ｂ区遺構完掘状況（北より）
図版 53　1．Ａ区遺構検出状況（北より）　2．Ｂ区遺構検出状況（北西より）
図版 54　1．石列（暗渠）検出状況（西より）　2．集石検出状況（北より）
図版 55　1．石列・石敷検出状況（北西より）　2．第１石列除去後状況（北西より）
図版 56　1．石敷掘り下げ状況１（西より）　2．石敷掘り下げ状況２（北西より）
図版 57　1．作業風景（東より）　2．ＳＫ３遺物出土状況（西より）
図版 58　1．Ａ区：ＳＤ１出土遺物（１・２）、ＳＰ７出土遺物（３）
Ｂ区：ＳＫ３出土遺物（４～ 18）、ＳＰ８出土遺物（38）
図版 59　1．石列・石敷出土遺物　2．集石遺構出土遺物（19・20）
石敷下出土遺物(31 ～ 35)第Ⅱ層出土遺物(36)

第１章　はじめに

１．調査に至る経過

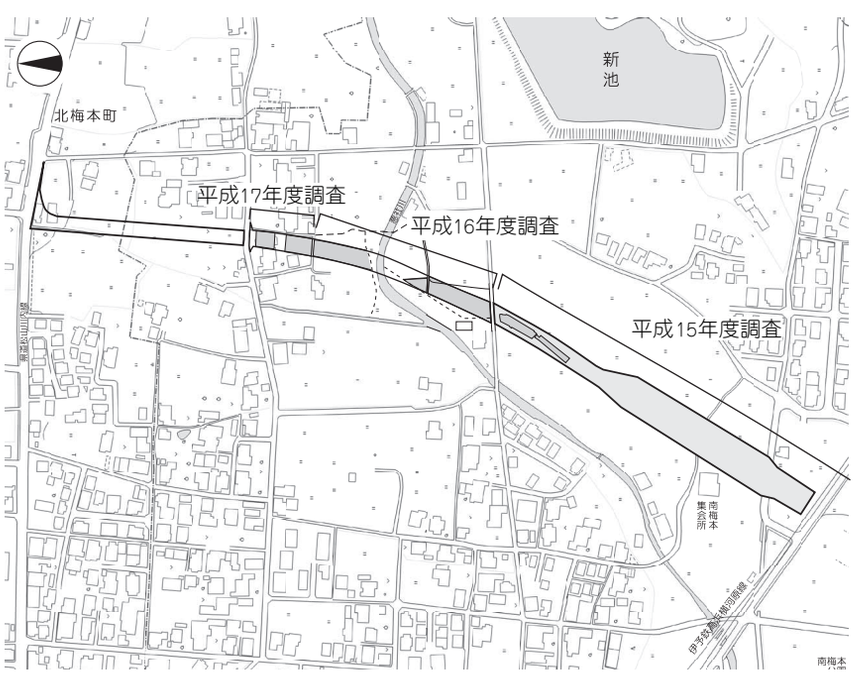
2003(平成15)年５月13日、松山市都市整備部道路建設課(以下、道路建設課）より松山市道南北梅本線(松山市北梅本町～南梅本町）道路改良工事に伴う埋蔵文化財の試掘・確認調査申請が、松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。

申請地は、松山市指定の埋蔵文化財包蔵地「№107 播磨塚古墳群」と「№142 水泥遺物包含地」に挟まれる埋蔵文化財包蔵未指定地である。しかしながら近年、申請地周辺に幾つかの古墳が遺存することが明らかとなっており、当該期あるいはその前後の集落関連遺跡が周囲に展開する可能性を否定できない状況となりつつある。これらのことから、文化財課と道路建設課は協議を行い、申請地内における遺跡の有無と、さらにはその範囲や性格を確認するために、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）が試掘調査及び発掘調査を実施することとなった。

試掘調査は、道路改良工事の工程や既存建物の立ち退き（解体撤去）状況によって数回に分けて実施した。2003（平成15）年６月、申請地の中央部にあたる南梅本町甲100-1外において第１回目の試掘調査を実施した。調査の結果、遺構・遺物が検出され、中世期の集落関連遺跡が遺存することを確認した。その後試掘調査報告書、出土遺物等を基に検討がなされ、遺跡が確認された区間については本格調査が必要と判断された。

この結果を受け、道路建設課、文化財課、埋文センターの三者は発掘調査について協議を行い、道路改良工事によって遺跡が失われる該当エリアについて記録保存を目的とした本格調査を実施する事となった。

調査は、現況農道や生活道路などの保全が前提であり、用地買収等の関係で継続的に３年次の工程で実施された。



第１図　調査対象地位置図　（S=1:6,000）

2．調査委託

松山市都市整備部道路建設課

3．調査・刊 行 組 織

平成 15 年度 調査組織

松山市教育委員会	教 育 長	中矢　陽三
事務局	局　　長	武井　正浩
	企 画 官	遠藤　宗敏
	企 画 官	石丸　　修
文化財課	課　　長	八木　方人
	主　　幹	家久　則雄
	副 主 幹	田城　武志
	副 主 幹	重松　佳久
(財) 松山市生涯学習振興財団	理 事 長	中村　時広
	事務局長	三宅　泰生
	事務局次長	菅　　嘉見
埋蔵文化財センター	所　　長	杉田　久憲
	専門監兼学芸係長	高本　昌陽
	次長兼調査係長	西尾　幸則
	管理係長	岸本　照修
	調 査 員	相原　浩二
	調 査 員	武正　良浩
	調 査 員	吉岡　和哉
	調 査 員	大西　朋子 (写真担当)

平成 16 年度　調査組織（平成 17 年 3 月 31 日現在）

松山市教育委員会	教 育 長	土居　貴美
事務局	局　　長	久保　浩三
	企 画 官	丹生谷博一
	企 画 官	石丸　　修
	企 画 官	仙波　和典
文化財課	課　　長	篠原　忠人
	主　　幹	家久　則雄
	副 主 幹	田城　武志
	主　　査	栗田　正芳
(財) 松山市生涯学習振興財団	理 事 長	中村　時広
	事務局長	三宅　泰生
	事務局次長	池田　正勝
埋蔵文化財センター	所　　長	杉田　久憲
	専門監兼学芸係長	早瀬　忠幸
	次長兼調査係長	西尾　幸則
	管理係長	岸本　照修
	調 査 員	河野　史知
	調 査 員	小笠原 善治
	調 査 員	大西　朋子 (写真担当)

平成 17 年度　調査組織

松山市教育委員会	教 育 長	土居　貴美
事務局	局　　長	石丸　　修
	企 画 官	松本　義文
	企 画 官	仙波　和典
	企 画 官	江戸　通敏
文化財課	課　　長	篠原　忠人
	主　　幹	家久　則雄
	主　　幹	田城　武志
	主　　査	栗田　正芳
(財) 松山市生涯学習振興財団	理 事 長	中村　時広
	事務局長	一色　　巧
	事務局次長	石丸　允良
	事務局次長	丹生谷 博一
	事務局調査監	杉田　久憲
埋蔵文化財センター	所　　長	丹生谷 博一
	次長兼管理係長	重松　幹雄
	次長兼調査係長	西尾　幸則
	学芸係長	大北　冬彦
	調 査 員	河野　史知
	調 査 員	小笠原 善治
	調 査 員	大西　朋子 (写真担当)

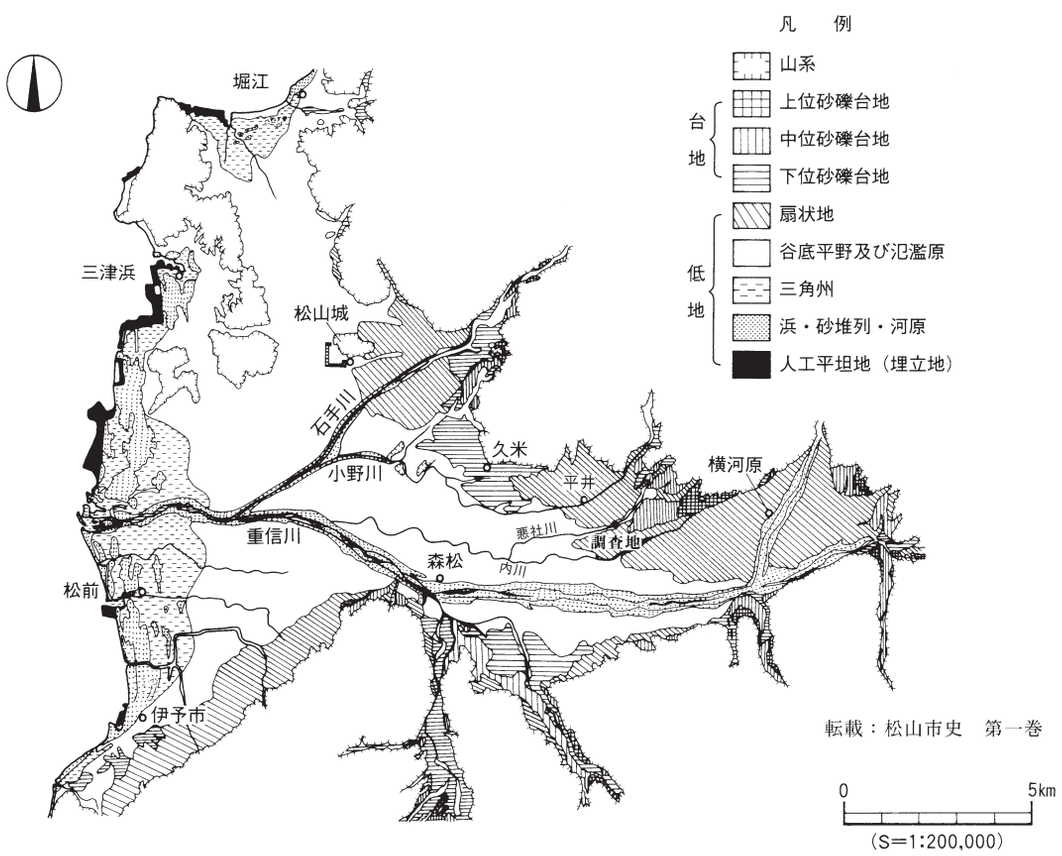
平成 18 年度　刊行組織（平成 19 年3月 31 日現在）

松山市教育委員会	教 育 長	土居　貴美
事務局	局　　長	石丸　　修
	企 画 官	宮内　健二
	企 画 官	仙波　和典
	企 画 官	江戸　通敏
文化財課	課　　長	家久　則雄
	主　　幹	(故) 西尾　幸則
	主　　査	栗田　正芳
(財) 松山市生涯学習振興財団	理 事 長	中村　時広
	事務局長	吉岡　一雄
	事務局次長	丹生谷 博一
	事務局調査監	杉田　久憲
埋蔵文化財センター	所長兼考古館館長	丹生谷 博一
	次長兼管理係長	重松　幹雄
	次長兼調査係長	田城　武志
	学芸係長	大北　冬彦
	調 査 員	小笠原 善治
	調 査 員	山本　健一 (木製品・鉄製品処理担当)
	調 査 員	武正　良浩
	調 査 員	大西　朋子 (写真担当)

第２章　遺跡の概要

１．地理的環境

南梅本上方遺跡、南梅本長広遺跡は松山市とその東南に隣接する東温市（旧重信町）との境近くにある小野地区に属する。愛媛県のほぼ中央に位置し、県下最大の面積を有する松山平野は、その北部から北東部を高縄山塊、また南から南東部を石鎚山系に囲まれた沖積低地で、その規模は南北約 17 ㎞、東西約 20 ㎞、西方の伊予灘、斎灘に面した三角形状ないしは扇状をなしている。平野には、北方の高縄山塊南斜面を流下して西流する石手川、同様に高縄山塊に源を発して石手川に合流する川附川、堀越川、小野川、悪社川、また石鎚山系北側斜面を流下する拝志川、御坂川、砥部川、高縄山塊南斜面に源を持って西流する内川などの支流を集めて平野南部を西流する一級河川重信川などが主流河川として流れている。平野は、これらの河川によって形成された幾つかの扇状地や、中･低位の段丘、氾濫原、浜堤、後背湿地、地溝帯などによって成り立っている。扇状地の主なものには、石手川扇状地、小野川扇状地や重信川によって形成された横河原扇状地などがある。調査地は、以上のうち高縄山塊小屋峠に源を発する小野川水系に属する位置にあり、半径 2.1 ㎞の小野川扇状地の扇央部付近、標高約 71 ｍに位置している。現在、この扇状地の扇頂から扇央部は畑や水田として利用され、密集した集落は扇端の湧水帯に同心円状に展開している。また、扇状地南方にひろがる広大な重信川氾濫原の集落密度は低く、水田地帯としての土地利用が行われている。



第２図　松山平野の地形分類図

２．歴史的環境

「和名類聚抄」によれば、古代伊豫國は 14 郡、72 郷からなり、そのうち和気、温泉、久米、伊豫の４郡と浮穴郡の一部が松山平野にあったとされている。南梅本上方遺跡、南梅本長広遺跡が所属する小野地区は久米郡域の東側に位置すると考えられる。往時の郡域は正確には定かではないが、記録に残る郷名を現在に照らし合わせてみると、おおよそ石手川以南、重信川以北で現在の松山市域の南東部一帯が久米郡に相当するものと考えられる。時は流れ、今から約 420 年前の小野地区は、梅本村･水泥村･小屋峠村･苅屋村・平井谷村・畑中村の六つの村があり、その後、約 260 年前に梅本村が北と南の二つに分かれたとされる。なお、南梅本村の圃之記の一部に上方、長広の名がある。

以下、久米地域における遺跡分布並びに史料を概観してみることにする。

旧石器時代

松山平野では旧石器時代の遺跡として知られている遺跡はない。旧石器が出土した遺跡や採取された地点は比較的多く知られているが、何れも混在的出土或いは表面採集であり、該期の遺跡と認定できるものではない。出土した種類別に主な遺跡･地点をあげていくと、ナイフ形石器が出土した筋違Ｆ遺跡、同Ｈ遺跡、桑原田中遺跡、東山鳶ヶ森古墳群、五郎兵衛谷古墳群、山田池遺跡、有舌尖頭器が出土した釜ノ口遺跡、楔形石器が出土した福音小学校構内遺跡、久米高畑遺跡５次調査地などがある。

縄文時代

周辺域で人間が生活の痕跡を残し始めるのは、縄文時代後期になってからである。久米窪田Ｉ遺跡では後期中頃の住居址が１棟検出され、同遺跡に程近い森元遺跡でも同時期に比定される廃棄（土器）用の土坑が検出されており、特に後者出土の遺物は一括性の高い良好な資料となっている。久米高畑遺跡 36 次調査地では晩期前半、瀬戸内舟津原併行期の良好な一括遺物が出土した円形竪穴住居址が近年調査された。この時期に比定される土坑は、東方約１㎞の古市遺跡２次調査地でも検出されている。また、久米高畑遺跡 33 次調査地では、晩期後半突帯文期の遺物が出土した落とし穴とみられる遺構が１基検出された。さらに片廻り遺跡２次調査地では斜面堆積ではあるが、晩期末の突帯文深鉢や浅鉢が出土している。

弥生時代

古い段階の遺構は、主に久米地域の西部、石井地区で検出されている。石井東小学校構内遺跡では前期前半の壺棺墓３基と土坑１基が検出された。また、南中学校構内遺跡では前期後半の溝から良好な一括遺物が出土している。前期末～中期初頭とみられる時期の遺構・遺物は、後の久米郡域の中枢部となる来住台地上で検出例が多い。久米高畑遺跡 23 次調査地や同遺跡 25 次調査地では、３重に巡る環濠と考えられている大溝が検出されている。また、台地上で実施された発掘調査において該期の遺物が出土する土坑（主に方形）が検出される例が多い反面、住居址や建物跡の検出が少ないことが特徴的である。今後の課題として居住域の中心を探ること、先述の環濠と考えられている溝の取り囲む範囲を明らかにすることなどが挙げられる。以後の中期は、久米地域の遺跡密度は疎らであり、遺跡分布の中心は、石手川以

1. 二ッ塚古墳
2. 南久米片廻り遺跡
3. 南久米片廻り遺跡２次調査地
4. 久米高畑遺跡 26 次調査地
5. 久米高畑遺跡 35 次調査地
6. 久米高畑遺跡 36 次調査地
7. 久米高畑遺跡 23・25・28・29 次調査地
8. 来住廃寺
9. 来住廃寺遺跡 15 次調査地
10. 来住町遺跡８次調査地
11. 久米窪田森元遺跡
12. 久米窪田古屋敷Ｃ遺跡
13. 開遺跡
14. 波賀部神社古墳
15. 五郎兵衛谷古墳
16. 素鵞神社古墳
17. 観音山古墳
18. 下苅屋遺跡４次調査地
19. 下苅屋遺跡３次調査地
20. 下苅屋遺跡２次調査地
21. 古市遺跡
22. 五楽遺跡２次調査地
23. 上苅屋遺跡
24. 上苅屋遺跡３次調査地
25. 上苅屋遺跡４次調査地
26. かいなご古墳
27. 平井谷１号墳
28. 茨谷１号窯祉
29. 駄馬姥懐１・２号窯址
30. 悪社谷１～３号窯址
31. 枝朶下池２・３号窯址
32. 枝朶下池１・４号窯址
33. 葉佐池古墳
34. 播磨塚古墳
35. 播磨塚天神山古墳
36. 西岡窯址（推定地）

●南梅本上方遺跡 ・ 南梅本長広遺跡
（南梅本上方遺跡 ・ 南梅本上方遺跡２次調査地）
（南梅本長広遺跡 ・ 南梅本長広遺跡２次）

第３図　調査地周辺の主要遺跡分布図

北の温泉郡・和気郡域、文京遺跡を核とする道後城北遺跡群周辺の平野部や丘陵部に展開している。久米郡域にあって確認された遺跡として久米高畑遺跡1次調査地の中期後葉の円形住居址1棟、来住廃寺15次調査地の来住台地縁辺部に溜まり状態で出土した中期後葉の遺物群、来住廃寺2・3次調査地出土の中葉～後葉の遺物群が挙げられる。後期中頃を過ぎると遺跡数は急増する。北部の東本遺跡周辺には直径10 m前後の大型竪穴住居を有する集落がある。この集落からは青銅器（分割鏡）の出土や鍛冶工房の検出がみられ、後期後半～末にかけての有力な集団と考えられている。西石井遺跡や釜ノ口遺跡からも多数の竪穴住居や溝に伴って多量の遺物が出土している。釜ノ口遺跡においても分割鏡が検出され、ガラス玉を用いた火処祭祀が普遍的に行われていたとみられることから有力な集団のひとつと考えられる。近年、同遺跡では豊後からの搬入品である壺が出土し、東北部九州との交流を示す遺物として注目されている。釜ノ口遺跡から谷状地形を挟んだ南方の福音小学校構内遺跡では、多くの竪穴住居や壺棺墓、土器溜まりが検出された。土器溜まりの土器の中には多数の絵画･記号土器が含まれていることで注目されている。

古墳時代

集落は、先述の福音小学校構内遺跡やその南の北久米浄蓮寺遺跡の付近一帯に広がっている。福音小学校構内遺跡では、120棟を超える竪穴住居址が調査されている。その約半数は須恵器を持たない住居にはカマドが伴わず、カマドが設置された住居からは須恵器の出土がみられることが分かっている。この集落の存続時期は概ね4世紀後半から6世紀後半までと考えられている。同遺跡では、韓式系土器、非陶邑系須恵器、鍛冶工房やこれに伴う鉄器のほか、双孔円盤・臼玉・子持勾玉などの滑石製祭祀具やガラス玉をはじめとする多様な遺物の出土がみられた。北久米浄蓮寺遺跡で調査されたのは、5世紀前半、須恵器出現以降の竪穴住居や掘立柱建物で構成される集落で、概ね7世紀末までの集落変遷を辿ることが可能な遺跡である。近年久米地域の北部、先述の東本遺跡近辺の樽味四反地遺跡6次調査地で重要な発見があった。日本最古例のひとつ、古墳時代前期の首長居館と考えられる大型掘立柱建物である。その規模は12.6 m×10.5 mの総柱で、濠と柵に囲まれた敷地の中に建っていたと考えられている。

古墳は、久米地域の北に広がる高縄山塊南麓にあたる丘陵上や、平野内の独立丘陵上に群集墳が数多く存在するが、ここでは久米郡域の首長墓に着目する。元来、松山平野の古墳は前・中期の前方後円墳が少なく、その多くが後期に属するといわれている。しかし、古墳の各種データが明確なものは少なく、首長墓系列の復元は困難を極めている。この現況下で、前方後円墳のほとんどが久米郡域内に分布しているということは注目されるところである。エリア別に例をあげると桑原地区の経石山古墳、三島神社古墳、北久米・福音寺地区の二つ塚古墳、西山古墳、来住地区のタンチ山古墳、平井地区の観音山古墳である。また、小野川以南の高井から小野地区にかけての波賀部神社古墳、播磨塚天神山古墳、葉佐池古墳が知られている。

窯址は、小野川によって開析された丘陵麓に須恵器窯址群が多く分布し、松山平野東部古窯址群と称され、駄場窯址・悪社谷窯址・茨谷窯址などが知れるところである。これらは平野南部、現在の砥部町域に分布する窯址群と並んで平野を代表する古窯址群の一つとなっている。窯体そのものが発掘調査された例は7世紀前半の駄場姥ヶ懐1号窯のみであるが、各地点での遺物採集により6世紀後半から8世紀代に至るまでの須恵器窯の分布が知られている。

古代

７世紀以降、南梅本上方遺跡・南梅本長広遺跡の西方２㎞の来住台地上において計画的な開発が始まる。以前から台地上に白鳳寺院址である来住廃寺が存在することは知られていたが、現在に至る 20 年来の発掘調査により、寺院址のみならず、大規模な官衙遺跡群が広く展開していることが分かってきた。来住廃寺調査当初、寺院に付随する回廊跡と考えられていた２列の柱穴群は、その後の周辺調査によって、寺院の西側に寺院を切って存在した方一町規模の区画溝で囲われた「回廊状遺構」であることが分かった。さらに、この「回廊状遺構」の周辺にもう一つの方一町規模の区画が整然と展開し、その区画内に官衙的な配置を持つ建物群が配置されていることも明らかとなった。また、1985（昭和 63）年に発見された「久米評」線刻須恵器によって「評衙政庁」の存在が俄に現実味を帯びることとなった。近年調査された久米高畑遺跡 51 次調査地は、従来から政庁推定地とされていた区域内であり、且つ線刻須恵器出土地の直近であった。その調査成果は、「久米評衙政庁」の存在を確定的とし、評衙に続く郡衙に伴う正倉域の存在等、評や郡に伴う重要施設が台地上に展開し、この地が久米評或いは久米郡の中枢域であることを再認識するものとなった。また、初現期の施設は７世紀の前半代に属する可能性が高くなり、官衙遺跡としては全国でも最古の一例として、その重要性はさらに高まっている。

中世

南梅本上方遺跡・南梅本長広遺跡の東方約１㎞の古市遺跡や下苅屋遺跡２・３次調査地より鋤址や溝などの生産関連遺構と遺物包含層が確認されており、生産域として土地利用された可能性が高いと考えられる。また、来住台地東部の鷹ノ子遺跡一帯で集落遺構の検出がみられる。さらに、来住廃寺内の北部分では、掘立柱建物群が集中して検出されている。建物は幾重にも検出され、継続的な建物であったことが知れるが、性格については明らかではない。

近隣地域

最後に南梅本上方遺跡・南梅本長広遺跡近辺について言及する。冒頭に述べたように調査地の所在する小野地区は、松山平野の東部に位置し、重信川の支流である小野川、悪社川及び内川によって形成された扇状地が広がる地域である。近接する播磨塚古墳群内には、かつて 20 基とも 30 基ともいわれる多数の古墳が存在していたと言われている。しかし明治時代に、梨・柑橘類の栽培適地として開墾され、その後、陸上自衛隊松山駐屯地として造成・削平を受けている。そのため、過去に存在したと考えられる古墳の大半が消滅し、現在では平成 10 年度に松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターによって発掘調査され、６世紀前半の前方後円墳と確認された播磨塚天神山古墳と駐屯地内に播磨塚１号墳として、７世紀前半と考えられる横穴式石室の一部が遺存しているにすぎない。また、調査地の北側には松山平野東部古窯址群、南側には重信川を挟んで、現在の東温市下林に分布する拝志古窯群が確認されている。なお、東温市には寛政 11 年頃に創業されたと言われる「西岡窯跡」がある。

〔参考文献〕

松山市教育委員会「松山市埋蔵文化財包蔵地地図」1997

『ふるさと小野（第３集)』松山市立小野小学校 1984

重松佳久「小野川水系における旧石器文化」『来住・久米地区の遺跡』松山市教育委員会・(財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1992

吉本　拡「久米窪田遺跡」『一般国道 11 号松山東道路関係遺跡発掘調査報告書Ⅱ』愛媛県教育委員会・(財) 愛媛県埋蔵文化財調査センター 1981

栗田茂敏「久米窪田森元遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会 1989

小笠原善治「久米高畑遺跡 36 次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅹ』松山市教育委員会・(財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1998

山之内志郎「古市遺跡２次調査地 (１区)」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅸ』松山市教育委員会・(財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1997

橋本雄一　「久米高畑遺跡 33 次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅹ』松山市教育委員会・(財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1998

梅木謙一 編「南久米片廻り遺跡２次調査地」『小野川流域の遺跡』松山市教育委員会・(財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1996

梅木謙一 編「石井東小学校構内遺跡」『石井・浮穴の遺跡』松山市教育委員会・(財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1998

栗田茂敏「南中学校構内遺跡－第２次調査－」『石井幼稚園遺跡・南中学校構内遺跡－２次調査－』松山市教育委員会・(財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1994

橋本雄一　「久米高畑遺跡 23 次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅶ』松山市教育委員会・(財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1995

髙尾和長　「久米高畑遺跡 25 次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅷ』松山市教育委員会・(財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1996

森　光晴ほか　『文京遺跡』松山市教育委員会 1976

下條信行・宮本一夫・梅木謙一　『文京遺跡－８・９・11 次調査－』愛媛大学法文学部考古学研究室・愛媛大学埋蔵文化財調査室 1990

宮本一夫　『文京遺跡第 10 次調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室 1991

栗田茂敏　『文京遺跡－第２・３・５次調査－』愛媛大学・松山市教育委員会・(財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1992

栗田茂敏「文京遺跡－４次調査－」『道後城北遺跡群』松山市教育委員会・(財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1992

西尾幸則・山本健一ほか『来住廃寺遺跡第 15 次調査報告書』松山市教育委員会・(財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1993

森　光晴「東本遺跡」『浮穴・西石井荒神堂・東本Ⅱ・Ⅲ・桑原高井遺跡』松山市教育委員会 1980

髙尾和長 編『東本遺跡４次調査・枝松遺跡４次調査』松山市教育委員会・(財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1996

相原浩二 編『東本遺跡６次調査地・桑原遺跡２次調査地・桑原遺跡４次調査地』松山市教育委員会・(財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 2005

宮内慎一・相原秀仁ほか『東石井遺跡・西石井遺跡－１・２・３次調査地－』松山市教育委員会・(財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 2005

髙尾和長 編『釜ノ口遺跡Ⅱ－６・７・８次調査－』松山市教育委員会・(財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1997

水本完児「釜ノ口遺跡９次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報 12』松山市教育委員会・(財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 2001

水本完児「釜ノ口遺跡 10 次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報 13』松山市教育委員会・(財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 2002

梅木謙一・武正良浩『福音小学校構内遺跡－弥生時代編－』松山市教育委員会・(財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1995

西尾幸則「北久米浄蓮寺遺跡」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県史編纂委員会 1986

池田　学・宮崎泰好「浄蓮寺Ⅱ遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会 1989

武正良浩　『福音小学校構内遺跡－古墳時代以降編－』松山市教育委員会・(財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 2003

橋本雄一『北久米浄蓮寺遺跡～３次調査地～』松山市教育委員会・(財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1994

栗田正芳「北久米浄蓮寺遺跡４次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅵ』松山市教育委員会・(財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1994

河野史知「北久米浄蓮寺遺跡５次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅷ』松山市教育委員会・(財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1996

河野史知「北久米浄蓮寺遺跡６次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅸ』松山市教育委員会・(財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1997

小玉亜紀子「樽味四反地６次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報 11』松山市教育委員会・(財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1999

橋本雄一「松山市樽味四反地遺跡－古墳時代初頭の首長居館－」『考古学ジャーナル 449』ニューサイエンス社 1999

正岡睦夫・十亀幸雄『日本の古代遺跡 22 愛媛』保育社 1985

森　光晴「経石山古墳」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県史編纂委員会 1986

田城武志　「経石山古墳」『桑原地区の遺跡』松山市教育委員会・(財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1992

森　光晴・長井数秋ほか　『三島神社古墳』松山市教育委員会 1972

森　光晴「二つ塚古墳」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県史編纂委員会 1986

相田則美『4・5 世紀伊予の首長墓』「社会科」学研究第１号 1980

西田　栄「観音山古墳」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県史編纂委員会 1986

森　光晴「波賀部神社古墳」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県史編纂委員会 1986

吉岡和哉『播磨塚天神山古墳』松山市教育委員会・(財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 2001

大山正風　『長隆寺跡調査報告書』松山市教育委員会 1974

小笠原好彦 編『来住廃寺』松山市教育委員会 1979

西尾幸則・池田　学「来住廃寺跡寺域調査」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会 1989

西尾幸則・宮崎泰好「久米高畑遺跡 (７次調査)」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会 1989

栗田茂敏・加島次郎ほか『葉佐池古墳』松山市教育委員会 2003

橋本雄一「久米高畑遺跡 51 次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報 14』松山市教育委員会・(財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 2003

橋本雄一「久米官衙遺跡群～今後の展望～」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅹ』松山市教育委員会・(財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1998

梅木謙一 編「駄馬姥ヶ懐窯址」『小野川流域の遺跡』松山市教育委員会・(財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1996

善永光一　「松山市小野地区における窯址の分布と変遷」『小野川流域の遺跡Ⅱ－北梅本町悪社谷遺跡－』松山市教育委員会・(財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1998

森　光晴「播磨塚古墳群」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県史編纂委員会 1986

吉岡和哉『潮見山古墳群』松山市教育委員会・(財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 2003

森　光晴・山本一英ほか『拝志古窯群』重信町教育委員会 1997

第３章　調査の概要

１．調査の経緯

調査地は、県道松山川内 334 号線（旧国道 11 号線）に接する北梅本町甲 557 から南に向かい、松山市道小野 15 号線につきあたる南梅本町甲 197-7 までの全長約 1.1 ㎞、道路幅員 14 m（一部拡幅部有り）、調査対象面積は 14,044 ㎡である。調査にあたっては、道路部分の用地買収や家屋の撤去に伴って試掘調査を行い、遺構・遺物が確認された地点について順次本格調査を行った。

遺跡名については、調査地の字名を付けることとした。なお、各遺跡名の位置と調査地番、面積、試掘及び本調査期間は以下に記した。

●南梅本上方遺跡１次調査地

調査地番	松山市南梅本町甲 331　外
調査面積	1,302 ㎡
試掘調査期間	2003（平成 15）6月 16 日～同月 19 日
本調査期間	2003（平成 15）9月1日～ 2004（平成 16）1月 30 日

第４図　調査地と調査区位置図

●南梅本上方遺跡２次調査地（試掘調査時：Ａ区）

調査地番　　松山市南梅本町甲 385-2　外

調査面積　　577.56 ㎡

試掘調査期間　　2004（平成 16）６月１日～同月４日

調査期間　　2004（平成 16）年 10 月 18 日～ 2005（平成 17）年３月 31 日

●南梅本長広遺跡１次調査地（試掘調査時：Ｂ区）

調査地番　　松山市南梅本町甲 544-2　外

調査面積　　586.13 ㎡

試掘調査期間　　2004（平成 16）６月１日～同月４日

本調査期間　　2004（平成 16）10 月 18 日～ 2005（平成 17）３月 31 日

●南梅本長広遺跡２次調査地

調査地番　　松山市南梅本町甲 527-2　外

調査面積　　370.15 ㎡

試掘調査期間　　2004（平成 16）６月１日～同月３日

本調査期間　　2005（平成 17）８月１日～ 2005（平成 17）９月 30 日

第４章

南梅本上方（かみがた）遺跡

－１次調査地－

第４章　南梅本上方遺跡

１．調査の経緯

南梅本上方遺跡１次調査の調査対象地は、市道小野 17 号線から南側約 100 ｍの区間で、調査面積は 1,302 ㎡である。調査前は、水田であった。以下、調査工程を略記する。

平成 15（2003）年

９月 １ 日 (月)　現場作業開始。調査区「１区」を設定し、重機（業者委託）よる表土剝ぎ及び掘削を開始する。試掘調査のデータを参考に掘削を進める。Ⅲ層中に中世の遺物が包含されていることを確認し、Ⅲ層上面にて重機使用を中止した。(～５日)

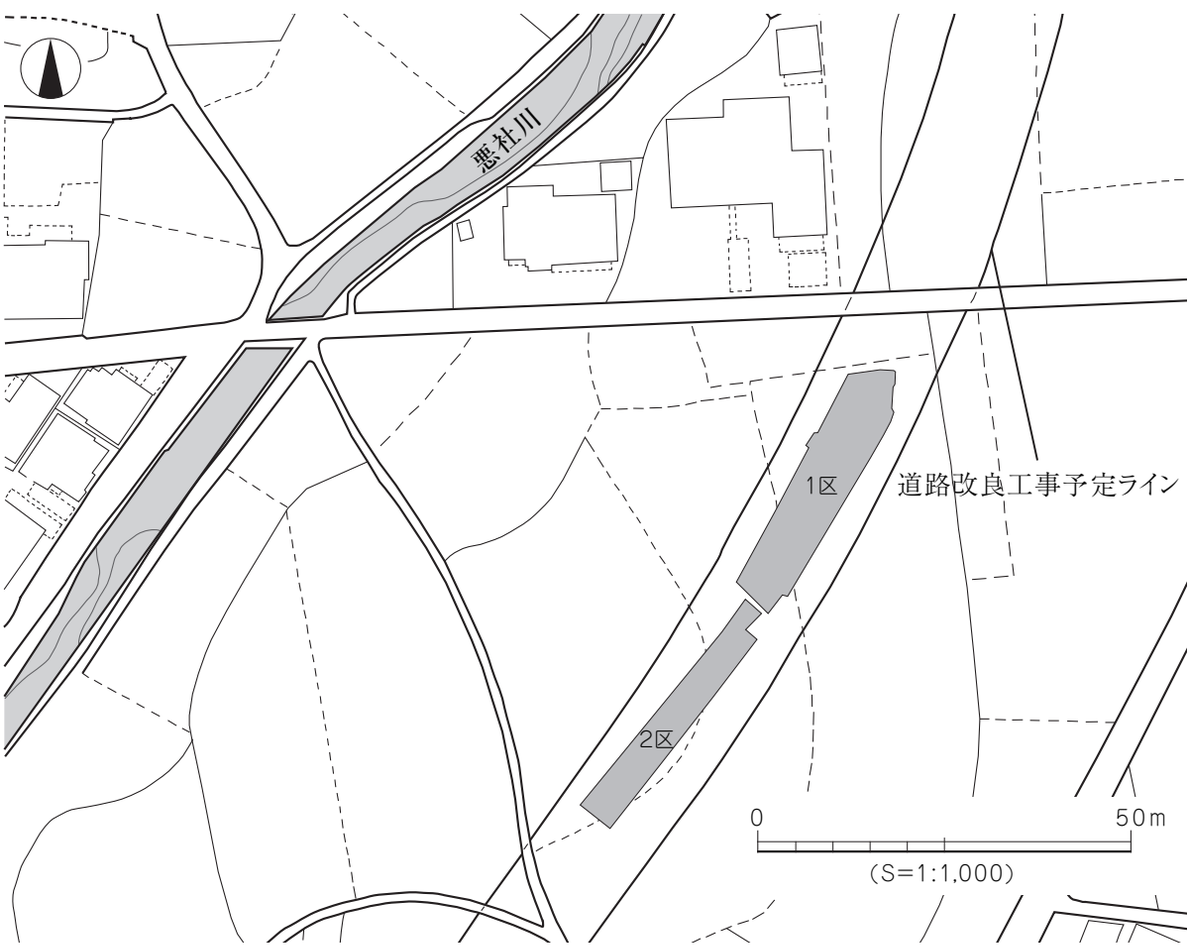
９月 ８ 日 (月)　人力により遺物包含層（Ⅲ層）の掘り下げ並びに遺物検出作業を開始する。（～ 19 日）

９月 22 日 (月)　Ⅵ層上面にて遺構検出作業を開始する。

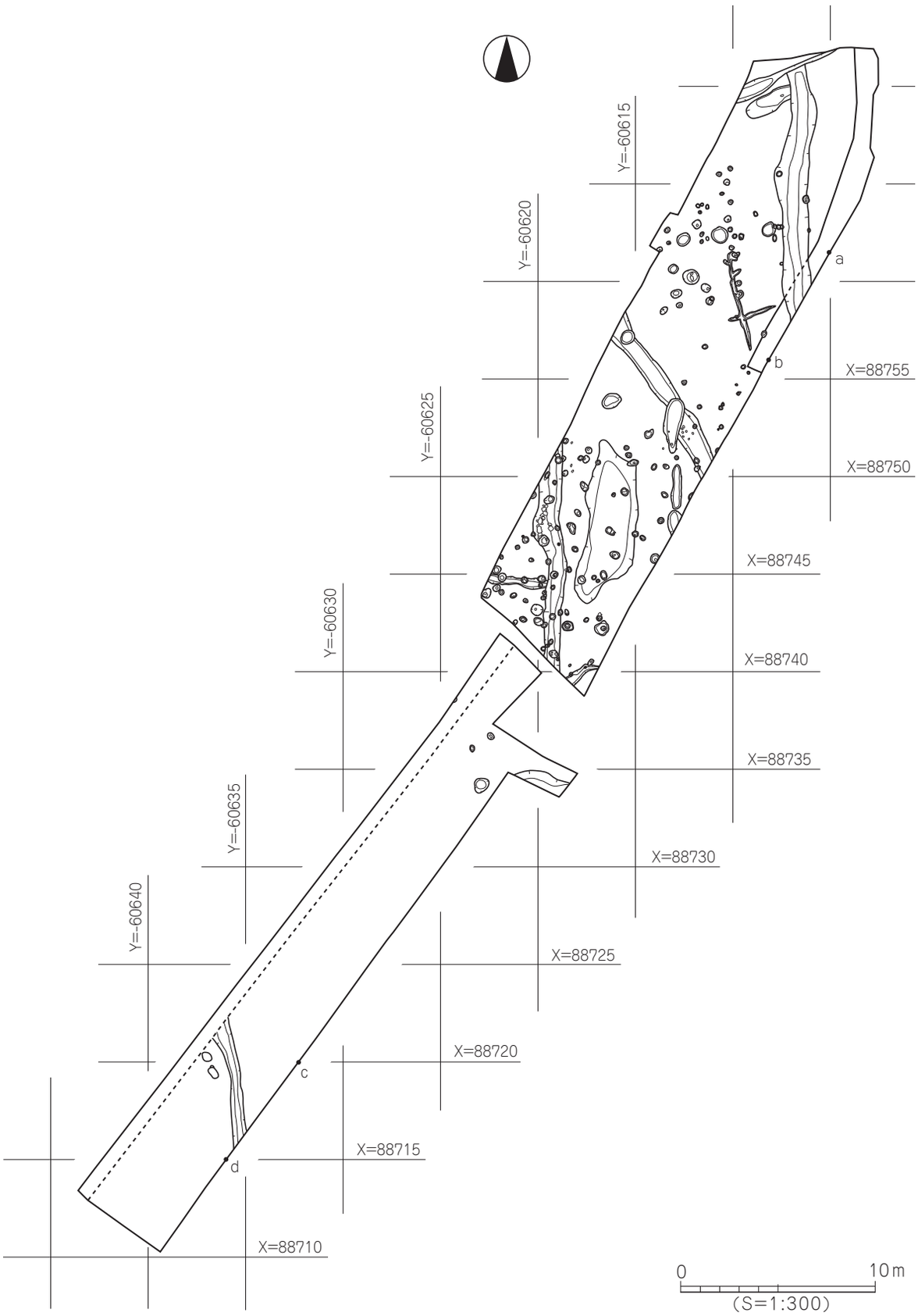
９月 26 日 (金)　高所作業車（業者委託）を使用して「１区」遺構検出写真を撮影する。その後、遺構精査・実測を順次進める。（～ 12 月 12 日）

10 月 15 日 (水)「１区」の測量基準杭（業者委託）の設定。

11 月 26 日 (水)　SD4 の掘り下げを行う。SP79・111 内残存礎の検出状況写真を撮影後、礎の収納を



第５図　調査区位置図



第６図　１区・２区遺構配置図

行う。

12 月 16 日 (火)　高所作業車（業者委託）を使用して「１区」遺構完掘写真を撮影する。

12 月 18 日 (木)　重機（業者委託）による「１区」の埋め戻し作業を開始する。（～ 19 日）

12 月 22 日 (月)　調査区「２区」を設定し、重機（業者委託）による 表土剝ぎ及び掘削を開始する。（～ 26 日）

12 月 25 日 (木)　平成 15 年の野外調査終了。

平成 16（2004）年

１ 月６ 日 (火)　野外調査再開。「２区」の測量基準杭（業者委託）の設定。

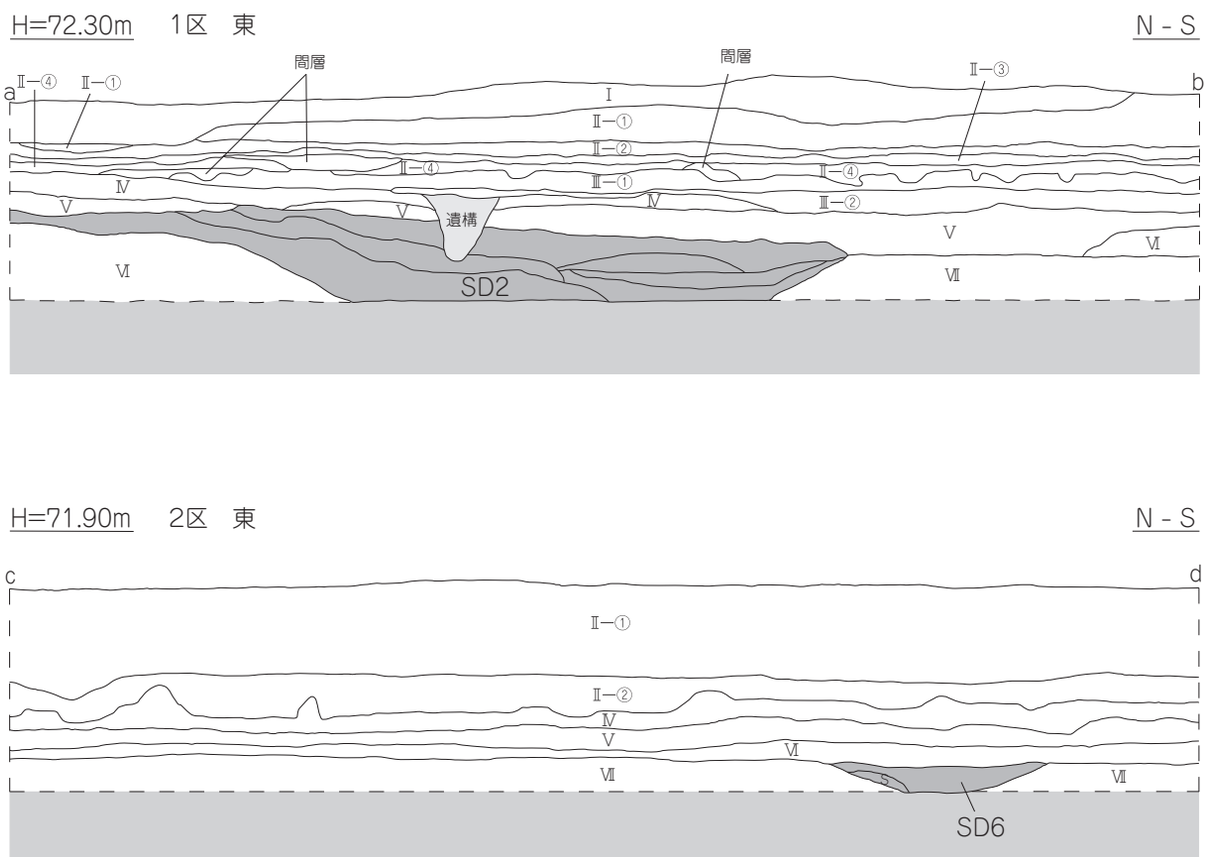
１ 月７ 日 (水)　高所作業車（業者委託）を使用して「１区」遺構検出写真を撮影する。その後、遺構精査・実測を順次進める。（～ 26 日）

１ 月 23 日 (金)　積雪 (15cm)。安全を最優先し、現場作業中止。

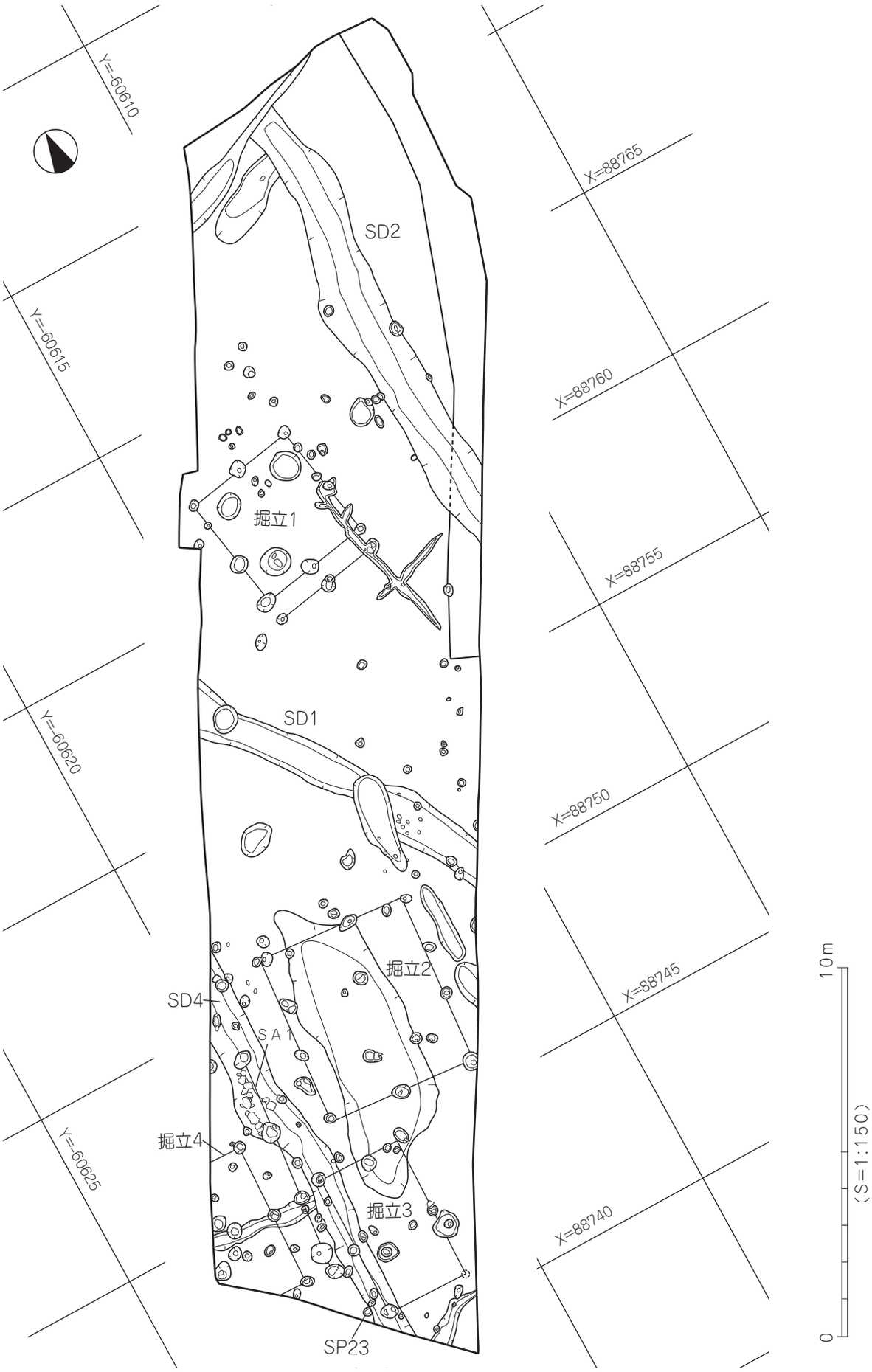
１ 月 27 日 (火)　高所作業車（業者委託）を使用して「２区」遺構完掘写真を撮影する。

１ 月 28 日 (水)　重機（業者委託）による「２区」の埋め戻し作業を開始する。（～ 30 日）航空機（業者委託）による航空写真撮影を実施。現場事務所の解体撤去。（～ 30 日）

２ 月２ 日 (月)　～室内整理作業



第７図　１区 ・ ２区　東壁土層図


Y=-60610
Y=-60615
Y=-60620
Y=-60625
X=88765
X=88760
X=88755
X=88750
X=88745
X=88740
SD2
掘立1
SD1
掘立2
SD4
SA1
掘立4
掘立3
SP23
0
10m
(S=1:150)

第８図　１区遺構配置図

2．層　位（第７図、図版２）

調査地は松山平野東部、中小河川によって形成された扇状地上の標高約 71 ｍに立地し、直前まで水田耕作が営まれていた。北東から南西へ緩傾斜をなしている。

層序　基本層序は、第Ⅰ層客土（真砂土）、第Ⅱ層褐灰色土～浅黄色土（耕作土・床土）、第Ⅲ層黄褐色粘質土～明黄褐色粘質土、第Ⅳ層明黄褐色土、第Ⅴ層浅黄色粘質土、第Ⅵ層黄色砂質土、第Ⅶ層灰色土（微砂質系）、第Ⅷ層灰黄色粗砂である。

第Ⅰ層　　調査の利便性を図るために搬入した客土（真砂土）である。

第Ⅱ層－①　耕作土（褐灰色土／ 5YR 4/1）。厚さ２～ 46cm を測る。

－②　床土ａ（暗青灰色土／ 5PB 4/1）。厚さ２～ 13cm を測る。

－③　床土ｂ（灰褐色土／ 7.5YR 4/2）。旧耕作土の床土で、厚さ２～ 14cm を測る。

－④　床土ｃ（浅黄色土／ 2.5Y 7/4）。旧耕作土の床土で、厚さ３～ 15cm を測る。

第Ⅲ層－①　黄褐色粘質土（2.5Y 5/4）。１区ほぼ全域に堆積し、中世の遺物を包含する。厚さ２～ 14cm の堆積を測る。

－②　明黄褐色粘質土（2.5Y 7/6）１区全域に堆積し、中世の遺物を包含する。厚さ３～ 30cm の堆積を測る。

第Ⅳ層－　　明黄褐色土（2.5Y 6/8）。厚さ３～ 30cm の堆積を測る。

第Ⅴ層－　　浅黄色粘質土（5Y 7/4）。厚さ５～ 30cm の堆積を測る。

第Ⅵ層－　　黄色砂質土（2.5Y 7/8）。厚さ 12 ～ 40cm の堆積を測る。

第Ⅶ層－　　灰色土（微砂質系、7.5Y 5/1）。厚さ 10 ～ 20cm の堆積を測る。

第Ⅷ層－　　灰黄色粗砂（2.5Y 6/2）。厚さ６～ 25cm の堆積を測る。

遺構の検出は、基本的に第Ⅶ層上面で行い、主に中世の遺構や遺物を検出した。遺構には、掘立（掘立柱建物跡）４棟、ＳＡ（柵列）１条、ＳＫ（土坑）６基、ＳＤ（溝）５条、ＳＰ（柱穴）160 基、ＳＸ（性格不明遺構）６基がある。遺構の中には本来、第Ⅳ層より上部からの掘り込みのものがある。

【参考文献】

農林水産省農林水産技術会議事務局 監修「新版標準土色帖」(1989 年版)

3．遺構と遺物

〔1〕１区の調査

第Ⅶ層上面にて掘立４棟、ＳＡ１条、ＳＫ６基、ＳＤ５条、ＳＰ 156 基、ＳＸ３基を検出した。

掘立１（第９図、図版 2、3）

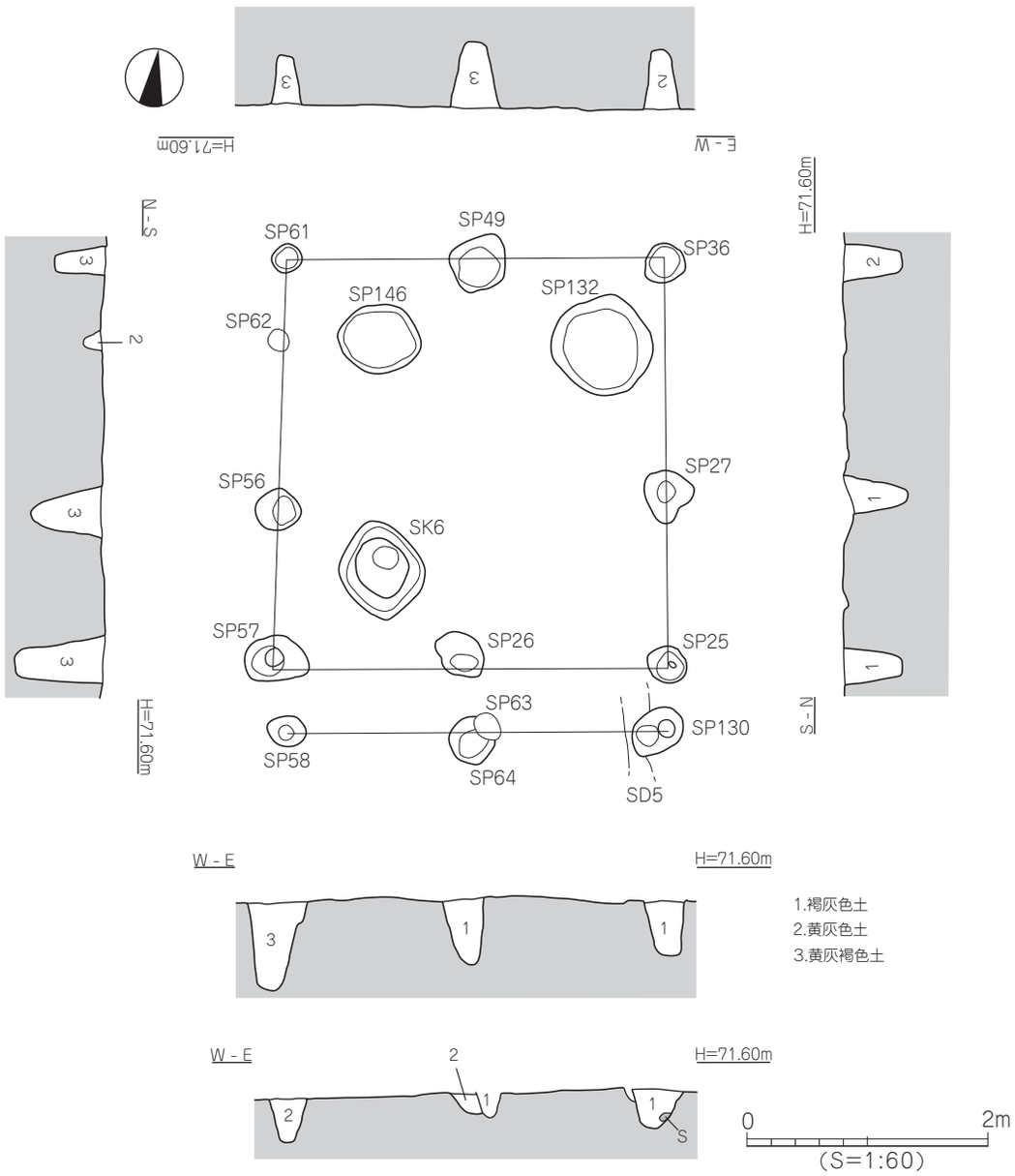
位　　置　１区中央やや北よりに位置する。

重　　複　ＳＤ５と重複し、本掘立柱建物跡の方が新しい。

方　　向　北辺に直交する軸の傾きはＮ－ 10°－Ｗである。

形状･規模　桁行２間 (3.3 ｍ)、梁行２間 (3.2 ｍ) である。２×２間のほぼ方形を呈する側柱建物である。

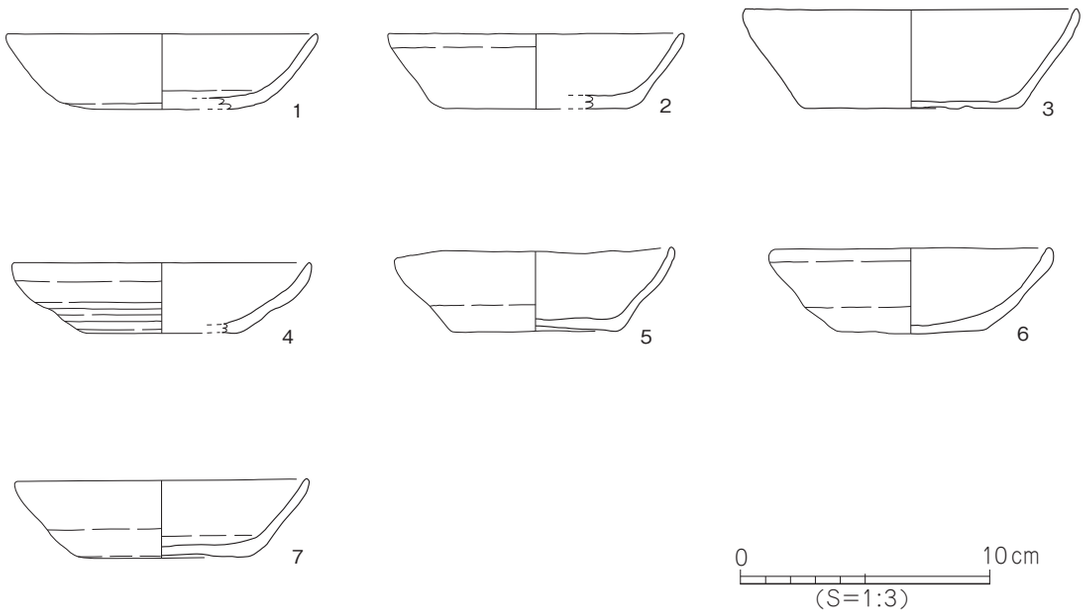
遺　　物　柱穴覆土内からは土師器皿が出土した。また、柱痕内からは柱材の一部と考えられる木片が出土した。



第９図　掘立１測量図

出土遺物（第 10 図、図版 8）

１～７は土師質土器の杯である。１の体部は底部より緩やかに湾曲して立ち上がり、中位より直線的になり、端部は丸く収められる。底部に回転糸切りの痕跡が僅かに残るのみで、内外面共に器面の荒れが顕著である。２の体部は底部より緩やかに外傾して直線的に立ち上がる。端部は丸く収められる。内面に炭化物の付着、外面に２次焼成痕が共に僅かに看取される。底部切り離しは回転糸切りによると思われる。３の体部は底部より外傾して立ち上がり、口縁部下から僅かに内湾する。口縁端部は上方に細く仕上げられる。底部には回転糸切りの直後、簀の子状の乾燥台上に置かれたと思われる痕跡が看取される。外面は酸化鉄分の付着が顕著である。４の体部は底部より低く且つ緩やかに内湾する。外面には回転ナデの段が残る。５の体部は底部より緩やかに内湾して立ち上がる。内外面は回転ナデにより稜が生じている。口縁端部は丸く収められる。口縁部外面に焼成時のものと思われる朱色の帯が看取される。全体的に器壁が薄く、精緻な仕上がりとなっている。６の体部は底部より緩や



第 10 図　掘立１出土遺物実測図

かに立ち上がり、やや肥厚され丸く仕上げられる口縁端部を有する。体部外面は回転ナデにより僅かに稜が生じている。底部には回転糸切り後、簀の子状の乾燥台上に置かれたと思われる痕跡が看取される。７の体部は底部から直線的に立ち上がり、口縁端部は丸く収められる。器壁は内外面共に摩耗が顕著であるが、底部には回転糸切り後、簀の子状の乾燥台上に置かれたと思われる痕跡が僅かに看取される。

掘立２（第 11 図、図版 3）

位　　置　１区中央南よりに位置する。

重　　複　なし。

方　　向　北辺に直交する軸の傾きはＮ－５°－Ｅである。

形状･規模　南北棟。桁行３間 (4.7 ｍ)、梁行２間 (4.1 ｍ) である。３×２間の側柱建物である。

遺　　物　柱穴覆土内からは土師器、須恵器が出土した。

出土遺物（第 11 図、図版 8）

８は土師質土器の杯である。体部は底部から直線的に立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げられる。底部には回転糸切り後、簀の子状の乾燥台上に置かれたと思われる痕跡が看取される。９は中世須恵器の東播系捏鉢口縁部である。口縁部が若干上下に拡張され、口縁端部は凸レンズ状をなす。

掘立３（第 12 図）

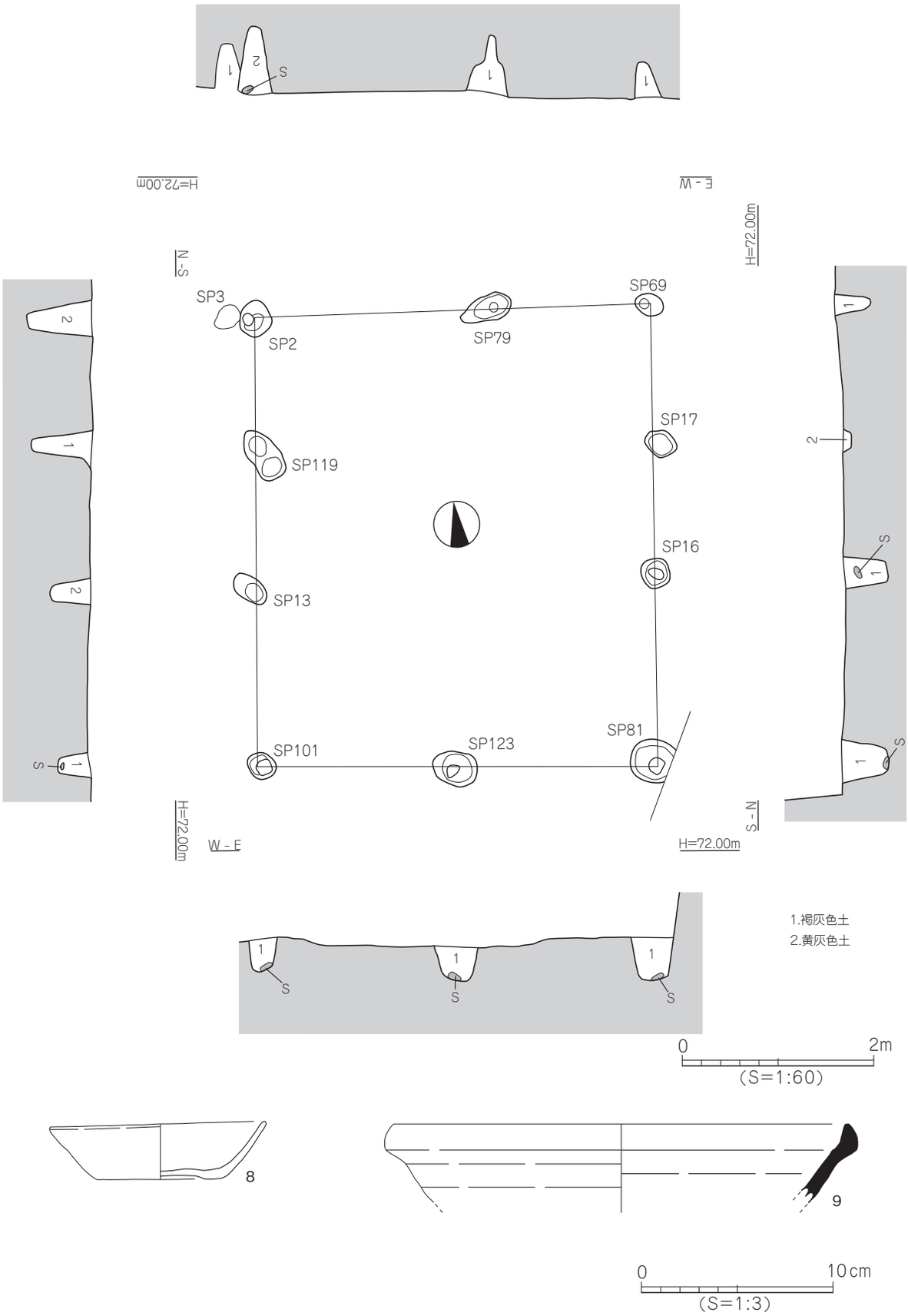
位　　置　１区南よりに位置する。

重　　複　ＳＤ４と重複し、本掘立柱建物跡の方が新しい。

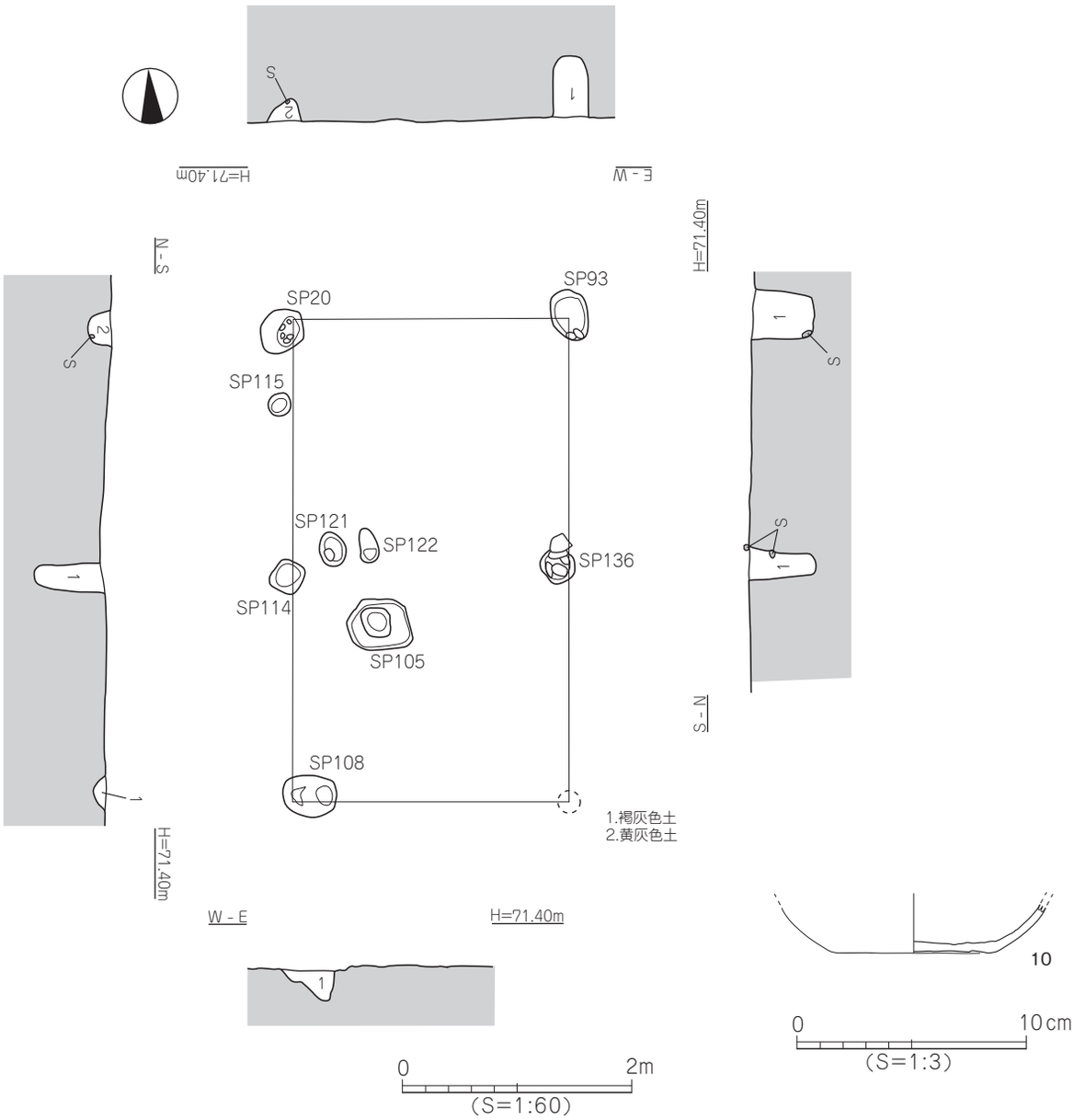
方　　向　北辺に直交する軸の傾きはＮ－１°－Ｅである。

形状･規模　南北棟。桁行２間 (4.1 ｍ)、梁行１間 (2.5 ｍ) である。２×１間の側柱建物である。

遺　　物　柱穴覆土内からは土師器、須恵器が出土した。



第 11 図　掘立２測量図・出土遺物実測図



第 12 図　掘立３測量図・出土遺物実測図

出土遺物（第 12 図、図版 8）

10 は土師質土器の杯である。体部は底部から緩やかに内湾して立ち上がる。底部には回転糸切り後、簀の子状の乾燥台上に置かれたと思われる痕跡が看取される。

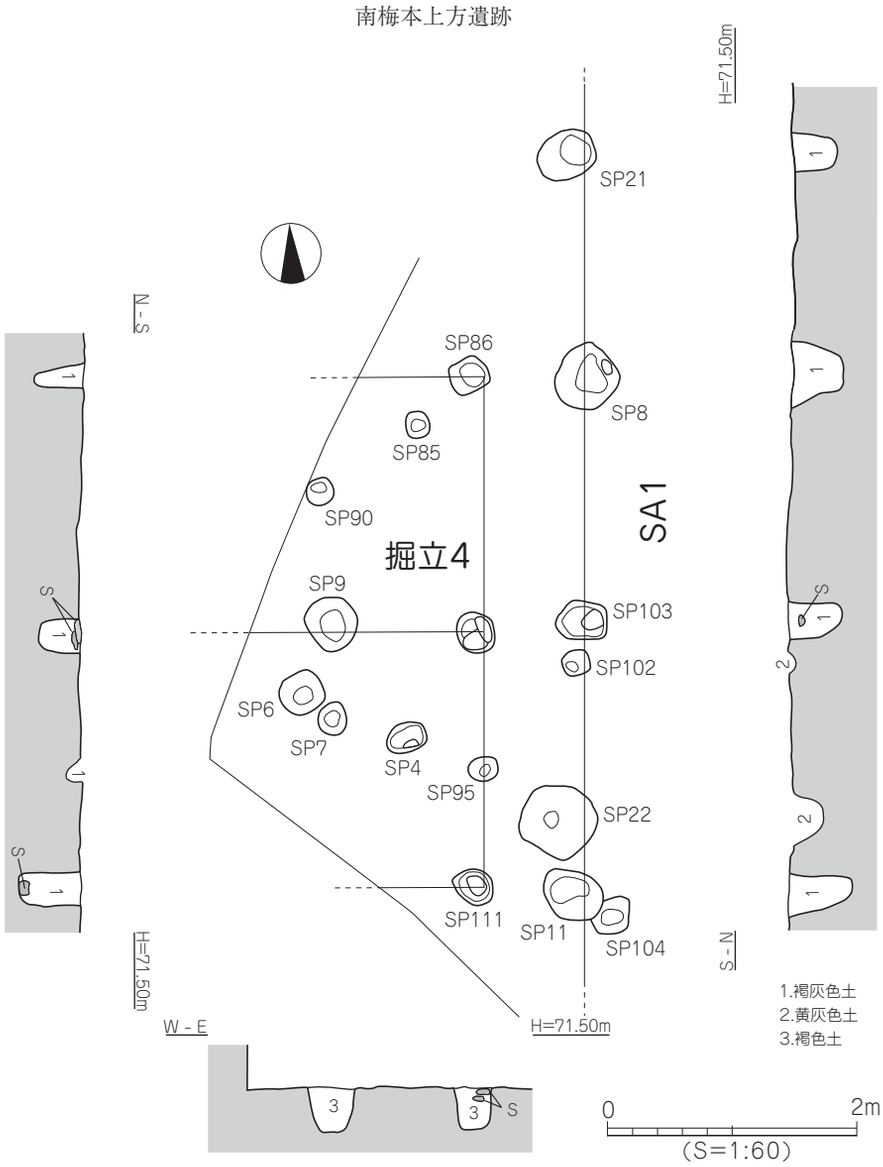
掘立４（第 13、14 図）

位　　置　１区南よりに位置する。

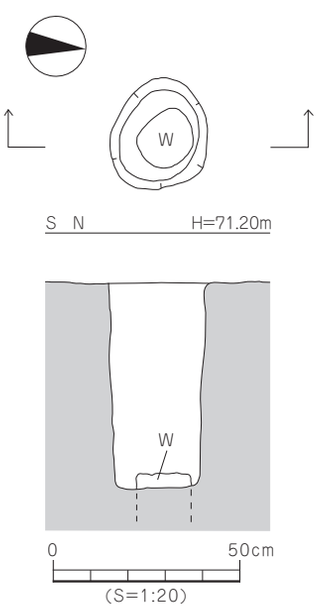
重　　複　なし。

方　　向　北辺に直交する軸の傾きはＮ－１°－Ｅである。

形状･規模　南北棟。桁行２間 (4.1 ｍ) 分のみの検出である。



第 13 図　掘立４・ＳＡ１測量図

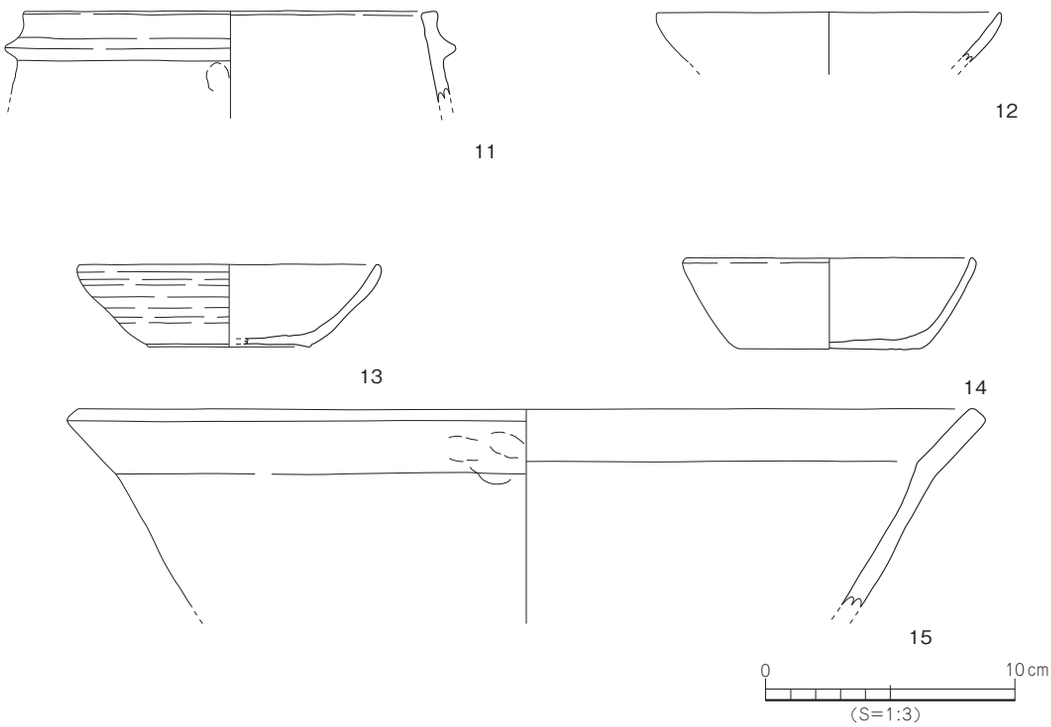


第 14 図　ＳＰ 111 測量図

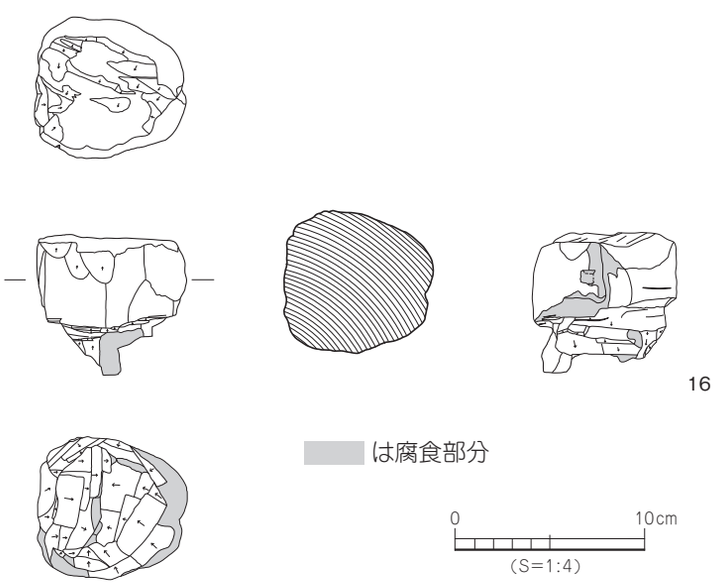
遺　　物　柱穴覆土内からは土師器、須恵器が出土した。また、ＳＰ 111 の底部から木製の礎が検出された。

出土遺物（第 15、16 図、図版 9、12）

11・12 は土師質土器である。11 は土釜で体部は内湾または内傾し、三脚が付くタイプと思われる。口縁部よりやや下がった位置に断面三角形の籠（タガ）が貼り付けられている。鍔は上下面ともナデが強く、先端は尖り気味である。口縁端部は面をなし、ナデにより僅かに肥厚される。外面には煤が付着している。12 は杯で口縁部のみの残存である。口縁端部は丸く収められる。口縁部外面に焼成時のものと思われる乳白色の帯が看取される。16 はＳＰ 111 内から出土した木製の礎である。法量は長さ 14.6cm、長辺 16cm、短辺 15cm を測る。丸太材を 1/4 程度

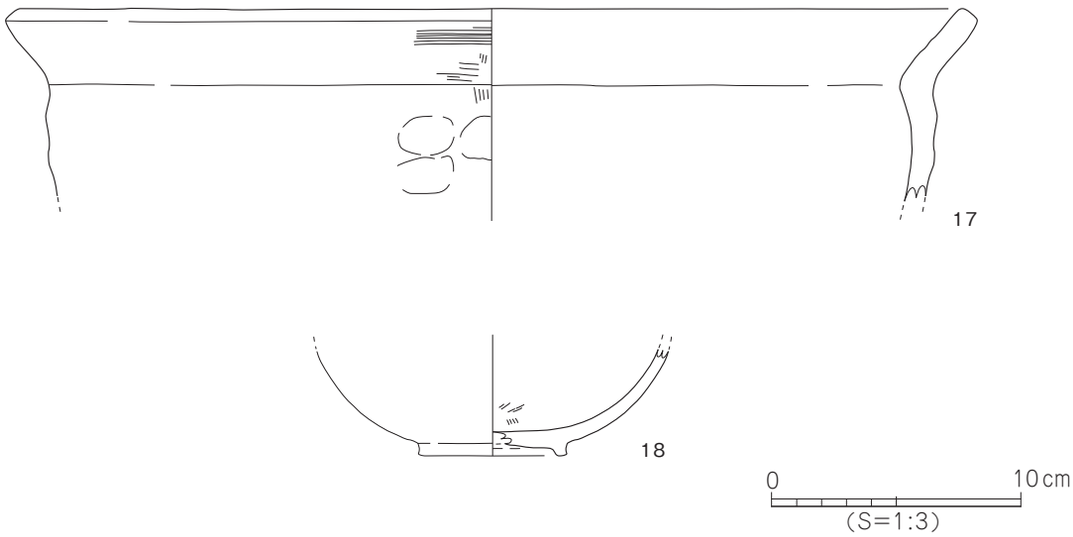


第 15 図　掘立４・ＳＡ出土遺物実測図

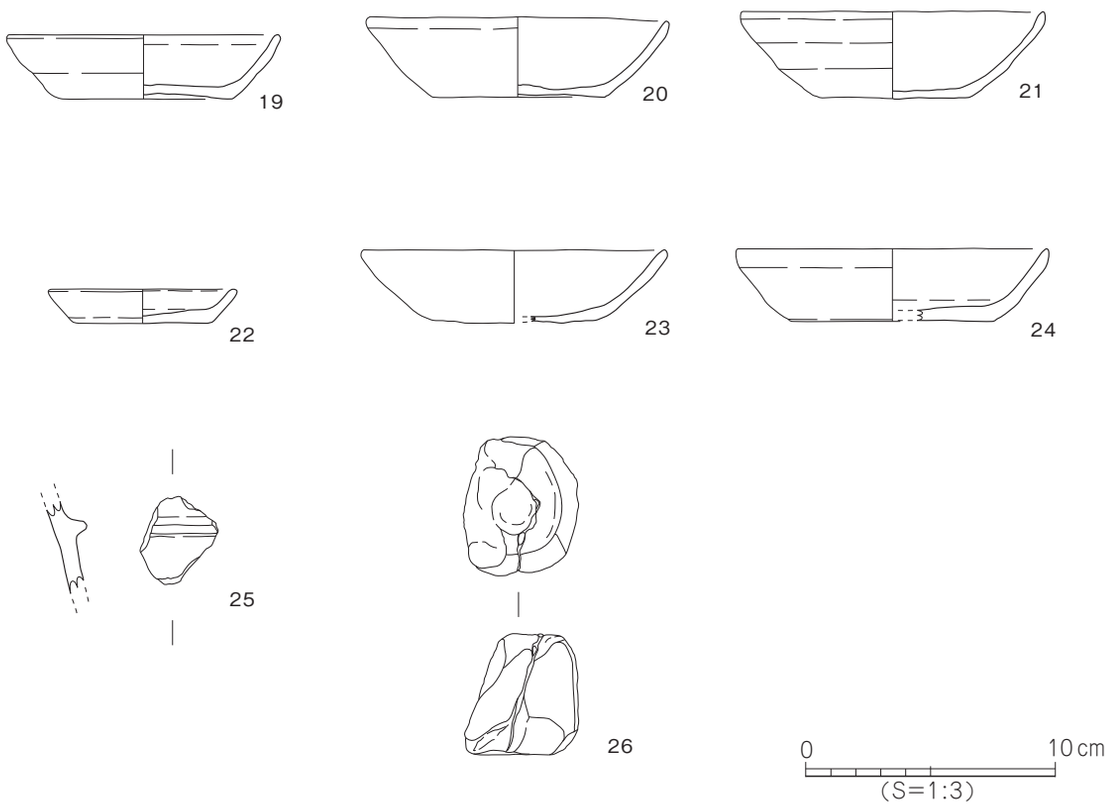


第 16 図　ＳＰ 111 出土遺物実測図

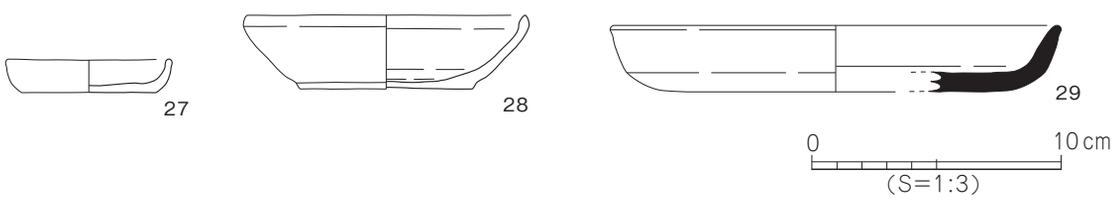
のみかん割りにしたものを芯を避けて角材にし、幅広の面取りを施し、断面八角形に仕上げている。表面には加工痕が多く見られる。下端には紐掛け溝の一部が看取されることから、柱材端部を切断したものを礎として使用した可能性が高い。



第 17 図　ＳＤ２出土遺物実測図



第 18 図　ＳＤ４出土遺物実測図



第 19 図　ＳＰ 131・132・144 出土遺物実測図

ＳＡ１（第 13 図）

位　　置　１区南よりに位置する。

重　　複　ＳＤ４と重複し、本柵列跡の方が新しい。

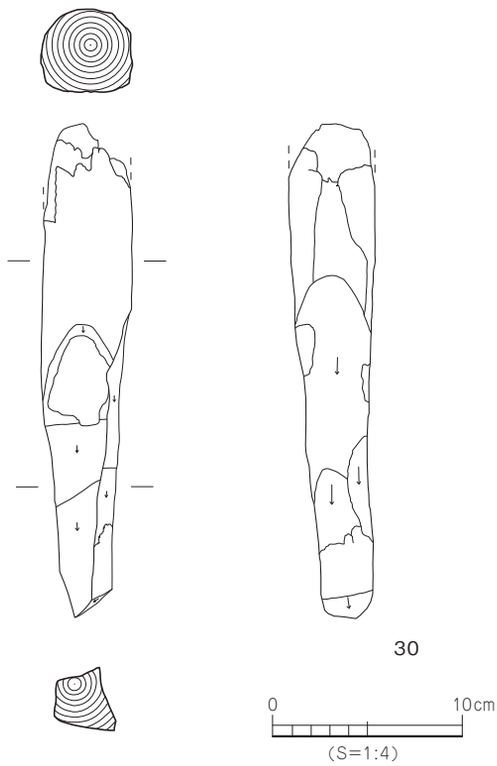
方　　向　ＳＢ４の北辺に直交する軸の傾きはＮ－１°－Ｅである。

形状･規模　南北方向３間分のみの検出である。

遺　　物　柱穴覆土内からは土師質土器が出土した。

出土遺物（第 15 図、図版 9）

13 ～ 15 は土師質土器である。13・14 は杯である。13 の体部は底部より緩やかに外傾して直線的に立ち上がり、口縁部付近で内湾する。また回転ナデにより､器厚に変化が生じている。底部には回転糸切り後、簀の子状の乾燥台上に置かれたと思われる痕跡が僅かに看取される。14 の体部は底部より緩やかに内湾して立ち上がる。内外面共、器面の荒れが顕著である。15 は鍋である。体部上位で緩やかに内湾し、断面長方形状をなし外傾する口縁部にいたる。口縁端部は面をなす。体部と口縁部の内面境は、明確な稜をなす。外面には煤が付着している。



第 20 図　ＳＰ 23 出土遺物実測図

ＳＤ２（第８図）

位　　置　１区北側、グリッドＢ１～Ｂ４に位置する。

重　　複　ＳＤ３、ＳＸ３と重複し、本遺構の方が古い。

形状･規模　幅 100 ～ 170cm、深さ 57cm 程、調査区内での南北の長さは 11.9 ｍを測る。断面形状は逆台形状を呈す。

覆　　土　地点により若干相違はあるものの、概ね３層を確認した。北西から南東方向への自然傾斜堆積と考えられる。

遺　　物　覆土内からは土師質土器が出土した。

出土遺物（第 17 図、図版 9）

17 は土師質土器の鍋である。体部は内湾する。口頸部は「く」の字状に強く屈曲し、内面には稜線がつく。口縁部は外方へ大きく開き、端部は平坦面をなす。口縁部外面には、ヘラ状工具による調整痕が看取される。また、胴部外面には多くの指頭圧痕が残り、煤が厚く付着する。18 は和泉型の瓦器椀である。底部から緩やかに内湾する体部片である。底部には断面方形の輪高台が貼り付けられている。内外面共に器面の荒れが顕著である。

ＳＤ４（第８図、図版６）

位　　置　１区南側、グリッドＤ５～Ｄ７に位置する。

重　　複　掘立３、ＳＡ１と重複し、本遺構の方が古い。

形状･規模　幅 68 ～ 140cm、深さ 42cm 程、調査区内での南北の長さは 10.5 ｍを測る。断面形状は逆台形状を呈す。

覆　　土　地点により若干相違はあるものの、概ね２層を確認した。自然堆積と考えられる。

付属施設　一部突出した箇所に拳～人頭大の丸礫が敷設されていた。

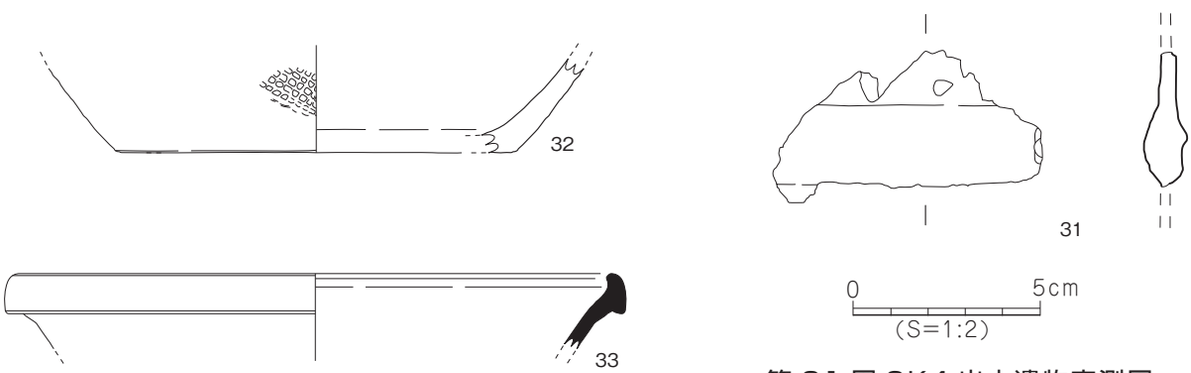
遺　　物　覆土内からは土師器、須恵器が出土した。

出土遺物（第 18 図、図版 10）

19 ～ 25 は土師質土器である。19 ～ 21、23・24 は杯である。19・20 の体部は、底部からやや内湾気味に立ち上がる。21 の体部は底部より緩やかに内湾して立ち上がる。内外面は回転ナデにより僅かに稜が生じている。口縁端部は上向きに細く収められる。全体的に器壁が薄く、精緻な仕上がりとなっている。22 は皿である。体部から口縁部にかけて短く直線的に外方へ開く。25 は羽釜の口縁部で、端部は欠損する。断面三角形の箍（タガ）が貼り付けられ、鍔部より下方には煤が付着する。26 は支脚である。全面赤褐色を呈し、器面の荒れが顕著である。

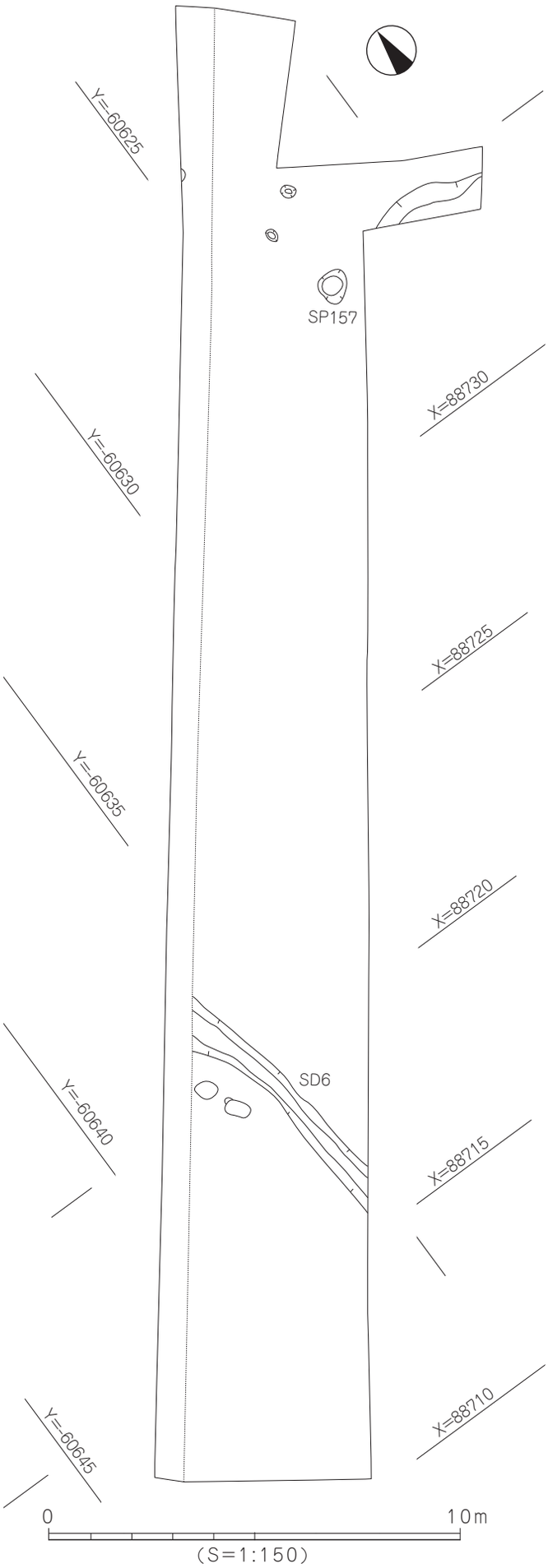
その他の遺構内出土遺物（第 19 ～ 22 図、図版 9、12）

27 ～ 34 は柱穴 (ＳＰ)、土坑 (ＳＫ)、性格不明遺構 (ＳＸ) から出土した遺物である。27・28・32・34 は土師質土器である。27 はＳＰ 131 出土の皿である。28 はＳＰ 132 出土の杯である。32 はＳＸ１から出土した鍋の底部である。外面に格子状タタキの痕跡が残る。34 はＳＸ３出土の杯である。29 はＳＰ 144 から出土した須恵器の皿である。やや肥厚された体部は外反気味に短く伸びる。33 は東播系須恵器の捏鉢である。外反する体部を持ち、口縁端部は上下に拡張される。30 はＳＰ 23 出土の杭である。法量は長さ 26.2cm、直径 4.8cm を測る。芯持ち材で下端の両方を斜めに削り尖らせている。



第 21 図 SK4 出土遺物実測図

第 22 図　ＳＸ１・３出土遺物実測図



第２３図　２区遺構配置図

31 はＳＫ４出土の鉄片である。

〔２〕２区の調査

第Ⅶ層上面にてＳＤ１条、ＳＰ４基、ＳＸ３基を検出した。

ＳＰ 157（第 23 図、図版 7）

位　　置　２区北側、グリッドＥ９に位置する。

重　　複　なし。

形状･規模　平面形態は円形。検出規模は、長軸 83cm、短軸 74cm、深さ 65cm を測る。

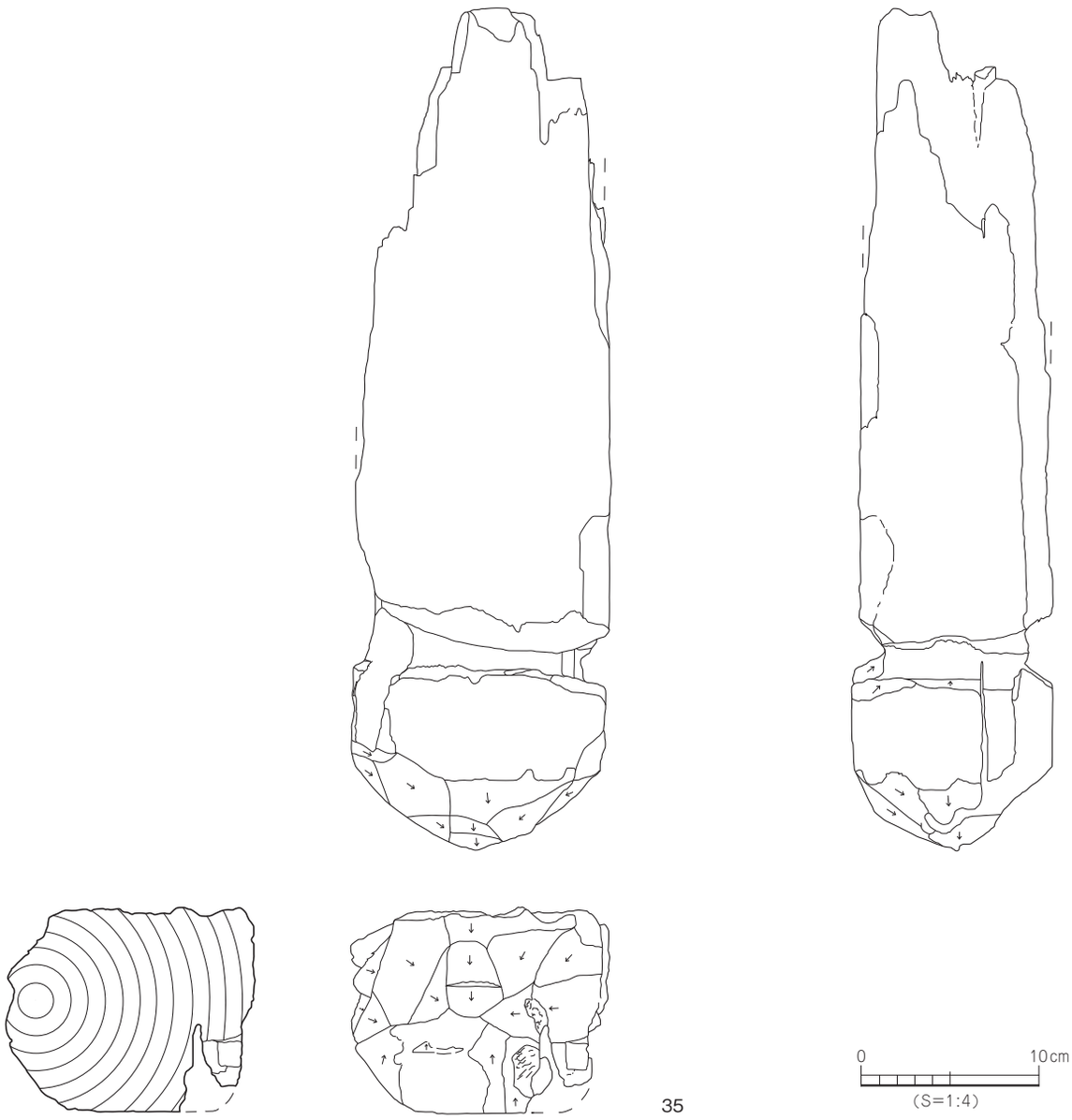
遺　　物　柱穴覆土内からは土師器が出土した。また、底部から柱材の一部が検出された。

出土遺物（第 24 図、図版 12）

35 は SP157 内から出土した丸い柱材である。法量は長さ 48.0 cm、直径 14.6 cm を測る。木取りは、一部が芯にかかる取り方である。上端付近は斜めに削り鈍く尖らせている。また、端部寄りには幅 4 cm、深さ 1.8 cm の溝が抉られ、紐掛け構造を有する。溝部や端面には加工痕が多く残る。

〔３〕包含層出土遺物および表土（第 25 図、図版 11）

36 ～ 41 は土師質土器である。36 は杯で内底部には同心円状に凹みが巡る。外底には糸切り離し後の板目状圧痕が僅かに残る。37 は椀である。断面形が逆台形を呈する輪高台が貼り付けられる。38・39 は皿である。39 の外面にはタール状の黒斑が付着する。40 は釜の口縁部で、口縁端部に接して断面三角形の箍（タガ）が貼り付けられる。41 は鍋の口縁部で、端部は上下に肥厚される。42 ～ 45 は東播系須恵器である。42･43･45 は捏鉢である。44 は擂鉢で、擂目は５本単位である。46 ～ 48 は陶磁器である。46 は白磁皿の底部である。47 は青磁碗の底部である。釉は不透明

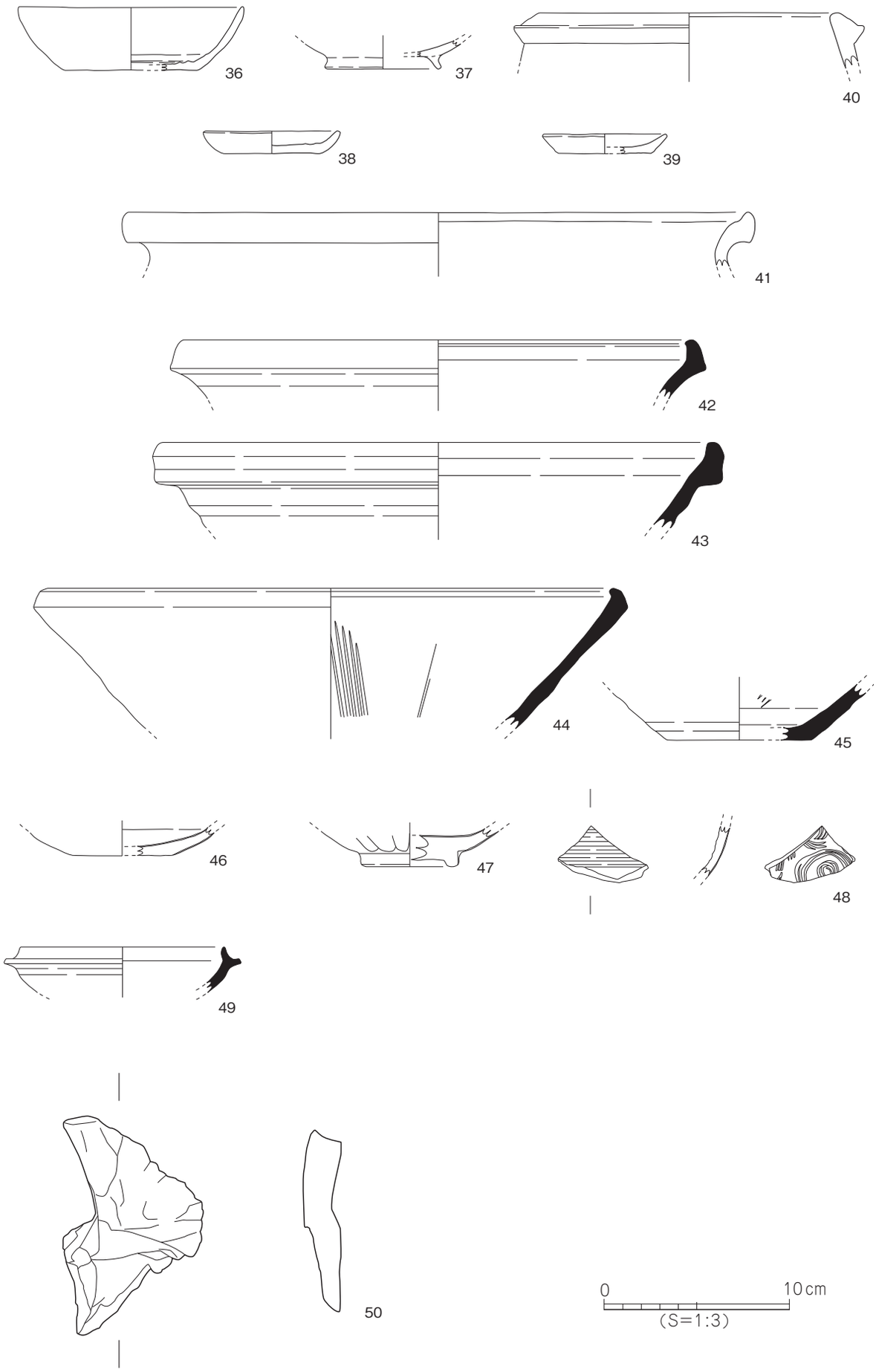


第24図　ＳＰ157出土遺物実測図

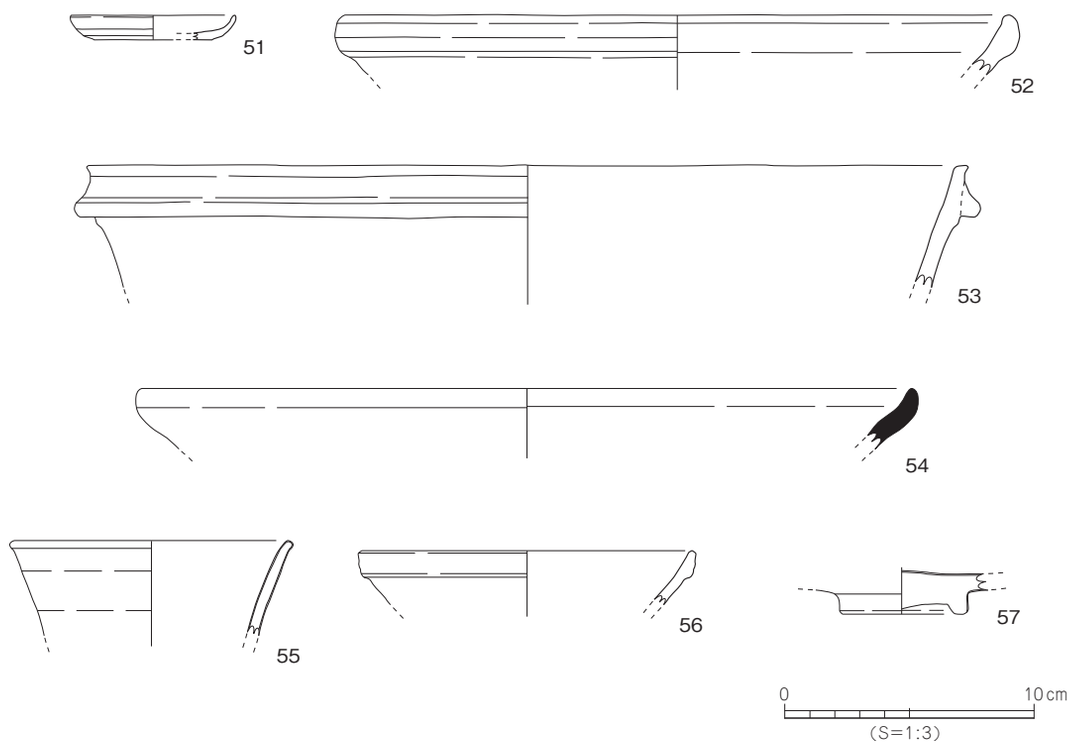
で濃緑色を呈する。48は青白磁梅瓶の体部である。外面はヘラ彫りによる渦巻文が施される。内面は強い横方向の回転により多数の条線が形成される。49は須恵器の坏身である。50はサヌカイトの石核である。

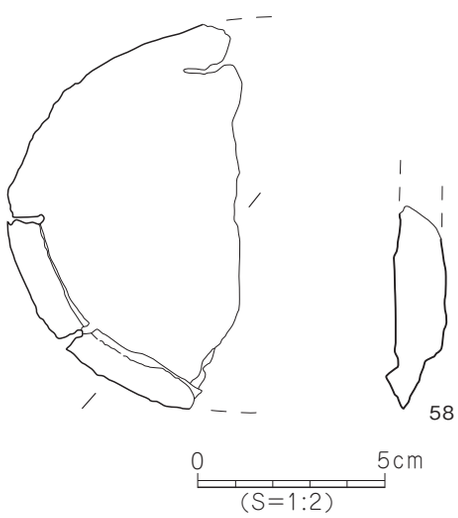
〔4〕表土採集遺物（第26図、図版11、12）

51～53は土師質土器である。51は皿である。体部は短く外反し、口縁端部は細く仕上げられる。52は鍋の口縁端部である。53は体部が大きく外傾する鍋である。口縁部よりやや下がった位置に箍（タガ）が貼り付けられる。54は東播系須恵器の捏鉢である。口縁部が上方へ僅かに拡張され、端部は丸く収められる。55は青磁の碗である。56は白磁の碗である。口縁外側の玉縁は薄い断面三角形を呈する。57は青磁碗の厚い底部である。畳付から底部にかけて釉のふき取りが不完全である。58は性格不明鉄製品である。鋳造品と思われる。



第 25 図　包含層出土遺物実測図





第 26 図　表採遺物実測図

4．小 結

今回の調査では、概ね 13 世紀後半～ 14 世紀の遺物が含まれる層の堆積と、集落関連遺構・遺物を確認した。これまで南梅本地区は集落遺跡の希薄な地域であったが、本調査により中世集落の一端が明らかとなった。

掘立１　構成する柱穴群内から土師器皿（完形品が含まれる）が出土した。これは、建物の廃絶に伴う祭祀遺物と考えられる。時期は出土遺物から 13 世紀後半以降と考える。

ＳＤ２とＳＤ４　検出面自体が脆弱な地盤であり、平面プランに若干の凹凸が見られる。方向性は共に南北である。溝と溝の芯々距離は約 12 ｍである。詳細なる分析・検討を経ねばならないが、人為的に配された可能性を残す遺構である。時期は出土遺物から 13 ～ 14 世紀代と考える。

以上、検出された掘立柱建物跡、溝状遺構、その他柱穴群等から、それらが構成する当時の集落が悪社川の周囲に営まれていたことが分かった。この調査結果は、今後周辺にて発掘調査が行われた場合、貴重なデータになるものである。なお、周辺地域には、近接する播磨塚天神山古墳に代表される古墳が存在することから、中世集落のみならず古墳時代の集落が検出される可能性がある。

表１　遺構一覧１

遺構№	区	グリッド	時代時期	平面形態	断面形態	法量 (cm)			埋土	出土遺物	重複	備考
						長さ	幅	深さ				
ＳＫ１	１区	Ｄ４	中世	円	逆台形	７５	６４	２４	黄灰褐色	土師・須恵	SD1 ↓	
ＳＫ２	１区	Ｃ５	中世	楕円	皿	２７６	８６	１５	黄灰色	土師	SD1 ↓	
ＳＫ３	１区	Ｃ５・Ｃ６	中世	楕円	皿	２２５	４９	１２	黄灰色砂質	土師		
ＳＫ４	１区	Ｃ６	中世	楕円	皿	１２５	６３	３２	黄灰色砂質	土師・須恵・石		
ＳＫ５	１区	Ｄ７・８	中世	楕円	皿	１１５	５２	８	黄灰色	土師		
ＳＫ６	１区	Ｃ３	中世	円	逆台形	７９	７２	３０	褐灰色	土師・炭・鉄		
ＳＸ１	１区	Ｄ５～Ｄ７	中世	不整形	皿	８４０	２６０	１４	黄灰色砂質	土師・須恵・硯・木・炭		
ＳＸ２	１区	Ｄ６										消滅
ＳＸ３	１区	Ｂ２	中世	楕円	皿	２４８	９１	１８	黄灰色砂質	土師	SD2 ↑	
ＳＸ４	２区	Ｄ・Ｅ９				２９３	７５	２０				
ＳＸ５	２区	Ｈ 11				４９	４５					
ＳＸ６	２区	Ｈ 12				５６	４２					
ＳＤ１	１区	Ｃ５～Ｄ４	不明	直線的	逆台形	８６０	１４０	１１	灰色			
ＳＤ２	１区	Ｂ１～Ｂ４	中世	直線的	レンズ状	１１９０	１７０	５７	暗灰褐色	弥生・土師・須恵・木		
ＳＤ３	１区	Ｂ１・２	中世	直線的	レンズ状	５４５	２３０	２３	灰色砂質	土師・鉄		
ＳＤ４	１区	Ｄ５～Ｄ７	中世	直線的	逆台形	１０５０	１４０	４２	暗灰色	土師・須恵・石・陶器		
ＳＤ５	１区	Ｂ３～Ｂ４	中世	直線的	皿	５１０	２０	１１	黄灰色			
ＳＤ６	２区	Ｈ 11・12				６００	１２８	１７				
掘立№						桁	梁	面積				
掘立１	１区	Ｃ３	中世	２×２間	長方形	３４１	３１４	10.7 ㎡				
掘立２	１区	Ｃ・Ｄ６	中世	２×３間	長方形	４６５	４１４	19.3 ㎡				
掘立３	１区	Ｄ７	中世	１×２間	長方形	４２２	２４０	10.1 ㎡				
掘立４	１区	Ｅ６・７	中世	×２間	長方形	４１２	１８７	7.7 ㎡以上				
ＳＡ１	１区	Ｄ６・７	中世	３間	直線	６００						
ＳＰ１	１区	Ｄ５	中世	楕円	逆台形	９７	７０	４７	灰色	鉄		暗灰黄色
ＳＰ２	１区	Ｄ５	中世	楕円	レンズ状	４０	３０	６９	黄灰色	土師・炭	SD3 ↓	
ＳＰ３	１区	Ｄ５	中世	楕円	レンズ状	２７	２２	４７	褐灰色	土師	SD3 ↑	
ＳＰ４	１区	Ｅ７	中世	楕円	レンズ状	３０	２１	５２	褐灰色	土師・炭化米・柱残存		暗灰色
ＳＰ５	１区	Ｅ７	中世	楕円	レンズ状	５３	４０	３７	褐灰色	土師・炭		
ＳＰ６	１区	Ｅ７	中世	円	逆台形	３４		１５	褐灰色	土師		
ＳＰ７	１区	Ｅ７	中世	円	逆台形	２４		９	黄灰色	土師		
ＳＰ８	１区	Ｄ６	中世	楕円	レンズ状	６２	４４	４２	褐灰色	土師・炭	SD4 ↓	
ＳＰ９	１区	Ｅ６	中世	円	逆台形	４２		３６	褐色	土師・炭		
ＳＰ１０	１区	Ｅ７	中世	楕円	レンズ状	３０	１５	２０	黄灰色	土師		
ＳＰ１１	１区	Ｄ７	中世	楕円	レンズ状	５０	４１	５２	褐灰色	土師・須恵	SP104 ↓	

遺構一覧２

遺構№	区	グリッド	時代時期	平面形態	断面形態	法量 (cm)			埋土	出土遺物	重複	備考
						長さ	幅	深さ				
ＳＰ１２	１区	Ｄ７	中世	楕円	レンズ状	３４	１０	２３	黄灰色			
ＳＰ１３	１区	Ｄ６	中世	楕円	レンズ状	４５	３７	１４	黄灰褐色	土師･炭		
ＳＰ１４	１区	Ｄ６	中世	楕円	レンズ状	２０	１５	１３	褐灰色	土師		
ＳＰ１５	１区	Ｅ６							褐灰色	土師		消滅
ＳＰ１６	１区	Ｃ６	中世	円	逆台形	２７		３９	褐灰色			
ＳＰ１７	１区	Ｃ６	中世	楕円	レンズ状	３６	２２	１０	黄灰色	土師		
ＳＰ１８	１区	Ｃ６							褐灰色	土師		消滅
ＳＰ１９	１区	Ｃ６							黄灰色	土師		消滅
ＳＰ２０	１区	Ｄ６	中世	円	逆台形	２５		１７	黄灰色	土師	SD4 ↓	
ＳＰ２１	１区	Ｄ６	中世	楕円	レンズ状	４５	４０		褐灰色	土師･炭		
ＳＰ２２	１区	Ｄ７	中世	円	逆台形	５７		３９	黄灰色	土師･鉄		
ＳＰ２３	１区	Ｄ７	中世	楕円	レンズ状	２０	２０	１２	黄灰色	土師		
ＳＰ２４	１区	Ｄ６	中世	楕円	レンズ状	４６	３５	３６	黄灰褐色	土師･須恵		
ＳＰ２５	１区	Ｂ３	中世	円	逆台形	２８		４８	褐灰色	土師･石･炭	SD5 ↑	
ＳＰ２６	１区	Ｃ４	中世	楕円	レンズ状	４４	３６	５５	褐灰色	土師･木		
ＳＰ２７	１区	Ｂ３	中世	楕円	レンズ状	４２	３６	５７	褐灰色	土師	SD5 ↓	
ＳＰ２８	１区	Ｂ３	中世	円	逆台形	１５		１０	灰褐色	土師	SP154 ↓	
ＳＰ２９	１区	Ｂ２							灰褐色	土師･石	SD2 ↓	消滅
ＳＰ３０	１区	Ｃ２	中世	楕円	レンズ状	５９	５０		黄灰色	土師		消滅
ＳＰ３１	１区	Ｃ２	中世	円	逆台形	２３		２０	褐灰色	土師･陶器		
ＳＰ３２	１区	Ｃ２	中世	円	逆台形	２１		４９	褐灰色	土師･鉄･木		
ＳＰ３３	１区	Ｃ２	中世	円	逆台形	３２		４１	黄灰色	土師		
ＳＰ３４	１区	Ｃ３	中世	楕円	レンズ状	２２	１５	３１	黄灰色			
ＳＰ３５	１区	Ｃ３	中世	円	逆台形	２３		３４	黄灰色	土師･木･炭		
ＳＰ３６	１区	Ｃ３	中世	楕円	レンズ状	３３	２３	５０	黄灰色	土師		
ＳＰ３７	１区	Ｂ３	中世	円	逆台形	１７		２６	黄灰色			
ＳＰ３８	１区	Ｂ３	中世	円	逆台形	２３		２０	黄灰色			
ＳＰ３９	１区	Ｂ３	中世	円	逆台形	２５		4	黄灰色			
ＳＰ４０	１区	Ｂ３	中世	円	逆台形	１５		5	褐灰色		SP41 ↓	
ＳＰ４１	１区	Ｂ３	中世	円	逆台形	１５		6	褐灰色		SD2 ↓	SP40 ↑
ＳＰ４２	１区	Ｂ２	中世	円	逆台形	２８			褐灰色	土師･鉄	SD2 ↓	消滅
ＳＰ４３	１区	Ｂ３	中世	円	逆台形	１９		２８	褐灰色	土師･石	SD2 ↓	
ＳＰ４４	１区	Ｂ３							褐灰色		SD2 ↓	消滅
ＳＰ４５	１区	Ｂ３	中世	円	逆台形	２０		8	褐灰色		SD2 ↓	
ＳＰ４６	１区	Ｃ３	中世	円	逆台形	１７		３５	黄灰色	土師		
ＳＰ４７	１区	Ｃ３	中世	円	逆台形	１６		２４	黄灰色	土師		
ＳＰ４８	１区	Ｃ３	中世	円	逆台形	１５		4	黄灰色			

遺構一覧３

遺構№	区	グリッド	時代時期	平面形態	断面形態	法量 (cm)			埋土	出土遺物	重複	備考
						長さ	幅	深さ				
ＳＰ４９	１区	Ｃ３	中世	四角		３９	３８	５６	黄灰褐色	土師		
ＳＰ５０	１区	Ｃ３	中世	楕円	レンズ状	２４	１４	１７	黄灰色	土師		
ＳＰ５１	１区	Ｃ３	中世	楕円	レンズ状	２１	１６		黄灰色			
ＳＰ５２	１区	Ｃ３	中世	楕円	レンズ状	１７	１４	１７	黄灰色			
ＳＰ５３	１区	Ｃ３							黄灰色			消滅
ＳＰ５４	１区	Ｃ２							黄灰色			消滅
ＳＰ５５	１区	Ｃ２							黄灰色			消滅
ＳＰ５６	１区	Ｃ３	中世	四角		４４	４１	５０	黄灰褐色	土師･炭		
ＳＰ５７	１区	Ｃ４	中世	楕円	レンズ状	５４	３８	７５	黄灰褐色	土師		
ＳＰ５８	１区	Ｃ４	中世	楕円	レンズ状	２９	２２	３８	黄灰色	土師･陶器		
ＳＰ５９	１区	Ｃ４	中世	楕円	レンズ状	３１	２０	３１	黄灰色			
ＳＰ６０	１区	Ｃ３	中世	楕円	レンズ状	１８		４２	黄灰色	土師･木･鉄		
ＳＰ６１	１区	Ｃ３	中世	円	逆台形	１７		４１	黄灰褐色	土師		
ＳＰ６２	１区	Ｃ３	中世	円	逆台形	２６		１５	黄灰色			
ＳＰ６３	１区	Ｃ４	中世	円	逆台形	１５		２３	褐灰色		SP64 ↓	
ＳＰ６４	１区	Ｃ４	中世	楕円	レンズ状	４１	３２	１６	黄灰色		SP63 ↑	
ＳＰ６５	１区	Ｃ４	中世	円	逆台形	２２		５３				
ＳＰ６６	１区	Ｃ５	中世	円	逆台形	２４		４２	褐灰色			
ＳＰ６７	１区	Ｃ５	中世	楕円	レンズ状	３０	１６		褐灰色			消滅
ＳＰ６８	１区	Ｃ５	中世	楕円	レンズ状	２２	１９		褐灰色	土師		
ＳＰ６９	１区	Ｃ５	中世	楕円	レンズ状	２５	２０	３９	褐灰色			
ＳＰ７０	１区	Ｃ５	中世	楕円	レンズ状	２１	１９	６４	褐灰色			
ＳＰ７１	１区	Ｃ５	中世	四角		２１	２０		褐灰色	残存杭		
ＳＰ７２	１区	Ｄ５	中世	楕円	レンズ状	３０	２５	６５	褐灰色	土師		
ＳＰ７３	１区	Ｅ７	中世	円	逆台形	３２		３３	褐灰色	土師		
ＳＰ７４	１区	Ｃ６	中世	円	逆台形	１９		４７	褐灰色	土師･炭		
ＳＰ７５	１区	Ｃ６	中世	円	逆台形	１８		３６	褐灰色	土師		
ＳＰ７６	１区	Ｄ６	中世	楕円	レンズ状	４７	３５	４１	褐灰色	土師･炭		
ＳＰ７７	１区	Ｄ６	中世	円	逆台形	１６		３２	褐灰色	土師		
ＳＰ７８	１区	Ｄ６	中世	楕円	レンズ状	３０	２１	３５	黄灰色	土師･炭		
ＳＰ７９	１区	Ｄ５	中世	四角		２９	２５	６７	褐灰色	土師		
ＳＰ８０	１区	Ｄ５	中世	円	逆台形	２４		３８	黄灰色			
ＳＰ８１	１区	Ｃ６	中世	円	逆台形	４４		４７	褐灰色	土師		
ＳＰ８２	１区	Ｃ６							褐灰色			消滅
ＳＰ８３	１区	Ｄ６							褐灰色			消滅
ＳＰ８４	１区	Ｄ６							褐灰色			消滅
ＳＰ８５	１区	Ｅ６	中世	円	逆台形	１９		３９	褐灰色	土師		

遺構一覧４

遺構№	区	グリッド	時代時期	平面形態	断面形態	法量 (cm)			埋土	出土遺物	重複	備考
						長さ	幅	深さ				
ＳＰ８６	１区	Ｅ６	中世	楕円	レンズ状	３３	２７	３７	褐灰色	土師		
ＳＰ８７	１区	Ｅ６	中世	円	逆台形	9		5	黄灰色			
ＳＰ８８	１区	Ｅ６							褐灰色	土師		消滅
ＳＰ８９	１区	Ｅ６							褐灰色			消滅
ＳＰ９０	１区	Ｅ６	中世	円	逆台形	２１		４７	褐灰色			
ＳＰ９１	１区	Ｄ６							褐灰色			消滅
ＳＰ９２	１区	Ｄ６							褐灰色			消滅
ＳＰ９３	１区	Ｄ６	中世	楕円	レンズ状	４５	３０	５６	褐灰色	土師･須恵･炭		消滅
ＳＰ９４	１区	Ｄ５	中世	円	逆台形	２０			褐灰色			
ＳＰ９５	１区	Ｅ７	中世	円	逆台形	２１		１２	褐灰色			
ＳＰ９６	１区	Ｄ５	中世	四角		１８	１６	２２	褐灰色	土師	SD4 ↓	
ＳＰ９７	１区	Ｄ６	中世	円	逆台形	２０			褐灰色		SD4 ↓	
ＳＰ９８	１区	Ｄ５	中世	楕円	レンズ状	２７	１９	２５	褐灰色			
ＳＰ９９	１区	Ｄ５							黄灰色	土師		消滅
ＳＰ 100	１区	Ｄ５	中世	楕円	レンズ状	３０	２２	３４	褐灰色	土師		
ＳＰ 101	１区	Ｄ６	中世	楕円		３０	２６	３５	褐灰色	土師･須恵		
ＳＰ 102	１区	Ｄ７	中世	円	逆台形	２２		4	黄灰色	土師		
ＳＰ 103	１区	Ｄ７	中世	楕円	レンズ状	４１	３１	４１	褐灰色	土師･炭		
ＳＰ 104	１区	Ｄ７	中世	楕円	レンズ状	３５	２５	３７	褐灰色	土師･炭	SP11 ↑	SD4 ↓
ＳＰ 105	１区	Ｄ７	中世	楕円	レンズ状	５３	４５	４５	黄灰色	土師･木		
ＳＰ 106	１区	Ｃ３	中世	円	逆台形	２４		４７	黄灰色	土師･石･炭		
ＳＰ 107	１区	Ｄ７	中世	円	逆台形	２５		３９	褐灰色		SD4 ↓	
ＳＰ 108	１区	Ｄ７	中世	楕円	レンズ状	４５	３７	３８	褐灰色	土師･木	SD4 ↓	
ＳＰ 109	１区	Ｄ７	中世	楕円	レンズ状	１５	１１	１５	褐灰色		SD4 ↓	
ＳＰ 110	１区	Ｄ７	中世	円	逆台形	１２			褐灰色			
ＳＰ 111	１区	Ｅ７	中世	楕円	レンズ状	３０	２６	４７	褐灰色	土師･須恵		
ＳＰ 112	１区	Ｄ６	中世	楕円	レンズ状	２６	２０	２６	褐灰色	土師	SD4 ↓	
ＳＰ 113	１区	Ｄ６	中世	円	逆台形	9			褐灰色		SD4 ↓	
ＳＰ 114	１区	Ｄ７	中世	円	逆台形	３０		５６	褐灰色	土師	SD4 ↓	
ＳＰ 115	１区	Ｄ７	中世	円	逆台形	１７			褐灰色	土師	SD4 ↓	
ＳＰ 116	１区	Ｄ５	中世	円	逆台形	１４		１２	褐灰色	土師	SD4 ↓	
ＳＰ 117	１区	Ｄ５							褐灰色	土師	SD4 ↓	消滅
ＳＰ 118	１区	Ｄ５							褐灰色	土師	SD4 ↓	消滅
ＳＰ 119	１区	Ｄ６	中世	楕円	レンズ状	５６	３０	６４	褐灰色	土師		
ＳＰ 120	１区	Ｅ６	中世	四角		１７	１６	２４	褐灰色	土師	SD4 ↓	
ＳＰ 121	１区	Ｄ７	中世	楕円	レンズ状	３０	２３	２９	褐灰色	土師	SD4 ↓	
ＳＰ 122	１区	Ｄ７	中世	楕円	レンズ状	３１	１７	２９	褐灰色	土師		

遺構一覧５

遺構No.	区	グリッド	時代時期	平面形態	断面形態	法量 (cm)			埋土	出土遺物	重複	備考
						長さ	幅	深さ				
ＳＰ 123	１区	Ｄ６	中世	楕円	レンズ状	５２	４０	３８	褐灰色		SD4 ↓	
ＳＰ 124	１区	Ｃ６							褐灰色	土師		消滅
ＳＰ 125	１区	Ｄ５	中世	楕円	レンズ状	４０	１５		灰褐色	土師	SD4 ↓	
ＳＰ 126	１区	Ｄ７	中世	円	逆台形	２２		３７	褐灰色	土師	SD4 ↓	
ＳＰ 127	１区	Ｄ７	中世	円	逆台形	２３		２３	褐灰色	土師	SD4 ↓	
ＳＰ 128	１区	Ｄ６	中世	円	逆台形	３２		２７	褐灰色	土師	SD4 ↓	
ＳＰ 129	１区	Ｄ７							褐灰色	土師･須恵		消滅
ＳＰ 130	１区	Ｂ４	中世	円	逆台形	３４		３２	褐灰色	土師		
ＳＰ 131	１区	Ｃ３	中世	円	逆台形	２６		４４	褐灰色	土師		
ＳＰ 132	１区	Ｃ３	中世	円	逆台形	８１		３１	褐灰色	土師		
ＳＰ 133	１区	Ｃ６	中世	円	逆台形	４３		３６	褐灰色	土師		
ＳＰ 134	１区	Ｃ５	中世	楕円	レンズ状	３４	２１	６８	褐灰色	土師	SD1 ↓	
ＳＰ 135	１区	Ｃ５	中世	楕円	レンズ状	３０	２１	５２	褐灰色	土師･陶器	SD1 ↓	
ＳＰ 136	１区	Ｄ７	中世	円	逆台形	３０		５４	褐灰色	土師		
ＳＰ 137	１区	Ｃ５	中世	楕円	レンズ状	３０	１９	４２	褐灰色	土師･木		
ＳＰ 138	１区	Ｃ５							褐灰色	土師･木		消滅
ＳＰ 139	１区	Ｃ５							褐灰色			
ＳＰ 140	１区	Ｃ５							褐灰色	土師		消滅
ＳＰ 141	１区	Ｃ５							灰色粘土	土師	SD1 ↓	消滅
ＳＰ 142	１区	Ｃ５							灰色粘土	土師	SK2 ↓	消滅
ＳＰ 143	１区	Ｃ５							灰色粘土	土師	SK2 ↓	消滅
ＳＰ 144	１区	Ｂ４	中世	円	逆台形	３４			褐灰色	須恵		
ＳＰ 145	１区	Ｄ７							褐灰色	土師		消滅
ＳＰ 146	１区	Ｃ３	中世	楕円	レンズ状	９５	５５	２６	褐灰色			
ＳＰ 147	１区	Ｂ４	中世	円	逆台形	１４		３８	黄灰色			
ＳＰ 148	１区	Ｂ４	中世	楕円	レンズ状	２４	２０	５２	黄灰色			
ＳＰ 149	１区	Ｂ５	中世	四角		１８	１２	３１	黄灰色			
ＳＰ 150	１区	Ｂ５							黄灰色			消滅
ＳＰ 151	１区	Ｃ５							黄灰色			消滅
ＳＰ 152	１区	Ｃ５							黄灰色			消滅
ＳＰ 153	１区	Ｃ５							褐灰色		SD1 ↓	消滅
ＳＰ 154	１区	Ｂ３	中世	円	逆台形	７０		３０	褐灰色		SP28 ↑	
ＳＰ 155	１区	Ｂ３	中世	楕円	レンズ状	３５	２０	１２	黄灰色			
ＳＰ 156	１区	Ｂ３	中世	円	逆台形	１７		１２	黄灰色		SD2 ↓	
ＳＰ 157	２区	Ｅ９	中世	楕円	レンズ状	８２	７４		灰色粘土			
ＳＰ 158	２区	Ｅ８	中世	楕円	レンズ状	２７	２２		褐灰色			
ＳＰ 159	２区	Ｅ８	中世	不整円		３４	２８		褐灰色			

遺構一覧６

遺構№	区	グリッド	時代時期	平面形態	断面形態	法量 (cm)			埋土	出土遺物	重複	備考
						長さ	幅	深さ				
ＳＰ 160	２区	Ｅ８	中世	円	逆台形	２７			褐灰色			

遺物観察表　－凡例－

（１）以下の表は、本遺跡の遺物の計測値および観察一覧である。
　遺物観察表は武正良浩、戸川安子、佐伯利枝が作成した。

（２）遺物観察表の各掲載について

法　量　欄　（　）：推定復元値。

調　整　欄　土器の各部位名称を略記。
　例）口→口縁部、拡→拡張部、胴中→胴部中位、胴底→胴部～底部

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。
　例）砂→砂粒、長→長石、石→石英

表２　出土遺物観察表　（土製品）

番号	種類	器種	残存	法量 (cm)［推定値］・(残存値)			調整・特徴	胎土	焼成	外面色調	内面色調	備考	図版
				口径	器高	底部径							
1	土師質	杯	口縁 1.5cm 底部 1/4	［12.5］	3.0	3.0	外面；ナデ 内面；ナデ	石･長 (1)	◎	灰白	灰白		8
2	土師質	杯	口縁 2cm 底部 1/3	［11.8］	3.0	[7.6]	外面；ヨコナデ・回転糸切 内面；ヨコナデ	微砂粒 褐色粒	◎	灰白	灰白		8
3	土師質	杯	1/2 弱	［13.4］	4.0	[8.7]	外面；ヨコナデ・回転糸切→板圧痕 内面；ヨコナデ	石･長 (1 ～ 4)	○	灰白	灰白		8
4	土師質	杯	口縁 1/4 弱	［12.0］	2.8	[6.8]	外面；回転ヨコナデ 内面；摩滅	石･長 (1)	◎	灰白	灰白		8
5	土師質	杯	口縁 3/4 底部完形	［11.2］	3.3	6.7	外面；ヨコナデ・回転糸切 内面；ヨコナデ	石･長 (1 ～ 2)	◎	灰白	灰白		8
6	土師質	杯	底部のみ 完形	［11.4］	3.4	6.0	外面；ヨコナデ・回転糸切→板圧痕 内面；ヨコナデ	石･長 (1 ～ 1.5)	◎	灰白	灰白		8
7	土師質	杯	底部のみ 完形	［12.0］	3.1	6.8	外面；摩滅・回転糸切→タタキ痕 内面；ナデ・摩滅	石･長 (1 ～ 3)	◎	灰白	灰白		8
8	土師質	杯	口縁 2/3 底部完形	［11.3］	3.0	7.0	外面； 内面；	長 (1) 微砂粒	○	灰白	灰白		8
9	須恵器	捏鉢	口縁 1/12	［24.7］	(4.1)		外面；回転ナデ 内面；回転ナデ	石 (4) 微砂粒	◎	灰	灰白		8
10	土師質	杯	底部 1/3 弱		(2.1)	[7.2]	外面；ヨコナデ・回転糸切→板圧痕 内面；ヨコナデ	石 (1 ～ 1.5)	◎	灰白	灰白		8
11	土師質	土釜	口縁 1/10	［16.5］	(3.7)		外面；ナデ 内面；ナデ	石･長 (1 ～ 3)	◎	黄橙	黄橙		9
12	土師質	杯	口縁 1/8 弱	［13.8］	(2.0)		外面；ナデ・剥離 内面；ナデ・剥離	石 (1) 石粒 (3)	◎	灰白	灰白		9
13	土師質	杯	口縁完形 底部 1/4	12.0	3.3	[6.7]	外面；回横ナデ・篦削り→板圧痕 内面；ナデ	微砂粒	◎	褐灰	褐灰		9
14	土師質	杯	口縁 2cm 底部 1/4	［11.2］	3.7	[7.2]	外面；ナデ・摩滅 内面；ナデ・摩滅	石 (1 ～ 3)	◎		浅黄橙		9
15	土師質	鍋	口縁 9 ㎝	［36.8］	(8.0)		外面；ナデ 内面；ナデ	石･長 (1 ～ 3)	◎	黒褐	黄橙		9
17	土師質	鍋	口縁 3cm 頸部 1/11	［38.9］	(7.7)		外面；ナデ・ハケ→ナデ 内面；摩滅	石･長 (1 ～ 4) 金	◎	黒褐	黄褐		9
18	瓦器	椀	底部 1/9		(4.25)	[6.0]	外面；ヨコナデ・ナデ 内面；ミガキ・摩滅	微砂粒	◎	灰白	暗灰		9
19	土師質	杯	口縁 1/2 底部完形	［10.8］	2.55	6.9	外面；摩滅 内面；ヨコナデ	石･長 (1 ～ 3)	◎	橙	橙		10
20	土師質	杯	口縁 2/3 底部完形	［12.1］	3.2	6.9	外面；ヨコナデ・回転糸切 内面；ヨコナデ	長 (1 ～ 11)	◎	灰白	灰白		10
21	土師質	杯	底部のみ 完形	［12.2］	3.5	6.0	外面；ヨコナデ・回転糸切 内面；ヨコナデ	長 (1 ～ 2)	◎	灰白	灰		10
22	土師質	皿	底部 1/2	［7.5］	1.35	[5.5]	外面；ヨコナデ・回転糸切 内面；ヨコナデ	微砂粒	◎	浅黄橙	浅黄橙		10
23	土師質	杯	口縁 1/3 強 底部 1/2 強	［12.2］	2.9	[6.6]	外面；ナデ 内面；ナデ	石･長 (1 ～ 1.5)	◎	灰白	灰白		10
24	土師	杯	底部 1/3	［12.5］	2.9	[8.0]	外面；ヨコナデ・摩滅・回転糸切 内面；ナデ	石･長 (1 ～ 2)	○	黄橙	黄褐		10
25	土師質	羽釜	4 × 3 ㎝ （破片）		(3.9)		外面；ナデ 内面；ナデ	石･長 (1 ～ 2)	◎	橙	黄褐		10
26	土製品	支脚	ほぼ完形		(4.8)		外面；ナデ 内面；ナデ	石･長 (1 ～ 4)	◎	灰赤			10
27	土師質	皿	口縁 1/4 底部 1/2	［6.6］	1.3	[5.4]	外面；ヨコナデ・回転糸切→板圧痕 内面；ヨコナデ	微砂粒	◎	褐灰	褐灰		9
28	土師質	杯	口縁 1/5 底部 1/2	［7.0］	2.95	[11.4]	外面；ヨコナデ・回転糸切→板圧痕 内面；ヨコナデ	長 (1 ～ 3)	◎	灰白	灰白		9
29	須恵器	杯	口縁 1/5	［18.0］	2.6	[13.8]	外面；回転ナデ 内面；回転ナデ	長（微）	◎	灰白	灰白		9
32	土師質	鍋	底部 4.5cm		(3.8)	[16.1]	外面；格子のタタキ・ナデ 内面；ナデ	長 (1 ～ 3)	◎	灰黄褐	褐灰		9
33	須恵器	捏鉢	口縁 4 ㎝	［24.8］	(3.0)		外面；ヨコナデ 内面；ヨコナデ	微砂粒	◎	灰白	灰白		9
34	土師質	杯	口縁 5/6 底部 1/3	［11.7］	3.4	[5.8]	外面；ナデ 内面；ナデ	石･長 (1 ～ 2)	◎	灰白	灰白		9

出土遺物観察表　（土製品）

番号	種類	器種	残存	法量(cm)［推定値］・(残存値)			調整・特徴	胎土	焼成	外面色調	内面色調	備考	図版
				口径	器高	底部径							
36	土師質	杯	口縁 2 ㎝ 底部 1/4	［12.1］	3.4	[7.1]	外面；ナデ・回転糸切 内面；ナデ・回転ナデ	微砂粒	◎	灰白	灰白		11
37	土師質	椀	底部 1/12		(1.5)	[6.2]	外面；回転ナデ 内面；ナデ	長 (1)	◎	灰	浅黄		11
38	土師質	皿	口縁 1/10 底部 1/4	［7.4］	1.2	[5.4]	外面；ナデ・回転糸切 内面；ナデ・回転ナデ	微砂粒	○	赤灰	明褐灰		11
39	土師質	皿	口縁 1/7 底部 1/5	［6.7］	1.1	[5.0]	外面；ナデ・摩滅 内面；ナデ	石 (1 ～ 2.5)	○	灰白	灰白	ﾀｰﾙ付着	11
40	土師質	釜	口縁 2.5cm	［16.0］	(3.0)		外面；ナデ 内面；ナデ	石･長 (1 ～ 2.5)	○	橙	黄橙		11
41	土師質	鍋	口縁 5cm	［34.1］	(2.9)		外面；ナデ・回転ナデ 内面；回転ナデ	石･長 (1)	◎	明黄褐	灰		11
42	須恵器	捏鉢	口縁 1/13	［27.3］	(3.2)		外面；ヨコナデ 内面；ヨコナデ	長 (1 ～ 2)	◎	灰白	灰白	施釉 (ｵﾘｰﾌﾞ灰)	11
43	須恵器	捏鉢	口縁 1/12	［30.7］	(4.6)		外面；ヨコナデ 内面；ヨコナデ	石･長 (1 ～ 2)	◎	灰白	灰白		11
44	須恵器	擂鉢	口縁 1/8	［32.0］	(7.6)		外面；ナデ 内面；ナデ・5 条の条痕	長 (1 ～ 4)	◎	灰	灰		11
45	須恵器	捏鉢	底部 1/6		(3.0)	[7.8]	外面；ナデ 内面；ナデ・3 条の条痕	微砂粒	◎	灰	灰白		11
46	陶磁器	白磁皿	底部 1/8		(1.6)	[5.4]	外面；ナデ 内面；施釉の為不明	微砂粒	◎	灰白		施釉 (明ｵﾘｰﾌﾞ灰)	11
47	陶磁器	青磁碗	底部 1/2 弱		(2.1)	[5.2]	外面；ナデ 内面；施釉の為不明	微砂粒	◎	灰		施釉 (ｵﾘｰﾌﾞ灰)	11
48	陶磁器	青白磁 梅瓶	胴部破片		(3.1)		外面；施釉の為不明 内面；施釉の為不明	微砂粒	◎			施釉 (明緑灰)	11
49	須恵器	坏身	受部 3.5 ㎝	［11.0］	(2.4)		外面；回転ヨコナデ 内面；回転ヨコナデ	微砂粒	◎	灰	灰		
51	土師質	皿	口縁 1/6	［6.7］	1.0	[4.7]	外面；回転ナデ・回転糸切 内面；ナデ	石･長 (1 ～ 2)	◎	灰赤	黒		11
52	土師質	鍋	口縁 4.5cm	［27.4］	(2.4)		外面；摩滅 内面；摩滅	石･長 (1 ～ 3)	◎	黒褐	黒褐		11
53	土師質	鍋	口縁 4 ㎝	［35.2］	(4.9)		外面；ナデ 内面；ナデ	石･長 (1 ～ 5)	◎	黒褐	黒褐		11
54	須恵器	捏鉢	口縁 5 ㎝	［31.3］	(2.4)		外面；回転ナデ 内面；回転ナデ	微砂粒	◎	灰	灰白	自然釉	11
55	陶磁器	青磁碗	口縁 1/7	［11.3］	(3.8)		外面；回転ナデ 内面；回転ナデ	微砂粒 石粒 (2)	◎	灰白	灰白	施釉 (灰ｵﾘｰﾌﾞ)	11
56	陶磁器	白磁碗	口縁 2cm	［13.5］	(2.2)		外面；施釉の為不明 内面；施釉の為不明	微砂粒	◎			施釉 (明ｵﾘｰﾌﾞ灰)	11
57	陶磁器	青磁碗	底部のみ 完形		(1.7)	5.2	外面；施釉の為不明 内面；回転ナデ	微砂粒	◎	灰	灰	施釉 (灰ｵﾘｰﾌﾞ)	11

表３　出土遺物観察表　（木製品）

番号	種類	遺存状態	樹種	法量 (cm)［推定値］・(残存値)				木取り	備考	図版
				長さ	幅	厚さ	直径			
16	木製礎	欠損	コウヤマキ	(14.6)			16	丸太みかん割り 1/4・辺材		12
30	杭	欠損	マツ	(26.2)			4.8	芯持ち材		12
35	柱	欠損	マツ	(48.0)			14.6	芯持ち材 (一部)		12

表４　出土遺物観察表　（金属品）

番号	種類	遺存状態	材質	法量 (cm)［推定値］・(残存値)				備考	図版
				長さ	幅	厚さ	重量 (g)		
31	不明	破片	鉄	(7.2)	(3.6)	(1.2)	13.6		12
58	不明	欠損	鉄	(10.3)	(6.2)	(1.7)	92.2	鋳造品	12

表５　出土遺物観察表　（石製品）

番号	種類	遺存状態	石材	法量 (cm)［推定値］・(残存値)				備考	図版
				長さ	幅	厚さ	重量 (g)		
50	石核	剥片	ｻﾇｶｲﾄ	(3.9)	(2.5)	(2.5)	4.9		11

第５章

南梅本上方（かみがた）遺跡

－２次調査地－

第５章　南梅本上方遺跡２次調査地

１．調査の経緯

平成 15 年 5 月 13 日、松山市都市整備部道路建設課（以下、道路建設課）より、上記の場所における埋蔵文化財の試掘・確認調査申請が、松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。申請を受けた文化財課と埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）は協議の上、埋文センターが平成 16 年６月１日から６月４日の間、 松山市南梅本町甲 385-2 外（面積 14,044 ㎡のうち 1,397 ㎡）について試掘調査を実施した。申請地は、悪社川を挟み北と南に分かれることから調査の便宜上、南部をＡ区（現南梅本上方遺跡２次調査地）とし北部をＢ区（現南梅本長広遺跡）とした。申請地Ｂ区では７本のトレンチを設定し、層序と遺構の有無を確認した。その結果、中世から近世の遺物を包含する土層や同期と思われる遺構（溝状遺構、土坑、柱穴等）が検出された。6 月 14 日付の当該試掘調査報告書を基に検討され、遺跡が確認された部分については本格調査が必要と判断された。

以上の経緯を踏まえ、道路建設課、文化財課、埋文センターの三者は遺跡の取り扱いについて協議を行った。その結果、道路改良工事によって遺跡が失われる該当エリアについて記録保存を目的とした本格調査を実施することになった。

南梅本上方遺跡２次調査地は、調査対象地の南部にあたり、調査前は水田であった。調査面積は 577.56 ㎡である。発掘調査に先立ち、上記２遺跡の調査地内掘削計画を検討した。その結果重機の搬入や対象面積、また遺構の密度を検討した結果、調査は長広遺跡から行い順次南梅本上方遺跡２次調査地に調査を移行していく方法が採られた。

以下、調査行程を略記する。

平成 16 年 10 月 18 日　対象地の周囲を丸杭とトラロープを用いて安全対策を施した。掘削予定地については下草刈りと調査区の線引きを実施。

12 月 20 日～ 22 日　上方遺跡２次調査地重機による掘削開始。

平成 17 年１月７日　上方遺跡調査区内の遺構精査作業開始し、調査区内全面に中世から近世の鋤跡を多数検出した。その後平板測量作業を開始。

１月 13 日　第一遺構面検出写真を撮影する。鋤跡遺構の精査と掘り下げ、測量を開始。

１月 20 日　基準点測量と設置を行い、グリッド杭設置作業を始める。および遺構面精査。

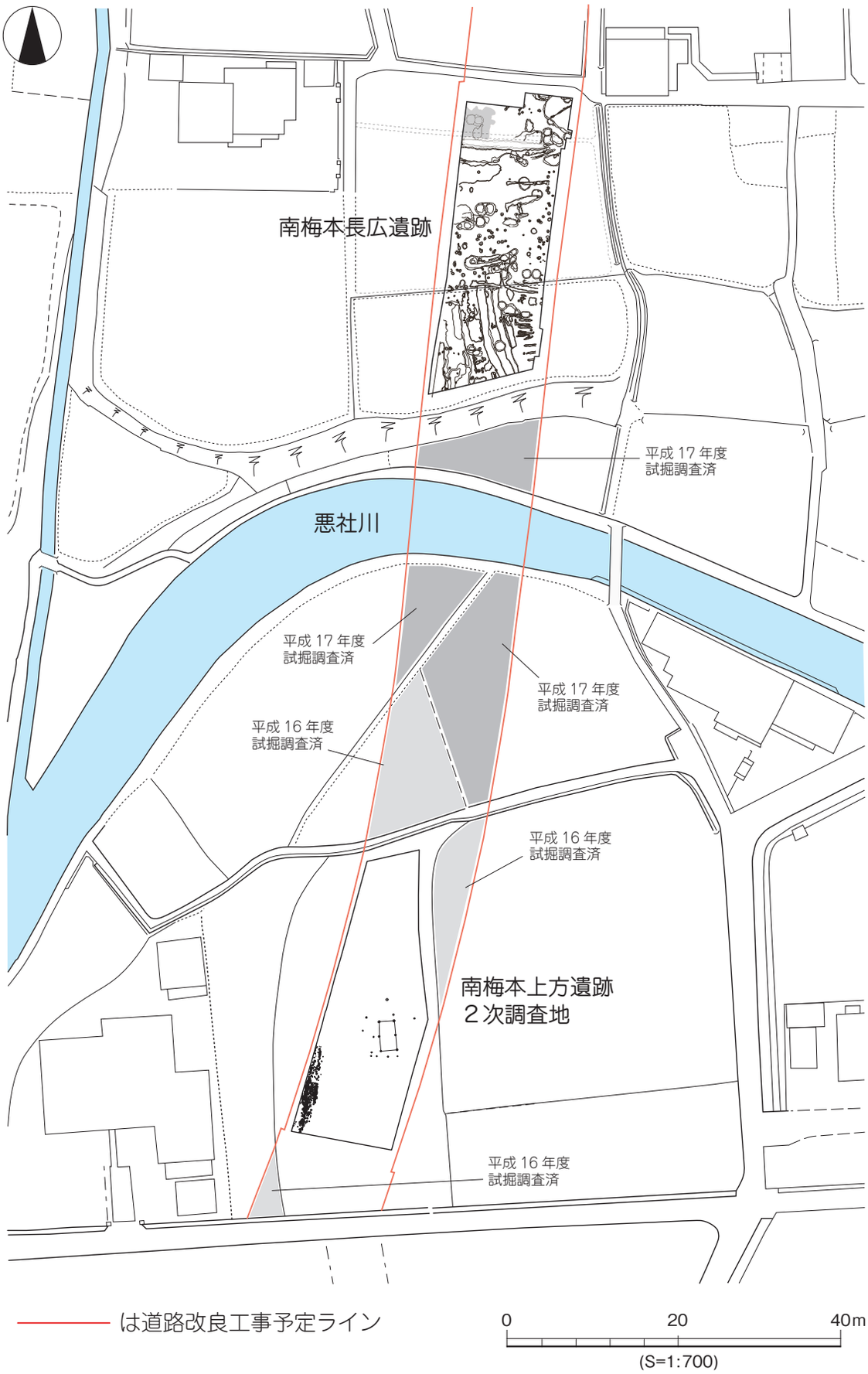
２月４日　第１遺構面完掘状況写真を撮影。

２月７日～９日　第１遺構面を重機により掘削開始。

２月 10 日　遺構検出作業開始。掘立１棟及び柱穴と礫群を検出。

３月 28 日～ 31 日　遺構完掘状況写真を撮影。重機による埋め戻し開始。

平成 17 年３月 30 日・31 日に発掘機材を搬出し、屋外調査を終了。


南梅本長広遺跡
平成 17 年度
試掘調査済
悪社川
平成 17 年度
試掘調査済
平成 17 年度
試掘調査済
平成 16 年度
試掘調査済
平成 16 年度
試掘調査済
南梅本上方遺跡
２次調査地
平成 16 年度
試掘調査済
は道路改良工事予定ライン
0
20
40m
(S=1:700)

第 27 図　調査地位置図

2．層位（第 30・31 図、図版 17）

本遺跡は、悪社川によって形成された扇状地上に立地し、調査区はおおよそ北東から南西に緩傾斜する。

調査地の基本土層は、第一層新旧耕作土・新旧床土、第Ⅱ層にぶい黄褐色土、第Ⅲ層明黄褐色土、第Ⅳ層黄色土、第Ⅴ層灰黄色土、第Ⅵ層暗灰黄色土、第Ⅶ層明黄褐色土、第Ⅷ層黄灰色微砂である。遺構の検出は掘立柱建物址が第Ⅵ層上面にて検出。礫群は第Ⅵ層～第Ⅶ層にて検出した。

第Ⅰ層－ 1. 現耕作土（水田）である。　2. 床土である。　3. 旧耕作土である。　4. 旧床土である。
　　第Ⅰ層の厚さは、19 ㎝～ 30 ㎝を測り、調査区全域に堆積する。

第Ⅱ層－にぶい黄褐色土。調査区南部を中心に 3/4 程度の堆積である。厚さ２㎝～ 19 ㎝を測る。

第Ⅲ層－明黄褐色土。調査区西中央部から南東部にかけて堆積する。厚さ２㎝～ 13 ㎝を測る。

第Ⅳ層－黄色土。調査区西部全域から東南部にかけて広く堆積する。厚さ３㎝～ 10 ㎝を測る。

第Ⅴ層－灰黄褐色土。調査区南西部から南部にかけて堆積する。厚さ２㎝～ 16 ㎝を測る。

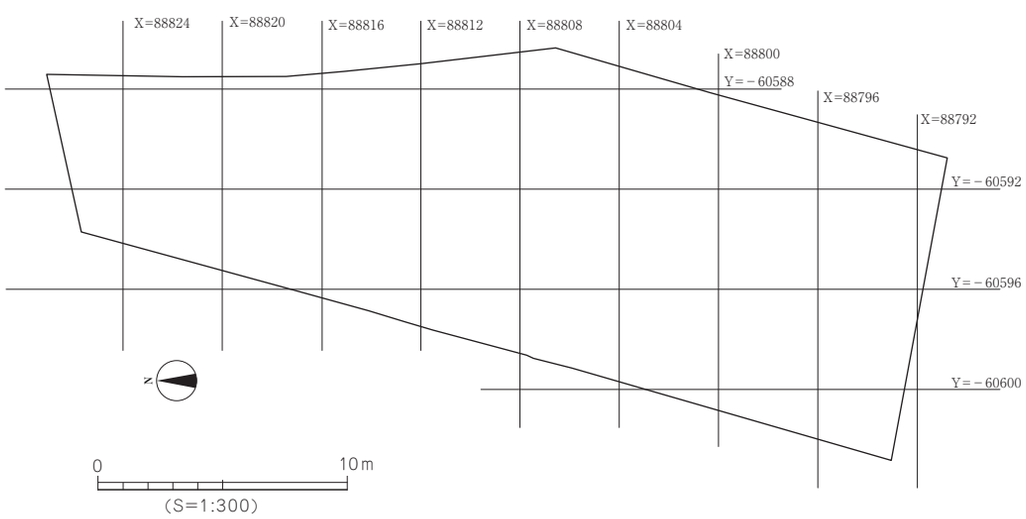
第Ⅵ層－暗灰黄色土。調査区全域に広く堆積する。厚さ２㎝～ 24 ㎝を測る。（下層とともに礫群検出）

第Ⅶ層－黄褐色土。調査区全域に広く堆積する。厚さ６㎝～ 30 ㎝を測る。（掘立柱建物址・礫群検出）

第Ⅷ層－黄灰色微砂。厚さ 10 ㎝～ 22 ㎝を測る。調査区北部では拳大から人頭大の円礫が混じる。

本調査区北部の試掘調査では、第Ⅰ層耕作土、第Ⅱ層浅黄色土と灰白色砂質土に砂岩が混じり。第Ⅲ層青灰色粗砂円礫が多量に混じる。このように第Ⅰ層以下徐々に砂および砂礫を含有する層が厚く堆積する結果が見られる。また、本調査区北東部では、排水用トレンチを設定し同時に土層確認と観察を行った結果、第Ⅷ層中からは砂礫が多量に確認される状況がある。

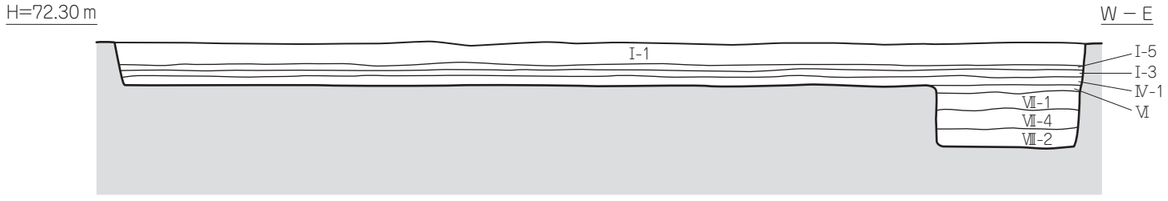
小野川の南を北東から南西に流れる悪社川は、当地ではその流路が大きく蛇行する部分が多く、周辺住民の方によると幾度かの氾濫がありそのたびに中小の改修を行い、以前より暴れ川と言われている。このことは本調査地の土層観察結果および周辺試掘調査土層観察結果の概要とほぼ一致するところであり、本調査地と悪社川の間において遺構検出がされなかった一因とも考えられる。



第 28 図　調査区座標配置図

N
X=88824
X=88820
X=88816
X=88812
X=88808
X=88804
X=88800
X=88796
X=88792
Y=－60588
Y=－60600
Y=－60596
Y=－60592
71.850m
71.800m
71.750m
71.700m
71.650m
71.600m
71.550m
71.500m
71.450m
71.400m
71.350m
掘立 1
礫群
0
10m
(S=1:150)

第 29 図　遺構配置図



北壁

第Ⅰ層－1. 現耕作土（水田）
－2. 床土
－3～5. 旧床土

第Ⅱ層－1. にぶい黄褐色土（2.5YR6/3）
－2. にぶい黄褐色土（2.5YR6/3）茶褐色ブロック混

第Ⅲ層－明黄褐色土 (2.5Y6/6)

第Ⅳ層－1. 黄色土 (2.5Y7/8)
－2. 黄色土 (2.5Y7/8) やや黄色が強い

第Ⅴ層－灰黄褐色土 (2.5Y6/2)

第Ⅵ層－暗灰黄色土 (2.5Y5/2) －下層とともに礫群検出

第Ⅶ層－1. 黄褐色土 (2.5Y5/6) －掘立柱建物址・礫群検出
－2. 黄褐色砂質土 (2.5Y5/6)
－3. にぶい黄色土 (2.5Y6/4)5～10㎜大の隅丸礫含
－4. にぶい黄色土 (2.5Y6/4)

第Ⅷ層－1. 黄灰色微砂 (2.5Y5/1) 黄色ブロック混
－2. 黄灰色微砂 (2.5Y5/1)
－3. 灰白色微砂 (2.5Y8/1) 砂礫含
－4. 灰白色微砂 (2.5Y8/1)

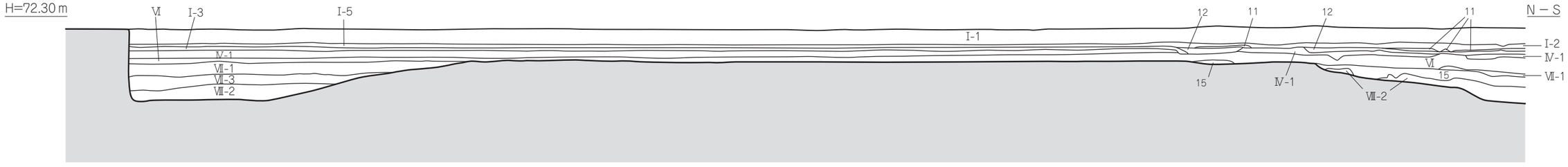
11. 黒褐色土 (7.5YR3/1)

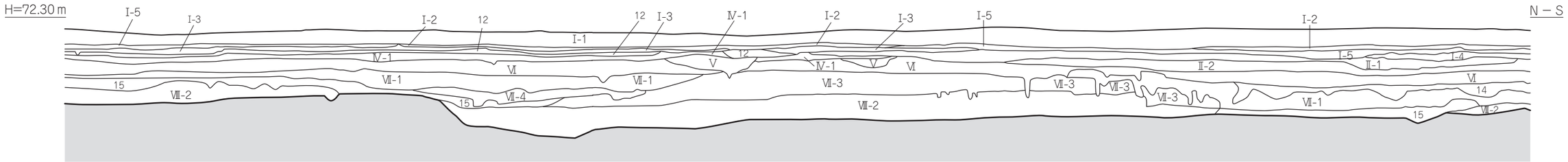
12. 灰褐色土 (7.5YR4/2)

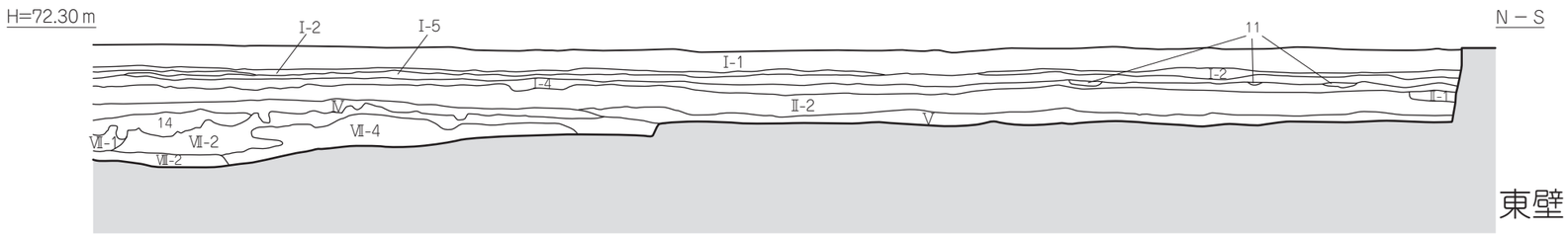
13. 浅黄色土 (2.5Y7/4)

14. 暗灰黄色土 (2.5Y4/2) やや褐色強い

15. 暗灰色粘質土 (2.5Y5/1)



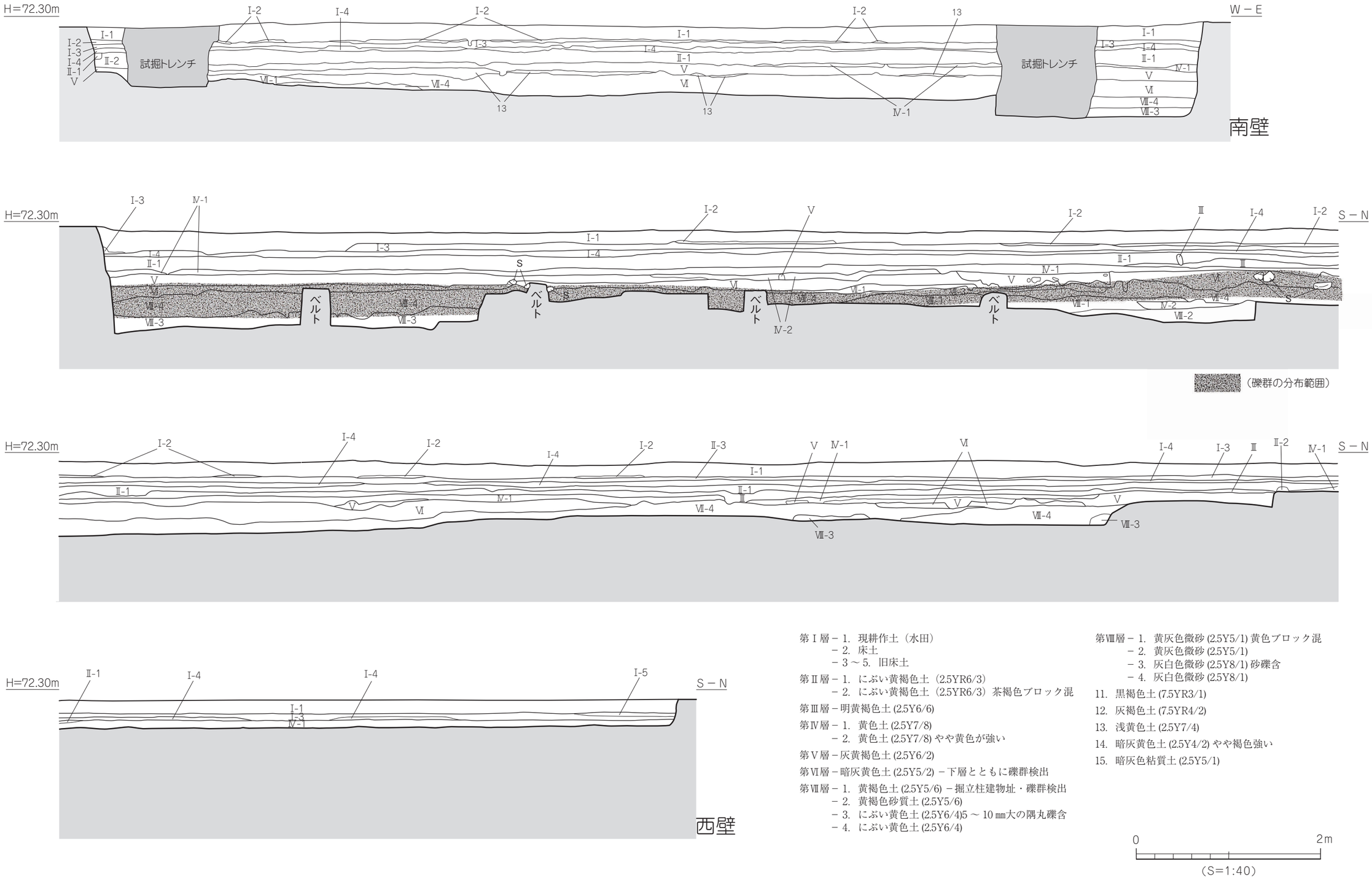




東壁

0　2m
（S=1:40）

第 30 図　北壁・東壁土層図



第Ⅰ層－1. 現耕作土（水田）
－2. 床土
－3～5. 旧床土

第Ⅱ層－1. にぶい黄褐色土（2.5YR6/3）
－2. にぶい黄褐色土（2.5YR6/3）茶褐色ブロック混

第Ⅲ層－明黄褐色土 (2.5Y6/6)

第Ⅳ層－1. 黄色土 (2.5Y7/8)
－2. 黄色土 (2.5Y7/8) やや黄色が強い

第Ⅴ層－灰黄褐色土 (2.5Y6/2)

第Ⅵ層－暗灰黄色土 (2.5Y5/2) －下層とともに礫群検出

第Ⅶ層－1. 黄褐色土 (2.5Y5/6) －掘立柱建物址・礫群検出
－2. 黄褐色砂質土 (2.5Y5/6)
－3. にぶい黄色土 (2.5Y6/4)5～10㎜大の隅丸礫含
－4. にぶい黄色土 (2.5Y6/4)

第Ⅷ層－1. 黄灰色微砂 (2.5Y5/1) 黄色ブロック混
－2. 黄灰色微砂 (2.5Y5/1)
－3. 灰白色微砂 (2.5Y8/1) 砂礫含
－4. 灰白色微砂 (2.5Y8/1)

11. 黒褐色土 (7.5YR3/1)
12. 灰褐色土 (7.5YR4/2)
13. 浅黄色土 (2.5Y7/4)
14. 暗灰黄色土 (2.5Y4/2) やや褐色強い
15. 暗灰色粘質土 (2.5Y5/1)

0　2m
（S=1:40）

第31図　南壁・西壁土層図

３．遺構と遺物

本遺跡は、悪社川の南へ約 33 m、標高 72 .20m の低地に立地する。検出された遺構は中世の掘立柱建物１棟、礫群一条、その他建物を構成しない柱穴 11 基である。既往調査の「南梅本上方遺跡」においても同時期の中世集落が報告されている。

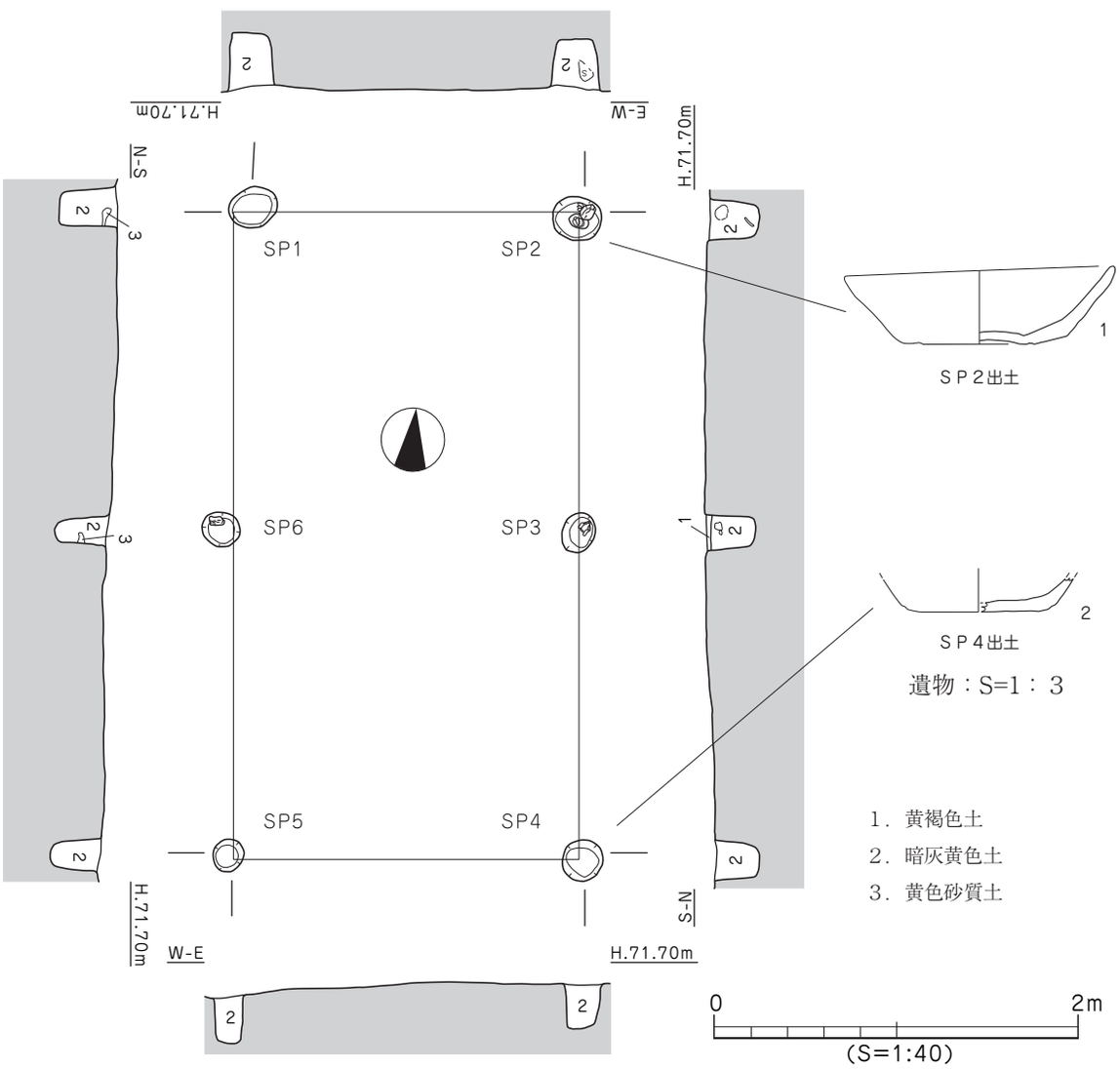
１）掘立１（第 32 図、図版 14）

調査地中央部にて検出した。規模は、東西１間南北２間で桁行２間 3.5 m（柱間 1.75m）、梁行１間 1.90mを測る。建物の主軸方向はＮ－５°－Ｗを向く。柱穴６基の平面形態は円形～楕円形を呈し、規模は径 18 ～ 28 ㎝、検出面より深さ 22 ～ 32 ㎝、床面積 6.65 ㎡を測る。埋土は黄褐色土である。遺物は、Ｐ２から完形の土師皿が出土し、Ｐ３、Ｐ４からも土師皿片が出土している。

出土遺物　（第 34 図、図版 18）

１はＰ２出土の土師器の坏である。底部から直線的に開く体部を呈し、口縁端部をやや尖り気味におさめる。２はＰ４出土の土師器の皿である。底部から内反して立ち上がる体部をなす。底部は回転糸切り。

時　期：　出土した遺物の特徴から掘立１の時期は 14 世紀代とする。



第 32 図　掘立１測量図

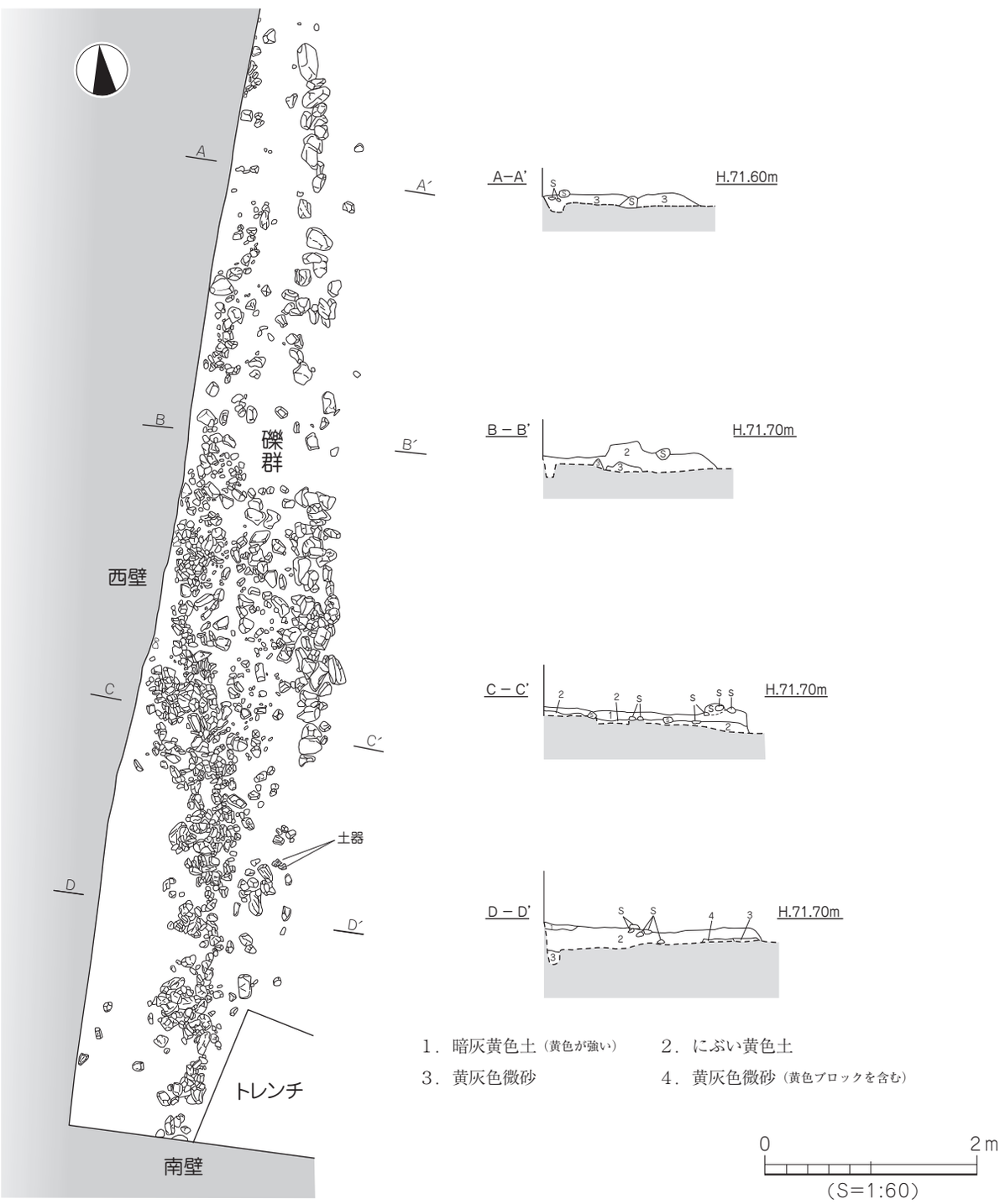
２）礫群（第 33 図、図版 16）

調査区南西隅に位置し、調査区南西部から北に向かい調査区外に延びる。礫群は第Ⅸ層より検出した。規模は検出長 10.7 m、幅 0.7 m～ 2.0 mを測る。高さ 20 ㎝内外を測り、比較的礫群両端に人頭大の円礫を配置する傾向にある。また、中央部は砂利とともに小礫が多く分布している。遺物は、礫群下面で土師器皿の底部片が出土している。

出土遺物　（第 34 図、図版 18）

3は土師器の坏である。底部から内湾して立ち上がる体部をなす。底部外面には糸切り痕が見られる。

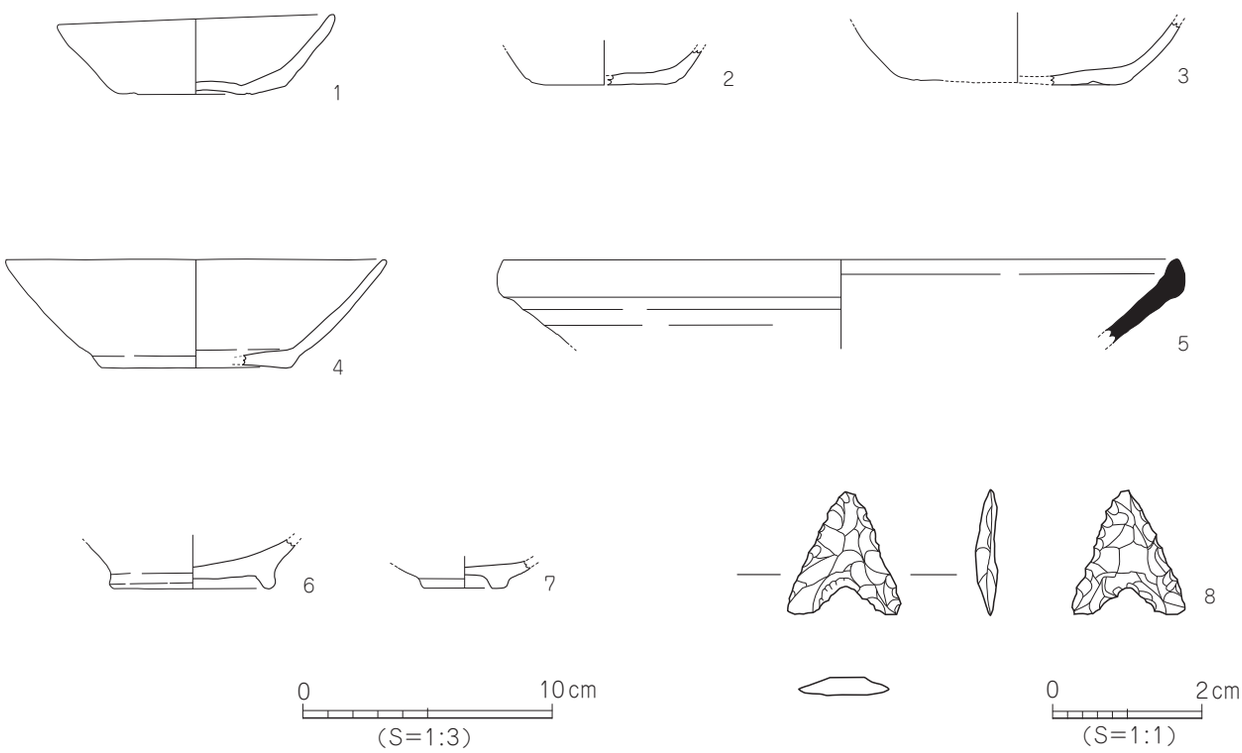
時　期　出土した遺物の特徴から礫群の時期は 14 世紀以降とする。



第 33 図　礫群測量図

3）その他遺構外から出土した遺物（第 34 図、図版 18）

4は土師器の坏で、わずかに内湾しながら立ち上がり端部は丸く仕上げる。全体的に摩滅が激しく、底部の切り離しは不明。5は東播系中世須恵器こね鉢の口縁部片である。口縁部は上方にのびて端部は丸く仕上げる。体部内外面には回転ナデによる段が見られる。6は土師器の坏で高台がつく。全体的に摩滅が激しく、底部の切り離し痕は不明。7は磁器の高台付きの小碗で平坦な底部をもつ。内外とも乳灰白色の施釉がある。石鏃8はサヌカイト製の凹基式無茎鏃である。



1・2は掘立1　3は礫群　4～8は位置不明

第 34 図　出土遺物実測図

4．小結

今回の調査では、14 世紀～ 15 世紀の中世集落関連遺構・遺物を確認した。検出された掘立柱建物址は1間×2間の小規模な建物である。時期は出土遺物より 14 世紀～ 15 世紀に比定される。また礫群は、水源へ通じる道路的な施設が考えられる。時期は出土遺物から、北東に位置する掘立柱建物とほぼ同時期と考えられる。

本遺跡は、本調査地南部に隣接する既往調査「南梅本上方遺跡」の集落が悪社川南部に営まれ、調査区内北部には集落関連遺構が検出されなかったことからも、集落の北限が本遺跡にあたると考えられ、南部に隣接する遺構に続き中世集落構造の一端を解明できた言えよう。

当地はこれまで中世集落遺跡の希薄な地域であったが、「南梅本上方遺跡」および「南梅本上方遺跡２次調査地」の成果を踏まえ、今後の周辺調査によっては当集落の規模拡大も考えられる。

遺物観察表　－凡例－

（１）以下の表は、本遺跡の遺物の計測値および観察一覧である。
　　遺物観察表は小笠原善治、金子育代が作成した。

（２）遺物観察表の各掲載について

法　量　欄　（　）：推定復元値。

調　整　欄　土器の各部位名称を略記。
例）口→口縁部、拡→拡張部、胴中→胴部中位、胴底→胴部～底部

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。
例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土、金→金雲母。
（　）の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。
例）砂・長（１～３）→「１～３mm の砂粒・長石を含む」である。
焼成欄の略記について。　◎→良好、○→良、△→不良。

表６　掘立柱建物址一覧

掘立	規模（間）	方向	桁行		梁行		方位	床面積（㎡）	時期	備考
			実長（m）	柱間寸法(m)	実長（m）	柱間寸法(m)				
1	2×1	南北	3.50	1.75	1.90	1.90	N－5°－W	6.65	14 世紀	

表７　礫群遺構一覧

地区	規模（m） 長さ×幅×高さ	埋土	出土遺物	時期	備考
7～9・A～B	10.7 × 0.7 ～ 2.0 × 0.2 内外	暗灰黄色土・にぶい黄色土 黄灰色微砂・ 黄灰色微砂 （黄色ブロックを含む）	土師器	14 世紀以降	

表８　出土遺物観察表　土製品

番号	遺構・出土地	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
					外面	内面				
1	掘立１	坏	口径　11.0 器高　3.2 底径　6.6	平底。内湾して立ち上がり、口縁端部は尖り気味。	回転ナデ 底）回転糸切り（すのこ痕）	回転ナデ ナデ	淡黄色 淡黄色	石・長（1～2） ○		
2	掘立１	皿	底径　(5.8) 残高　1.3	平底。	マメツ 底）回転糸切り	マメツ	淡黄橙色 淡黄橙色	細粒 ○		
3	礫群	坏	底径　8.3 残高　2.5	平底。内湾して立ち上がる。	マメツ 底）回転糸切り	回転ナデ ナデ	灰黄褐色・淡赤橙色 褐灰色	細粒 ○		
4	位置不明	坏	口径　(15.2) 器高　4.3 底径　(7.6)	平底。内湾して立ち上がり、口縁端部は丸い。	マメツ	マメツ	淡白黄色・淡褐色 淡白黄色	細粒 ○		
5	位置不明	こね鉢	口径　(27.0) 残高　3.4	口縁部は上方に向き、端部は丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色・灰白色 灰白色	石・長（1） ◎		
6	位置不明	坏	底径　6.2 残高　1.9	高台付き。	マメツ (一部回転ナデ)	マメツ	にぶい黄橙色 淡黄橙色	細粒（石 5） ◎		
7	位置不明	碗	底径　(3.1) 残高　1.1	高台付き。	施釉	施釉	乳灰白色 乳灰白色	密 ◎		

表９　出土遺物観察表　石製品

番号	遺構・出土地	器種	残存	材質	法量				備考	図版
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
8	位置不明	石鏃	完形	サヌカイト	1.65	1.5	0.25	0.425		

参考文献

河野史知　『古市遺跡・下苅屋遺跡２・３次調査地』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター　2000

吉岡和哉　『播磨塚天神山古墳』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター　2001

山之内志郎　『小野地区の遺跡』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター　2001

武正良浩　「南梅本上方遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報　16』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター　2004

小笠原善治　「南梅本上方遺跡２次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報　17』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター　2005

第６章

南梅本長広（ながひろ）遺跡

－１次調査地－

第６章　南梅本長広遺跡

１．調査の経緯

平成 15 年５月 13 日、松山市都市整備部道路建設課（以下、道路建設課）より、松山市道南北梅本線道路改良工事に伴う埋蔵文化財の確認調査申請が、松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。申請地は、松山市指定の埋蔵文化財包蔵地「No.107 播磨塚古墳群」と「No.142 水泥遺物包含地」に挟まれる埋蔵文化財包蔵未指定地である。申請地の所在する小野地区は、松山平野の東部に位置し、重信川の支流である小野川、悪社川及び内川によって形成された扇状地が広がる地域である。

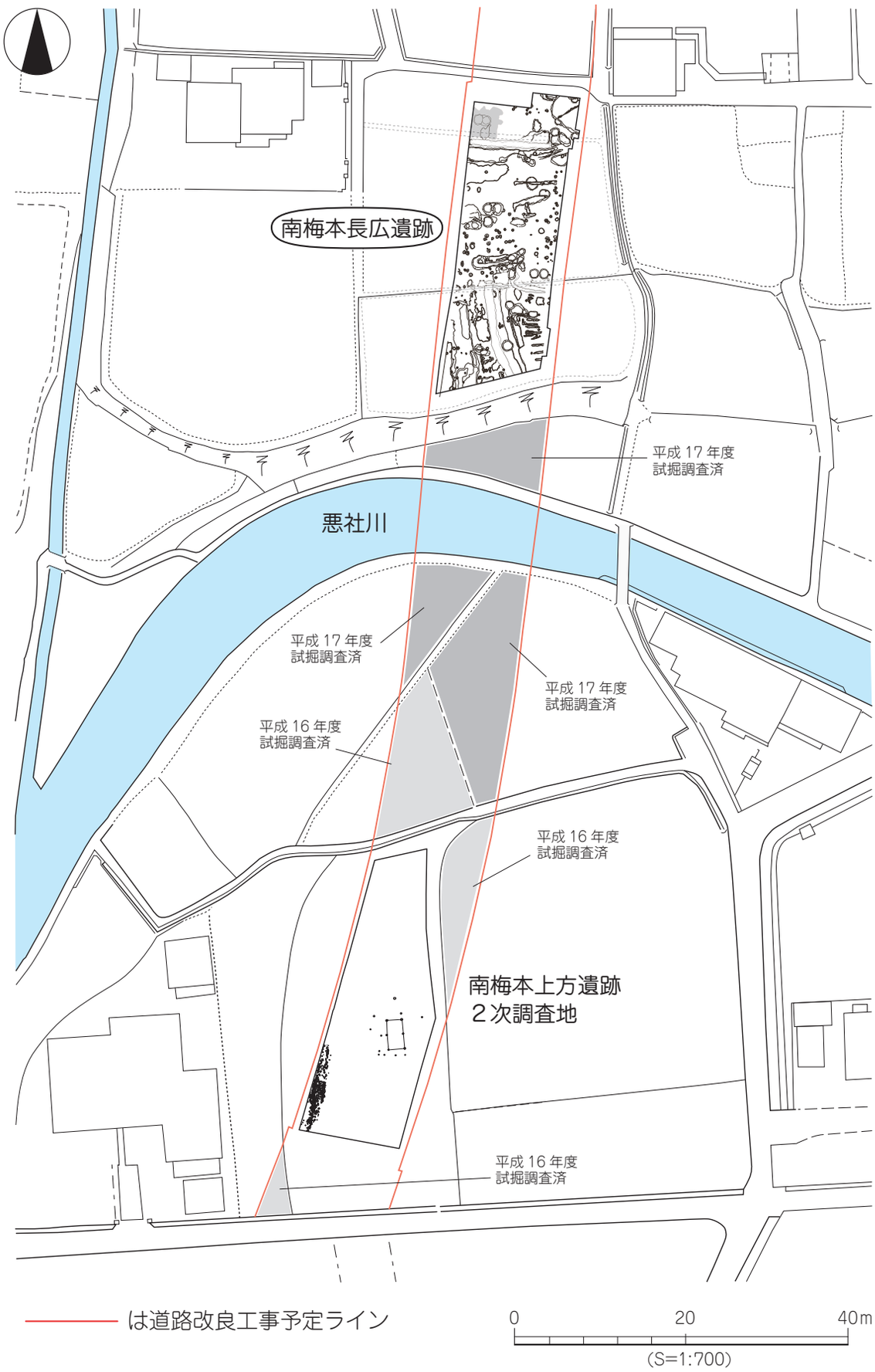
東に近接する「播磨塚古墳群」内には、かつて多数の古墳が存在していたと言われている。近代には柑橘類の栽培適地として開墾、また陸上自衛隊松山駐屯地として当地周辺は造成・削平を受け、過去に存在したと考えられる古墳の大半が消滅している。現在では平成 10 年度に財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）によって発掘調査が行われた、「播磨塚天神山古墳」（6 世紀前半の前方後円墳）と駐屯地内に横穴式石室（7 世紀前半とされる）の一部が残っている。さらに、約２㎞東には東温市（旧重信町）に所在する、平成５年に重信町教育委員会によって調査された、「志津川古墳群（古墳後期）」や寛政 11 年頃に創業されたと言われる「西岡窯跡」などがある。また、申請地内では平成 15 年度埋文センターによって発掘調査された、14 ～ 15 世紀代の中世集落関連遺跡である「南梅本上方遺跡」が所在する。

申請を受けた文化財課と埋文センターは協議の上、埋文センターが平成 16 年６月１日から６月４日の間試掘調査を実施した。申請地は、悪社川を挟み北と南の２ヵ所に分かれることから、調査の便宜上南部をＡ区とし、北部をＢ区と呼称した。申請地Ａ区内に 11 本のトレンチを設定し、層序と遺構の有無を確認した。その結果、申請地Ａ区の南半部分において、主に中世の遺物を包含する土層や同期と思われる遺構（溝状遺構、柱穴、土坑、石列等）が検出された。また、申請地Ｂ区では７本のトレンチを設定し、層序と遺構の有無を確認した。その結果、中世から近世の遺物を包含する土層や同期と思われる遺構（溝状遺構、土坑、柱穴等）が検出された。6 月 14 日付の当該試掘調査報告書を基に検討がなされ、遺跡が確認された区間については本格調査が必要と判断された。

以上の経緯を踏まえ、道路建設課、文化財課、埋文センターの三者は遺跡の取り扱いについて協議を行った。その結果、道路改良工事によって遺跡が失われる該当エリアについて記録保存を目的とした本格調査を実施することになった。当該地の遺跡名称は、申請地が悪社川を挟みやや離れた地点に位置すること。また申請地Ａ区・Ｂ区の字名が異なることから、申請地Ａ区を「南梅本上方遺跡２次調査地」、申請地Ｂ区を「南梅本長広遺跡」とした。調査は埋文センターが調査主体となり、同年 10 月 18 日より本格調査を開始した。

【参考文献】
松山市教育委員会 1997「松山市埋蔵文化財包蔵地地図」
吉岡和哉　2001「播磨塚天神山古墳」松山市文化財調査報告書 83
武正良浩　2003「南梅本上方遺跡」調査概要報告書

第 35 図　調査地位置図 1



第 36 図　調査地位置図２

発掘調査(屋外調査)は、平成16年10月18日～平成17年3月31日の間実施した。調査区を設定し、掘削を実施した対象地は以下の通りである。

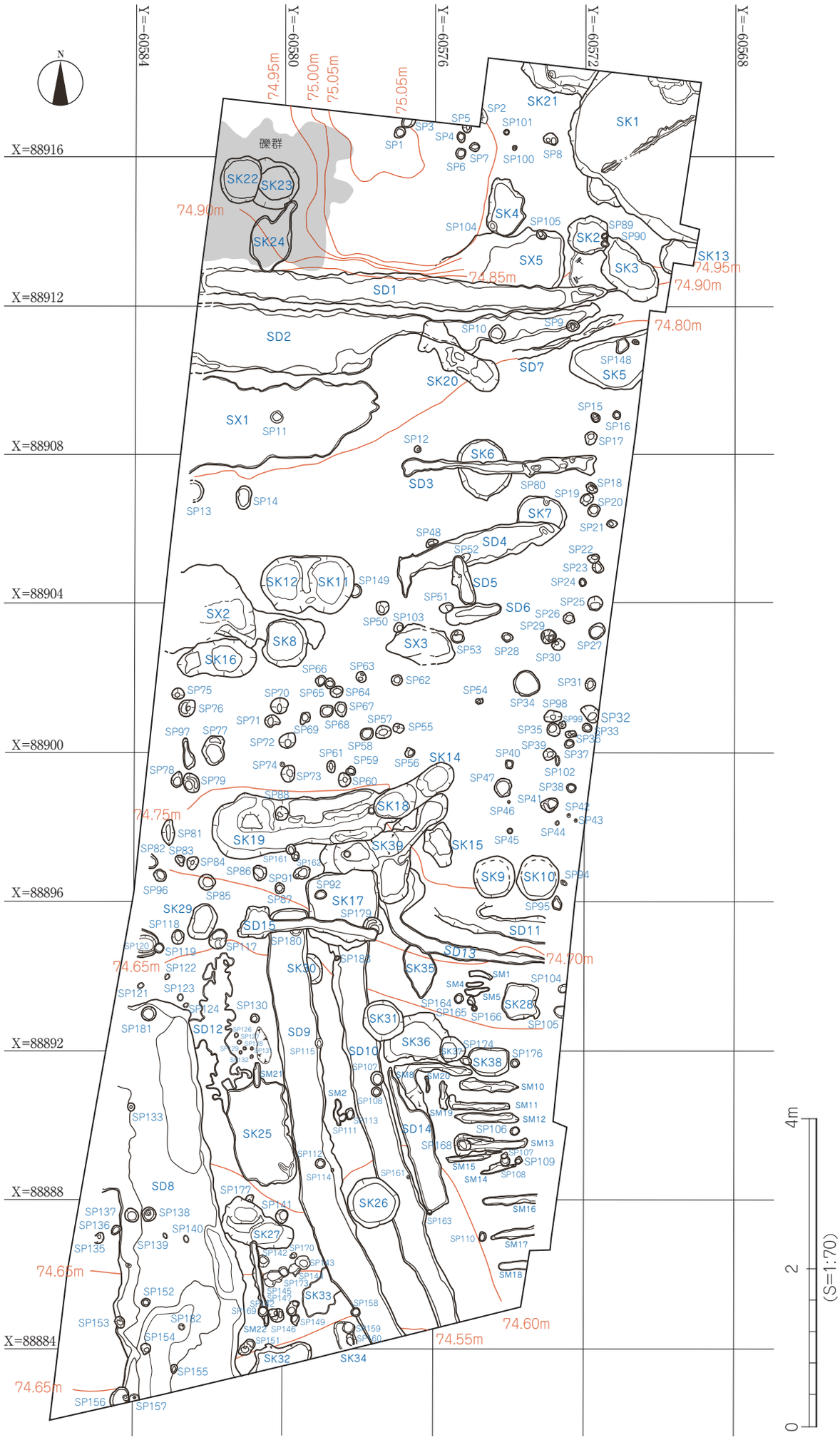
●南梅本上方遺跡２次調査地　甲385-2　577.56㎡　（Ａ区）

●南梅本長広遺跡　甲544-2　586.13㎡　（Ｂ区）

発掘調査に先立ち、上記２遺跡の調査地内掘削計画を検討した。その結果重機の搬入や対象面積、また遺構の密度を検討した結果、調査は長広遺跡（Ｂ区）から行い順次Ａ区に調査の主力を移行していく方法が採られた。また、先行して実施する長広遺跡では、周辺の状況から表土掘削時の排土搬出が困難なことから、調査区内で排土処理を行う、追って返しを行なった。調査では便宜上、調査区北半を「長広Ａ」、調査区南半を「長広Ｂ」と呼称した。

調査事務所は松山市都市整備部道路建設課の協力により、調査地よりやや離れた当該路線建設地内に設置し、発掘機材等の搬入を行った。平成16年10月18日には、まず対象地である長広遺跡の周囲を丸杭とトラロープを用いて安全対策を施した。掘削予定地については下草刈りを行い、調査区の線引きを実施した。調査区内には「お塚」があり、これを旧所有者立ち会いのもと適切な処置を行った後、旧所有者の指示により重機で調査地南西の畦付近に移動させせた。その後、重機と不整地運搬車を用いて調査区の表土（耕作土）掘削と排土移動を開始する。重機（バックフォー）及び不整地運搬車は18日・21日・22日と使用した。その後は、人員を配置して調査区壁及び遺構検出に努めた。11月２日には遺構の検出状況を撮影し、順次遺構の精査と掘り下げ、遺構の測量を開始する。12月20日上方遺跡２次調査地重機による掘削開始。(20・21・22日の間）年が明け、平成17年１月７日には上方遺跡調査区内の遺構精査作業開始し、調査区内全面に中世から近世の鋤跡を多数検出した。その後平板測量作業を開始する。１月13日には、長広遺跡の追って返し準備として、調査区設定・予備杭設置作業を開始する。同日に上方遺跡２次調査地の第一遺構面検出写真を撮影する。その後検出された鋤跡遺構の精査と掘り下げ、測量を開始する。１月17日には長広遺跡の重機によるＡ区の埋め戻しとＢ区表土掘削を開始した。(17・18・20日の間）また、１月20日には上方遺跡２次調査地の基準点測量と設置を行い、グリッド杭設置作業を始める。１月26日には長広遺跡Ｂ区の遺構検出状況を撮影する。その後検出された遺構の精査と掘り下げ、測量を開始する。２月４日には上方遺跡２次調査地の第１遺構面完掘状況写真を撮影する。その後２月７日に第１遺構面を重機により掘削開始する（７・８・９日の間)。翌２月10日から遺構検出作業開始する。第２遺構面からは掘立１棟及び柱穴と礫群を検出した。３月９日、長広遺跡Ｂ区の遺構完掘状況写真を撮影する。翌日10日、重機による調査区の埋め戻し開始する。(10・11・15日の間）３月28日、上方遺跡２次調査地の遺構完掘状況写真を撮影する。また同日、重機による埋め戻し開始（28・29・30・31日の間)。

平成17年３月30日、31日に発掘機材を搬出し、屋外調査を終了する。


N
Y=60584
Y=60580
Y=60576
Y=60572
Y=60568
X=88916
X=88912
X=88908
X=88904
X=88900
X=88896
X=88892
X=88888
X=88884
74.95m
75.00m
75.05m
75.05m
74.90m
74.85m
74.95m
74.90m
74.80m
74.75m
74.70m
74.65m
74.65m
74.65m
74.60m
74.55m
礫群
SK1
SK2
SK3
SK4
SK5
SK6
SK7
SK8
SK9
SK10
SK11
SK12
SK13
SK14
SK15
SK16
SK17
SK18
SK19
SK20
SK21
SK22
SK23
SK24
SK25
SK26
SK27
SK28
SK29
SK30
SK31
SK32
SK33
SK34
SK35
SK36
SK38
SK39
SD1
SD2
SD3
SD4
SD5
SD6
SD7
SD8
SD9
SD10
SD11
SD12
SD13
SD14
SD15
SX1
SX2
SX3
SX5
4m
2
0
(S=1:70)

第 37 図　遺構配置図

2．層位（第 39 ～ 41 図、図版 44・45）

本遺跡は、悪社川北の河岸段丘上に立地し、調査区はおおよそ北東から南西に緩く傾斜する。調査地の基本土層は、第一層新旧耕作土、第Ⅱ層新旧床土、第Ⅲ層灰黄褐色土～暗褐色砂質土、第Ⅳ層褐灰色土～褐灰色砂質土、第Ⅴ層にぶい黄色シルト～にぶい黄色微砂、第Ⅵ層褐灰色シルト～灰白色シルト、第Ⅶ層黄色砂質土である。遺構の検出は第Ⅴ層上面にて検出検出した。

第Ⅰ層　1　灰黄褐色土　(10YR4/2) －－－水田耕作土

第Ⅱ層　2　灰黄褐色土 (10YR4/2) に黄色帯びる－－－床土

第Ⅲ層　3-1　灰黄褐色土 (10YR4/2) に黄色ブロックを多含－－－整地土

3-2　にぶい黄褐色土 (10YR5/3)2 ～ 5mm 大の黄色ブロックを多含－－－整地土

3-3　暗褐色土 (10YR3/4)2 ～ 10mm 大の黄色ブロックを多含－－－整地土

3-4　暗褐色砂質土 (10YR3/4) －－－整地土砂層

第Ⅳ層　4-1　褐灰色土 (10YR4/1)10 ～ 100mm 大の円礫を多含－－－砂礫層

4-2　褐灰色砂質土 (10YR4/1) －－－砂層

第Ⅴ層　5-1　にぶい黄色シルト (2.5Y6/4) －－－基盤相当層

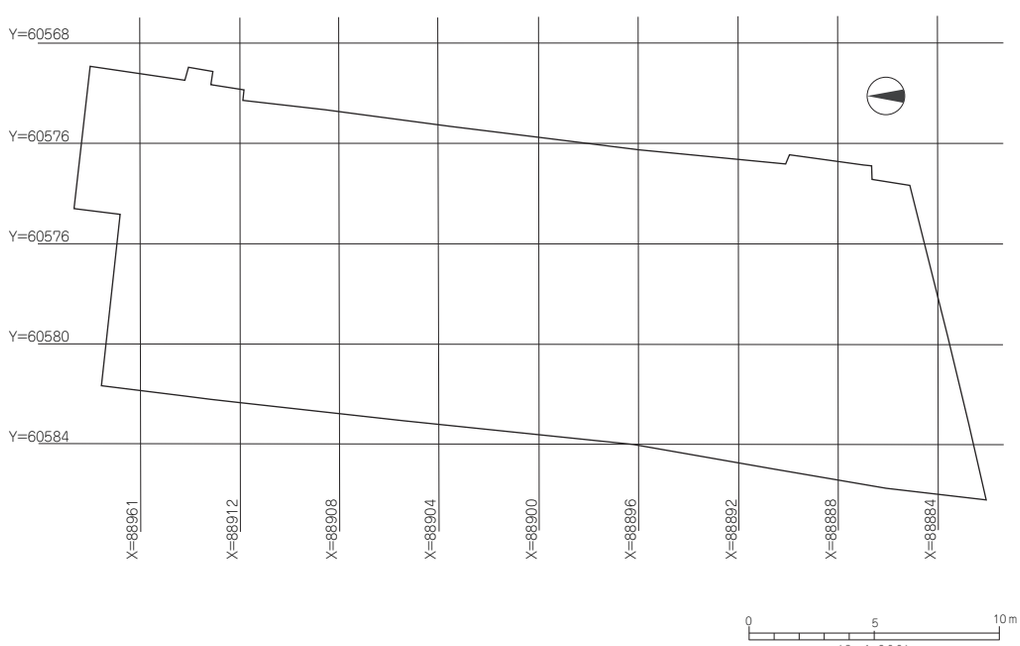
5-2　にぶい黄色 (2.5Y6/4) 微砂－－－砂層

第Ⅵ層　6-1　灰白色シルト (2.5Y7/1)5mm ～ 100mm 大の円礫を多含する礫層－－－砂礫層

6-2　灰白色シルト (2.5Y7/1) －－－砂層

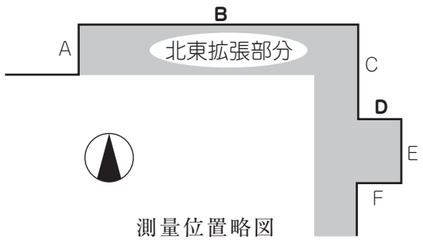
第Ⅶ層　7　黄色砂質土 (2.5Y7/8) －－－砂層

遺跡は北部から悪社川に向かって傾斜し、遺跡の標高は約 76.50 mに立地する。第Ⅲ層灰黄褐色のブロックが多く含む層が調査区に広く分布する。この層は分層され、土層観察より整地層と考えられる。その下層は砂層・砂礫層・礫層が続き、第Ⅴ層が基盤面と考えられる。

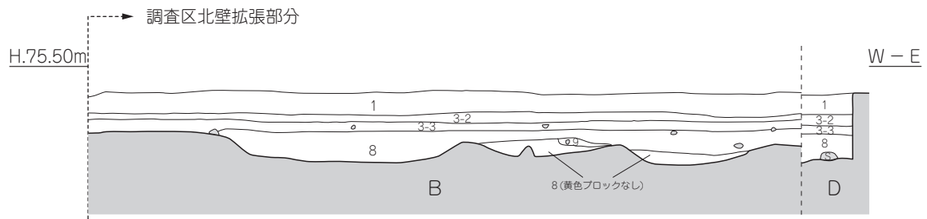


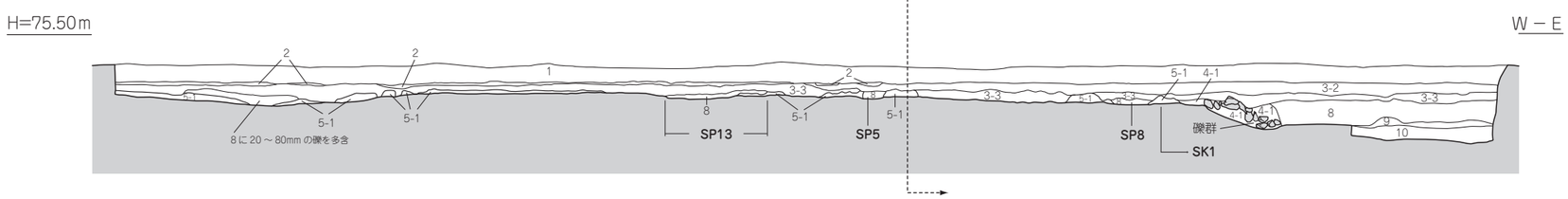
第 38 図　調査区座標配置図

北壁（北東部拡張前及び拡張後）

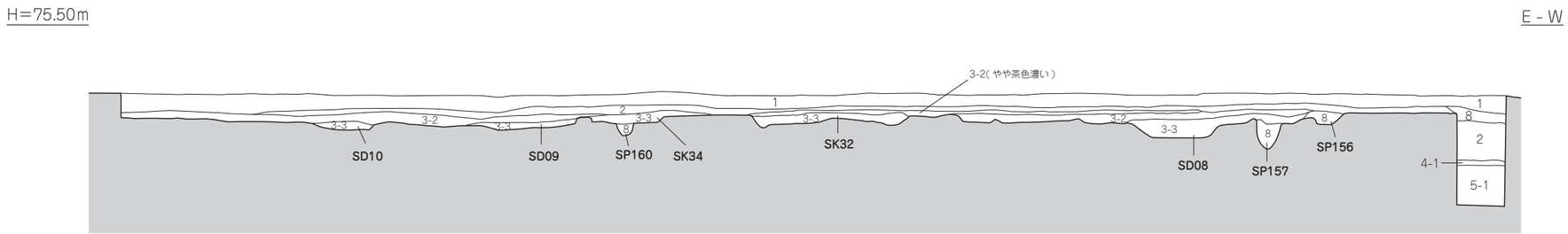


測量位置略図





南壁

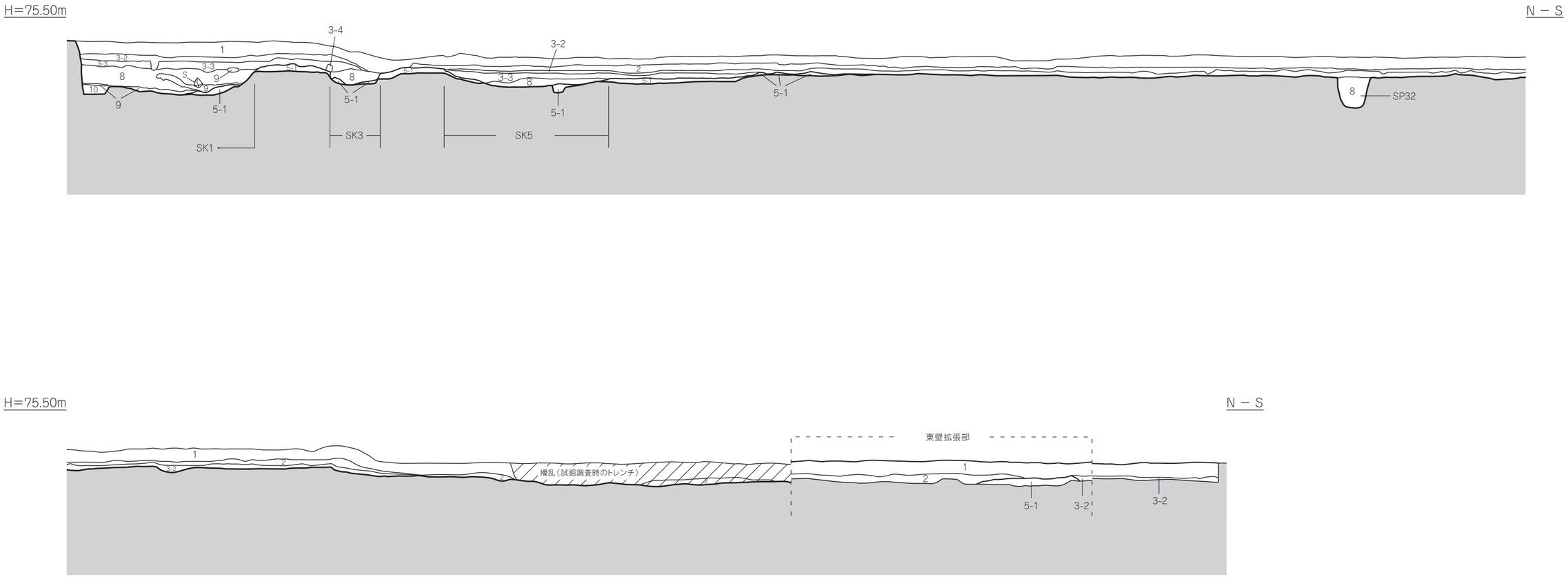


第Ⅰ層	1	灰黄褐色土　(10YR4/2)	水田耕作土
第Ⅱ層	2	灰黄褐色土(10YR4/2)に黄色帯びる	床土
第Ⅲ層	3-2	にぶい黄褐色土(10YR5/3)2～5mm大の黄色ブロックを多含	整地土
	3-3	暗褐色土(10YR3/4)2～10mm大の黄色ブロックを多含	整地土
第Ⅳ層	4-1	褐灰色土(10YR4/1)10～100mm大の円礫を多含	SK1内礫群埋土
第Ⅴ層	5-1	にぶい黄色シルト(2.5Y6/4)	基盤相当層
	8	黒褐色土(10YR3/1)2mm大の黄色ブロック含	主に遺構埋土
	9	にぶい黄橙色土(10YR6/3)	主に遺構埋土
	10	にぶい黄橙色砂礫(10YR7/2)10～30mm大の礫を多含	

0　2m
(S=1:50)

第 39 図　調査区土層図 1

東壁



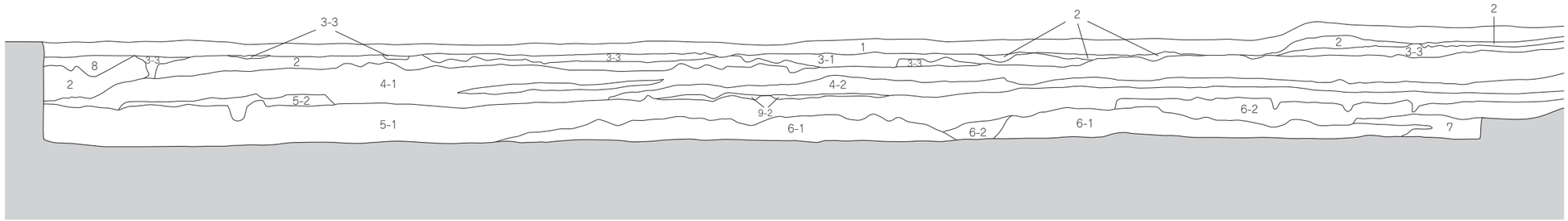
第Ⅰ層	1	灰黄褐色土　(10YR4/2)	水田耕作土
第Ⅱ層	2	灰黄褐色土 (10YR4/2) に黄色帯びる	床土
第Ⅲ層	3-2	にぶい黄褐色土 (10YR5/3)2 ～ 5mm 大の黄色ブロックを多含	整地土
	3-3	暗褐色土 (10YR3/4)2 ～ 10mm 大の黄色ブロックを多含	整地土
第Ⅴ層	5-1	にぶい黄色シルト (2.5Y6/4)	基盤相当層
	8	黒褐色土 (10YR3/1)2mm 大の黄色ブロック含	主に遺構埋土
	9	にぶい黄橙色土 (10YR6/3)	主に遺構埋土
	10	にぶい黄橙色砂礫 (10YR7/2)10 ～ 30mm 大の礫を多含	

0　2m
(S=1:50)

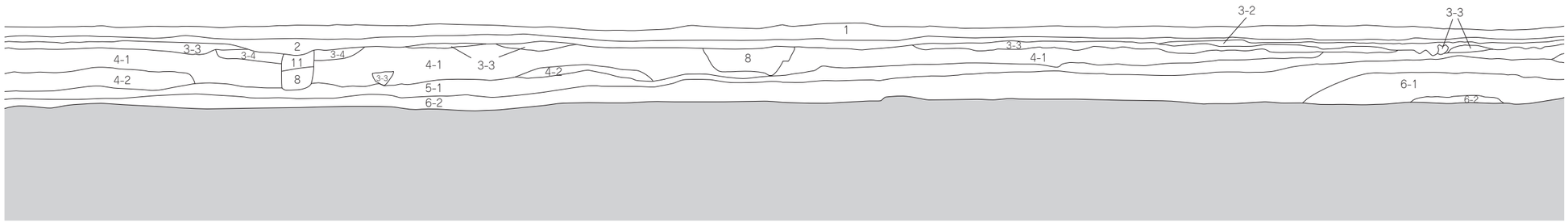
第 40 図　調査区土層図２

西 壁

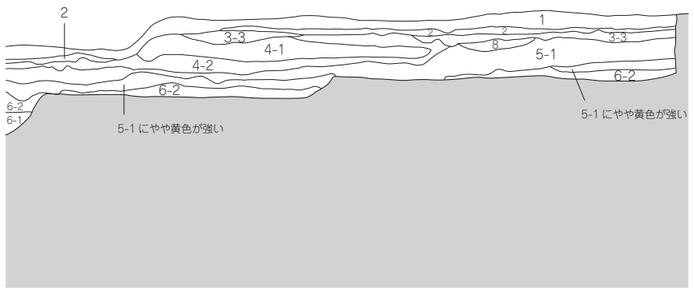
H=75.50 m　　S − N



H=75.50 m　　S − N



H=75.50 m　　S − N



0　　2m
(S=1:50)

第Ⅰ層	1	灰黄褐色土　(10YR4/2)	水田耕作土
第Ⅱ層	2	灰黄褐色土 (10YR4/2) に黄色帯びる	床土
第Ⅲ層	3-1	灰黄褐色土 (10YR4/2) に黄色ブロックを多含	整地土
	3-2	にぶい黄褐色土 (10YR5/3) 2 ～ 5mm 大の黄色ブロックを多含	整地土
	3-3	暗褐色土 (10YR3/4)2 ～ 10mm 大の黄色ブロックを多含	整地土
	3-4	暗褐色砂質土 (10YR3/4)	整地土砂層
第Ⅳ層	4-1	褐灰色土 (10YR4/1) 10 ～ 100mm 大の円礫を多含	砂礫層
	4-2	褐灰色砂質土 (10YR4/1)	砂層
第Ⅴ層	5-1	にぶい黄色シルト (2.5Y6/4)	基盤相当層
	5-2	にぶい黄色 (2.5Y6/4) 微砂	砂層
第Ⅵ層	6-1	灰白色シルト (2.5Y7/1) 5mm ～ 100mm 大の円礫を多含する礫層	砂礫層
	6-2	灰白色シルト (2.5Y7/1)	砂層
第Ⅶ層	7	黄色砂質土 (2.5Y7/8)	砂層
	8	黒褐色土 (10YR3/1) 2mm 大の黄色ブロック含	主に遺構埋土
	9	にぶい黄橙色土 (10YR6/3)	主に遺構埋土
	11	黒褐色土 (10YR3/2)	主に遺構埋土

第 41 図　調査区土層図３

３．遺構と遺物

長広遺跡では、土坑（ＳＫ）39 基、溝（ＳＤ）15 条、性格不明遺構（ＳＸ）５基、畝状遺構（ＳＭ）18 条、その他建物を構成しない柱穴が多数検出された。遺構の所属時期は、弥生時代、古墳時代、古代、そして中世～近世と各期の遺構が検出されたが、主に近世を中心とする遺構群が大半である。

以下、時代別および遺構別に説明を加える。

〔１〕弥生時代

弥生時代の遺構は土坑３基（SK21・SK29・SK32）、柱穴 12 基 (SP8・SP14・SP35・SP68・SP72・SP75・SP105・SP120・SP137・SP142・SP143・SP144・SP146・SP147・SP149・SP177)、性格不明遺構１基 (SX1) が確認された。該期の遺構からは出土遺物が少なく、また小片が多く図化可能なもののみ掲載した。

１）土坑（ＳＫ）

ＳＫ21（第 42 図、図版 28）

調査区北東拡張部に位置し、ＳＫ１に切られる。平面形態は不整形を呈し、北半は調査区外に延びる。規模は長軸 2.02 m以上、短軸 0.75 m、深さ 0.3 mを測る。断面形は舟底状で、埋土は黒褐色土である。遺物は埋土中より弥生土器片が２点出土した。

時　期　出土遺物から弥生時代と考えるが、遺物が破片であるため詳細な時期の比定はできない。

ＳＫ29（第 42 図、図版 38）

調査区中央西部に位置する。平面形態は北東－南西に長い楕円形を呈し、規模は長軸 0.98 m、短軸 0.66 m、深さ 0.12 mを測る。断面形状は皿状を呈し、埋土は暗褐色土である。遺物は埋土中より弥生土器片が数点出土した。

時　期　出土遺物から弥生時代と考えるが、遺物が破片であるため詳細な時期の比定はできない。

ＳＫ32（第 42 図）

調査区南部端中央に位置する。調査区南部は調査可能範囲限界であり、遺構の南半部は拡張することができず、未検出である。平面形態は不整形を呈し、規模は東西 1.64 m、南北検出長 0.40 m、深さ 8cm を測り、比較的浅い。埋土は暗褐色土である。遺物は埋土中より弥生土器細片が数点出土した。

時　期　出土遺物から弥生時代と考えるが、遺物が細片であるため詳細な時期の比定はできない。

２）柱穴（ＳＰ）

ＳＰ８（第 43 図）

調査区北東部に位置する。平面形態は楕円形を呈し、規模は長軸 43 ㎝、短軸 28 ㎝、深さ 22 ㎝を測り、埋土は黒褐色土（2 ㎜大の黄色ブロック含）である。

出土遺物（第 43 図、図版 51）

１は弥生時代後期後半の複合口縁壺の頸部～口縁部片で、口縁拡張部が貼付部分より欠失している。頸

部に格子状の刻目突帯文を貼付する。

時　期　出土遺物から弥生時代後期後半と考える。

ＳＰ14（第43図）

調査区中央やや北西部、ＳＸ１の南に位置する。平面形態は南北に向く楕円形を呈し、規模は長軸61㎝、短軸41㎝、深さ17㎝を測り、埋土は黒褐色土(2㎜大の黄色ブロック含)である。遺物は埋土中より弥生土器小片が数点出土した。

時　期　出土遺物から弥生時代と考える。

ＳＰ35（第43図）

調査区中央東部、ＳＫ９・10の北に位置する。平面形態は円形を呈し、規模は長軸37㎝、短軸33㎝、深さ24㎝を測り、埋土は黒褐色土（2㎜大の黄色ブロック含）である。遺物は埋土中より弥生土器小片が１点出土した。

時　期　出土遺物から弥生時代と考える。

ＳＰ68（第43図）

調査区中央西部ＳＫ８の南に位置する。平面形態はやや角張った円形を呈し、規模は長軸35㎝、短軸31㎝、深さ11.7㎝を測り、埋土は暗褐色土(2㎜大の黄色ブロック含)である。遺物は埋土中より弥生土器小片が数点出土した。

時　期　出土遺物から弥生時代と考える。

ＳＰ72（第43図）

調査区中央やや西部ＳＫ19の北に位置する。平面形態はやや角張る楕円形を呈し、規模は長軸40㎝、短軸39㎝、深さ37㎝を測り、埋土は灰黄褐色土である。遺物は埋土中より弥生甕形土器の口縁部小片が１点出土した。

時　期　出土遺物から弥生時代と考える。

ＳＰ75（第43図）

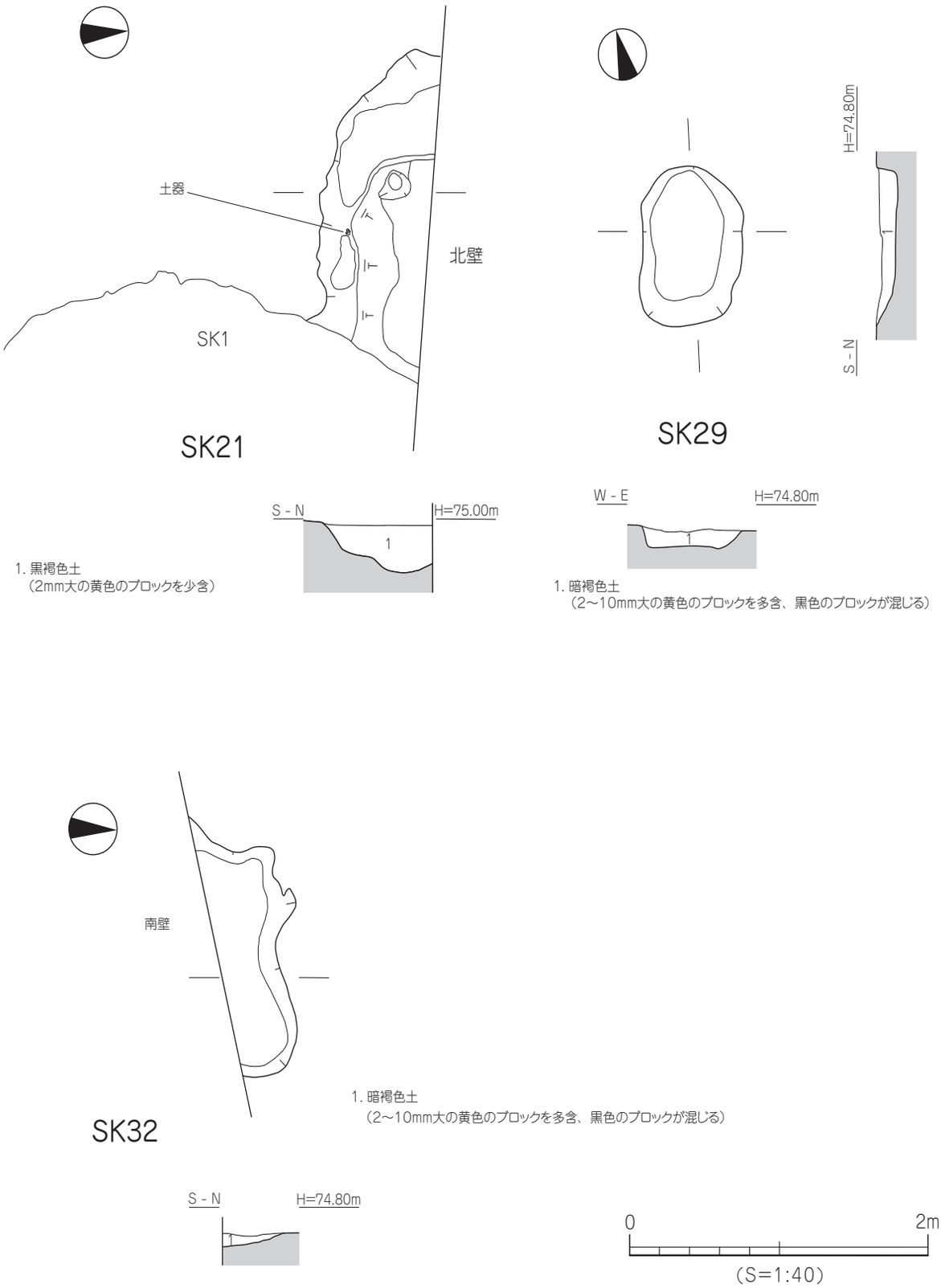
調査区中央西部ＳＫ16の南に位置する。平面形態は一部角張る円形を呈し、規模は長軸31㎝、短軸31㎝、深さ10㎝を測り、埋土は暗褐色土(2～10㎜大の黄色ブロック含)である。遺物は埋土中より弥生土器細片が数点出土した。

時　期　出土遺物から弥生時代と考える。

ＳＰ105（第44図）

調査区東端部南ＳＫ28の東に位置する。柱穴の東半は調査区外に広がる。平面形態は楕円形を呈し、規模は長軸18㎝、短軸13㎝、深さ20㎝を測り、埋土は黒褐色土(2㎜大の黄色ブロック含)である。遺物は埋土中より弥生土器細片が数点出土した。

時　期　遺物が細片であるため明確な時期の比定はできないが、出土遺物から弥生時代と考える。



第 42 図　SK21・29・32 測量図

SP120（第 44 図）

調査区中央部西端に位置し、西半はトレンチに切られている。遺構の規模は長軸 0.75m、短軸 0.55m、深さ 48 ㎝を測り、平面形状は不整形である。断面形状は逆台形状を呈する。埋土は黒褐色土（２mm 大の黄色ブロック含）である。遺物は弥生土器小片と擦石片が出土している。

出土遺物（第 45 図）

２は擦石の一部である。底面に一部平坦な部分が看取できる。

時　期　時期比定できる遺物の出土は少ないが、埋土と出土遺物から弥生時代とする。

ＳＰ137（第 44 図）

調査区南部西ＳＤ８内西端に位置する。平面形態は円形を呈し、規模は長軸 40 ㎝、短軸 34 ㎝、深さ 34 ㎝を測り、埋土は３層の土色 (黒色ブロック含む) である。遺物は埋土中より弥生土器小片が数点出土した。

時　期　出土遺物から弥生時代と考える。

ＳＰ142（第 44 図）

調査区南部西ＳＫ 27 の南に位置し、ＳＭ 22 に切られる。平面形態は円形を呈し、規模は長軸 35 ㎝、短軸 31 ㎝、深さ 10 ㎝を測り、埋土は黒褐色土 (２mm 大の黄色ブロック含) である。遺物は埋土中より弥生土器小片が出土。

時　期　出土遺物から弥生時代と考える。

ＳＰ143（第 45 図）

調査区南部西ＳＫ 33 の北に位置し、ＳＰ 144 を切る。平面形態は円形を呈し、規模は長軸 42 ㎝、短軸 37 ㎝、深さ 24 ㎝を測り、埋土は暗褐色土 (２～ 10mm 大の黄色ブロック含) である。遺物は埋土中より弥生土器小片が出土。

時　期　出土遺物およびＳＰ 144 との切り合い関係から弥生時代と考える。

ＳＰ144（第 45 図）

調査区南部西ＳＫ 33 の北に位置し、ＳＰ 143 に切られる。平面形態は惰円形を呈し、規模は長軸 30 ㎝、短軸 26 ㎝、深さ 16 ㎝を測り、埋土は黒褐色土 (２mm 大の黄色ブロック含) である。遺物の出土はない。

時　期　弥生時代の遺物を出土するＳＰ 143 に切られることと埋土から、弥生時代の遺構と考える。

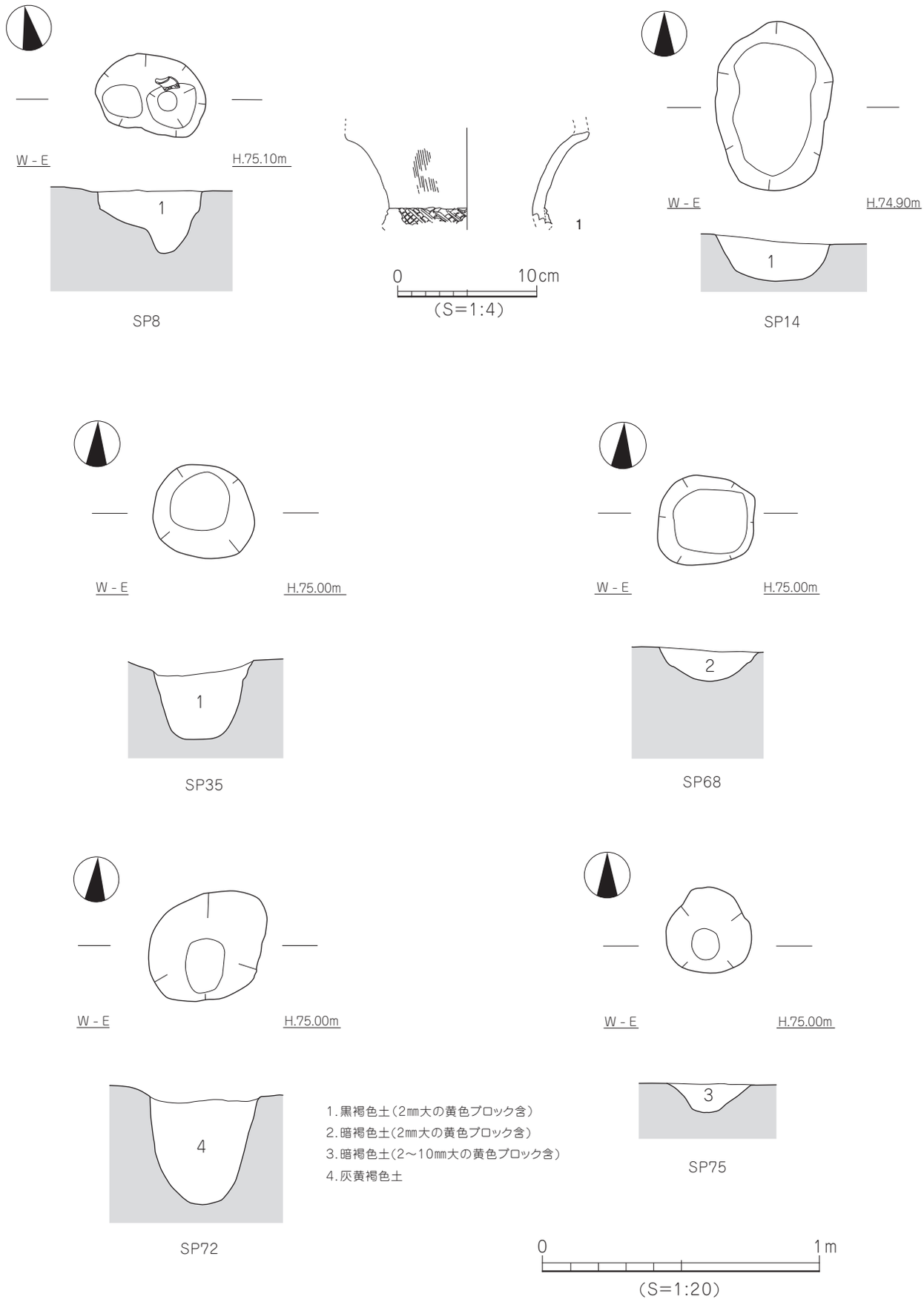
ＳＰ146（第 45 図）

調査区南部西ＳＫ 33 の西、ＳＫ 32 の北に位置し、ＳＰ 172 に切られる。平面形態は円形を呈し、規模は長軸 38 ㎝、短軸 36 ㎝、深さ 17 ㎝を測り、埋土は黒褐色土 (２mm 大の黄色ブロック含) である。遺物は埋土中より弥生土器小片が出土。

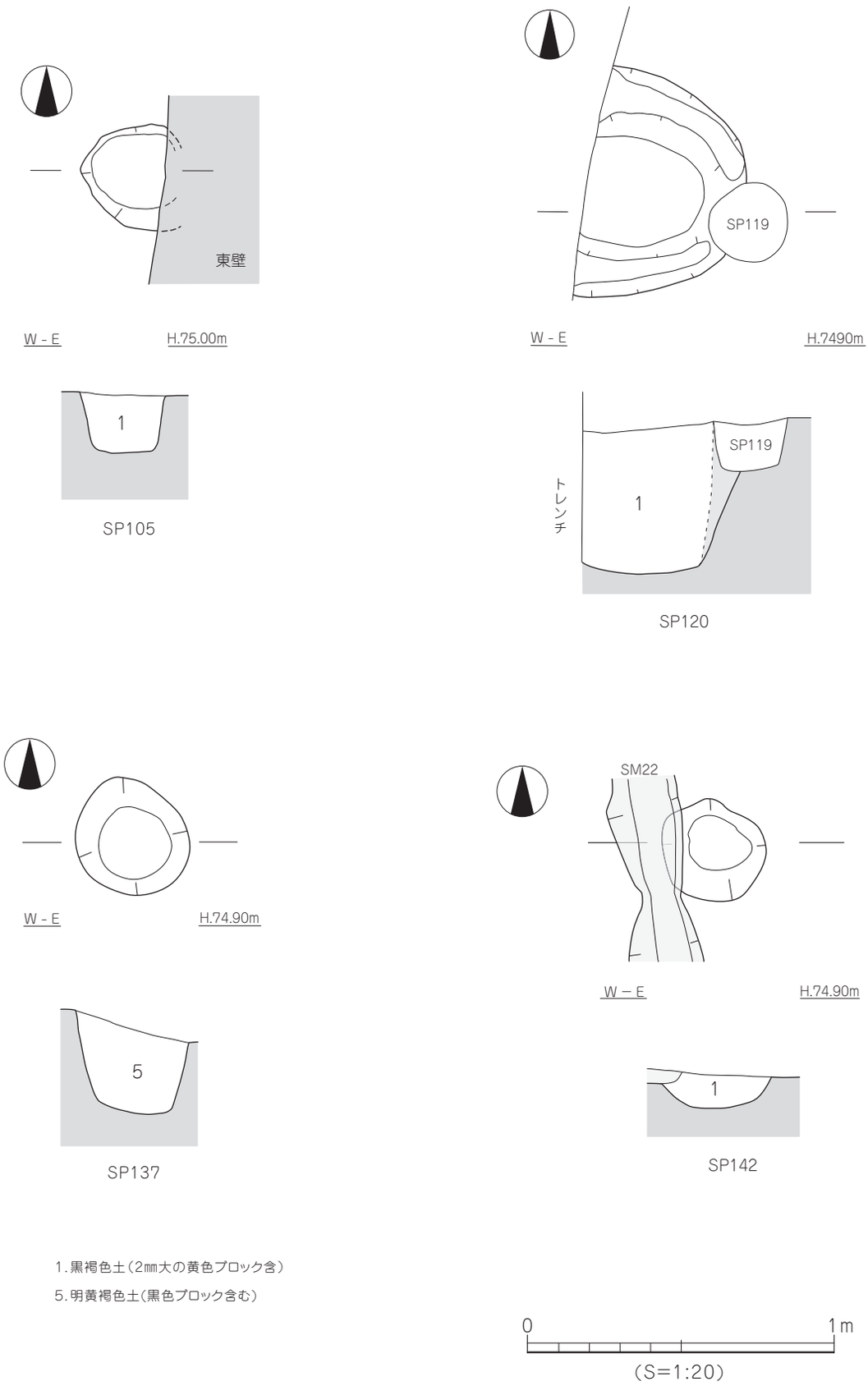
時　期　ＳＰ 172 に切られることと埋土の状況から、弥生時代の遺構とする。

ＳＰ147（第 45 図）

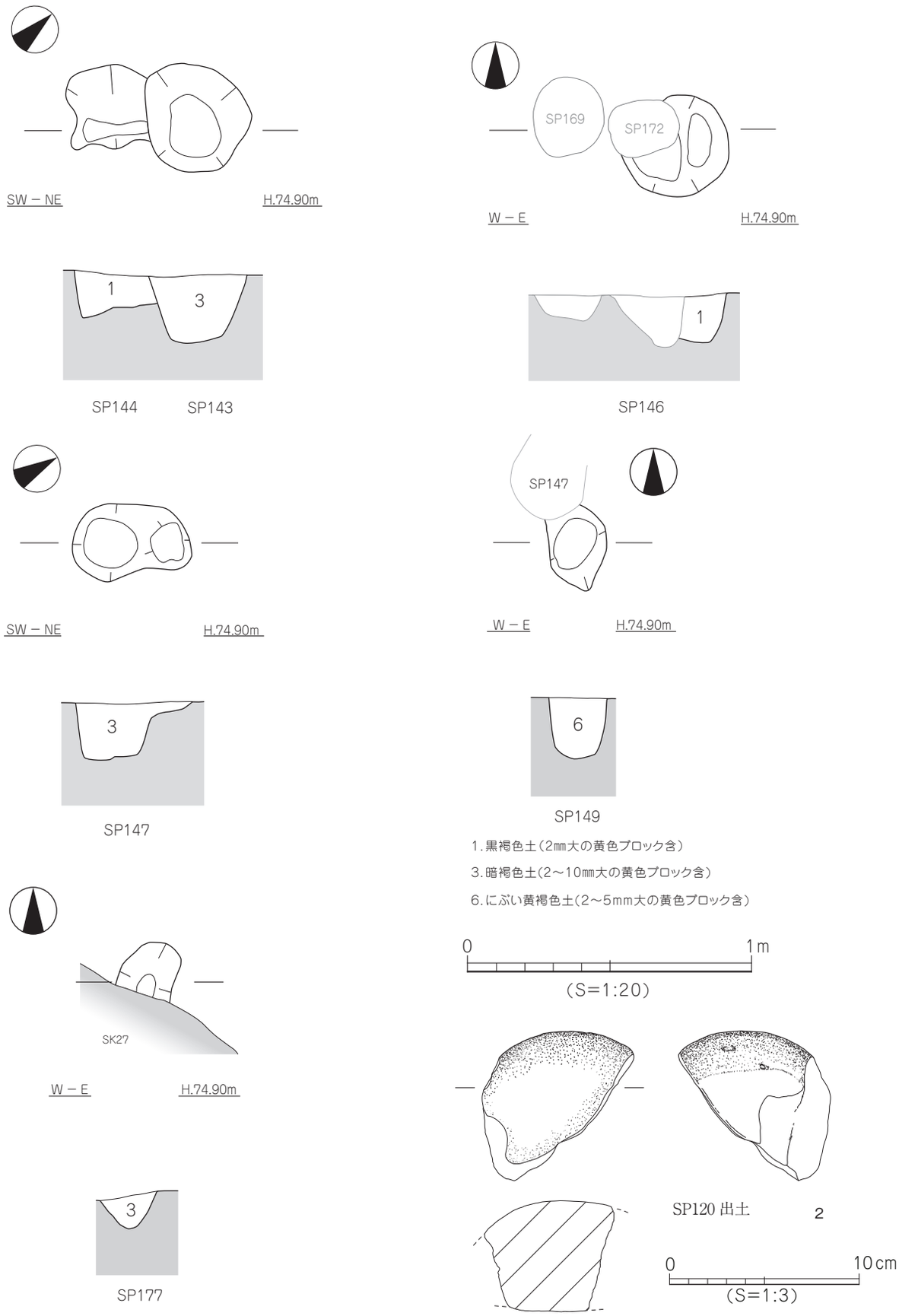
調査区南部西ＳＫ 33 の西、ＳＫ 32 の北に位置し、ＳＰ 149 を切る。平面形態は楕円形を呈し、規模は



第43図　ＳＰ（柱穴）測量図（１）・出土遺物実測図



第44図　ＳＰ（柱穴）測量図（2）



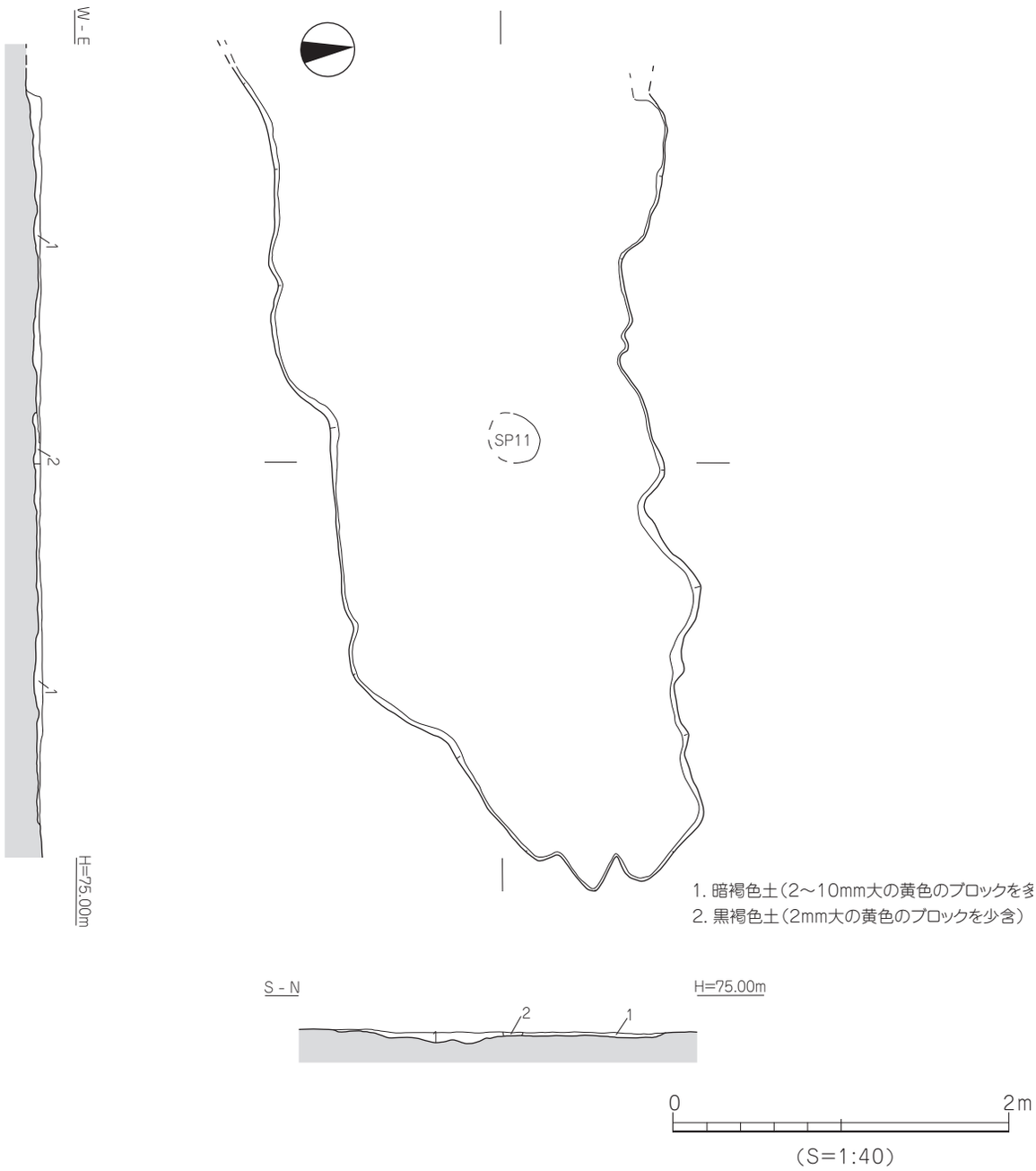
第45図　ＳＰ（柱穴）測量図（３）・出土遺物実測図

長軸 43 ㎝、短軸 23 ㎝、深さ 21 ㎝を測り、埋土は暗褐色土 (２～ 10mm 大の黄色ブロック含) である。遺物は埋土中より弥生土器小片が出土。

時　期　出土遺物と弥生時代の遺物が出土するＳＰ 149 を切ることから、弥生時代の遺構と考えられるが、遺物がごく小片であるため明確な時期の比定はできない。

ＳＰ149（第 45 図）

調査区南部西ＳＫ 33 の西、ＳＫ 32 の北に位置し、ＳＰ 147 に切られる。平面形態は楕円形を呈し、規模は長軸 29 ㎝、短軸 21 ㎝、深さ 22 ㎝を測る。埋土はにぶい黄褐色土 (２～５mm 大の黄色ブロック含) である。遺物は弥生土器小片が出土。



第 46 図　ＳＸ１測量図

時　期　出土遺物とＳＰ 147 に切られることと埋土の状況から、弥生時代の遺構と考えられる。

ＳＰ177（第 45 図）

調査区南部西ＳＫ 25 の南に位置し、ＳＫ 27 に切られる。平面形態は楕円形を呈し、規模は長軸 20 ㎝、短軸 21 ㎝、深さ 22 ㎝を測る。埋土は暗褐色土 (２～ 10mm 大の黄色ブロック含) である。遺物は埋土中より弥生土器小片が出土。

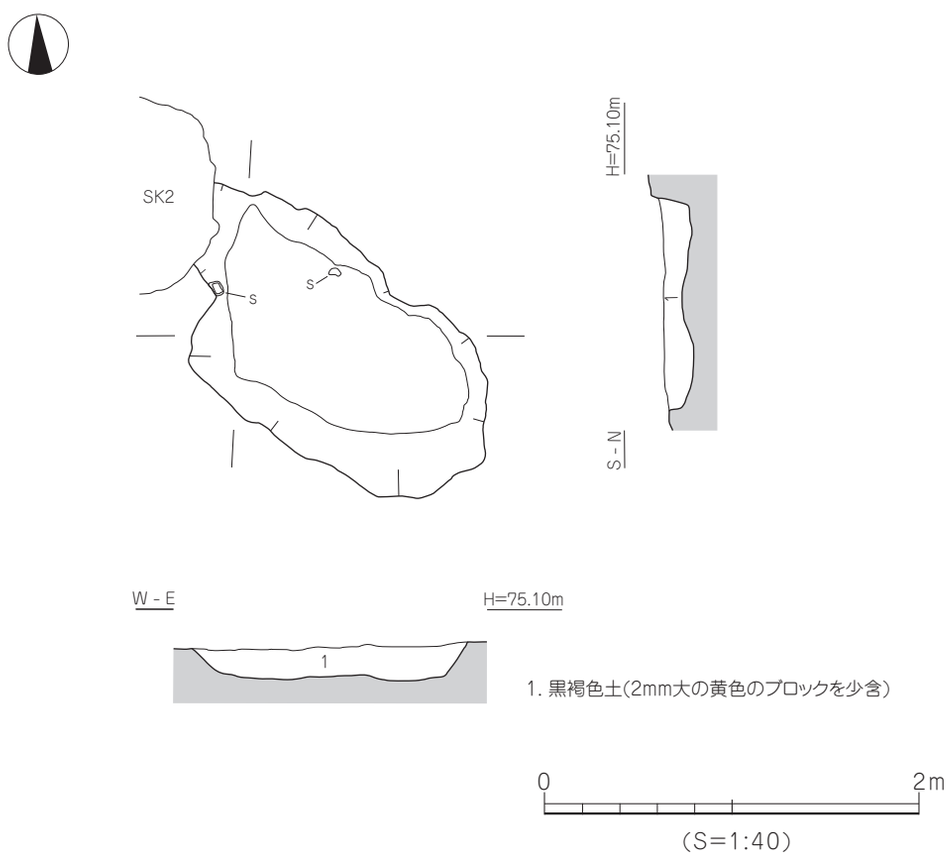
時　期　出土遺物から弥生時代と考えられる。

３）性格不明遺構（ＳＸ）

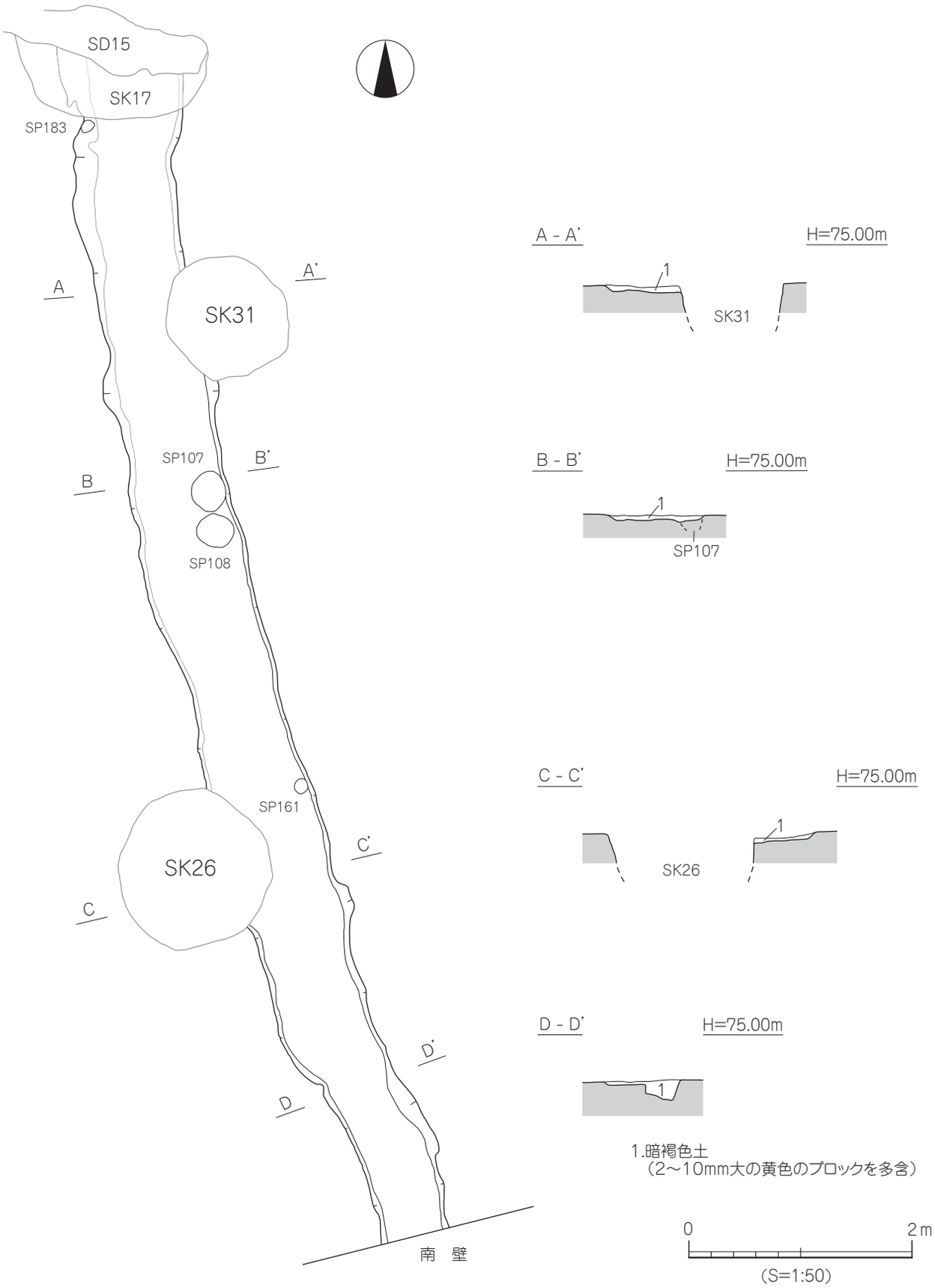
ＳＸ１（第 46 図、図版 32）

調査区北部西ＳＤ２の南に位置し、ＳＰ 11 に切られる。平面形態は不定型な長方形で、西端は調査区外に延び、東端は北に細く収まる。規模は検出長 5.00 ｍ、幅 2.38 ｍ、深さ６㎝を測る。断面形状は皿形を呈し、埋土は暗褐色土である。遺構はかなり後世の削平を受け浅く、床面はやや起伏が多い印象である。遺物は埋土中より弥生土器小片が数点出土した。また約 10 ㎝～ 15 ㎝程度の角の取れた礫が比較的上層で散見された。

時　期　出土遺物から弥生時代と考えられる。



第 47 図　ＳＫ３測量図



第48図　ＳＤ１０測量図

〔2〕古墳時代～古代

古墳時代の遺構はＳＫ３、ＳＤ10が検出され、古代の遺構としてはＳＫ４、ＳＫ８が検出されている。以下遺構・遺物の詳細を述べる。

1）土坑（ＳＫ）

ＳＫ３（第47図、図版24）

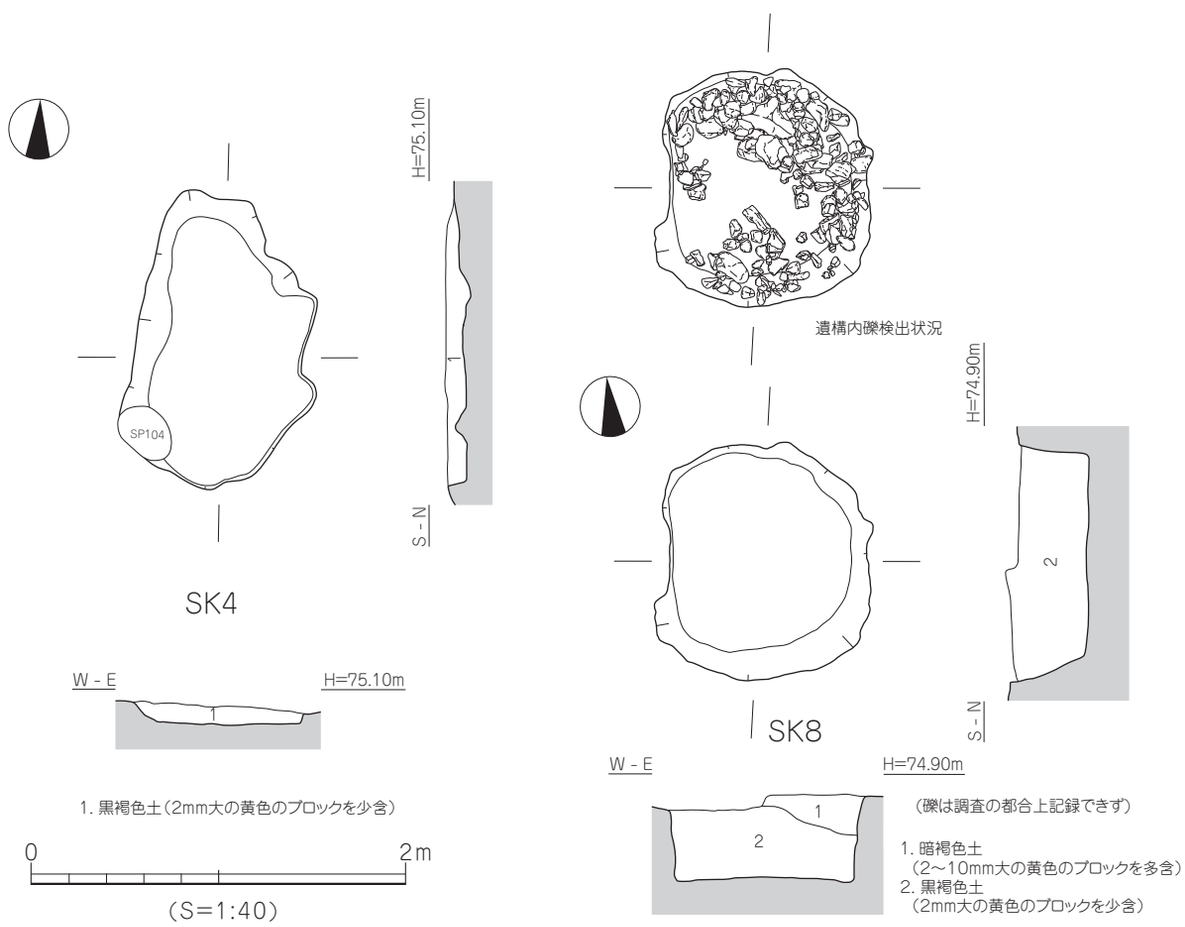
調査区北東部ＳＫ１の南、ＳＫ５の北に位置し、ＳＫ２に切られる。土坑の規模は、長軸2.04 m、短軸0.98 m、深さ0.18m内外を測り、断面形状は皿状を呈する。平面形態は不整形で、北西－南東方向に長い。埋土は黒褐色土（10YR3/1）である。遺物は埋土中より弥生土器片・須恵器坏蓋口縁部の小破片が数点出土した。

時　期　出土遺物が破片のみではあるが、遺物からここでは古墳時代とする。

ＳＫ４（第49図、図版24）

調査区北東部ＳＫ１の西、ＳＸ５の北に位置し、SP104に切られる。土坑の規模は、長軸1.55 m、短軸0.91 m、深さ0.13 m内外を測り、断面形状は皿状を呈する。平面形態は不整形で、北－南方向に長い。埋土は黒褐色土である。遺物は埋土中より弥生土器・石器剥片・須恵器・土師器の小破片が数点出土した。

時　期　出土遺物から遺構の埋没時期は古代とする。



第49図　ＳＫ４・８測量図

ＳＫ８（第 49 図）

調査区中央部ＳＫ 12 の南、ＳＫ 19 の北に位置する。土坑の規模は、長軸 1.25 m、短軸 1.06 m、深さ 0.46m 内外を測り、断面形状は逆台形状を呈する。平面形態は隅丸方形で、やや不整形である。埋土は黒褐色土である。遺物は埋土中より弥生土器･須恵器･土師器高坏脚部（面取りあり）の小破片が数点出土した。

時　期　出土遺物から遺構の埋没時期は古代とする。

2）溝（ＳＤ）

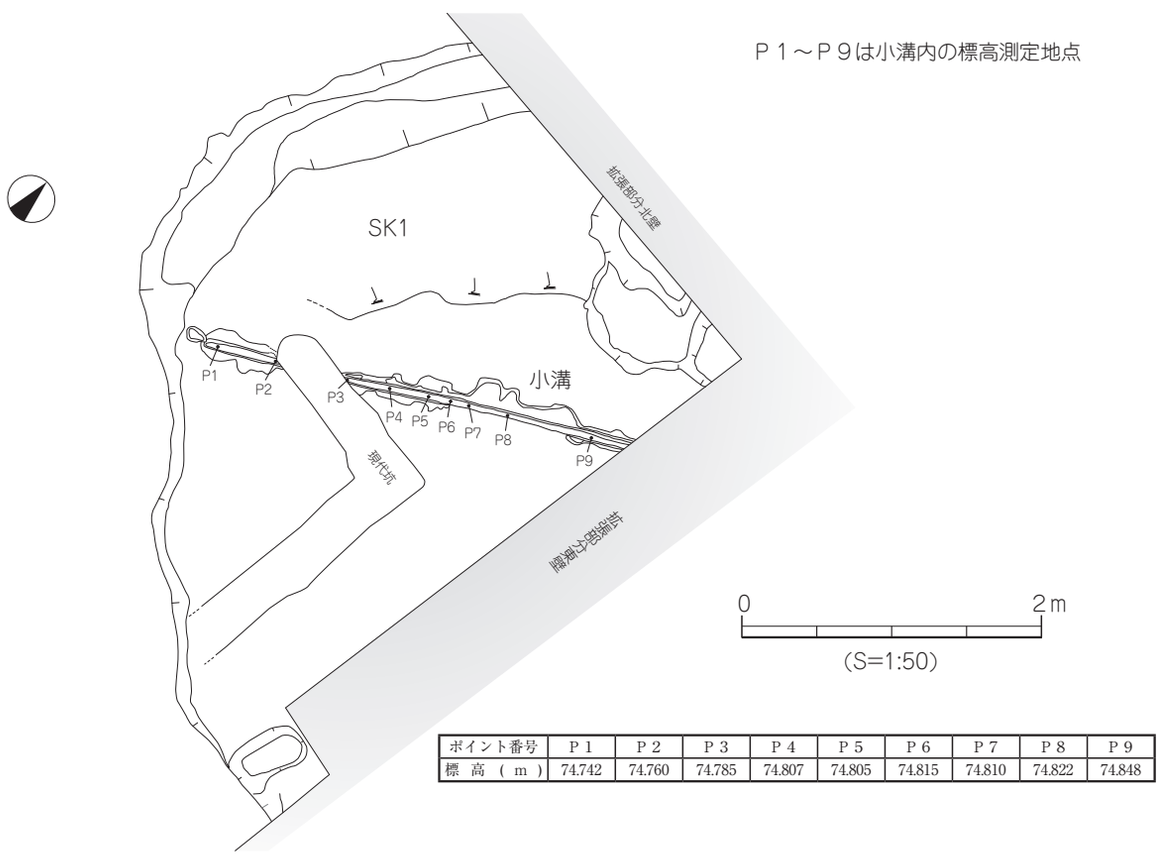
ＳＤ10（第 48 図、図版 42）

調査区南東から中央にかけて走る溝で、ＳＫ 17・26・31 に切られ、南東端では調査区外に延びる。溝の規模は検出長 11.0m、幅 0.65～ 1.05m、深さ 0.02～ 0.08m を測り比較的浅い。断面形状はレンズ状～皿状で、埋土は暗褐色土である。ＳＤ９の東を同様に湾曲しながら南北に走り調査区外に延びる溝である。遺物は埋土中より弥生土器・須恵器・土師器高坏脚部の小破片が数点出土した。

時　期　形状や埋土からは、ＳＤ９と時期的に近い可能性も高いが、ここでは出土遺物から遺構の埋没時期は古代とする。

〔３〕中世～近世

中世～近世の遺構は多く、遺跡の大半は該期の遺構である。本遺跡では、土抗としてＳＫ１・２、ＳＫ５～７、ＳＫ９～ 20、ＳＫ 22 ～ 27、ＳＫ 30・31、ＳＫ 36・37・39 の 28 基。そして溝はＳＤ１～９、ＳＤ 11 ～ 15 の 14 基が検出されている。そのほか畝状遺構が 18 条、性格不明遺構を４基確認した。



ポイント番号	Ｐ１	Ｐ２	Ｐ３	Ｐ４	Ｐ５	Ｐ６	Ｐ７	Ｐ８	Ｐ９
標　高　（ｍ）	74.742	74.760	74.785	74.807	74.805	74.815	74.810	74.822	74.848

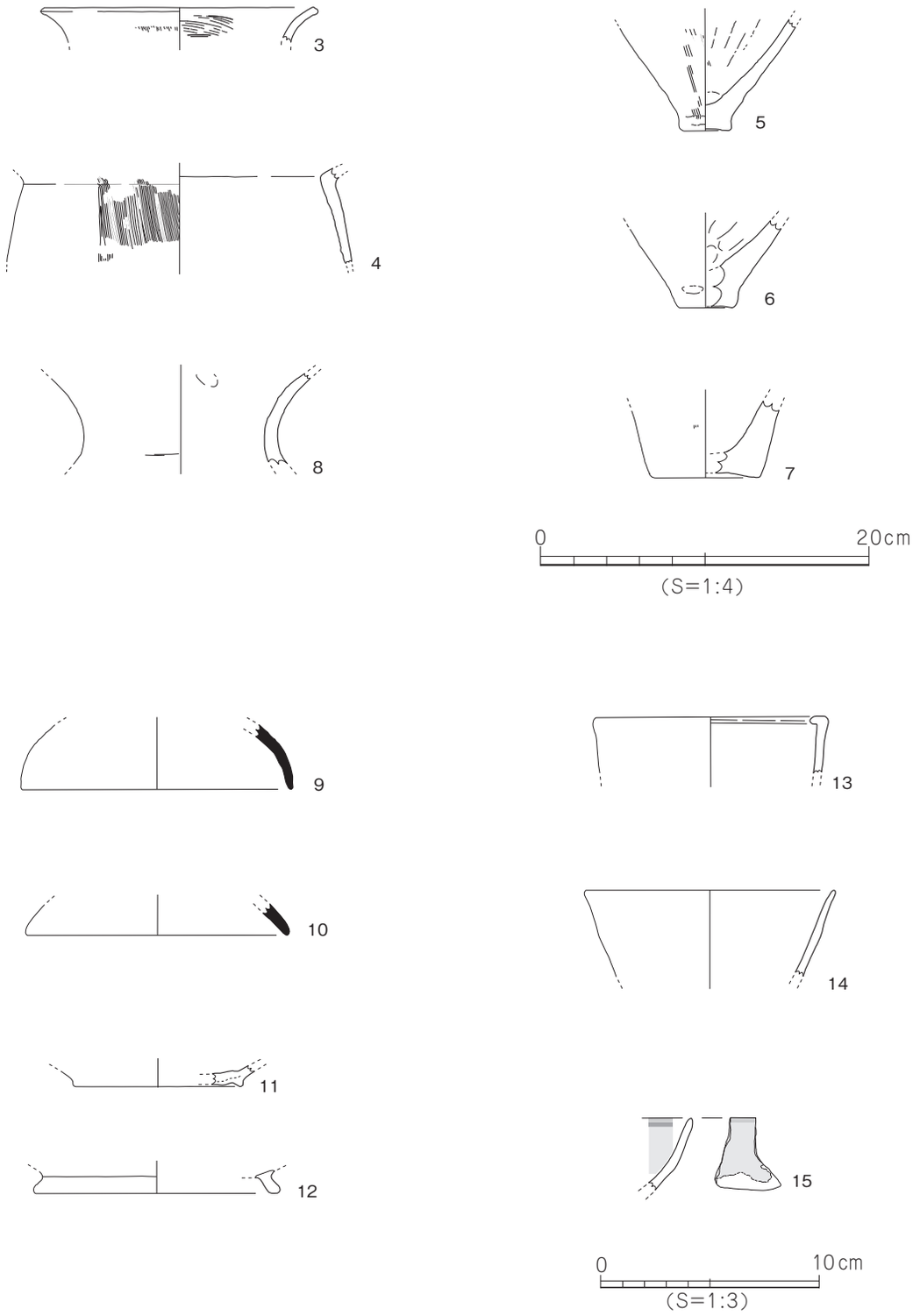
第 50 図　ＳＫ１測量図（１）

第51図　ＳＫ１測量図（２）

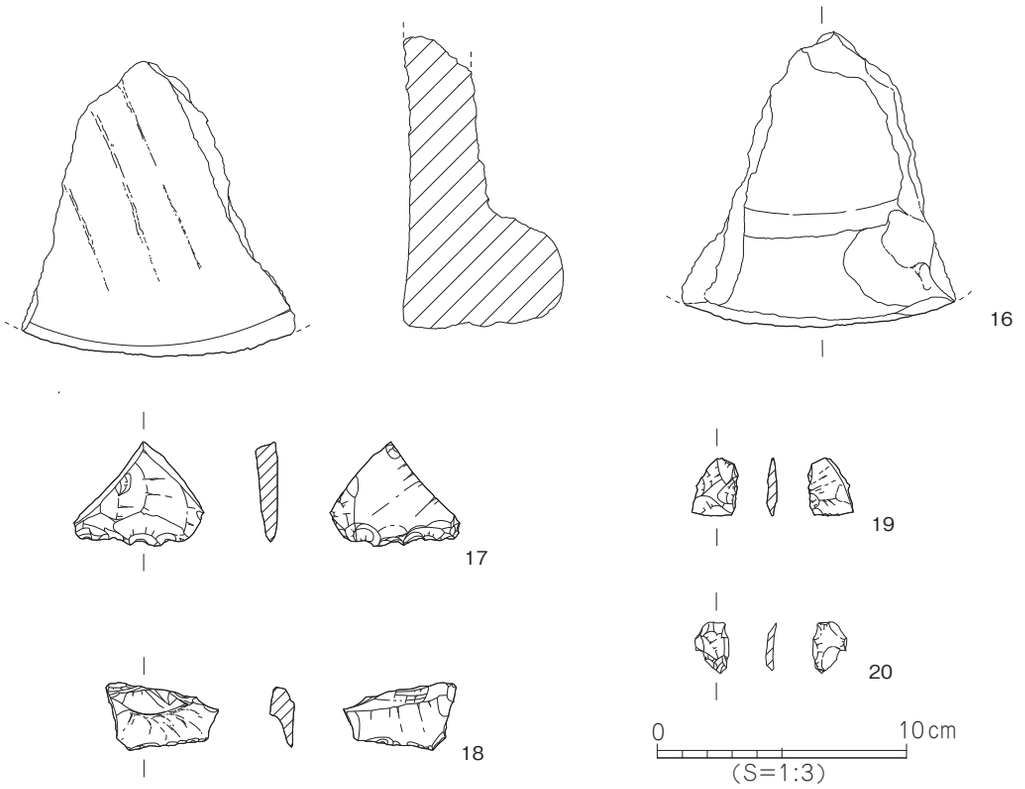
１）土抗（ＳＫ）

ＳＫ１（第50・51図、図版21～23）

調査区北東隅に位置し、ＳＫ13・21を切る。土坑の検出規模は、長軸4.35ｍ、短軸3.25ｍ、深さ0.25m内外を測り、調査区外北東に展開する。平面形態は膨らむ方形を呈し、やや不整形である。断面形状は皿状を呈する。遺構内は北から南にかけて緩やかな傾斜を持つ埋土は暗褐色土・黒褐色土・黒褐色粘質土である。遺物は土抗内中央の埋土から弥生土器・須恵器・土師器高坏脚部の小破片等が数点出土した。また、花崗岩製の石臼（挽臼）は礫群内上部で検出された。遺構内からは礫群を検出した。礫群は主に土抗内西端より中央に分布し、そのほかは遺構内を散発的に点在する。集中的に遺存する礫群の規模は、南北2.7ｍ、東西2.2ｍ前後、高さは40㎝を測る。礫は拳大～25㎝程度の角礫と円礫であるが比較的円礫が多い。礫群を東西に断ち割り断面観察を行った結果、礫の堆積は意識的に積まれた状況にもなく、何らかの施設を



第52図　ＳＫ１出土遺物実測図（１）



第53図　ＳＫ１出土遺物実測図（２）

構成するとは考えにくい。礫群の分布状況・断面状況および遺物の分布状況から、土抗が埋没される過程で礫群が流れ込み、または礫群を破棄するための場所にされたと考えられる。そのほか土抗内には中央部に北東から南西に走る小溝を検出した。規模は検出長2.9ｍ、幅10㎝～25㎝、深さ８㎝内外を測る。断面形状は、舟底状を呈しU字状にやや丸みを持つ。小溝床面の標高値を計測した。Ｐ１～Ｐ９の比高差は約11㎝程度あり、標高はＰ９からＰ１に向かい緩やかに傾斜している。この小溝は、断面状況からも土抗に伴うものである。

出土遺物（第52・53図、図版47）

３～７は弥生時代後期の甕形土器、８は同じく壺形土器である。３の口縁部は外反し、口縁部端面に１条の浅い沈線がめぐる。内面ハケ目調整、外面ハケ目調整ののちナデ。４は胴部片で外面にハケ目が施される。５はやや突出した平底を持つ。内外面ともにハケ目調整ののちナデられる。６はやや突出した平底で内外面ともにナデ。７はやや小さい上げ底で外面にハケ目調整。８は太い頸部に大きく外反して口縁部にいたる。器面調整は摩滅のため不明。９・10は須恵器の坏蓋。11は瓦器椀の底部で焼成不良と思われる。低い高台が付く。12は土師器の坏高台片で、ハの字状に開き端面は平坦に仕上げる。13は陶磁器口縁部片で、端部は内面に向かって屈折する。器種不明であるが火入れ・灰落としや香炉などが考えられる。外面オリーブ灰色の施釉。14は直立気味に立ち上がる陶磁器碗の口縁部片。内外面ともに灰オリーブ色の施釉。15は陶磁器碗の口縁部片で、内外面に灰オリーブ色の施釉。端部には細く鈍い赤褐色の釉を施す。15は花崗岩製の挽臼（上臼）である。底部は過度の使用のためか、摩耗により擦面の溝は不鮮明であるが痕跡を確認できる。やや上げ底。17～20はサヌカイト製の剥片である。

時　期　出土遺物から中世～近世と考えられる。

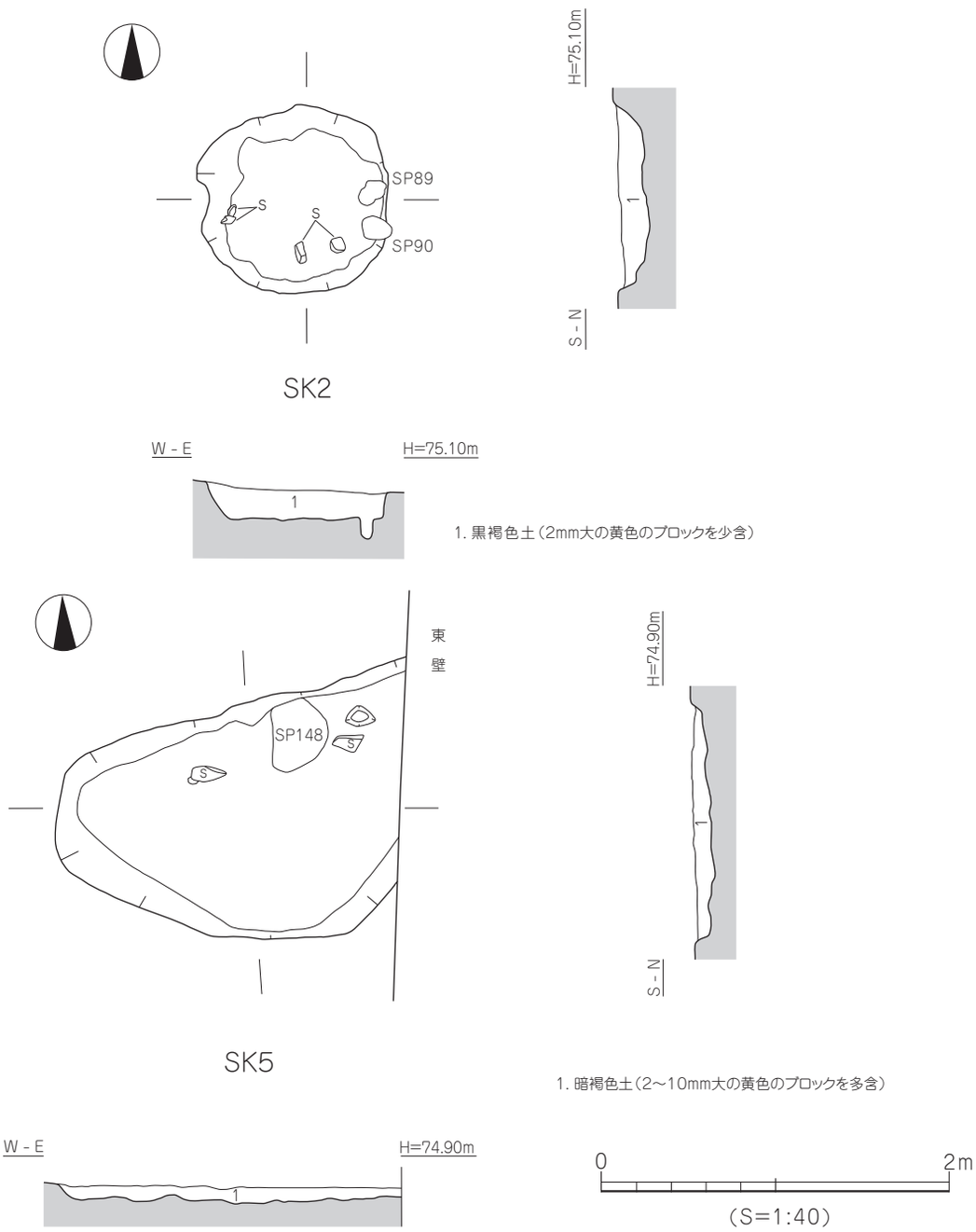
ＳＫ２（第 54 図、図版 24）

調査区北東部ＳＫ１の南に位置する。土坑の規模は、南北 1.08 m、東西 1.03 m、深さ 0.26m 内外を測り、平面形態はやや不整形な円形である。断面形状は皿状を呈し、埋土は黒褐色土である。土抗内には柱穴２基を確認した。土層観察からは土抗と柱穴との切り合い関係も認められず、土抗に伴うものと考えられる。遺物は埋土中より弥生土器・須恵器・陶磁器の小破片が数点出土した。

時　期　出土遺物から近世と考えるが、遺物が小破片であるため詳細な時期の設定は難しい。

ＳＫ５（第 54 図）

調査区中央部北東部に位置する。土坑の規模は、東西 1.97m以上、南北 1.36m、深さ 0.11mを測り、断



第 54 図　ＳＫ２・５測量図

面形状は皿状を呈する。平面形態は不整形で、遺構東半は調査区外に展開する。埋土は暗褐色土で（２～10mm大の黄色ブロックを多く含む）である。遺構床面は断面観察からもみられるように基盤面としては起伏が多く安定感がない状況である。遺物は埋土中より弥生土器・陶磁器の小破片が数点出土した。また床面より 10㎝～ 12㎝程度の礫が数点検出した。

時　期　出土遺物から中世～近世と考える。

ＳＫ６（第 55 図、図版 25）

調査区中央部やや北、ＳＤ２の南に位置する。東西に走るＳＤ３に切られる。土坑の規模は、長軸 1.66m、短軸 1.38m、深さ 1.0m 内外を測り、断面形状は皿状を呈する。平面形態はやや不整形な楕円形で、埋土は黒褐色土。遺物は埋土中より弥生土器・土師質焙烙片等が出土した。

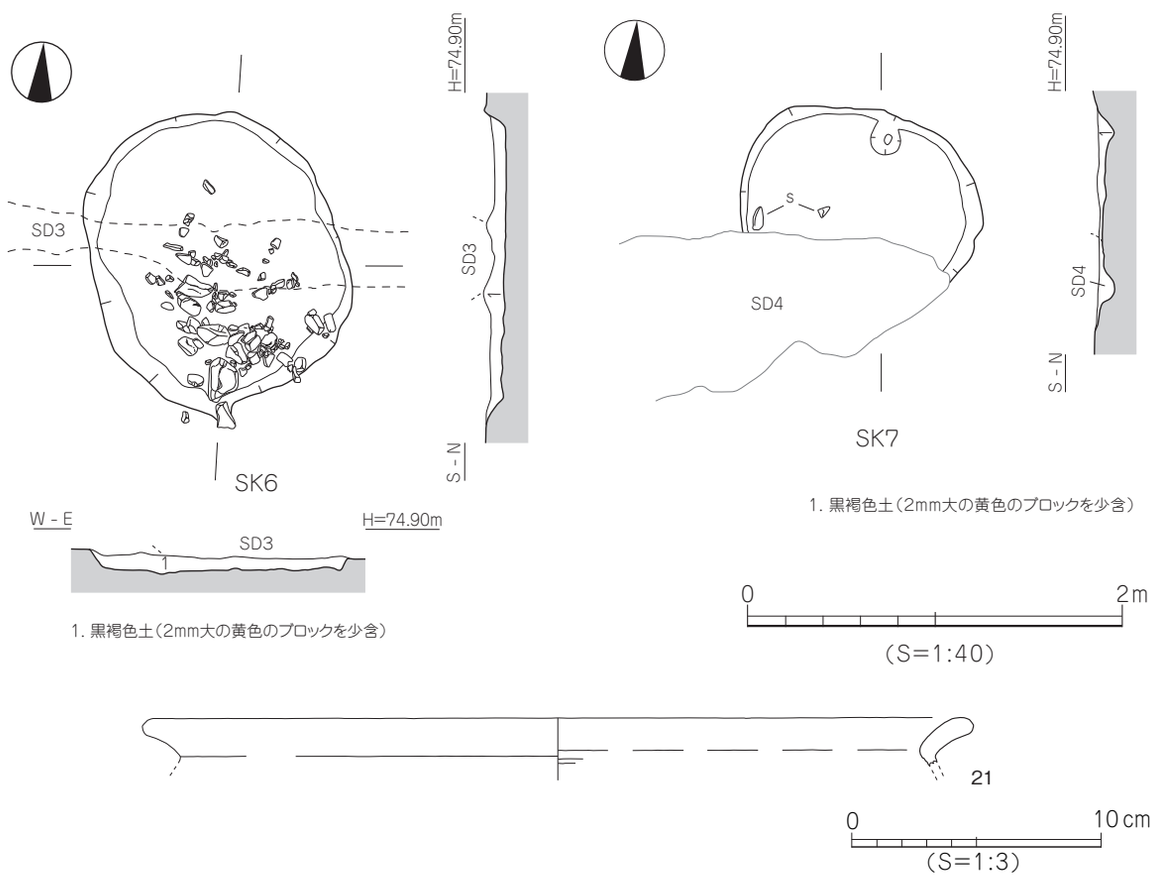
出土遺物（第 55 図、図版 48）

21 は焙烙の口縁部片である。内外ともにナデ。

時　期　出土遺物から中世～近世と考えられる。

ＳＫ７（第 55 図、図版 25）

調査区中央部やや東、ＳＫ６の南東に位置し、ＳＤ４に切られる。土坑の規模は、長軸 1.30m、短軸 0.69m、深さ８㎝を測る。断面形状は皿状を呈し、平面形態は不整形な円形である。埋土は黒褐色土。遺物は埋土中より弥生土器・土師器・磁器の小破片が数点出土した。



第 55 図　ＳＫ６・７測量図・ＳＫ６出土遺物実測図

時　期　出土遺物が細片ではあるが、出土遺物とＳＤ４に切られることから近世とする。

ＳＫ９･10（第 56 図）

調査区中央部南西に位置し、ＳＫ９・10は近接する。ＳＫ９の規模は、長軸 1.10m、短軸 1.06m、深さ 57㎝を測り、断面形状は逆台形状を呈する。平面形態は円形である。埋土は暗褐色土･ 褐灰色土･ 黄橙色土である。ＳＫ 10の規模は、長軸 1.17m、短軸 1.12m、深さ 58㎝を測り、断面形状は逆台形状を呈する。平面形態は円形である。埋土は暗褐色土･ 褐灰色土･ 黄橙色土である。両遺構とも第２層には５㎝～ 15㎝の円礫群が混入し、壁体には漆喰状の黄橙色土が塗り込められる。遺構内では特に異臭は認められなかった。遺物はＳＫ９からは出土がなく、SK10からは、第２層灰褐色土中（礫層・ ５㎝～ 15㎝の円礫群）より土師器の皿が出土した。遺構は構造的には同様であるが両遺構との間には切り合い関係もなく、時期差は不明である。

出土遺物（第 56 図、図版 48）

22 は SK10 出土の灯明皿片である。口縁部周辺には内外ともに煤が付着し、端部は全周が欠損する。灰落としの可能性もある。内外ともにナデ。

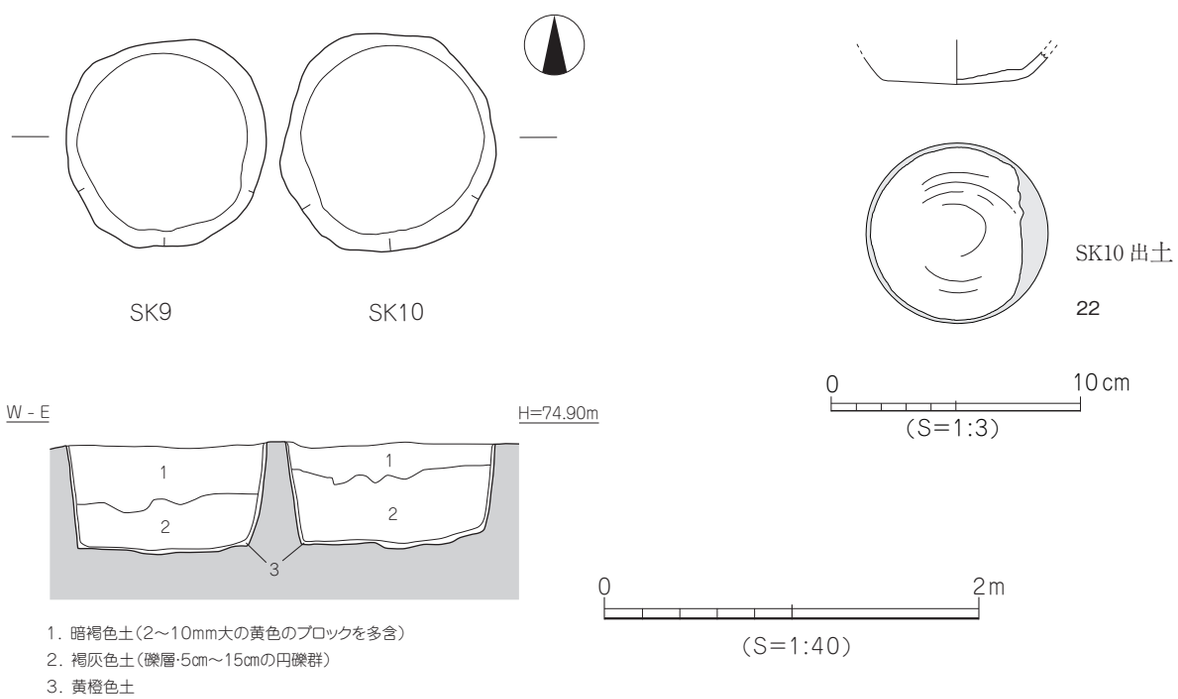
時　期　出土遺物から中世～近世と考えられる。

ＳＫ11（第 57 図、図版 26）

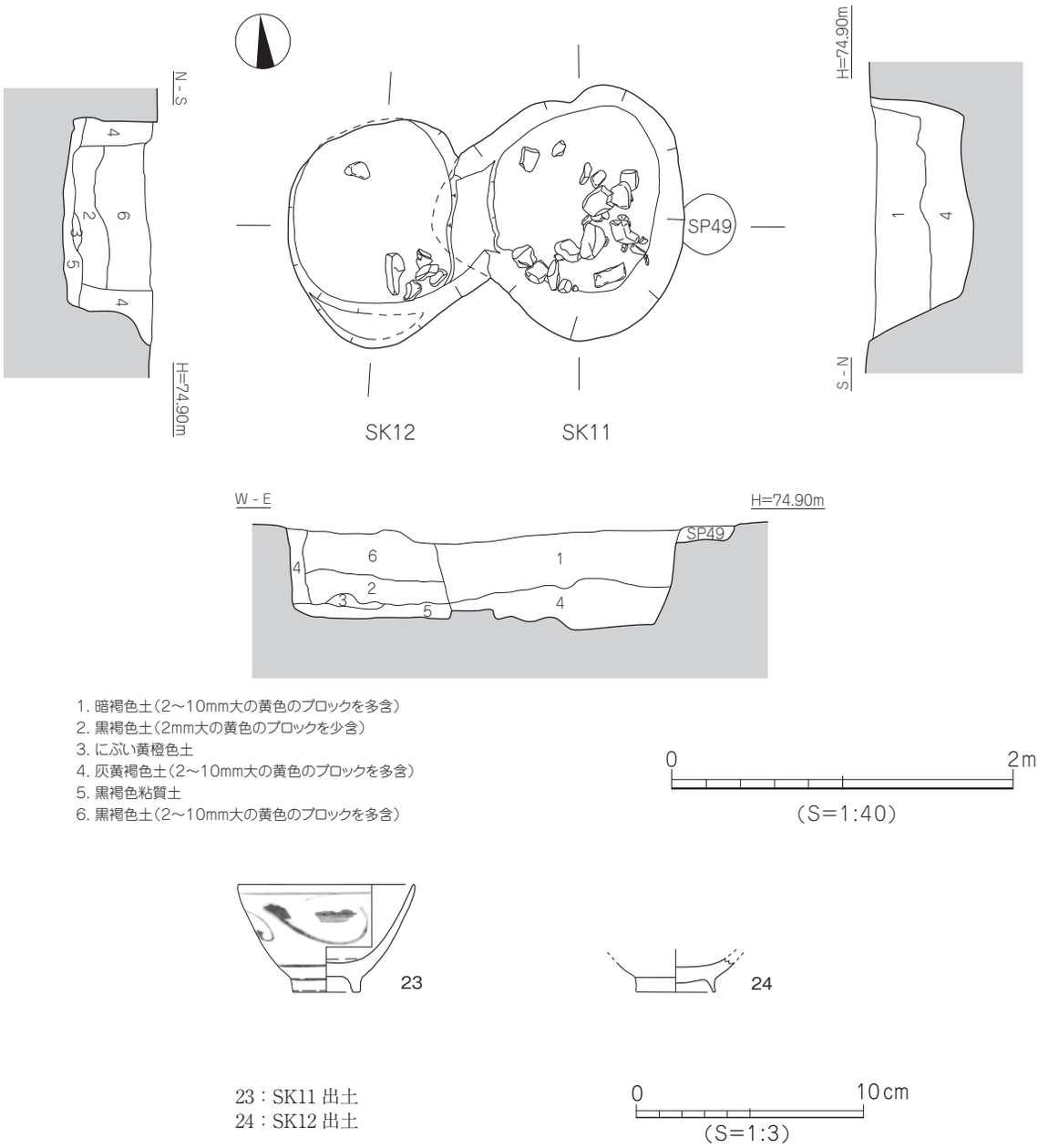
調査区中央部やや北西に位置する。土坑の規模は、検出長東西 1.34m、南北 1.5m、深さ 57㎝測り、断面形状は逆台形状を呈する。平面形態は不整形である。埋土は暗褐色土･ 灰黄褐色土である。遺物は埋土中より陶器碗の小破片が数点出土した。

出土遺物（第 57 図、図版 48）

23 は陶器碗の破片である。内外ともに灰白色の施釉が施される。



第 56 図　ＳＫ９・10 測量図・出土遺物実測図



第57図　ＳＫ 11・12 測量図・出土遺物実測図

時　期　出土遺物から近世と考える。

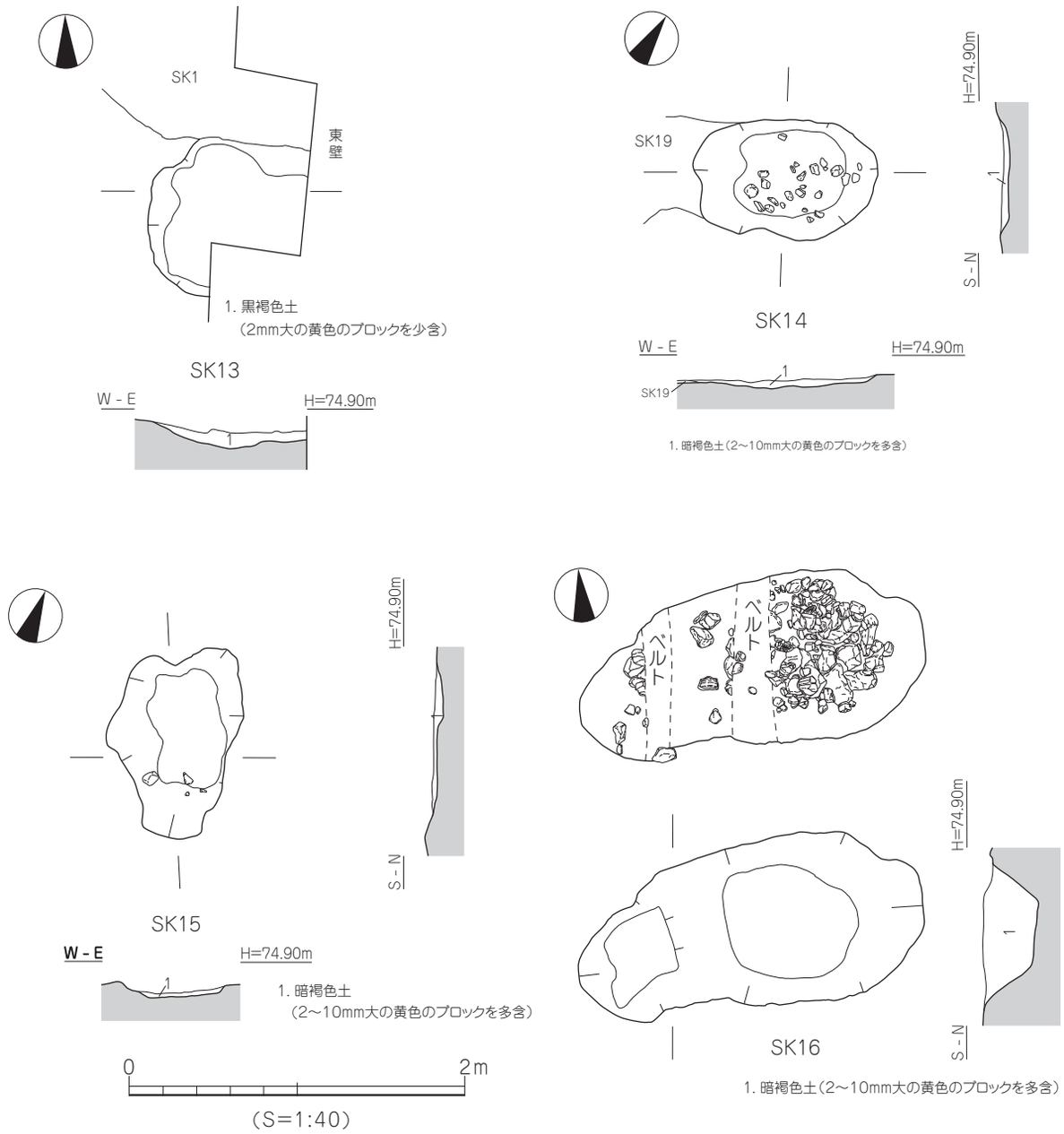
ＳＫ12（第57図、図版26）

調査区中央部やや北西部位置しＳＫ 11 に切られる。土坑の規模は、検出長東西 0.94 m、南北 1.3 m、深さ 5.0m を測り、断面形状は逆台形状を呈する。平面形態は不整形で、埋土は黒褐色土･灰黄褐色土である。遺物は埋土中より弥生土器・磁器の小破片が数点出土した。

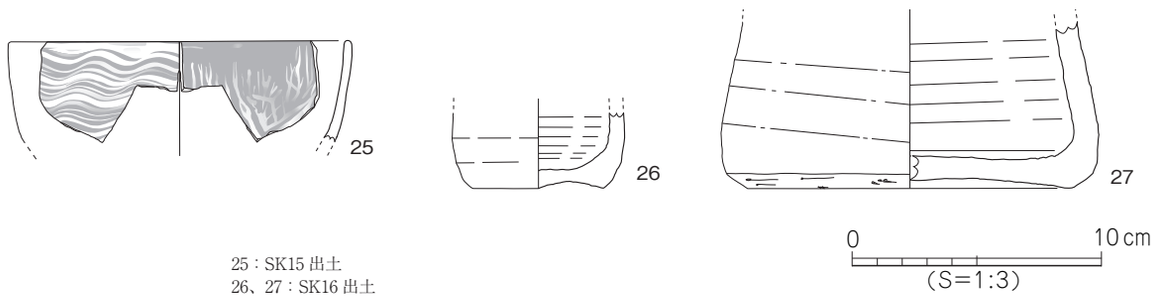
出土遺物（第57図）

24 は磁器の底部片である。高台はハの字状に開き先細る。

時　期　出土遺物が破片であるため詳細な時期の設定は難しいが江戸時代とする。



第58図　ＳＫ 13・14・15・16 測量図



25：SK15 出土
26、27：SK16 出土

第59図　ＳＫ 15・16 出土遺物実測図

ＳＫ13（第 58 図、図版 27）

調査区北部東拡張部位置し、遺構東半は調査区外に展開し、ＳＫ１に切られる。土坑の規模は、長軸 0.94 m以上、短軸 0.93 m、深さ 10 ㎝内外を測り、断面形状はレンズ状。平面形態は不整形でやや方形を呈し、埋土は黒褐色土。遺物は埋土中より弥生土器・須恵器・陶磁器の小破片が数点出土した。

時　期　出土遺物と埋土から近世と考える。

ＳＫ14（第 58 図、図版 27）

調査区中央部に位置し、ＳＫ 19 を切る。土坑の規模は、長軸 1.10 m、短軸 0.71 m、深さ５㎝を測り、断面形状は皿状を呈する。平面形態はやや南西－北東に長い不整形で、埋土は暗褐色土である。遺物の出土はみられなかった。

時　期　出土遺物はないが、隣接するＳＫ 18 と埋土および埋没状況が同様であることから江戸時代以降と考える。

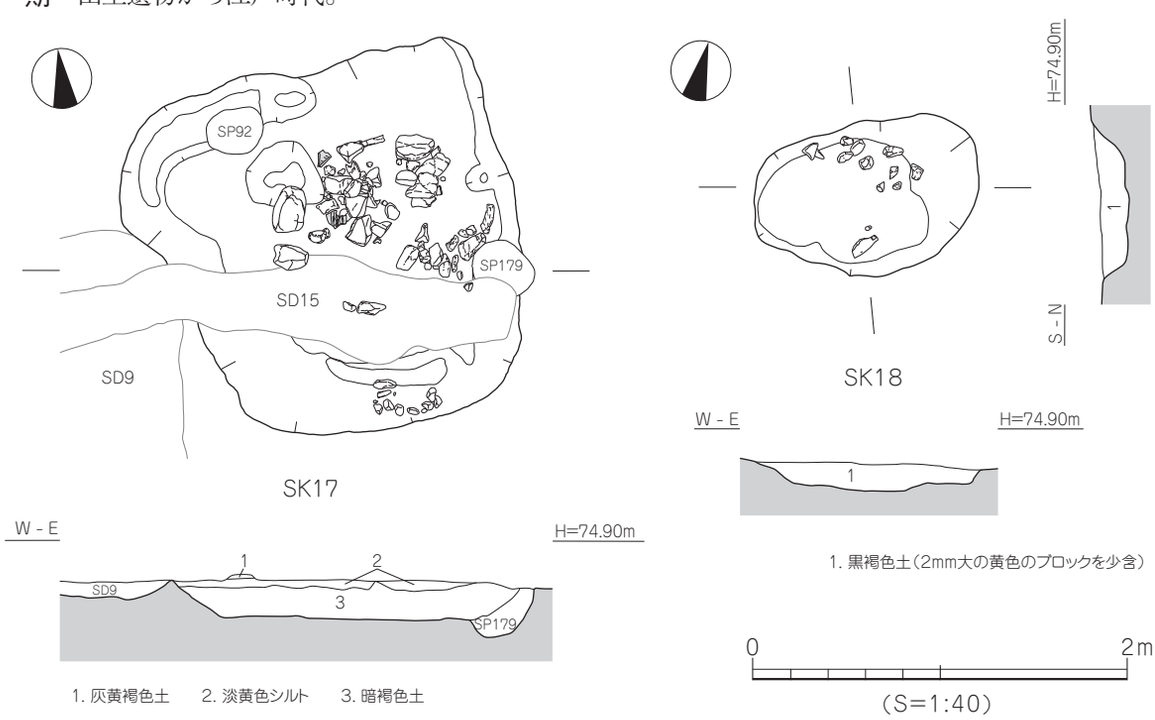
ＳＫ15（第 58 図、図版 27）

調査区中央部ＳＫ９の西に位置する。土坑の規模は、長軸 1.10 m、短軸 0.76 m、深さ５㎝を測り、断面形状は皿状を呈する。平面形態はやや南北に長い不整形である。埋土は暗褐色土である。遺物は埋土中より弥生土器・須恵器・陶磁器の胴部小破片が数点出土した。また出土遺物の中には同一個体と思われる陶磁器片が SK17 より出土している。

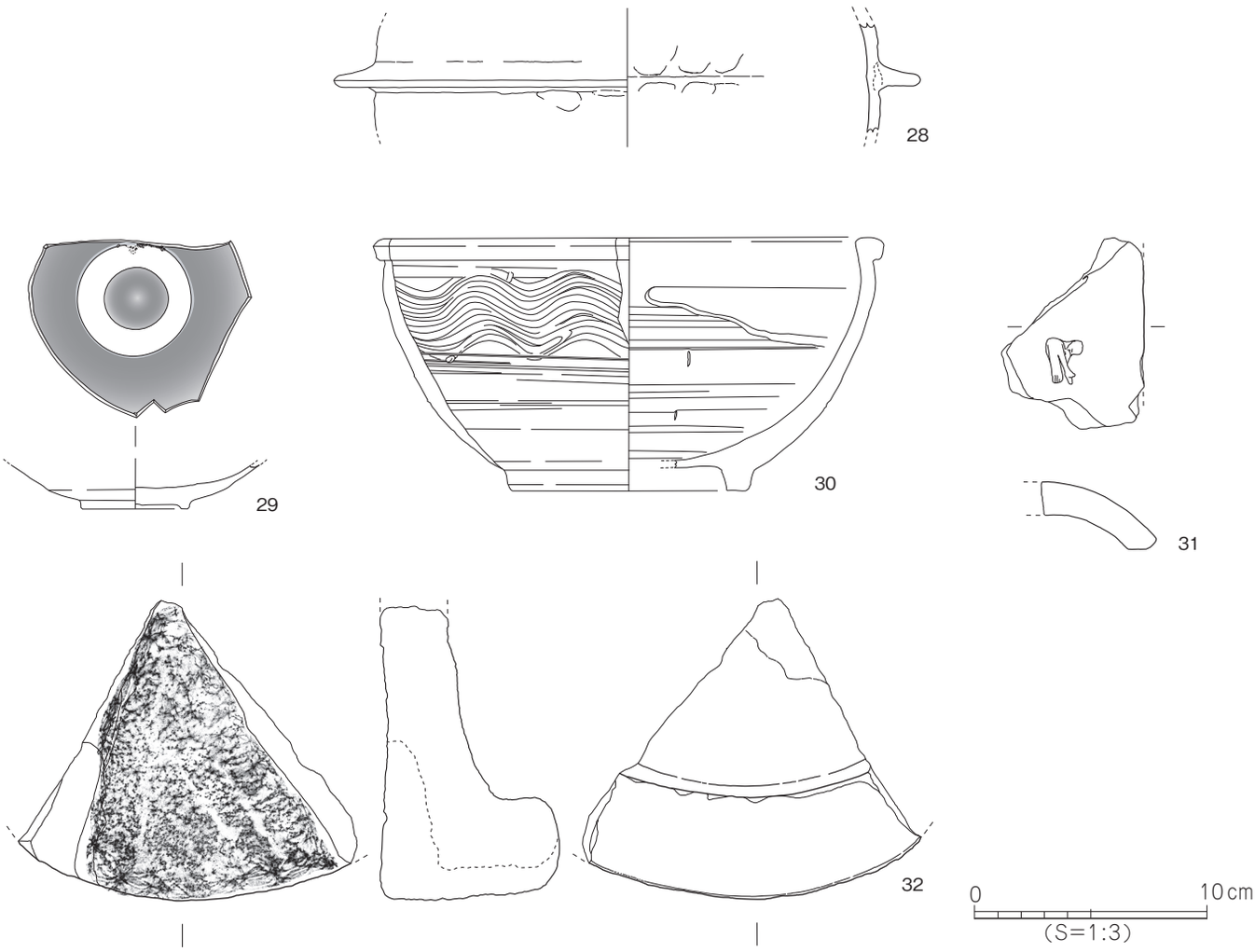
出土遺物（第 59 図、図版 48）

25 は肥前系の刷毛目碗である。黒褐色の胎土に外面には淡黄色土による横方向刷毛目の文様を施す。17 世紀後半～ 18 世紀前半。

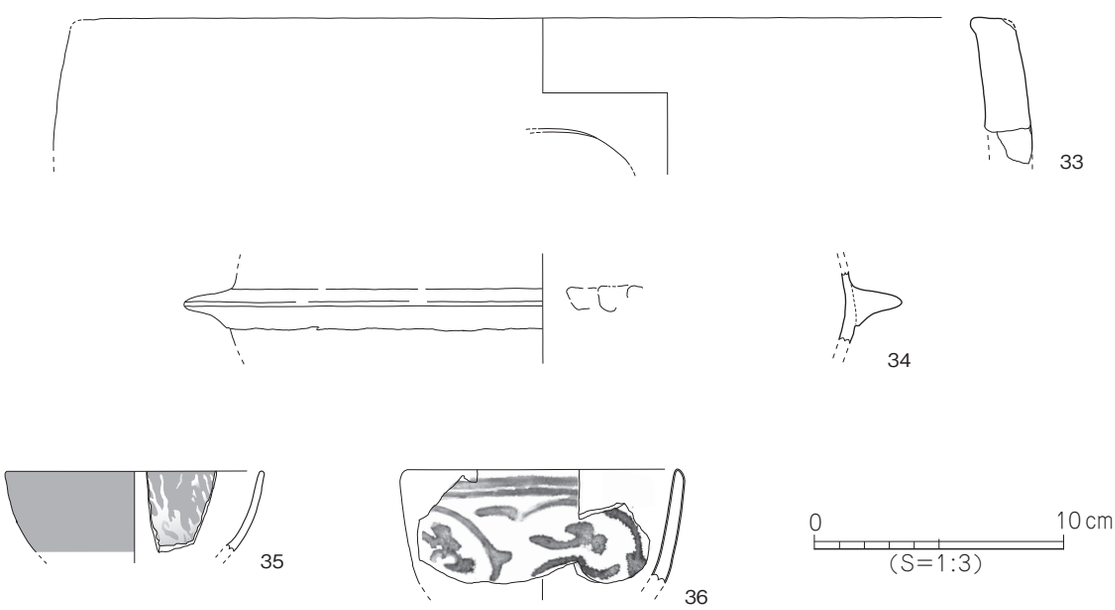
時　期　出土遺物から江戸時代。



第 60 図　ＳＫ17・18 測量図



第61図　ＳＫ17出土遺物実測図



第62図　ＳＫ18出土遺物実測図

ＳＫ16（第58図）

調査区中央部西に位置しＳＸ２に隣接する。土坑の規模は、東西2.12 m、南北1.03 m、深さ33㎝を測り、断面形状は逆台形状を呈する。平面形態は東西に長い不整形である。埋土は暗褐色土である。遺物は陶器片が数点出土した。

出土遺物（第59図、図版48）

26は備前焼の徳利底部である。やや上げ底。27は備前のサヤ形鉢底部である。やや上げ底の底部に内傾して立ち上がる体部をもつ。

時　期　出土遺物から江戸時代と考える。

ＳＫ17（第60図）

調査区中央部に位置し、ＳＤ15、ＳＰ92・179に切られ、ＳＫ39、ＳＤ10を切る。土坑の規模は、長軸2.20 m、短軸1.94 m、深さ22㎝を測り、断面形状は皿状を呈する。平面形態は隅丸の方形で、埋土は暗褐色土である。遺物は埋土中より羽釜・陶器・瓦・石臼等が出土した。

出土遺物（第61図、図版49）

28は土師質の羽釜胴部片である。内外ともナデ、外面に煤が付着する。29は見込蛇の目釉剝ぎの肥前系皿で、高台も露胎である。30は肥前系刷毛目鉢、外面はやや赤みを帯びた褐色の胎土に白土で横方向に波状の刷毛目文様を施す。体部は内傾して立ち上がり口縁部はやや角張った玉縁状に肥厚する。31は近世の軒丸瓦。凹面にコビキ痕・布目が若干残る。32は花崗岩製の挽臼の上臼部で、挽木の差し込み口が残る。擦面は摩耗が激しく目の溝は看取しにくがわずかに残存する。そのほか、肥前系の刷毛目碗の口縁部片が１点出土しているが、ＳＫ15出土のものと同一個体と思われるので実測図は割愛した。

時　期　出土遺物から江戸時代～近代と考える。

ＳＫ18（第60図、図版27・28）

調査区中央部位置し、ＳＫ19を切る。土坑の規模は、長軸1.25 m、短軸0.82 m、深さ14㎝を測り、断面形状は皿状を呈する。平面形態は不整形で、埋土は黒褐色土である。遺物は埋土中より羽釜・火鉢・陶器等の破片が出土した。

出土遺物（第62図、図版49）

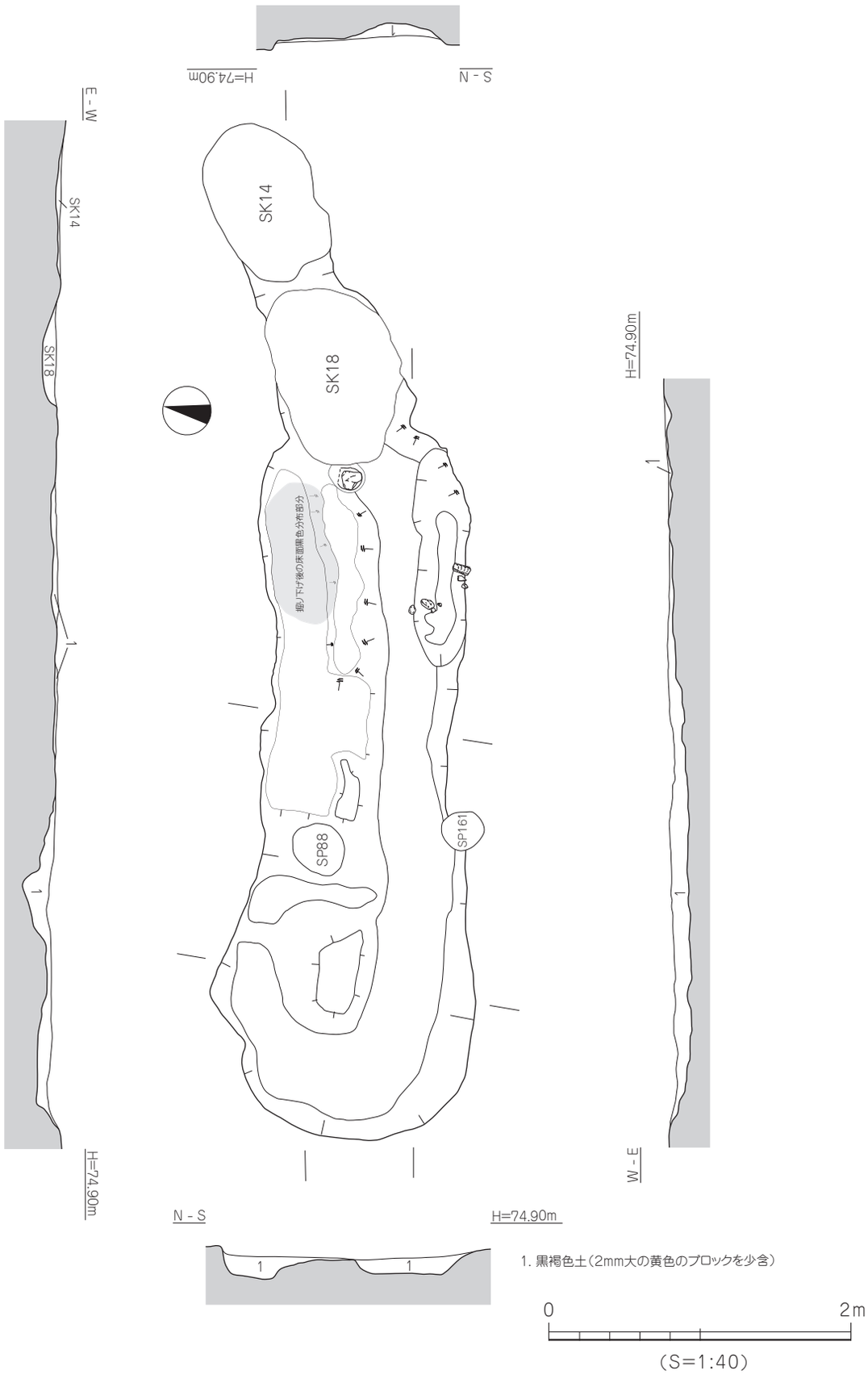
33は土師質の火鉢口縁部片である。内傾した立ち上がりで端部は内方にわずかに肥厚する。円形の風通し部分が残存する。34は羽釜の鍔部片。外面に煤が付着する。35は肥前系陶器の刷毛目碗口縁部片である。褐灰色の胎土で内面に白釉がかけられる。17世紀後半～18世紀前半。36は肥前系陶胎染付碗。体部に唐草文、口縁部に２条の圏線を施す。18世紀代。

時　期　出土遺物から江戸時代とする。

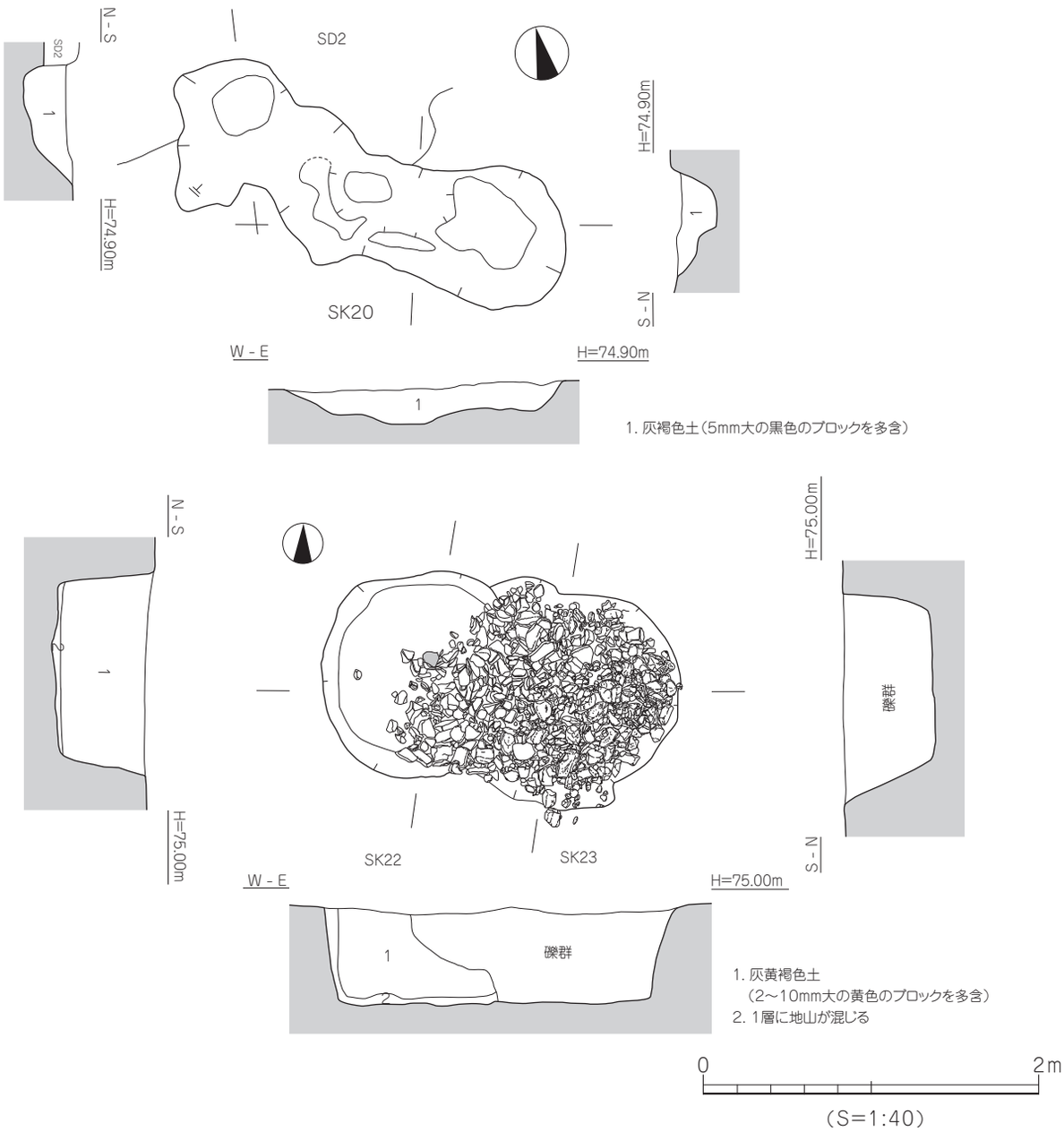
ＳＫ19（第63図、図版27・28）

調査区中央部に位置し、ＳＫ14・18、ＳＰ88・161に切られＳＫ39を切る。土坑の規模は、長軸5.70 m、短軸1.76 m、深さ17㎝を測り、断面形状は皿・舟底状を呈し、平面形態は東西に長い楕円形で、埋土は黒褐色土である。遺物は埋土中より弥生土器・陶器の細片が数点出土した。

時　期　出土遺物とＳＫ18に切られることから江戸時代以降と考える。



第63図　ＳＫ19測量図



第64図　ＳＫ20・22・23測量図

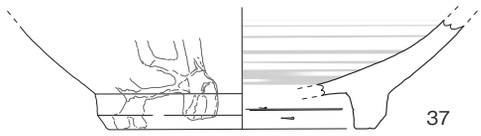
ＳＫ20（第64図）

調査区やや北部に位置し、ＳＤ２を切る。土坑の規模は、長軸2.58 m、短軸1.00 m、深さ25㎝を測り、断面形状は皿状を呈する。平面形態は北西－南東に長く不整形である。埋土は灰褐色土である。遺物の出土は見られなかった。

時　期　ＳＤ２を切ることや埋土の状況から江戸時代～近代と考える。

ＳＫ22（第64図、図版30）

調査区北西部に位置し、隣接するＳＫ23を切る。土坑の規模は、長軸1.25 m、短軸1.10 m、深さ57㎝を測り、断面形状は逆台形状を呈する。平面形態は不整形な円形で、埋土は灰黄褐色土である。遺物は埋土中より陶器の壺が１点出土した。また土抗内からは礫は検出していない。

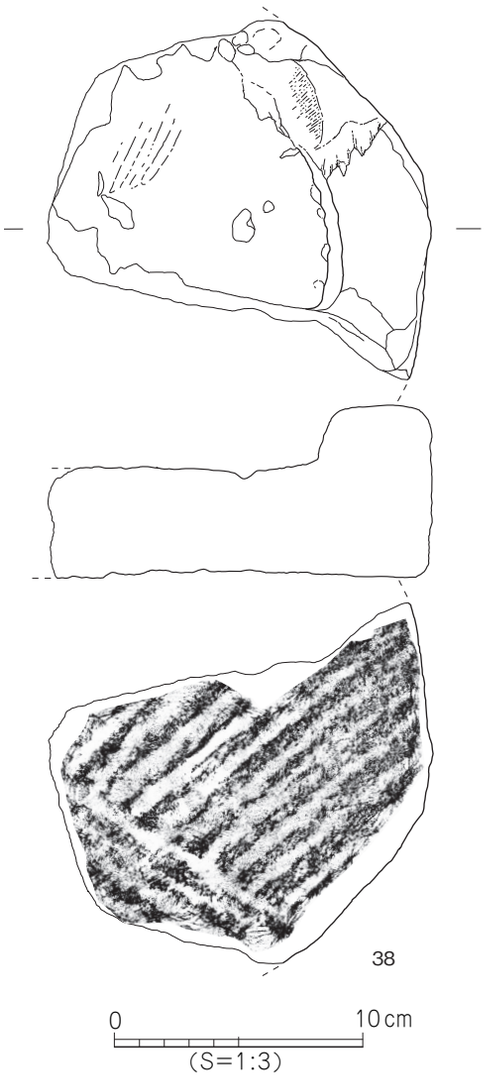


37： SK22 出土
38： SK23 出土

出土遺物（第 65 図、図版 49）

37 は肥前系の鉢あるいは皿の底部片である。面取りした厚手の高台がつく。見込みには白土による横方向の刷毛目を施す。18 世紀～ 19 世紀

時　期　出土遺物から江戸時代と考える。



第 65 図　ＳＫ22・23 出土遺物実測図

ＳＫ23（第 64 図、図版 30）

調査区北西部、SK22・ＳＫ24 に近接して位置する。遺構はＳＸ４に覆われ、ＳＫ22 に切られる。規模は長軸1.30 ｍ、短軸1.05 ｍ、深さ56 ㎝を測り、断面形状は逆台形状を呈する。平面形態は不整形な楕円形である。土抗内には５～20 ㎝のやや角の取れた礫群が見られた。遺物はこの礫群内より石臼片が１点出土した。

出土遺物（第 65 図、図版 50）

38 は花崗岩製挽臼の上臼である。下部擦面は使用痕が見られるが、溝は深く痕跡が確認できる。上面は黒ずんだ部分が一部見られ、熱を受けた痕跡が確認できる。

時　期　石製品１点の遺物から時期の比定はし難いが、ここでは江戸時代～近代としておく。

ＳＫ24（第 66 図）

調査区北西部、ＳＫ 22・23 に近接して位置する。この遺構もＳＸ４除去後確認された。ＳＤ１に切られる。土坑の規模は、長軸 1.97 ｍ、短軸 1.10 ｍ、深さ 13 ㎝を測り、断面形状は皿状を呈する。平面形態は南北に長い不整形で、埋土は褐灰色土。遺物の出土はない。

時　期　時期を比定できる遺物はないが、ＳＫ22･23と同一層位からの検出であるとこと、同じくＳＸ４によって覆われることからＳＫ22･23とほぼ同時期と考える。

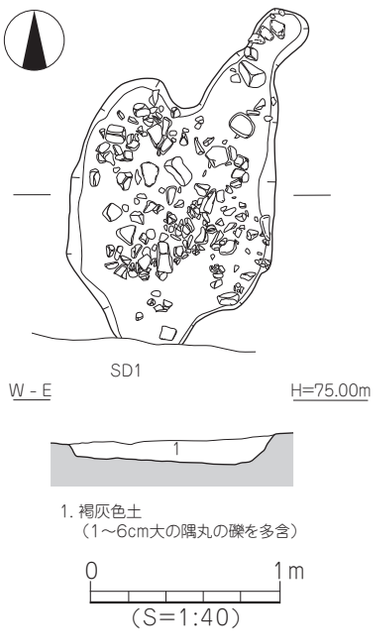
ＳＫ25（第 67 図、図版 35）

調査区南部ＳＤ９の西に位置し、ＳＤ 12を切り、ＳＭ 21に切られる。土坑の規模は、長軸 2.91m、短軸 1.50m、深さ６㎝を測り、断面形状は皿状を呈する。平面形態は不整形な方形で、埋土は暗褐色土である。遺物は埋土中より弥生土器･ 陶磁器の小破片が数点出土した。

時　期　出土遺物から江戸時代～近代と考える。

ＳＫ26（第 67 図、図版 36）

調査区南部に位置し、ＳＤ10を切る。土坑の規模は、長軸1.47m、短軸1.36m、深さ54㎝を測り、断面形状は



第 66 図　ＳＫ24 測量図

逆台形状を呈する。平面形態は円形で、埋土は暗褐色土である。遺物は埋土中より石器極小剥片が出土している。

時　期　埋土の状況から、近世～近代とする。

ＳＫ27（第 68 図、図版 37）

調査区南部、ＳＤ８とＳＤ９の間に位置する。土坑の規模は、長軸 2.00 m、短軸 1.13 m、深さ 27 ㎝を測り、断面形状は舟底状・レンズ状を呈する。平面形態は不整形で、埋土は黒褐色土である。遺物は埋土中より弥生土器・土師皿・陶磁器の皿等の小破片が数点出土した。

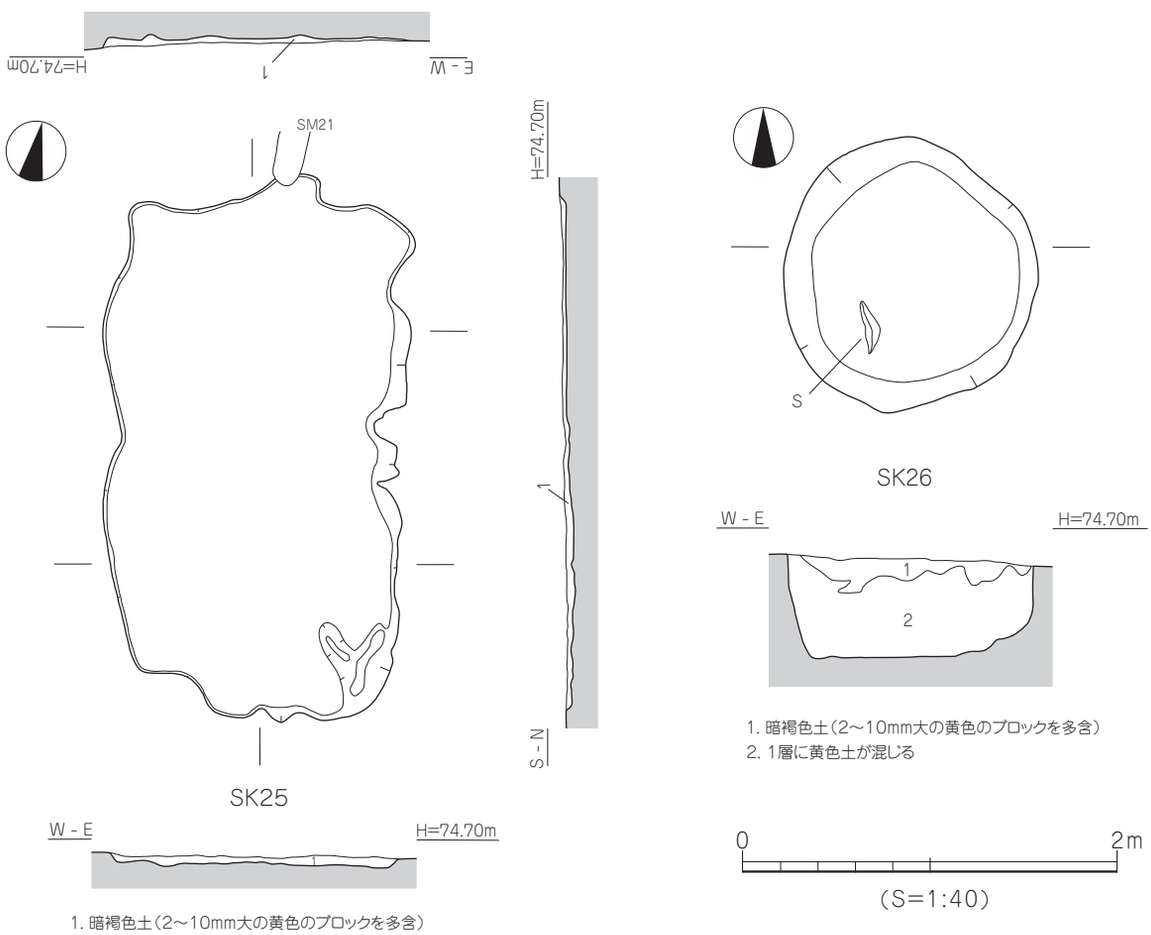
出土遺物（第 68 図、図版 49）

39 は鉄絵唐津の皿である。17 世紀中頃以降。

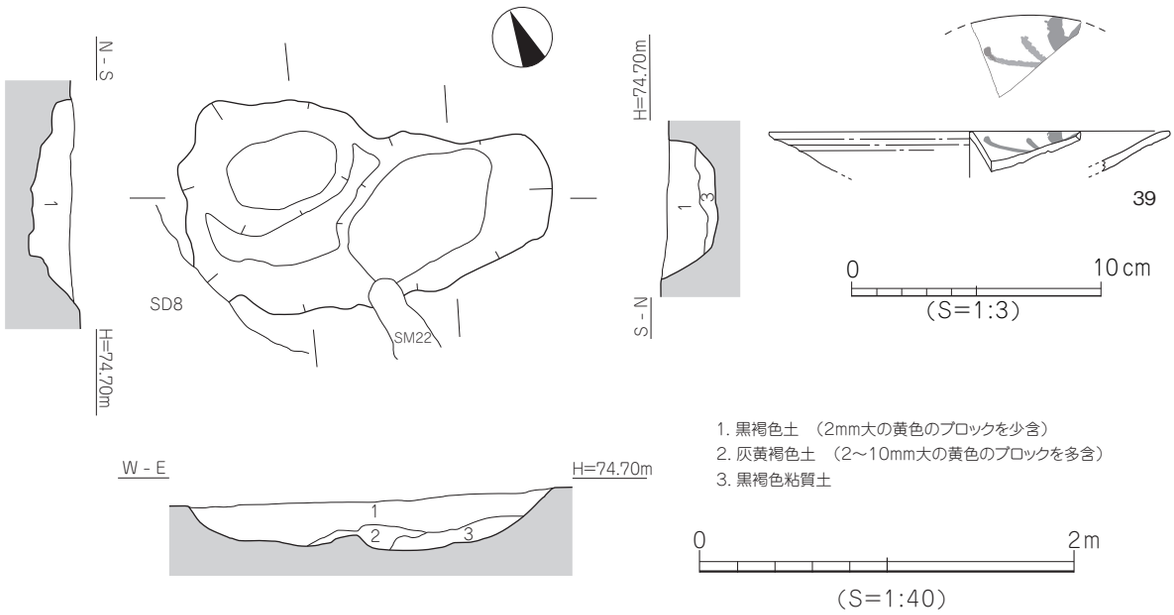
時　期　出土遺物から、江戸時代以降。

ＳＫ30（第 69 図）

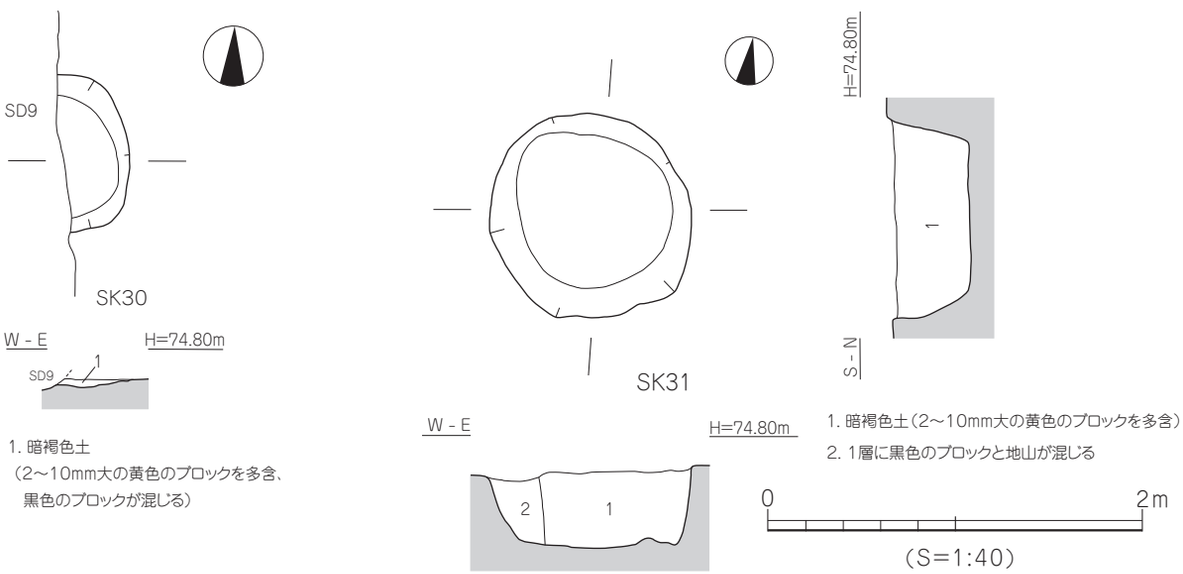
調査区南部ＳＤ 15 の南に位置しＳＤ９に切られる。土坑の規模は長軸 0.84 m、短軸 0.34 m以上、深さ４㎝内外を測り、断面形状は



第 67 図　ＳＫ 25・26 測量図



第68図　ＳＫ27測量図・出土遺物実測図



第69図　ＳＫ30・31測量図

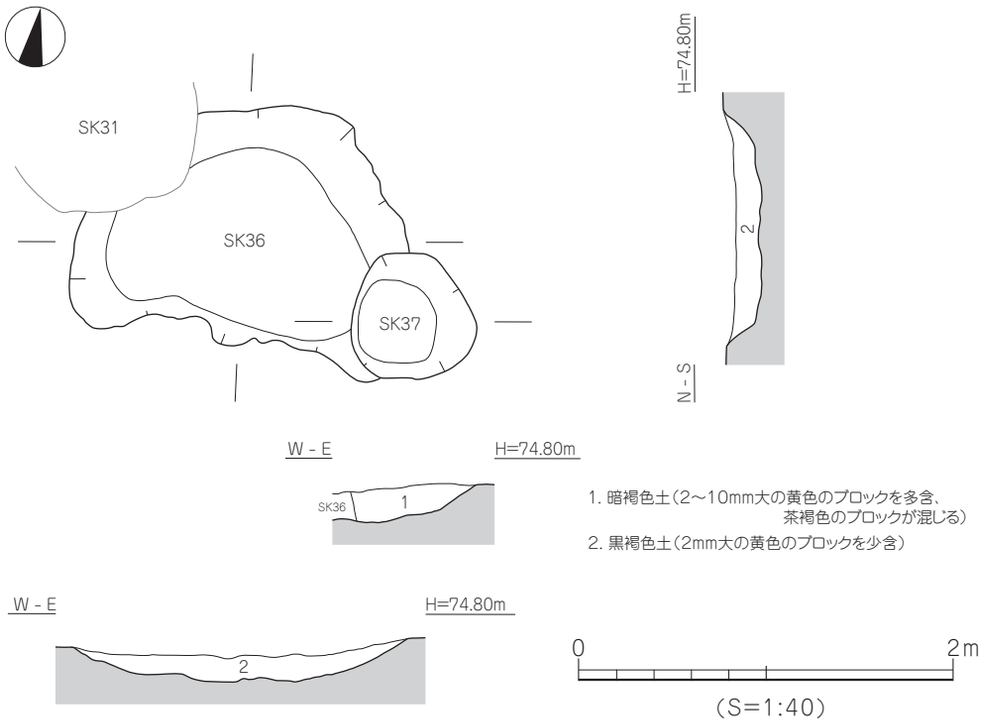
皿状を呈する。平面形態は楕円形である。埋土は暗褐色土である。遺物の出土はなかった。

時　期　遺構の時期を比定できる遺物はないが、埋土および遺構の切り合い関係、周辺遺構の状況からここでは江戸時代～近代とする。

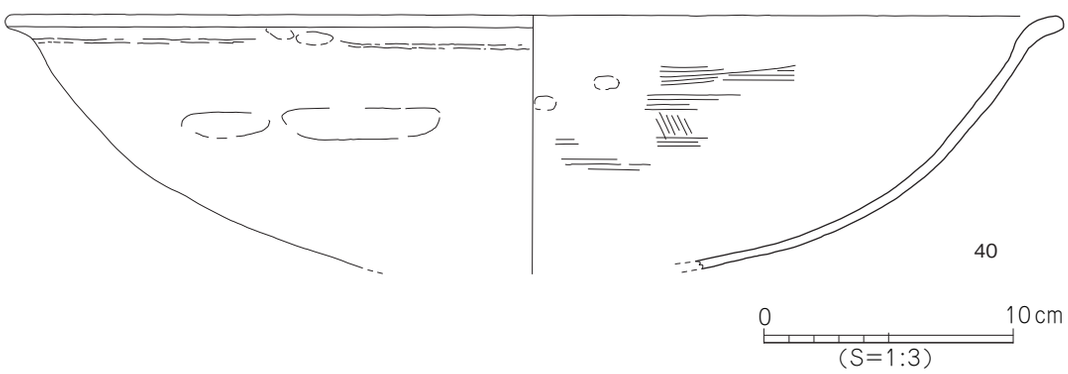
ＳＫ31（第69図、図版38・39）

調査区南部に位置し、ＳＤ10、ＳＫ36を切る。土坑の規模は、長軸1.18 m、短軸1.08 m、深さ40 cmを測り、断面形状は逆台形状を呈する。平面形態は円形である。埋土は暗褐色土である。遺物は埋土中より弥生土器・須恵器・陶磁器の胴部細片が数点出土した。

時　期　出土遺物が細片であるため詳細な時期の設定は難しいが、近世遺構のＳＫ36を切ることから遺構の時期は近世以降とする。



第 70 図　ＳＫ 36・37 測量図



第 71 図　ＳＫ 36 出土遺物実測図

ＳＫ36（第 70 図、図版 40・41）

調査区南部位置し、ＳＫ 31・37 に切られる。土坑の規模は、長軸 1.80 m、短軸 1.24 m、深さ 14 ㎝を測り、断面形状は皿状を呈する。平面形態は不整形で、埋土は黒褐色土である。遺物は埋土中より土師質の焙烙形土器が出土した。

出土遺物（第 71 図、図版 50）

40 は土師質の焙烙形土器である。口径は 42 ㎝のやや大振りで、内面には焦げ、外面には全体に煤が付着する。緩やかに立ち上がる体部に口縁部は短く屈曲する。内外面ともにナデ。

時　期　出土遺物から江戸時代と考える。

ＳＫ37（第 70 図）

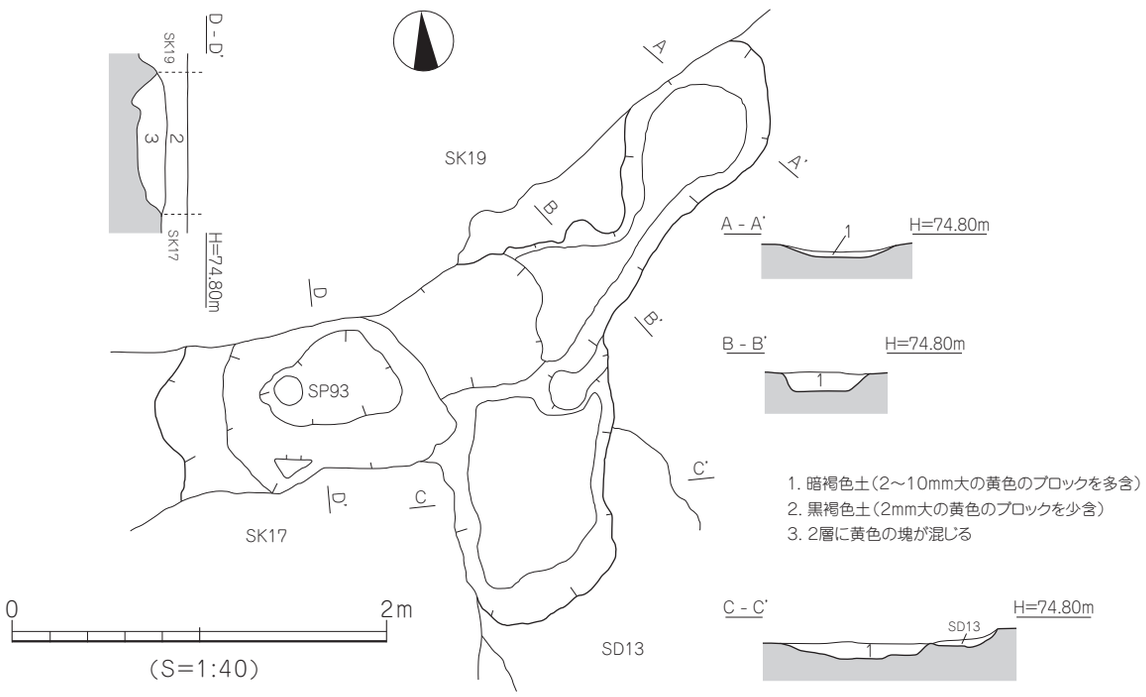
調査区南部位置し、ＳＫ 36 を切る。土坑の規模は、長軸 0.68 m、短軸 0.66 m、深さ 18 ㎝を測り、断面形状はレンズ状を呈する。平面形態は不整形で、埋土は暗褐色土である。遺物の出土はない。

時　期　ＳＫ 36 を切ることから、江戸時代～近代と考える。

ＳＫ39（第 72 図、図版 27・28）

調査区南部位置し、ＳＫ 17・19、ＳＰ 93 に切られ、ＳＤ 13 を切る。土坑の規模は、長軸 3.90 m、短軸 1.11 m、深さ 30 ㎝を測り、断面形状はレンズ状～逆台形状を呈する。平面形態は不整形で、埋土は暗褐色土である。遺物の出土はない。

時　期　ＳＫ 17・19 に切られることと埋土の状況から近世と考える。



第 72 図　ＳＫ 39 測量図

2）溝（ＳＤ）

ＳＤ１（第 73 図、図版 31）

調査区北部西に位置し、調査区を東西に走る。溝の規模は検出長 11.1m、幅 0.50 ～ 0.93m、深さ 27 ㎝ で、断面形状は逆台形状を呈する。埋土は暗褐色土で、遺物は土師器碗や陶器片が出土している。

出土遺物（第 74 図、図版 50）

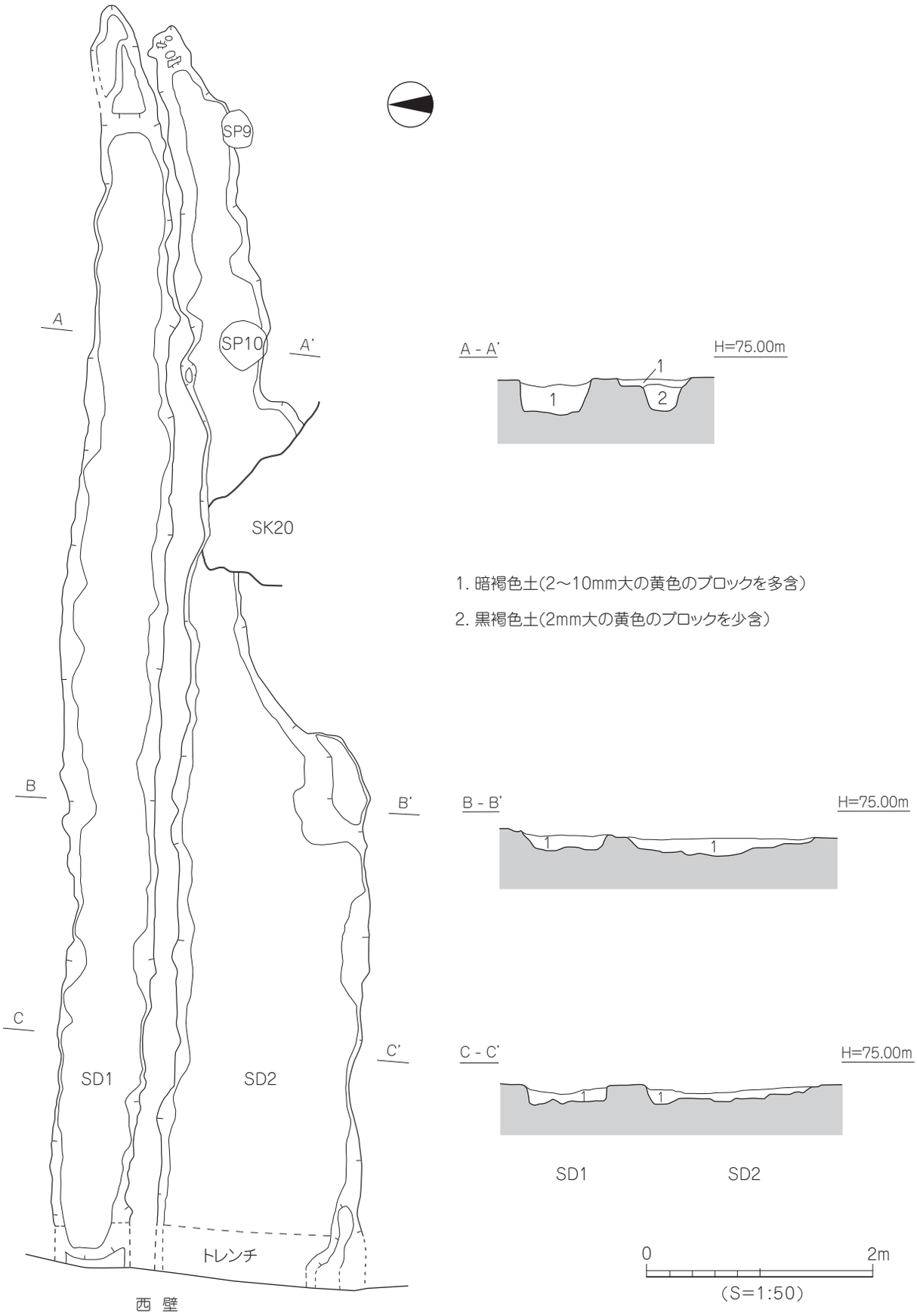
41 は陶器の口縁部片である。やや角張った玉縁が付く。42 は土師質土器底部で円盤高台。

時　期　時期を比定できる遺物が少なく詳細な時期の比定はし難いが、ここでは近世とする。

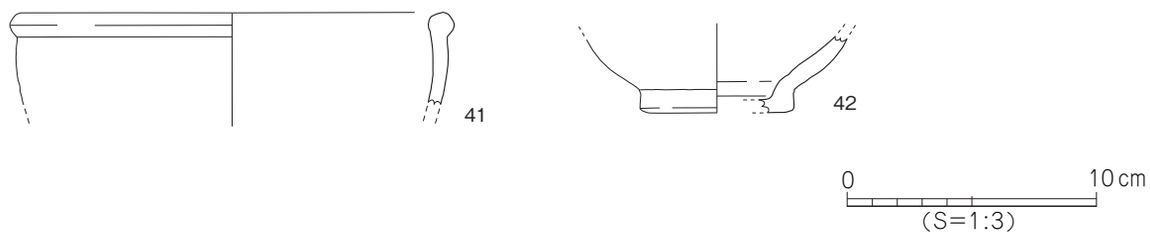
ＳＤ２（第 73 図、図版 31）

調査区北部西を東西に走るＳＤ１の南に隣接し、ＳＤ１と同様に東西方向に走る。中央部より東にむかってやや先細りながら消失する。ＳＫ 20、SP ９・10 に切られる。遺構の規模は、検出長 11.0m、幅 0.45 ～ 1.78m、深さ 28 ㎝ を測り、断面形は皿～舟底状を呈する。出土遺物は須恵器・土師器・陶器の胴部小片が出土している。ＳＤ１、ＳＤ２ともに遺構内西半に床面から拳大の円礫が多数検出されている。

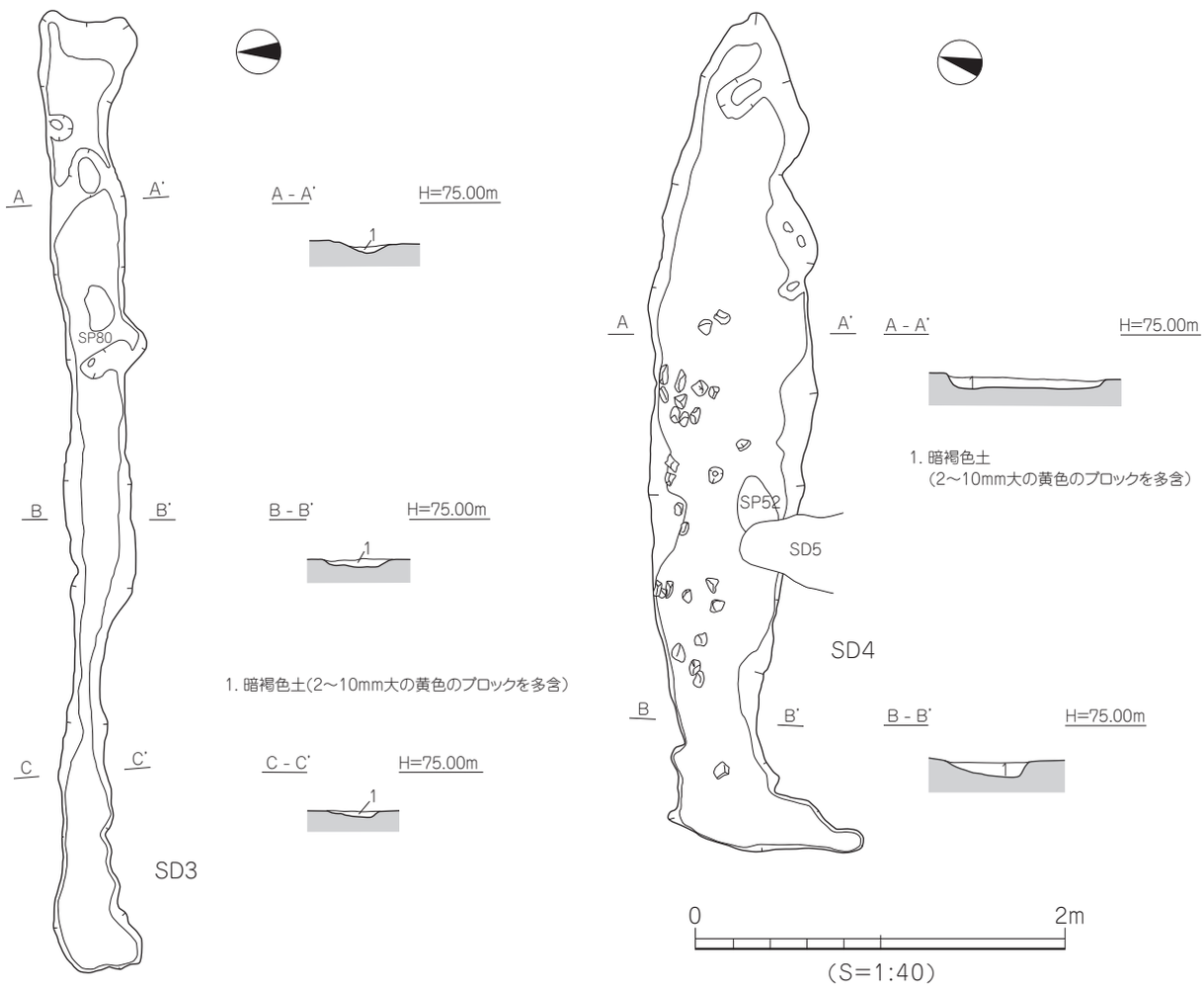
時　期　出土遺物が細片であるが、各土器の様相とＳＫ 20 に切られることから近世としておく。



第73図　ＳＤ１・２測量図



第74図　ＳＤ１出土遺物実測図



第75図　ＳＤ３・４測量図

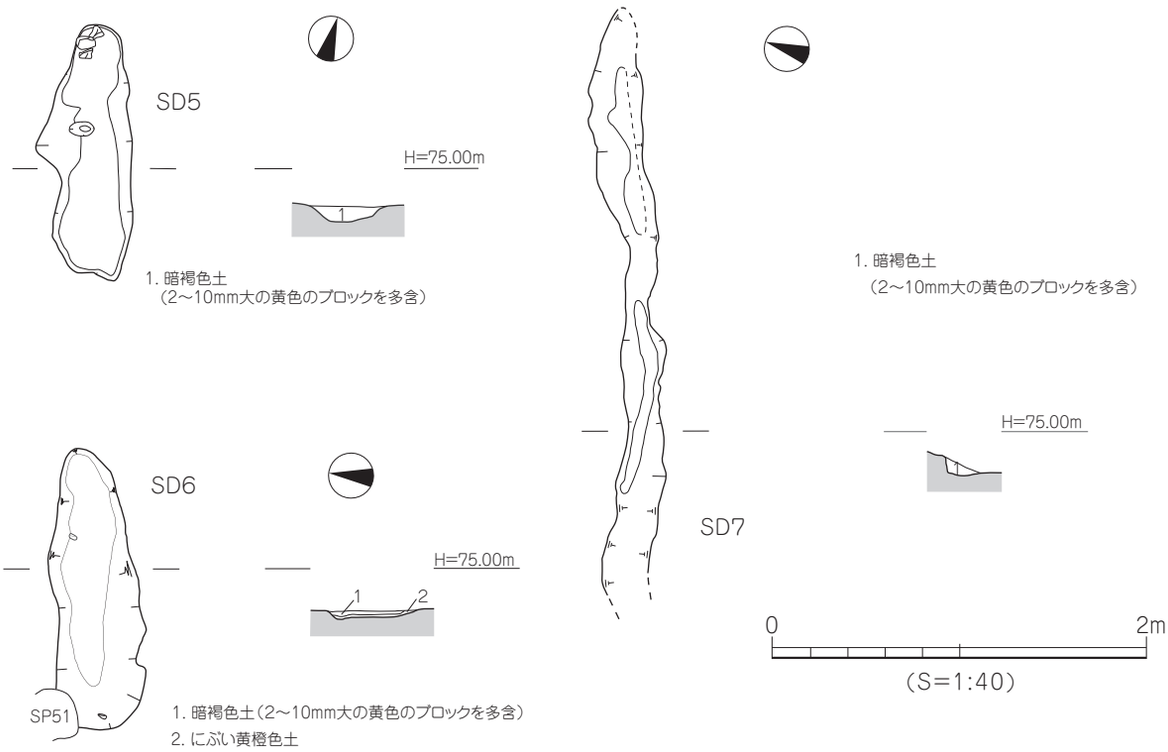
ＳＤ３（第75図）

調査区中央部を東西方向に走り、ＳＫ６を切る。遺構の規模は、検出長5.20m、幅0.14～0.50m、深さ2～4cmを測り、断面形は皿状～レンズ状を呈する。埋土は暗褐色土である。遺物の出土は見られなかった。

時　期　出土遺物はないが、ＳＫ６を切ることと埋土から近世と考える。

ＳＤ４（第75図）

調査区中央部をほぼ東西方向に走る溝で、ＳＤ５、ＳＰ52に切られ、ＳＫ７を切る。遺構の規模は、検出長4.52m、幅0.4～1.06m、深さ2～8cmを測り、断面形は皿状を呈する。埋土は暗褐色土である。出土遺物は弥生土器小片が出土している。



第76図　ＳＤ５・６・７測量図

時　期　ＳＫ７を切ることと埋土から近世と考える。

ＳＤ５（第76図）

調査区北部西を南北方向に走る短い溝である。遺構の規模は、長さ1.38m、幅0.26～0.50m、深さ8㎝を測り、断面形は逆台形状を呈する。埋土は暗褐色土である。遺物の出土は見られなかった。

時　期　時期を比定できる遺物の出土はないが、埋土から近世と考える。

ＳＤ６（第76図）

調査区北部西を東西に走る短い溝である。遺構の規模は、長さ1.50m、幅0.30～0.48m、深さ4㎝を測り、断面形は皿状を呈する。埋土は暗褐色土である。遺物の出土は見られなかった。

時　期　時期を比定できる遺物の出土はないが、埋土から近世と考える。

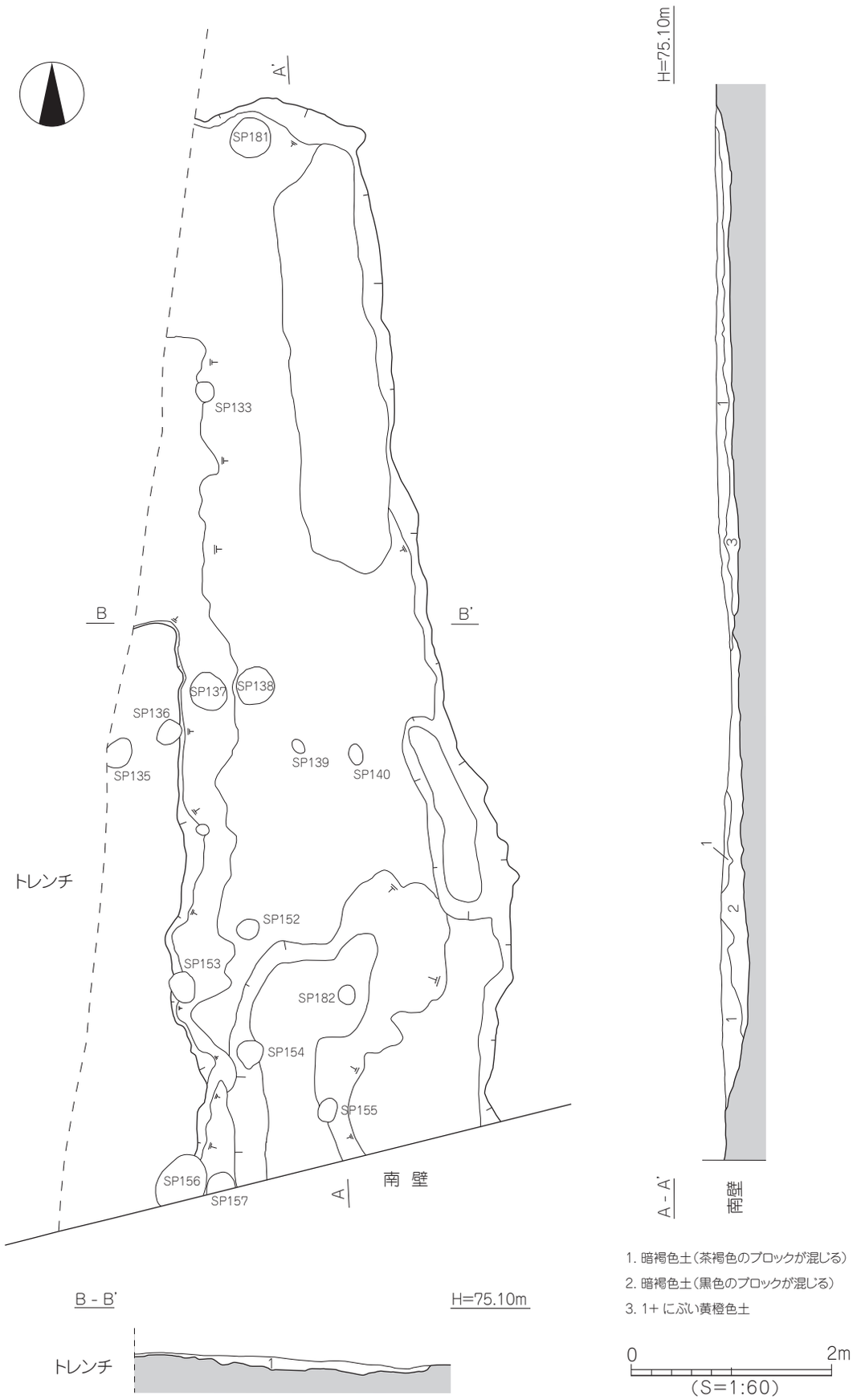
ＳＤ７（第76図）

調査区北部東に位置し、東西方向に走りながら北東部に向かい先細して消失する。遺構の規模は、検出長3.10m、幅0.12～0.30m、深さ6㎝を測り、断面形は皿状を呈する。埋土は暗褐色土である。遺物の出土は見られなかった。

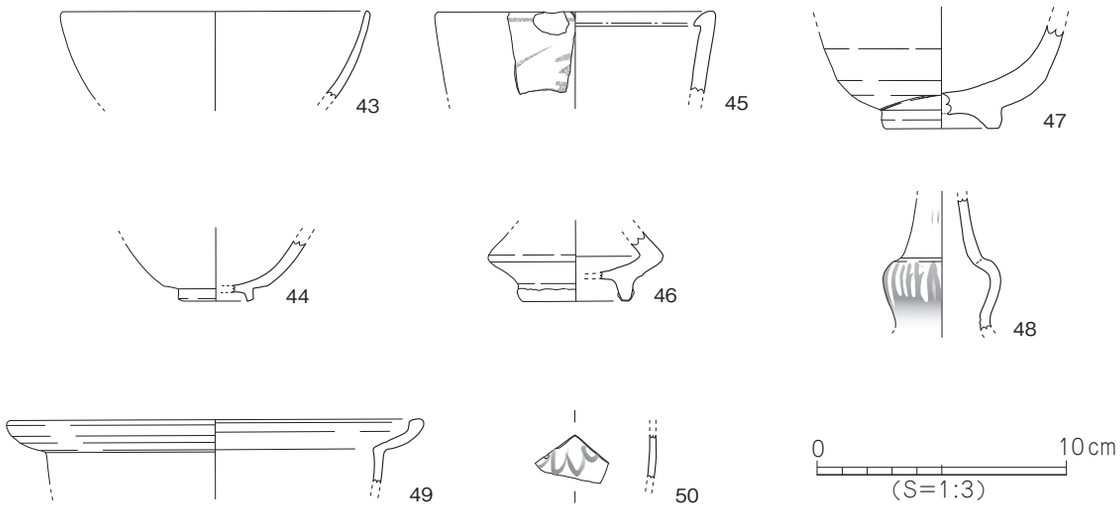
時　期　時期を比定できる遺物の出土はないが、埋土と周辺状況から近世と考える。

ＳＤ８（第77図、図版41）

調査区南西部に位置し、遺構は調査区西より南に折れ曲がり南端調査区外に延びる本遺跡で最も規模の


A'
SP181
SP133
B
B'
SP137
SP138
SP136
SP135
SP139
SP140
トレンチ
SP152
SP153
SP182
SP154
SP155
SP156
SP157
A
南 壁
H=75.10m
A - A'
南壁
1. 暗褐色土（茶褐色のブロックが混じる）
2. 暗褐色土（黒色のブロックが混じる）
3. 1+ にぶい黄橙色土
B - B'
H=75.10m
トレンチ
0
2m
（S=1:60）

第 77 図　ＳＤ８測量図



第78図　ＳＤ８出土遺物実測図

大きい溝である。規模は検出長10.6m、幅2.00～3.45m、深さ0.18m内外をはかり、南から北に６～７ｍ部分で西に屈曲し調査区外に延びる。遺構内からは陶器の碗、瓶、土鍋片等が出土している。遺構内の埋土は暗褐色土で他の溝より比較的柔らかい。

出土遺物（第78図、図版51）

43は陶器の碗である。44は京信楽系の陶器碗底部。やや黄色みを帯びた胎土に白釉。高台は露胎である。45は陶器の火吹または水入れと思われる。直行する口縁に口唇部は内方に折れ曲がる。外面は薄い灰オリーブ色に暗オリーブ色の文様。口縁部に１条の圏線が描かれる。内面は施釉は見られない。46は陶器の鬢付油壺底部～体部片である。「ハ」の字状に開く底部から体部は「く」の字状に屈曲する。内外ともに黒色の施釉がされる。47は唐津碗の底部片である。やや厚い器壁、底部を持つ。48は陶器の徳利と思われる。外面に緋襷状の痕跡が見られる。内外面とも赤褐色の胎土。頸部～胴部の残存。49は陶器の土鍋である。赤褐色の施釉。やや内傾気味の胴部に屈曲して開く口縁を持つ。端面は平らに仕上げる。50は磁器染付碗体部片と思われる。薄い青白色の胎土に文様が描かれる。

時　期　出土遺物から江戸時代～近代と考える。

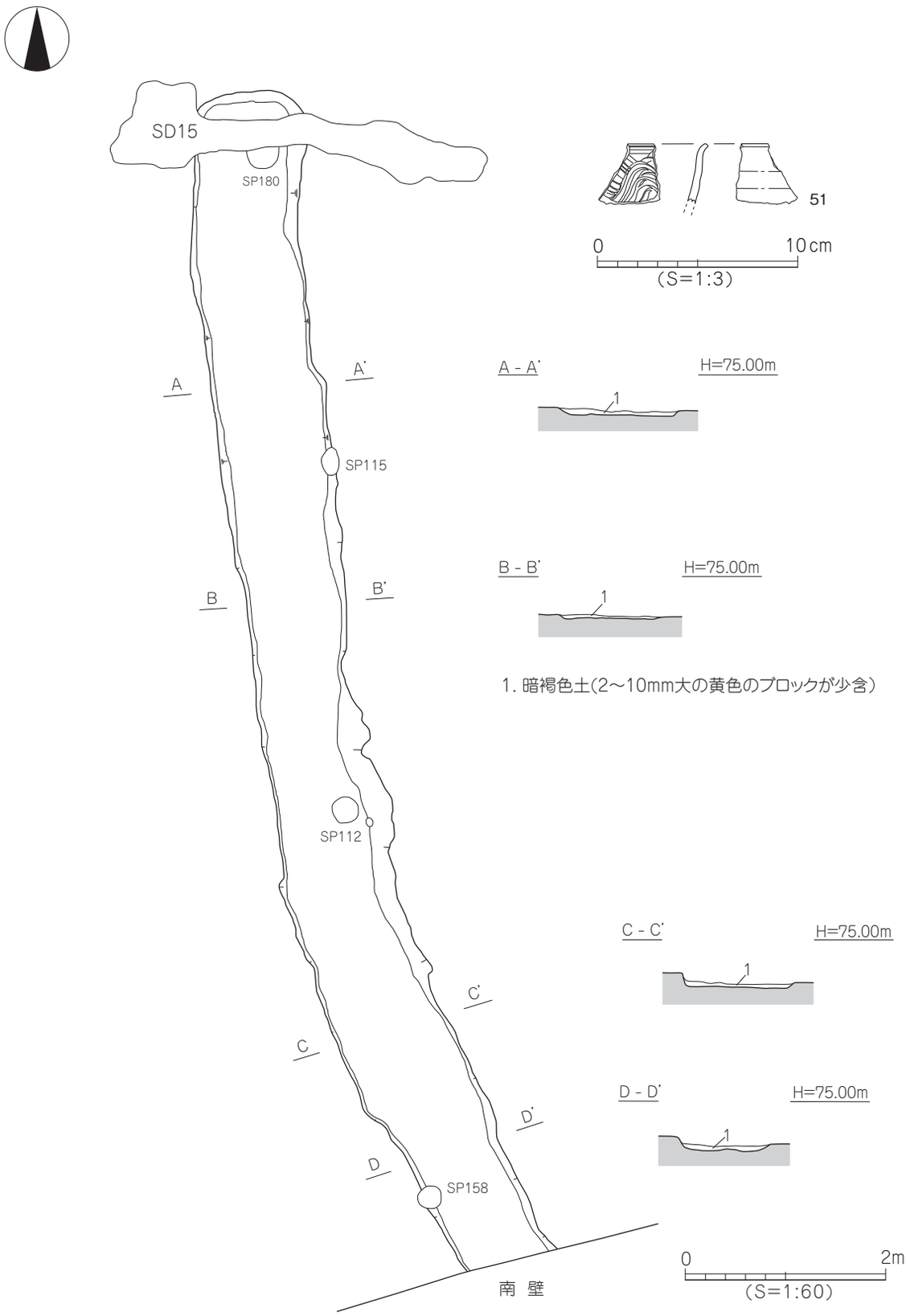
ＳＤ９（第79図、図版42）

ＳＤ９は検出長12.0m、幅0.9～1.15m、深さ0.06mを測り、埋土は暗褐色土である。断面形状はレンズ状～皿状である。東にやや湾曲しながら南北に走り、調査区外に延びる。ＳＫ30・33を切り、ＳＤ15・ＳＰ112・115・158・180に切られる。遺物は弥生土器・陶器片が出土している。この溝は、近接する溝ＳＤ10とともに調査区南部を南北方向を平行にやや東に湾曲しながら走る溝で、規模・形状・埋土・方向性からは関連があるものとも考えられる。

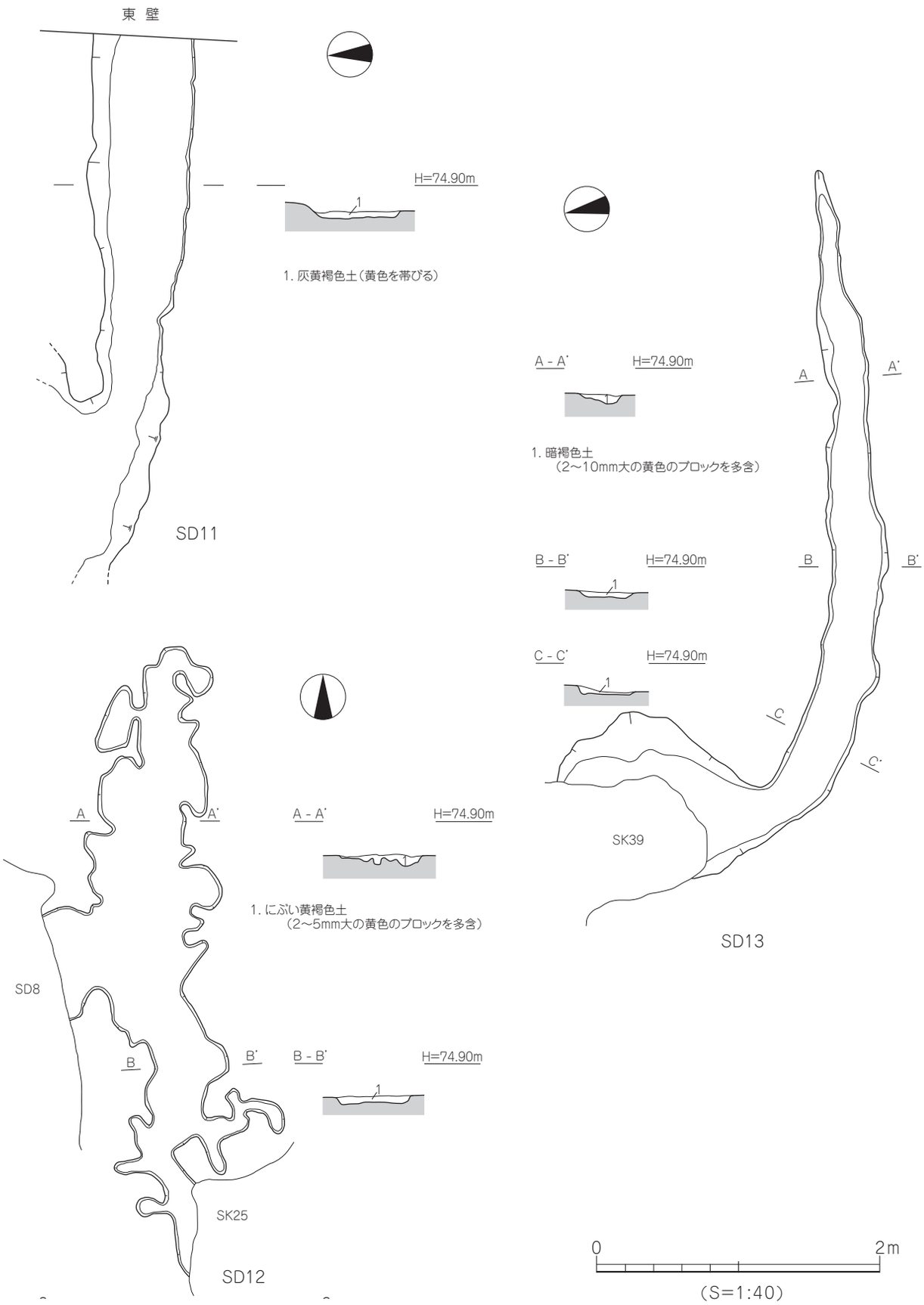
出土遺物（第79図、図版50）

51は肥前系の陶器碗または鉢の口縁部である。口縁部は緩く外方に折れ曲がる。内面は白土による刷毛目文様を施し、透明釉をかける。18世紀～19世紀。

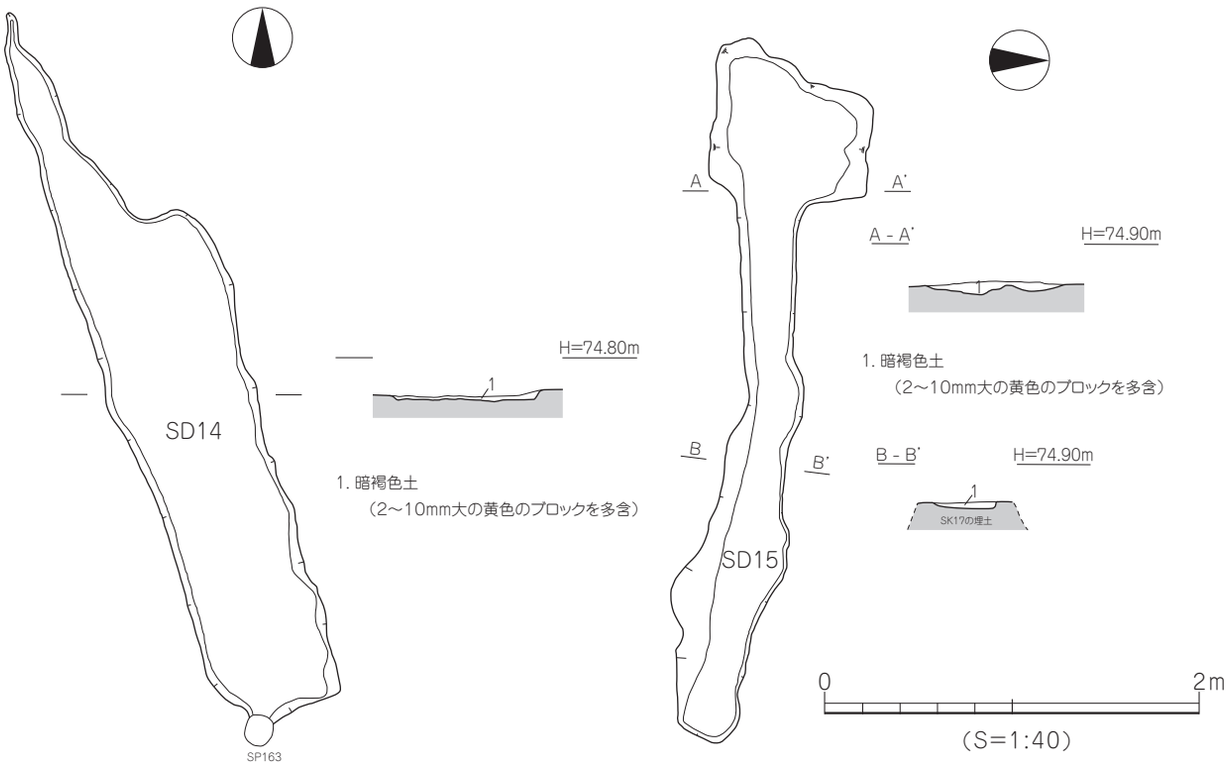
時　期　遺構の切り合い関係及び出土遺物・埋土の状況から江戸時代～近代と考える。



第 79 図　ＳＤ９測量図・出土遺物実測図



第80図　ＳＤ11・12・13測量図



第81図　ＳＤ14・15測量図

ＳＤ11（第80図、図版43）

調査区ＳＫ９・10の南に位置し、東から西に走り、北西方向に消える短い溝である。遺構の規模は、長さ3.48m、幅0.40～0.72m、深さ５㎝を測り、断面形は皿状を呈する。埋土は灰黄褐色土である。遺物は陶器胴部の細片が出土した。

時　期　出土遺物と埋土の状況から近世～近代と考える。

ＳＤ12（第80図）

調査区南部ＳＤ９とＳＤ８の間に位置し、南北方向に走る短い溝でＳＫ25とＳＤ８に切られる。平面形は不整形な溝である。遺構の規模は、長さ4.41m、幅0.20～1.10m、深さ８㎝を測り、断面形は皿～舟底状を呈する。埋土はにぶい黄褐色土である。遺物の出土は見られなかった。

時　期　層位と埋土の状況から近世～近代と考える。

ＳＤ13（第80図、図版43）

調査区中央を北から東西に屈曲しながら調査区外に走る短い溝である。遺構の規模は、長さ6.00m、幅0.15～1.00m、深さ８㎝を測り、断面形は皿状を呈する。埋土は暗褐色土である。遺物の出土は見られなかった。

時　期　層位と埋土の状況から近世～近代と考える。

ＳＤ14（第81図）

調査区南部を南北方向に走るやや幅広の溝で、北部に向かって先細る。遺構の規模は、長さ4.04m、幅

0.20 ～ 0.80m、深さ４㎝ を測り、断面形は皿状を呈する。埋土は暗褐色土である。遺物の出土は見られなかった。

時　期　層位と埋土の状況から近世～近代と考える。

ＳＤ15（第 81 図）

調査区中央ＳＫ 19 の南に位置し、東西方向に走る溝である。溝の西端部は不整形な方形を呈し、東に伸びる。遺構の規模は、長さ 3.76m、幅 0.28 ～ 0.86m、深さ７㎝ を測り、断面形はレンズ状～皿状を呈する。埋土は暗褐色土である。遺物はは陶器胴部の細片が数点出土した。

時　期　出土遺物が細片で時期比定は難しいが、埋土の状況から近世～近代と考える。

３）畝状遺構（ＳＭ）

ＳＭ１（第 83 図）

東西方向に走る溝である。遺構の規模は、長さ 0.63m、幅 0.14 ～ 0.15m、深さ２㎝ を測り、断面形は皿状を呈する。埋土は灰黄褐色土（黄色混）である。遺物は陶器胴部の細片が数点出土した。

時　期　出土遺物がなく、埋土の状況から近世～近代と考える。

第 82 図　ＳＭ（畝状遺構）配置図

ＳＭ２（第83図）

調査区南部中央に位置し、南北方向に走るごく短い畝状遺構である。遺構の規模は、長さ0.68m、幅0.10～0.14m、深さ２㎝を測り、断面形は皿状を呈する。埋土は灰黄褐色土（黄色混）である。遺物の出土は見られなかった。

時　期　出土遺物がなく、埋土の状況から近世～近代と考える。

ＳＭ４（第83図）

調査区南部東部に位置し、東西方向に走るごく短い畝状遺構である。遺構の規模は、長さ0.47m、幅0.09～0.11m、深さ２㎝を測り、断面形は皿状を呈する。埋土は灰黄褐色土（黄色混）である。遺物の出土は見られなかった。

時　期　出土遺物がなく、埋土の状況から近世～近代と考える。

ＳＭ５（第83図）

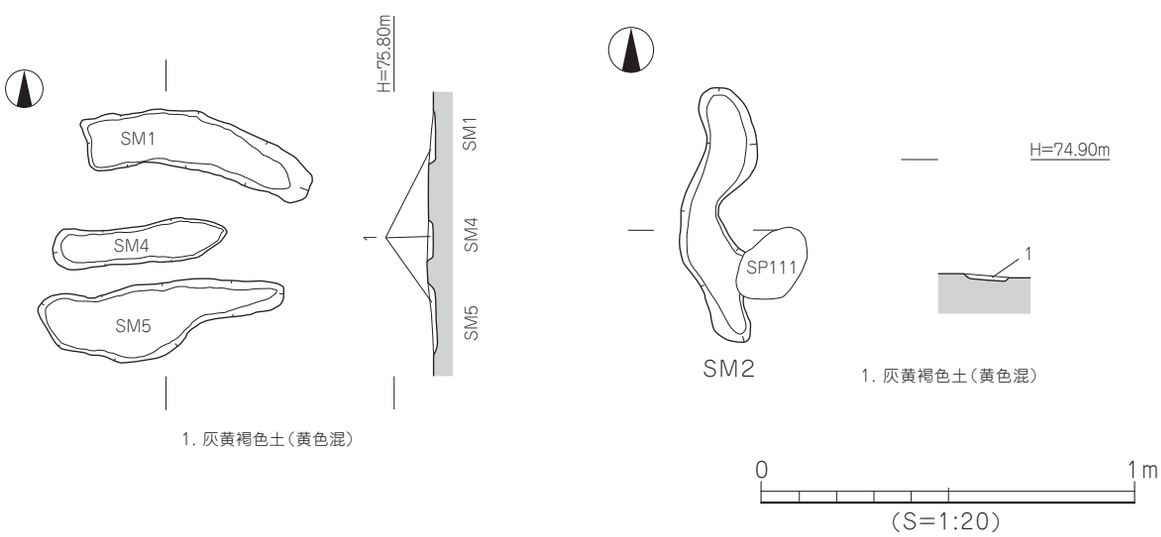
調査区南部東部に位置し、東西方向に走るごく短い畝状遺構で、ＳＭ１・４・５は近接する。遺構の規模は、長さ0.61m、幅0.08～0.20m、深さ2.5㎝を測り、断面形は皿状を呈する。埋土は灰黄褐色土（黄色混）である。遺物の出土は見られなかった。

時　期　出土遺物がなく、埋土の状況から近世～近代と考える。

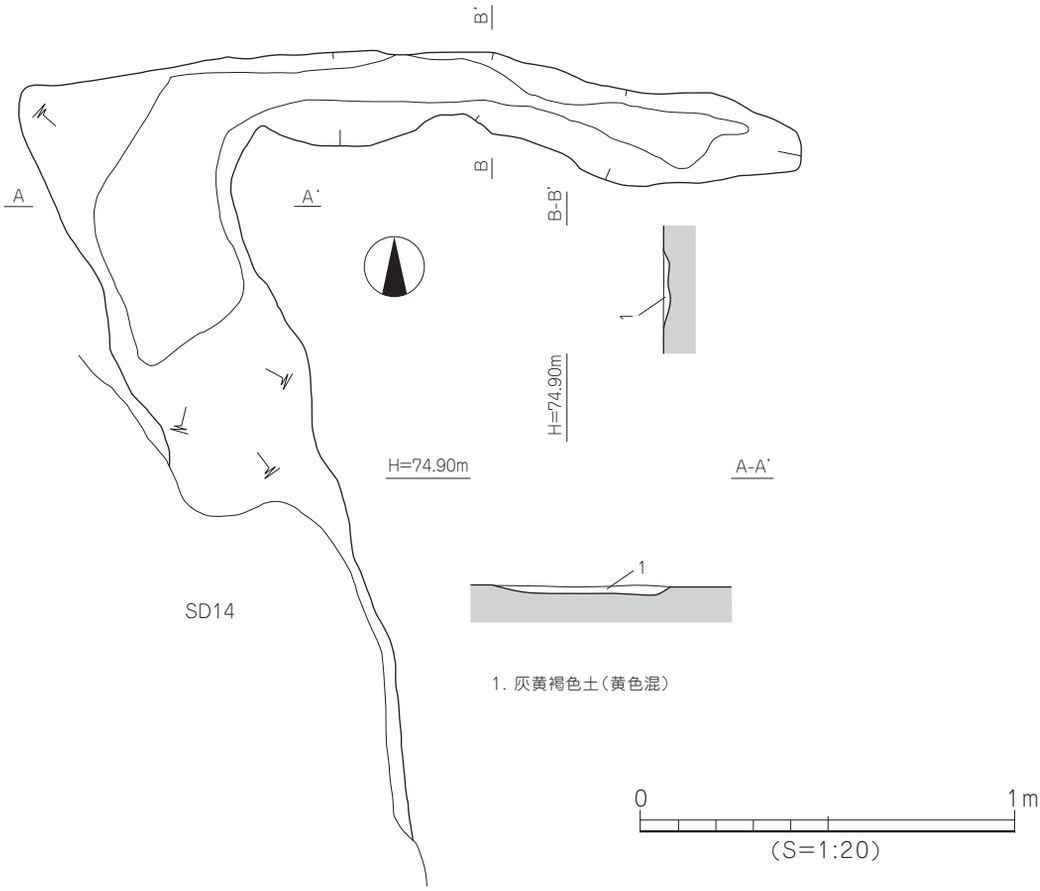
ＳＭ８（第84図）

調査区南部やや中央に位置しＬ字状に走り、南部で消失する。遺構の規模は、長さ2.06m、幅0.17～0.50m、深さ3.5㎝測り、断面形はレンズ状～皿状を呈する。埋土は灰黄褐色土（黄色混）である。遺物の出土は見られなかった。

時　期　出土遺物がなく、埋土の状況から近世～近代と考える。



第83図　ＳＭ（畝状遺構）測量図（１）



第84図　ＳＭ８（畝状遺構）測量図

ＳＭ10（第85図）

調査区南部東に位置し、東西方向に走る短い畝状遺構である。遺構の規模は、長さ1.56m、幅0.22～0.35m、深さ７㎝を測り、断面形は皿状を呈する。埋土は灰黄褐色土（黄色混）である。遺物の出土は見られなかった。

時　期　出土遺物がなく、埋土の状況から近世～近代と考える。

ＳＭ11（第86図）

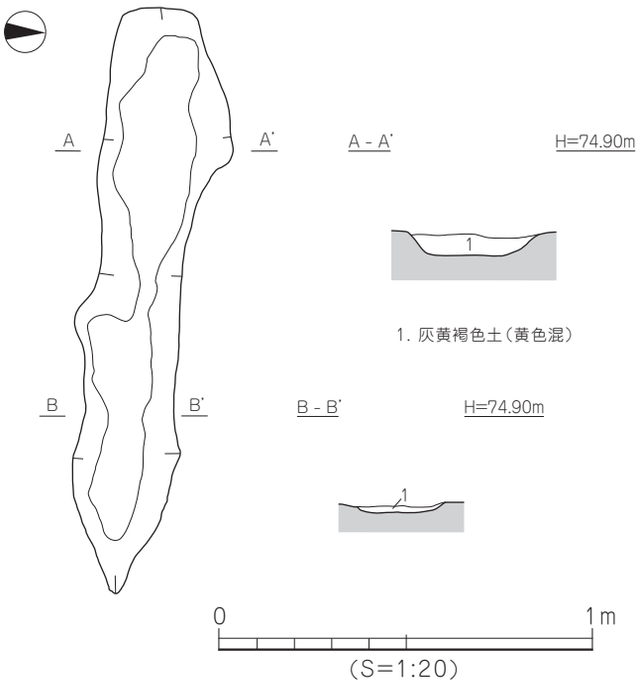
調査区南部東、ＳＭ10の南に位置し東西方向に走る短い畝状遺構である。遺構の規模は、長さ1.60m、幅0.22～0.35m、深さ５㎝を測り、断面形は皿状を呈する。埋土は灰黄褐色土（黄色混）である。遺物の出土は見られなかった。

時　期　出土遺物がなく､埋土の状況から近世～近代と考える。

ＳＭ12（第86図）

調査区南部東、ＳＭ11の南に位置し東西方向に走る。遺構の規模は、長さ1.69m、幅0.20～0.28m、深さ6.6㎝を測り、断面形はレンズ状を呈する。埋土は灰黄褐色土（黄色混）である。遺物の出土は見られなかった。

時　期　出土遺物がなく、埋土の状況から近世～近代と考える。



第85図　SM10（畝状遺構）測量図

SM13（第86図）

調査区南部東、SM 12の南に位置し東西方向に走る。遺構の規模は、長さ 1.93m、幅 0.18～ 0.58m、深さ5cm を測り、断面形は皿状を呈する。埋土は灰黄褐色土（黄色混）である。遺構中央部～西端にかけて幅広くなる。遺物の出土は見られなかった。

時　期　出土遺物がなく、埋土の状況から近世～近代と考える。

SM14（第86図）

調査区南部東、SM 13の南に位置し東西方向に走るごく短い畝状遺構である。遺構の規模は、長さ 0.96m、幅 0.07 ～ 0.23m、深さ３cm を測り、断面形は不定形である。埋土は灰黄褐色土（黄色混）である。遺物の出土は見られなかった。

時　期　出土遺物がなく、埋土の状況から近世～近代と考える。

SM15（第86図）

調査区南部東、SM 13の南に近接し東西方向に走る。遺構の規模は、長さ 1.56m、幅 0.03 ～ 0.16m、深さ 1.5 cmを測り、断面形はレンズ状を呈する。埋土は灰黄褐色土（黄色混）である。遺物の出土は見られなかった。

時　期　出土遺物が細片で埋土から近世～近代と考える。

SM16（第87図、図版43）

調査区南東部隅SM 14の南に位置し東西方向に走る。遺構の規模は、検出長 1.45m、幅 0.19 ～ 0.25m、深さ 5.6 cmを測り、断面形は変形皿状を呈する。埋土は灰黄褐色土（黄色混）である。遺物の出土は見られなかった。

時　期　出土遺物が細片で埋土から近世～近代と考える。

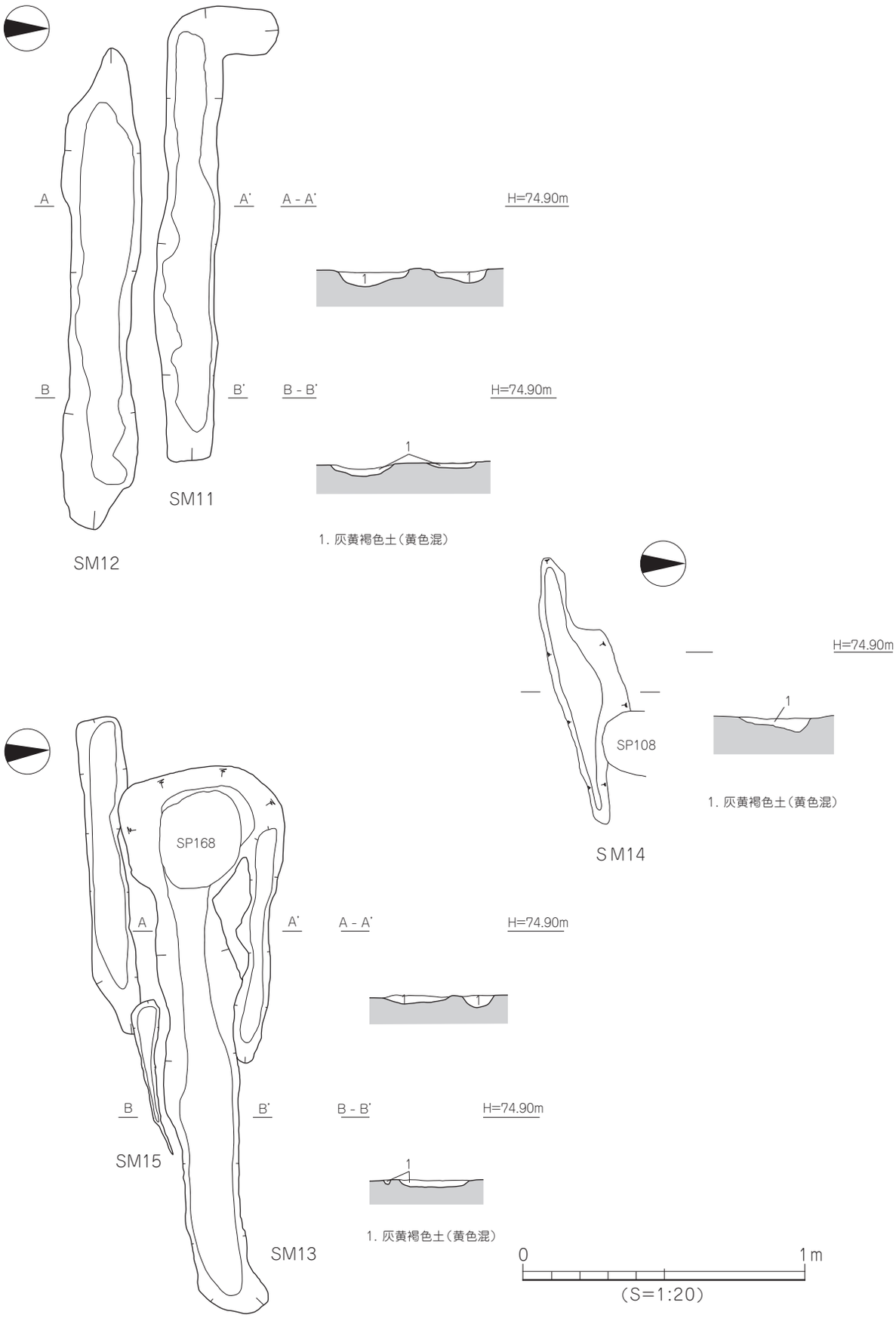
SM17（第87図、図版43）

調査区南東部隅SM 16の南に位置し東西方向に走る。遺構の規模は、検出長 1.10m、幅 0.20 ～ 0.26m、深さ 7.6 cmを測り、断面形はU字状を呈する。埋土は灰黄褐色土（黄色混）である。遺物の出土は見ない。

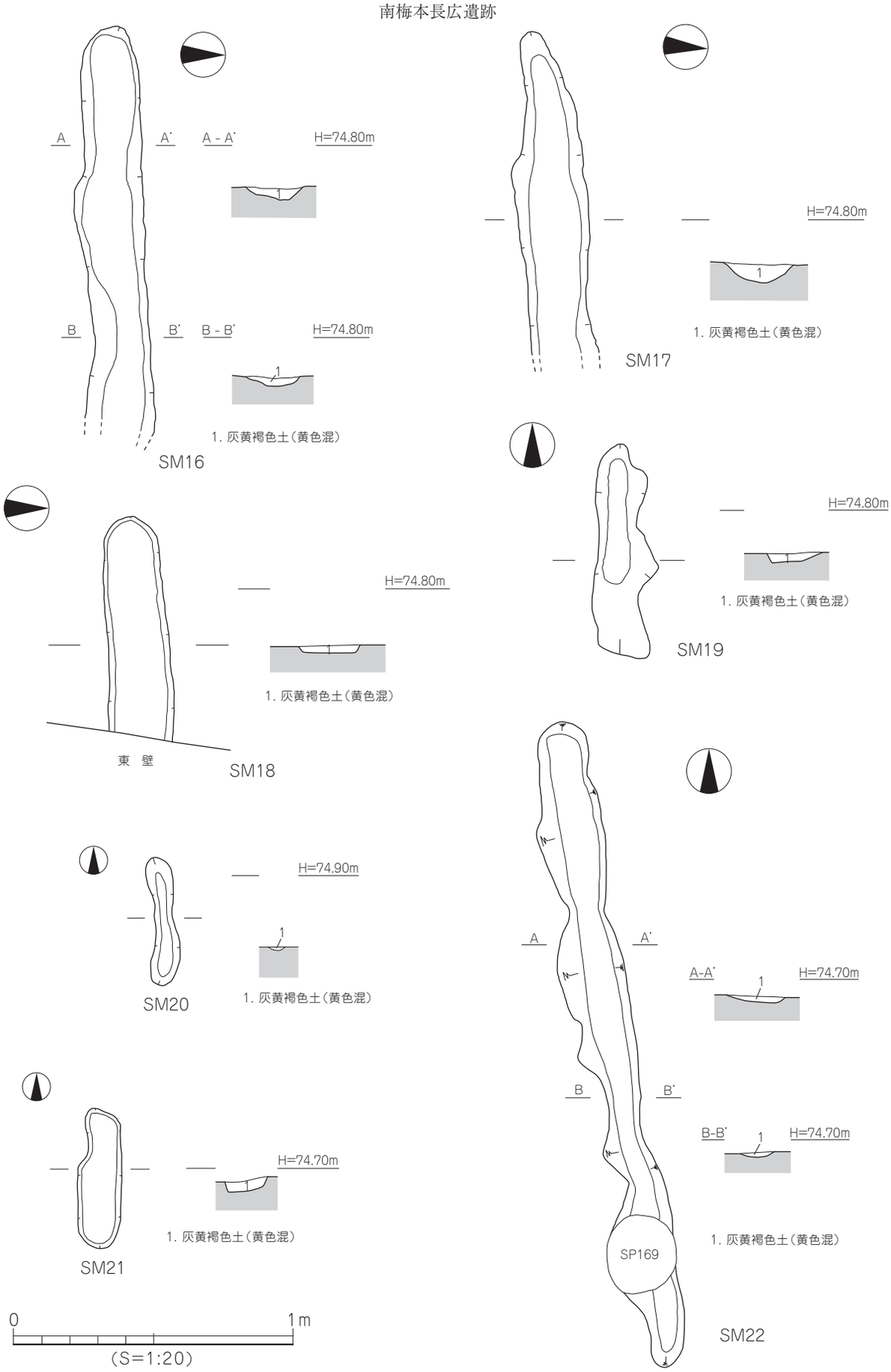
時　期　出土遺物が細片で埋土から近世～近代と考える。

SM18（第87図、図版43）

調査区南東部隅SM 17の南に位置し東西方向に走る。遺構の規模は、検出長 0.80m、幅 0.21 ～ 0.23m、



第 86 図　ＳＭ（畝状遺構）測量図（2）



第87図　SM（畝状遺構）測量図（3）

深さ5.3㎝を測り、断面形は皿状を呈する。埋土は灰黄褐色土(黄色混)である。遺物の出土は見られなかった。

時　期　出土遺物が細片で埋土から近世～近代と考える。

ＳＭ19（第87図）

調査区南部SM ８の南に位置し南北方向に走る。遺構の規模は、長さ0.77m、幅0.14 ～0.22m、深さ4.5㎝を測り、断面形は逆台形状状を呈する。埋土は灰黄褐色土（黄色混）である。遺物の出土はない。

時　期　出土遺物が細片で埋土から近世～近代と考える。

ＳＭ20（第87図）

調査区南部SM ８の南に位置し南北方向に走るごく短い遺構である。遺構の規模は、長さ0.46m、幅0.6 ～ 0.10m、深さ1.2㎝を測り、断面形はレンズ状を呈する。埋土は灰黄褐色土（黄色混）である。遺物の出土は見られなかった。

時　期　出土遺物が細片で埋土から近世～近代と考える。

ＳＭ21（第87図）

調査区南部やや西に位置し南北方向に走るごく短い遺構である。遺構の規模は、長さ0.50m、幅0.11 ～ 0.16m、深さ５㎝を測り、断面形は逆台形状を呈する。埋土は灰黄褐色土（黄色混）である。遺物の出土は見られなかった。

時　期　出土遺物が細片で埋土から近世～近代と考える。

ＳＭ22（第87図）

調査区南部に位置し南北方向に走るやや長い遺構である。遺構の規模は、長さ2.33m、幅0.11 ～ 0.24m、深さ4.5㎝を測り、断面形は皿状を呈する。埋土は灰黄褐色土（黄色混）である。遺物の出土は見られなかった。

時　期　出土遺物が細片で埋土から近世～近代と考える。

これらの畝状遺構のうち、位置関係から三つのグループに分けられる。第一はSM １・４・５、第二はＳＭ８・11・13、第三はＳＭ14・16・17・18である。ただし、埋土の状況から時期的な差はあまりないと思われる。

４）柱穴（ＳＰ）

SP15（第88図）

調査区北部東ＳＫ５の南に位置する。遺構の規模は、長径23㎝、短径21㎝、深さ32㎝を測り、平面形態は楕円形である。埋土は暗褐色土である。遺物は陶器片が出土した。

出土遺物（第93図、図版51）

52は染め付けの広東碗である。やや高めの高台に開き気味に直線的な体部を持つ。外面の文様は不詳。内面に１条の圏線が巡る。波佐見。18世紀～ 19世紀。

時　期　出土遺物から近世～近代と考える。

SP57（第88図）

調査区中央部ＳＫ８の南に位置する。遺構の規模は、長径 41 ㎝、短径 32 ㎝、深さ 32 ㎝を測り、平面形態は円形～楕円形である。埋土はにぶい黄褐色土である。遺物は陶器碗の破片などが出土した。

出土遺物（第 93 図、図版 51）

53 は京焼系の碗である。内外ともに黄橙色の胎土に透明釉を施す。外面は灰白色の発色が見られる。

時　期　出土遺物から近世と考える。

SP67（第89図）

調査区中央部ＳＫ８の南に位置する。遺構の規模は、長径 36 ㎝、短径 32 ㎝、深さ 32 ㎝を測り、平面形態は楕円形である。埋土は暗褐色土である。遺物は埋土中より焙烙片が出土した。

出土遺物（第 93 図、図版 51）

54 は土師質焙烙の口縁部片。ゆるく折れ曲がり下垂する口縁。１孔のみ残存の内耳をもつ。

時　期　出土遺物から近世～近代と考える。

SP92（第89図）

調査区中央ＳＫ 17 内の北西隅に位置する。遺構の規模は、長径 29 ㎝、短径 22 ㎝、深さ 18 ㎝を測り、平面形態は楕円形である。埋土は暗褐色土である。遺物は埋土中より陶器片が出土した。

出土遺物（第 93 図、図版 51）

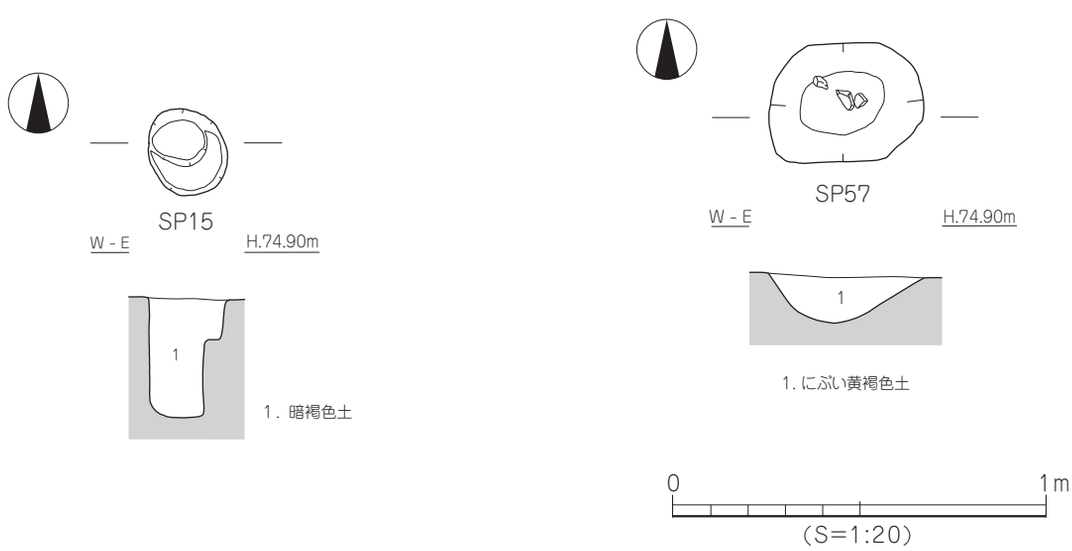
55 は陶器甕形土器の胴部片。外面は暗褐色の施釉に乳白色の釉が見られる。内面は褐色の施釉で横方向の荒い削り痕を残す。

時　期　出土遺物から近世～近代と考える。

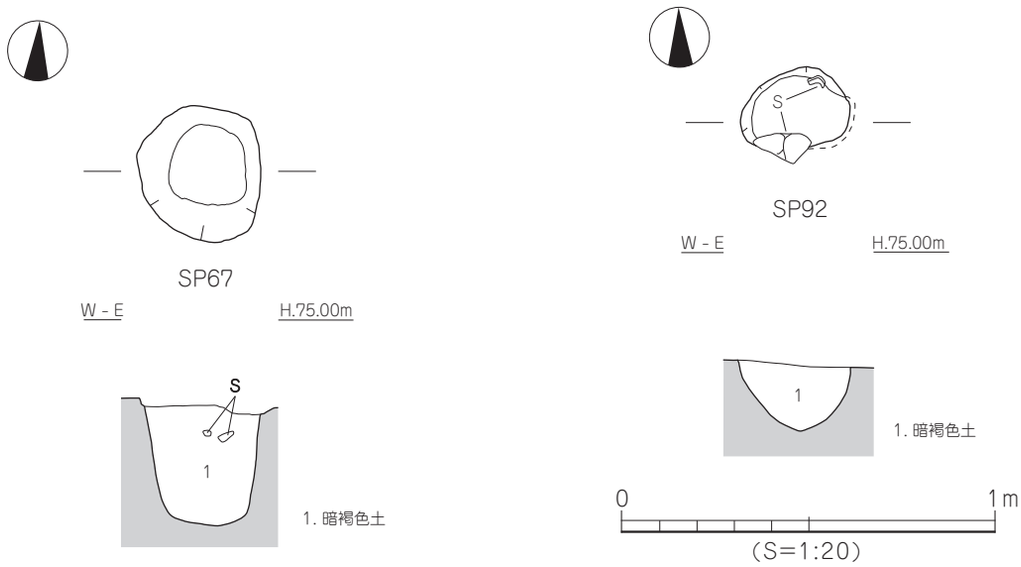
５）性格不明遺構（ＳＸ）

ＳＸ２（第91 図）

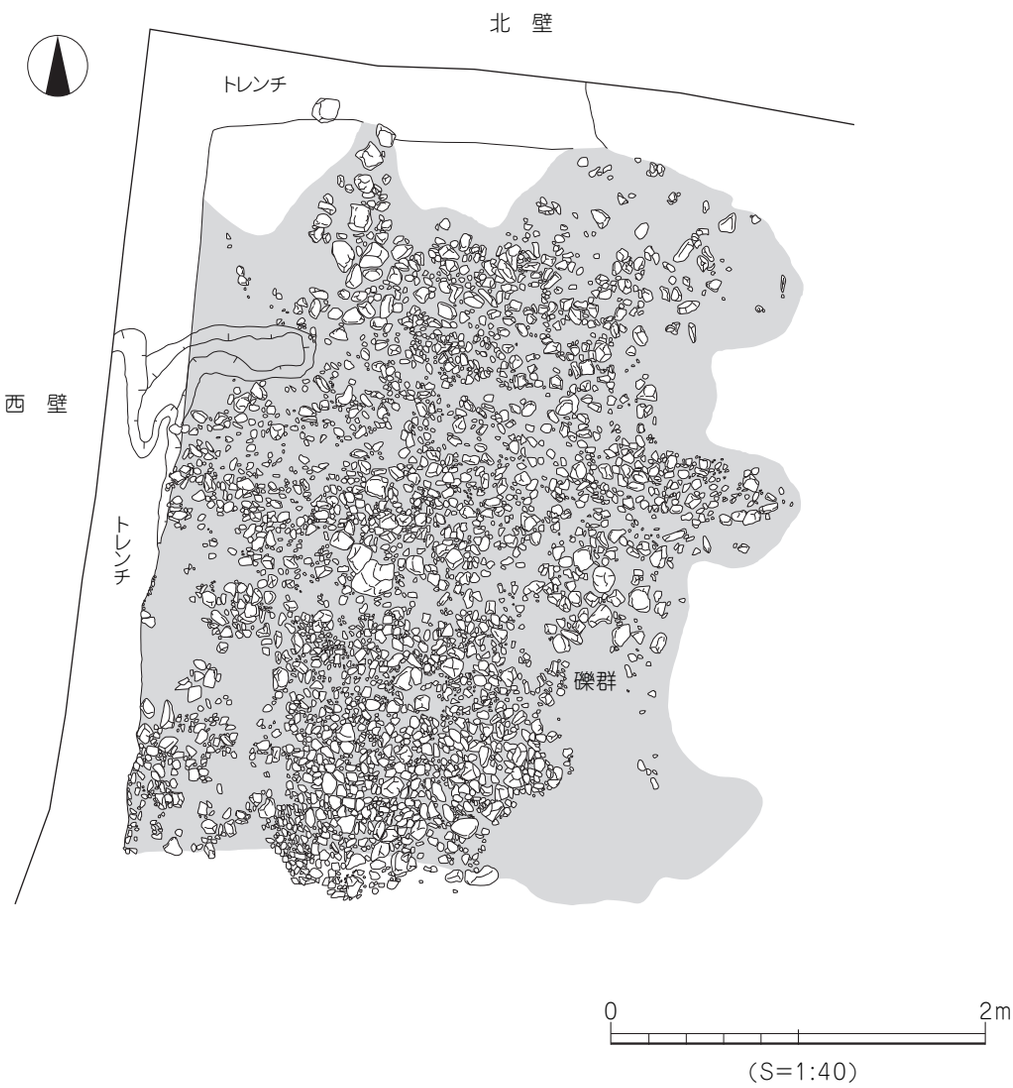
調査区中央西に位置し、規模は2.20 ｍ×2.18 ｍで平面形は不整形である。断面形状は舟底状で、埋土は暗褐



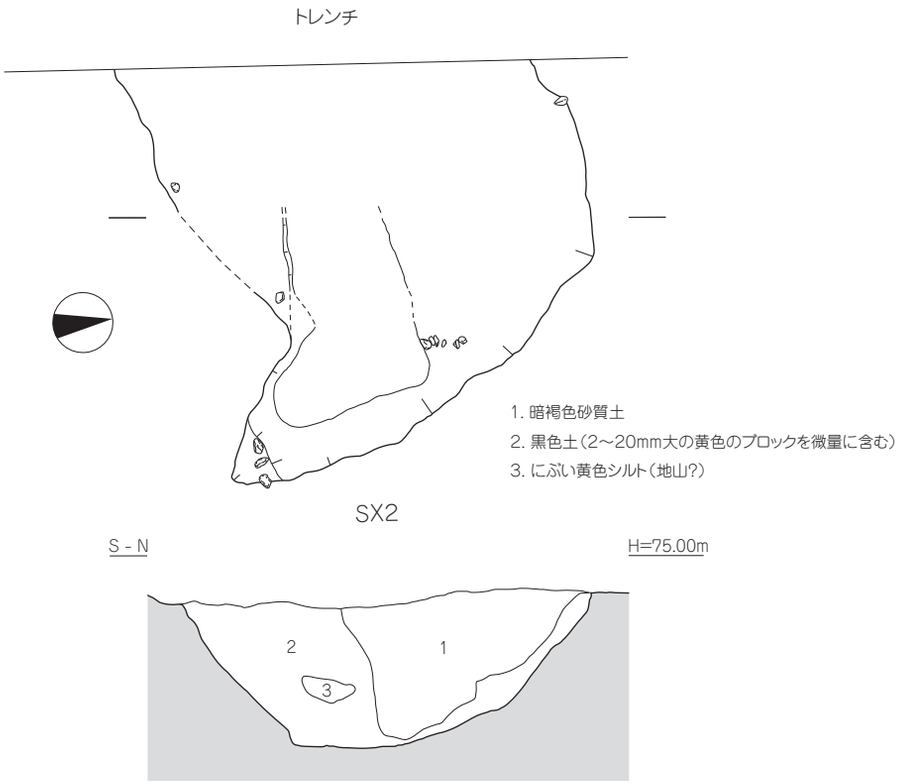
第 88 図　ＳＰ 15・57 測量図

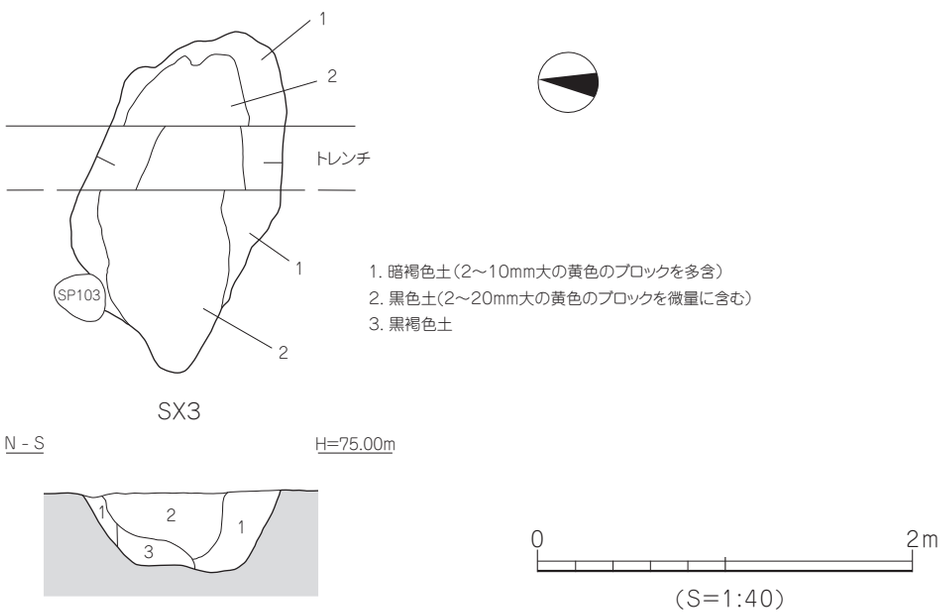


第 89 図　ＳＰ 67・92 測量図

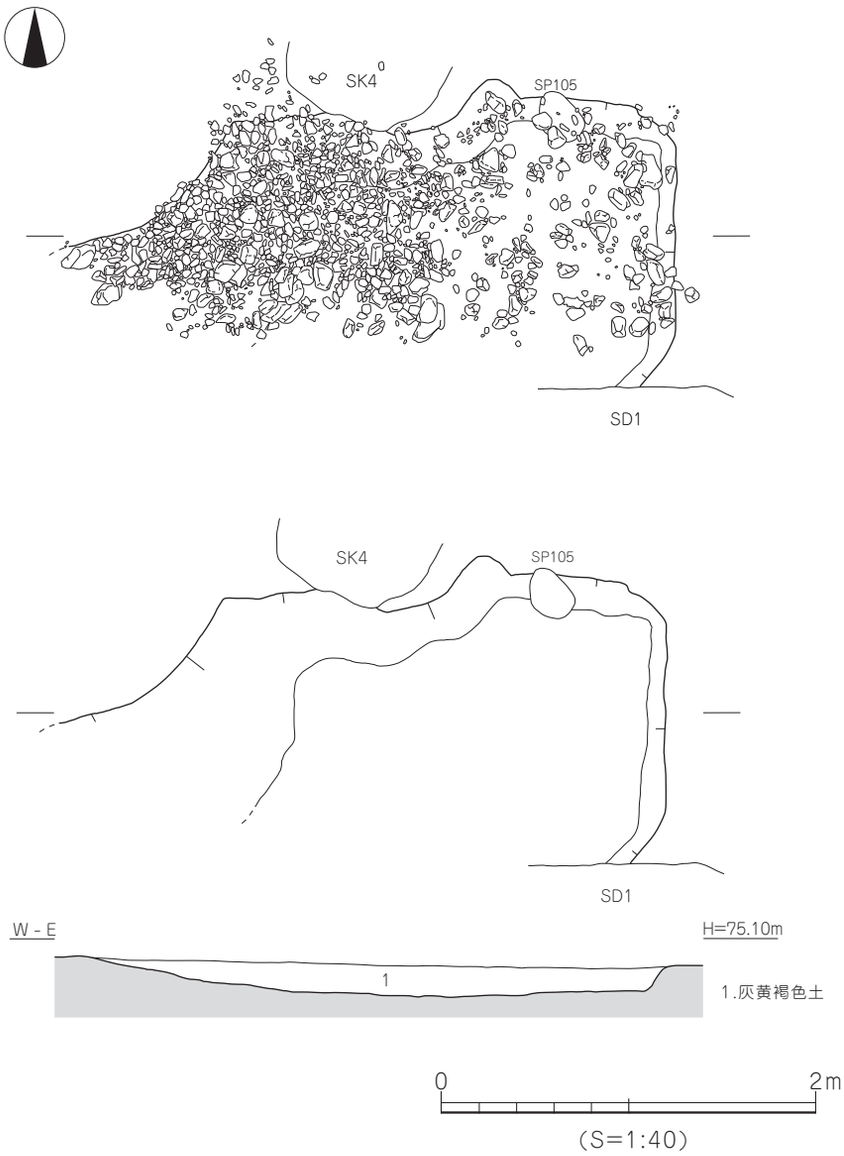


第 90 図　ＳＸ４測量図





第91図　ＳＸ２・３測量図



第92図　ＳＸ５測量図

色砂質土、黒色土、にぶい黄色シルト（地山?）である。遺物の出土はない。断面観察から、おそらくは倒木痕と考えられる。

時　期　時期の比定できる遺物の出土はないが、埋土の状況から近世～近代と考える。

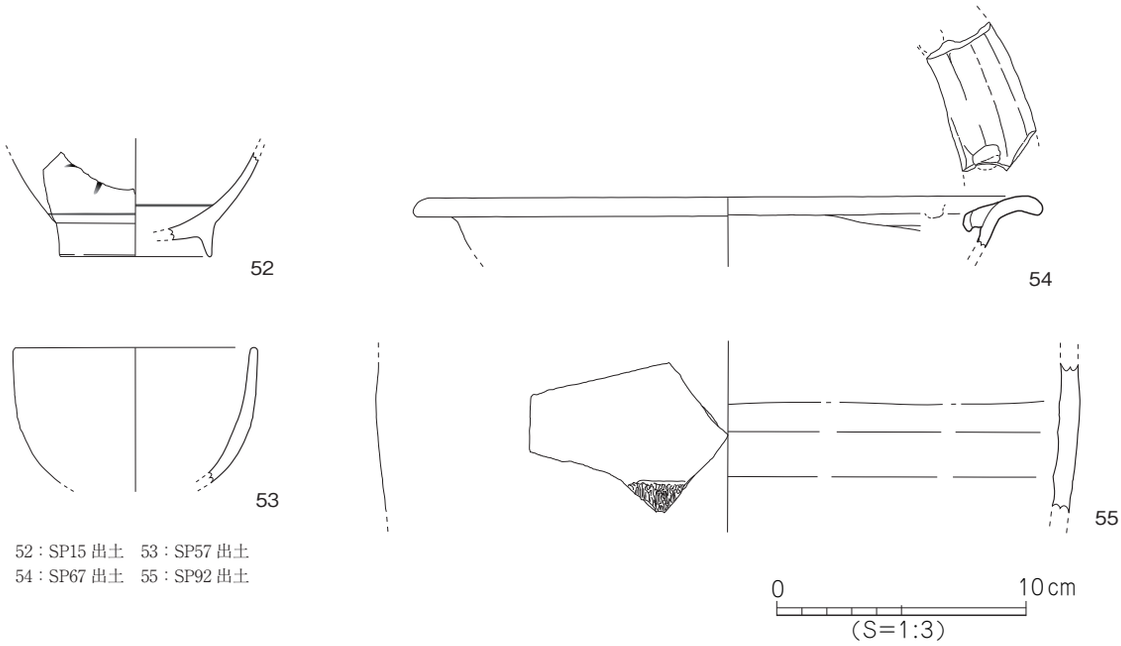
ＳＸ３（第91図）

調査区中央に位置し、遺構の規模は、長軸1.74ｍ、短軸1.05m、深さ42㎝を測り、平面形状は不整形である。断面形状は逆台形状を呈する。埋土は暗褐色土、黒色土、黒褐色土である。遺物の出土は見られなかった。断面観察から、おそらくは倒木痕と考えられる。

時　期　時期を比定できる遺物の出土もなく、時期の比定はし難いが、埋土の状況から近世～近代とする。

ＳＸ４（第90図、図版29）

ＳＸ４は調査区北西に位置し、規模は約４ｍ×約3.8ｍの不整形な形状を呈した礫群が分布する遺構であ



第 93 図　ＳＰ 15・57・67・92 出土遺物実測図

る。礫はほとんどが玉砂利状の小石で、深さは15 ㎝～ 20 ㎝程度で堆積している。遺構検出の後に本遺構を断ち割り、断面形状を観察後床面に黒褐色の土層を確認した。またその下層からは、ＳＫ 22・23・24 が検出された。ＳＸ４からこれらの遺構へ土層が推移する状況は調査の都合上測量はしなかったが、調査区西壁より一部観察できた。ＳＸ４の礫の分布は、これらの遺構群を覆う状況である。

時　期　時期比定できる遺物の出土はないが埋土から近世と考える。

ＳＸ５（第92 図）

調査区北東に位置し、遺構の規模は、長軸3.20m、短軸1.50m、深さ16 ㎝ を測り、断面形は皿状を呈する。埋土は灰黄褐色土（黄色混）である。遺物の出土は見られなかった。

時　期　時期比定できる遺物の出土はないが埋土から近世と考える。

４．小結

今回の調査では、南梅本長広遺跡では中世～近世と考えられる集落関連の遺構・遺物を多く確認した。検出された土坑の中には似通った構造を持った円形土抗遺構が複数基あり（ＳＫ６・７、ＳＫ９・10、ＳＫ 11・12、ＳＫ 22・23 等）、内部に礫を多量に持つもの、持たないもの。断面形状は逆台形状のものがほとんどで、中には漆喰状の構造を伴うものも見られ注目される。そのほかに、ＳＫ１など土坑内での小溝もつ遺構の検出があり、平野内で散見される間仕切り状遺構とはやや異なる。今後同時期の事例を積み重ね検討したい。そのほか本遺跡では、東に近接する東温市（旧重信町）所在の窯跡、西岡焼（江戸時代）の可能性が指摘される遺物の出土をみている。今後は周辺調査の結果も合わせ総合的に検討したい。また土層の状況から、当地では悪社川の河岸段丘という立地もあり、河川の氾濫の影響を受けた後、当時の人々の手によって幾度となく耕地整備され、今日まで永続的に集落が営まれてきたことが理解できる。

以上、当地で検出された遺構群から、悪社川を挟んだ当時の集落経営構造の一端が解明された。今後周辺での発掘調査の貴重なデータになるものである。

遺物観察表　－凡例－

（1）以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。
　　遺物観察表は小笠原善治、金子育代が作成した

（2）遺構一覧表の出土遺物欄は遺物を略記した・
　　例）土師→土師器、須恵→須恵器

（2）遺物観察表の各掲載について

法　量　欄　（　）：復元推定値。

形態・施文欄　土製品の各部名称を略記した。
　　例）口→口縁部、頸→頸部、胴→胴部、底→底部

胎　土　欄　胎土欄では混和剤を略記した。
　　例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土、金→金雲母。
　　（　）中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。
　　例）砂・長（1～3）→「1～3mmの砂粒・長石を含む」である。

焼　成　欄　焼成欄は焼成具合を略記した。
　　例）◎→良好、○→良、△→不良。

表10　土坑一覧

土坑（SK）	地　区	平面形	断面形	規　模（m）長さ（長径）×幅（短径）×深さ	床面積（㎡）	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	D～E・1～2	隅丸方形	皿状	4.35 × 3.25 × 0.25	10.97	黒褐色土 暗褐色土	弥生・須恵 土師・陶器 石器剥片	中世～近世	SK13・21を切る。 調査区外に展開する。
2	D～E・2	不整円形	皿状	1.08 × 1.03 × 0.26	0.96	黒褐色土	弥生・須恵 陶磁器	近世	SP89・90に切られ、 SK3を切る。
3	E・2	不整形	皿状	2.04 × 0.98 × 0.18	1.68	黒褐色土	弥生・須恵	古墳	SK2に切られる。
4	D・2	不整形	皿状	1.55 × 0.91 × 0.13	1.19	黒褐色土	弥生・須恵 土師・ 石器剥片	古代	SP104に切られる。
5	D～E・3	不整形	皿状	1.97 × 1.36 × 0.11	2.36	暗褐色土	弥生 陶磁器	中世～近世	SP148に切られる。 調査区外に展開する。
6	D・3～4	不　整 楕円形	皿状	1.66 × 1.38 × 1.00	1.36	黒褐色土	弥生 土師質土器	中世～近世	SD3に切られる。
7	D・4	不整円形	皿状	1.30 × 0.69 × 0.08	0.81	黒褐色土	弥生・土師 磁器	近世	SD4に切られる。
8	B～C・5	隅丸方形	逆台形状	1.25 × 1.06 × 0.46	1.19	黒褐色土	弥生・須恵 土師	古代	
9	D・6	円形	逆台形状	1.10 × 1.06 × 0.57	0.97	暗褐色土 褐灰色土			
10	D・6	円形	逆台形状	1.17 × 1.12 × 0.58	1.08	暗褐色土 褐灰色土	土師	中世～近世	
11	C・4～5	不整形	逆台形状	1.50 × 1.34 × 0.57	1.17	暗褐色土 灰黄褐色土	陶器	近世	SK12を切る。
12	B～C・ 4～5	不整形	逆台形状	1.30 × 0.94 × 0.50	1.45	黒褐色土 灰黄褐色土	弥生・磁器	江戸	SK11に切られる。
13	E・2	不整形	レンズ状	0.94 × 0.93 × 0.10	0.63	黒褐色土	弥生・須恵 陶磁器	近世	SK1に切られる。 調査区外に展開する。
14	C～D・6	不整形	皿状	1.10 × 0.71 × 0.05	0.64	暗褐色土		江戸以降	SK19を切る。
15	C～D・6	不整形	皿状	1.10 × 0.76 × 0.05	0.64	暗褐色土	弥生・須恵 陶磁器	江戸	
16	B・5	不整形	逆台形状	2.12 × 1.03 × 0.33	1.66	暗褐色土	陶器	江戸	
17	C・6～7	隅丸方形	皿状	2.20 × 1.94 × 0.22	2.91	暗褐色土	土師質土器 陶器・石器 瓦	江戸～近代	SD15・SP92・179 に切られ、SK39、 SD10を切る。

土坑一覧

土坑（ＳＫ）	地　区	平面形	断面形	規　模（m） 長さ（長径）×幅（短径）×深さ	床面積（㎡）	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
18	C・6	不整形	皿 状	1.25 × 0.82 × 0.14	0.80	黒褐色土	土師質土器 陶 器	江 戸	SK19 を切る。
19	B～C・6	楕円形	皿 状 舟底状	5.70 × 1.76 × 0.17	6.32	黒褐色土	弥生・陶器	江戸以降	SK14・18・SP88・161 に切られ、SK39 を切る。
20	C～D・3	不整形	皿 状	2.58 × 1.00 × 0.25	1.75	灰褐色土		江戸～近代	SD2 を切る。
21	D～E・1	不整形	舟底状	2.02 × 0.75 × 0.30	1.22	黒褐色土	弥 生	弥 生	SK1 に切られる。 調査区外に展開する。
22	B・2	不整円形	逆台形状	1.25 × 1.10 × 0.57	1.10	灰黄褐色土	陶 器	江 戸	SK23 を切る。
23	B～C・2	不 整 楕円形	逆台形状	1.30 × 1.05 × 0.56	1.23	礫層	石 器	江戸～ 近代	SK22 に切られる。
24	B～C・2	不整形	皿 状	1.97 × 1.10 × 0.13	1.40	褐灰色土		江戸～ 近代	SD1 に切られる。
25	B～C・8	不整方形	皿 状	2.91 × 1.50 × 0.06	4.02	暗褐色土	弥 生 陶磁器	江戸～ 近代	SD12 を切り、SM21 に切られる。
26	C・8～9	円 形	逆台形状	1.47 × 1.36 × 0.54	1.52	暗褐色土	石器剥片	近世～ 近代	SD10 を切る。
27	B～C・ 8～9	不整形	舟底状 レンズ状	2.00 × 1.13 × 0.27	1.68	黒褐色土	弥生・土師 陶磁器	江戸以降	SM22 に切られる。
28	D・7	不整形	皿 状	1.00 × 0.90 × 0.03	0.82	灰黄褐色土			
29	B・7	楕円形	皿 状	0.98 × 0.66 × 0.12	0.57	暗褐色土	弥 生	弥 生	
30	C・7	楕円形	皿 状	0.84 × 0.34 × 0.04	0.25	暗褐色土		江戸～ 近代	SD9 に切られる。
31	C・7	円 形	逆台形状	1.18 × 1.08 × 0.40	0.94	暗褐色土	弥生・須恵 陶磁器	近世以降	SK36･SD10 を切る。
32	B～C・ 9～10	不整形	レンズ状	1.64 × 0.40 × 0.08	0.64	暗褐色土	弥 生	弥 生	調査区外に展開する。
33	C・9	不整形	皿 状	1.18 × 0.89 × 0.02	0.82	暗褐色土			SD9 に切られる。
34	C・9	不整形 楕円形	皿 状	0.68 × 0.50 × 0.04	0.33	暗褐色土			SP159･16 に切られる。 調査区外に展開する。
35	C～D・7	不整形	レンズ状	1.30 × 0.86 × 0.04	0.87	暗褐色土			SD13 に切られる。
36	C～D・ 7～8	不整形	皿 状	1.80 × 1.24 × 0.14	1.61	黒褐色土	土師質土器	江 戸	SK31・37 に切られる。
37	D・7～8	不整形	レンズ状	0.68 × 0.66 × 0.18	0.35	暗褐色土		江戸～ 近代	SK36 を切る。
38	D・7～8	隅丸方形	皿 状	1.11 × 0.75 × 0.06	0.71	暗褐色土	陶 器		SP174 に切られる。
39	C～D・6	不整形	レンズ状 逆台形状	3.90 × 1.11 × 0.30	3.47	暗褐色土		近 世	SD13 を切り SK17・19・SP93 に切られる。

表 11　性格不明遺構一覧

性格不明遺構（ＳＸ）	地　区	平面形	断面形	規模（m） 長さ（長径）×幅（短径）×深さ	床面積（㎡）	埋 土	出土遺物	時 期	備　考
1	B～C・ 3～4	不整形	皿 状	5.00 × 2.38 × 0.06	9.0	暗褐色土	弥 生	弥 生	SP11 に切られる。 調査区外に展開する。
2	B・4～5	不整形	舟底状	2.20 × 2.18 × 0.76	3.65	暗褐色砂質土 黒色土 にぶい黄色シルト		近世～近代	調査区外に展開する。
3	C～D・5	不整形	逆台形状	1.74 × 1.05 × 0.42	1.35	暗褐色土 黒色土 黒褐色土		近世～近代	SP103 に切られる。
4	B～C・ 1～2	不整形		4.05 × 3.82 × 0.20 概報より	10.86	礫 層		近 世	調査区外に展開する。
5	D・2	不整形	皿 状	3.20 × 1.50 × 0.16	3.55	灰黄褐色土		近 世	SK4・SD1・SP105 に切られる。

表 12　溝一覧

溝（SD）	地 区	断面形	規 模（m）長さ×幅×深さ	方 向	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	B～E・2～3	逆台形状	11.1 × 0.50 ～ 0.93 × 0.07 ～ 0.27	東 西	暗褐色土	土師・陶器	近 世	SX5 を切る。調査区外に延びる。
2	B～E・2～3	皿 状 舟底状	11.0 × 0.45 ～ 1.78 × 0.05 ～ 0.28	東 西	暗褐色土 黒褐色土	須恵・土師 陶 器	近 世	SK20・SP9・10 に切られる。調査区外に延びる。
3	C～E・4	レンズ状 皿 状	5.20 × 0.14 ～ 0.50 × 0.02 ～ 0.04	東 西	暗褐色土		近 世	SP80 に切られ、SK6 を切る。
4	C～D・4	皿 状	4.52 × 0.40 ～ 1.06 × 0.02 ～ 0.08	東 西	暗褐色土	弥 生	近 世	SD5・SP52 に切られ、SK7 を切る。
5	D・4～5	逆台形状	1.38 × 0.26 ～ 0.50 × 0.08	南 北	暗褐色土		近 世	SD4 を切る。
6	D・5	皿 状	1.50 × 0.30 ～ 0.48 × 0.04	東 西	暗褐色土		近 世	SP51 に切られる
7	D～E・3	皿 状	3.10 × 0.12 ～ 0.30 × 0.06	東 西	暗褐色土		近 世	
8	A～B・7～10	皿 状	10.6 × 2.00 ～ 3.45 × 0.03 ～ 0.30	南 北	暗褐色土	陶 器	江戸～近代	SK27・SD12 を切る。調査区外に延びる。
9	B～C・7～9	レンズ状 皿 状	12.0 × 0.90 ～ 1.15 × 0.02 ～ 0.06	南 北	暗褐色土	弥生・陶器	江戸～近代	ＳＫ 30・33 を切る。SD15・に切られる。調査区外に延びる。
10	C～D・7～9	レンズ状 皿 状	11.0 × 0.65 ～ 1.05 × 0.02 ～ 0.08	南 北	暗褐色土	弥生・須恵 土 師	古 代	SK17・26・31 に切られる。調査区外に延びる。
11	D・7	皿 状	3.48 × 0.40 ～ 0.72 × 0.05	東 西	灰黄褐色土	陶 器	近世～ 近代	調査区外に延びる。
12	B・7～8	皿 状 舟底状	4.41 × 0.20 ～ 1.10 × 0.01 ～ 0.08	南 北	にぶい黄褐色土		近世～ 近代	SK25・SD8 に切られる。
13	C～D・6～7	皿 状	6.00 × 0.15 ～ 1.00 × 0.02 ～ 0.08	東 西 南 北	暗褐色土		近世～ 近代	SK35 を切る。SK39 に切られる。調査区外に延びる。
14	C～D・8～9	皿 状	4.04 × 0.20 ～ 0.80 × 0.04	南 北	暗褐色土		近世～ 近代	SP163 に切られる。
15	B～C・7	レンズ状 皿 状	3.76 × 0.28 ～ 0.86 × 0.02 ～ 0.07	東 西	暗褐色土	陶 器	近世 ～近代	SK17・SD9 を切る。

表 13　畝状遺構一覧

畝状遺構（SM）	地 区	断面形	規 模（m）長さ×幅×深さ	方 向	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	D・7	皿 状	0.63 × 0.14 ～ 0.15 × 0.02	東 西	灰黄褐色土（黄色混）	陶器片	近世～近代	
2	C・8	皿 状	0.68 × 0.10 ～ 0.14 × 0.02	東 西	灰黄褐色土（黄色混）		近世～近代	SP111 に切られる。
4	D・7	皿 状	0.47 × 0.09 ～ 0.11 × 0.02	東 西	灰黄褐色土（黄色混）		近世～近代	
5	D・7	皿 状	0.61 × 0.08 ～ 0.20 × 0.025	東 西	灰黄褐色土（黄色混）		近世～近代	
8	C～D・8	レンズ状 皿 状	2.06 × 0.17 ～ 0.50 × 0.035	東 西 南 北	灰黄褐色土（黄色混）		近世～近代	SD14 に切られる。
10	D・8	皿 状	1.56 × 0.22 ～ 0.35 × 0.07	東 西	灰黄褐色土（黄色混）		近世～近代	
11	D・8	皿 状	1.60 × 0.22 ～ 0.35 × 0.05	東 西	灰黄褐色土（黄色混）		近世～近代	
12	D・8	レンズ状	1.69 × 0.20 ～ 0.28 × 0.066	東 西	灰黄褐色土（黄色混）		近世～近代	
13	D・8	皿 状	1.93 × 0.18 ～ 0.58 × 0.05	東 西	灰黄褐色土（黄色混）		近世～近代	SP168 に切られる。
14	D・8	不定形	0.96 × 0.07 ～ 0.23 × 0.03	東 西	灰黄褐色土（黄色混）		近世～近代	SP108 に切られる。
15	D・8	レンズ状	1.56 × 0.03 ～ 0.16 × 0.015	東 西	灰黄褐色土（黄色混）		近世～近代	
16	D・8～9	変形皿状	1.45 × 0.19 ～ 0.25 × 0.056	東 西	灰黄褐色土（黄色混）		近世～近代	調査区外に延びる。

畝状遺構一覧

畝状遺構（ＳＭ）	地　区	断面形	規　模（m）長さ×幅×深さ	方 向	埋 土	出土遺物	時 期	備　考
17	Ｄ・9	Ｕ字状	1.10 × 0.20 ～ 0.26 × 0.076	東 西	灰黄褐色土（黄色混）		近世～近代	調査区外に延びる。
18	Ｄ・9	皿 状	0.80 × 0.21 ～ 0.23 × 0.053	東 西	灰黄褐色土（黄色混）		近世～近代	調査区外に延びる。
19	Ｄ・8	逆台形状	0.77 × 0.14 ～ 0.22 × 0.045	南 北	灰黄褐色土（黄色混）		近世～近代	
20	Ｃ・8	レンズ状	0.46 × 0.06 ～ 0.10 × 0.012	南 北	灰黄褐色土（黄色混）		近世～近代	
21	Ｂ・8	逆台形状	0.50 × 0.11 ～ 0.16 × 0.05	南 北	灰黄褐色土（黄色混）		近世～近代	SK25 を切る。
22	Ｂ・9	皿 状	2.33 × 0.11 ～ 0.24 × 0.045	南 北	灰黄褐色土（黄色混）		近世～近代	SK27・SP142 を切り、SP169 に切られる。

表 14　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形 態 ・ 施 文	調　整		色調（外面）（内面）	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
1	壺	残高　6.6	頸部に格子状の刻目突帯文を貼付する。	ヨコナデ マメツ （ハケ痕）	マメツ	褐灰色・ にぶい橙色 褐灰色・ にぶい橙色	石･長（1 ～ 3） 多 ○		
3	甕	口径（16.4） 残高　2.1	口縁部は外反し、口縁端面に 1 条の浅い沈線がめぐる。	ヨコナデ （ハケ痕）	ヨコナデ ハケ （6 本 /cm）	橙色 橙色	石･長（1 ～ 3） チャート ○		
4	甕	残高　5.8	胴部片。外面にハケ目が施される。	ハケ （10 本 /cm）	マメツ	にぶい黄橙色 浅黄橙色	石･長（1 ～ 5） ○	黒斑	
5	甕	底径　2.7 残高　6.8	やや突出した平底。	ナデ （ハケ痕）	ナデ	にぶい褐色・ 灰色 暗灰色	石･長（1 ～ 4） ○		
6	甕	底径　3.2 残高　5.3	やや突出した平底。	ナデ	ナデ マメツ	灰黄褐色・ 灰白色 褐灰色	石･長（1 ～ 4） チャート ○		
7	甕	底径（6.6） 残高　4.7	やや小さい上げ底。	ナデ （ハケ痕）	マメツ	にぶい黄橙色 灰黄色	石･長（1 ～ 7） ○		
8	壺	残高　5.5	太い頸部に大きく外反して口縁部にいたる。	マメツ	ナデ マメツ	橙色・ 浅黄橙色 灰黄色	石･長（1 ～ 3） チャート ○		
9	坏蓋	口径（12.2） 残高　2.9	内湾気味に接地する口縁部。	回転ナデ	回転ナデ	黄灰色 灰色	石･長（1 ～ 2） ◎		
10	坏蓋	口径（11.8） 残高　1.4	口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰黄色 暗灰黄色	石・長（細粒） ◎	自然釉	
11	椀	底径（7.5） 残高　0.9	瓦器。低い高台が付く。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	密 ○		
12	坏	底径（11.0） 残高　1.0	土師器。底部は「ハ」の字状に開き、端面は平坦に仕上げる。	ナデ マメツ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	密 ◎		
13	灰落とし または 香炉	口径（10.4） 残高　2.6	陶磁器。口縁端部は内面に向かって屈折する。	施釉	施釉 回転ナデ	オリーブ灰色 オリーブ灰色・ 橙褐色	密 ◎		
14	碗	口径（11.3） 残高　3.9	陶磁器。直立気味に立ち上がる口縁部。	施釉	施釉	灰オリーブ色 灰オリーブ色	密 ◎		
15	碗	残高　3.3	陶磁器。口縁端部に細く鈍い赤褐色の釉を施す。	施釉 回転ナデ	施釉	にぶい赤褐色・ 灰オリーブ色 灰オリーブ色	密 ◎		
21	焙烙	口径（32.4） 残高　1.9	口縁部片。	ヨコナデ	ヨコナデ	オリーブ黒色 灰色	石･長（1 ～ 2） ○		

出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
22	皿	底径 5.3 残高 1.3	土師器の灯明皿。端部は全周が欠損する。	回転ナデ 底）回転糸切り	回転ナデ	橙色 にぶい橙色	石・長（細粒） ◎	黒斑 煤付着	
23	碗	口径 (7.7) 器高 4.7 底径 2.9	陶磁器の口縁部片。	施釉	施釉	灰白色 灰白色	精良 ◎		
24	小碗	底径 (3.4) 残高 1.5	磁器。高台は「ハ」の字状に開き先細る。	施釉	施釉	明緑灰色 灰白色	密 ◎		
25	碗	口径 (13.5) 残高 4.0	肥前系。外面には横方向刷毛目の文様を施す。	施釉	施釉	黒褐色・淡黄色 黒褐色・淡黄色	密 ◎		
26	徳利	底径 (5.2) 残高 3.0	備前焼。やや上げ底の底部。	回転ナデ 底）回転切り離し	回転ナデ	暗赤灰色 赤灰色	石・長（1～8） ◎		
27	サヤ形鉢	底径 (13.0) 残高 6.7	備前焼。やや上げ底の底部に、内傾して立ち上がる体部を持つ。	回転ナデ 回転ヘラケズリ 底）ナデ	回転ナデ	暗赤灰色 暗赤灰色	石・長（1～3） ◎		
28	羽釜	残高 4.6	土師質。	ヨコナデ ナデ 指頭痕	ナデ 指頭痕	灰色・黒色 灰色	石・長（1～2） チャート ◎	煤付着	
29	皿	底径 4.5 残高 1.9	肥前系。見込蛇の目釉剥ぎで、高台は露胎である。	施釉 回転ナデ	施釉 回転ナデ	灰白色 ・ 灰オリーブ色 灰白色・緑灰色	密 ◎		
30	鉢	口径 (21.0) 底径 (10.0) 残高 10.9	肥前系。体部は内傾して立ち上がり、口縁部はやや角張った玉縁状に肥厚する。	施釉・回転ナデ 底）回転ヘラケズリ	施釉	茶褐色・ 灰オリーブ色 灰黄褐色・ 灰オリーブ色	密 ◎		
31	瓦	残長 8.2 残幅 6.1 厚さ 1.4	軒丸瓦。凹面にコビキ痕・布目が若干残る。	ナデ	ケズリ	暗灰色 暗灰色	密 ◎		
33	火鉢	口径 (37.0) 残高 5.9	土師質。口縁端部は内方に僅かに肥厚し、円形の風通し部分が残存する。	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ	褐灰色 にぶい橙色・ 黒褐色	石・長（1～2） チャート・ 金ウンモ ○		
34	羽釜	残高 2.9	鍔部片。	ヨコナデ	ヨコナデ 指頭痕	黄灰色 黄灰色	石・長（1～3） ◎	煤付着	
35	碗	口径 (10.2) 残高 3.2	肥前系の陶器。	施釉	施釉	暗赤灰色 暗赤灰色	密 ◎		
36	碗	口径 (10.8) 残高 4.6	肥前系陶胎染付け。体部に唐津文、口縁部に２条の圏線を施す。	施釉	施釉	灰色 灰色	密 ◎		
37	鉢 または 皿	底径 (10.6) 残高 4.3	肥前系。面取りした厚手の高台がつく。見込みには白土による横方向の刷毛目を施す。	施釉、回転ナデ 底）回転ヘラケズリ	施釉	黒褐色・赤褐色 灰色・灰白色	密（石・３） ◎		
39	皿	口径 (16.0) 残高 1.6	鉄絵唐津。	施釉 回転ナデ	施釉	灰黄色 灰黄色	密 ◎		
40	焙烙	口径 42.0 残高 10.2	土師質。緩やかに立ち上がる体部に、口縁部は短く屈曲する。	ヨコナデ ナデ 指頭痕	ヨコナデ、ナデ （一部ハケ痕） 指頭痕	黒色・灰黄褐色 褐灰色・灰白色	石・長（細粒） ◎		
41	鉢	口径 (16.9) 残高 3.7	陶器。やや角張った玉縁が付く。	施釉	施釉	黒褐色 褐色	密 ◎		
42	椀	底径 (6.0) 残高 3.0	土師質。円盤高台の底部。	回転ナデ マメツ	ナデ マメツ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長（細粒） ○		
43	碗	口径 (12.2) 残高 3.5	陶器。	施釉	施釉	灰白色 灰白色	密 ◎		

出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（㎝）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
44	碗	底径 (2.5) 残高 2.4	京信楽系。高台は露胎である。	施釉	施釉	淡黄色・灰白色 淡黄色	密 ◎		
45	水吹きまたは水入れ	口径 (11.0) 残高 3.3	直行する口縁に口唇部は内方に折れ曲がる。外面口縁部に１条の圏線が描かれる。	施釉	施釉 砂目痕	灰オリーブ色 灰オリーブ色・茶褐色	密 ◎		
46	鬢付油壺	底径 (4.3) 残高 2.8	「ハ」の字状に開く底部から、体部は「く」の字状に屈曲する。	施釉	施釉	黒色 黒色	密 ◎		
47	碗	底径 (4.5) 残高 4.1	唐津碗。やや厚い器壁、底部を持つ。	施釉	施釉	灰黄褐色 灰黄色	密 ◎		
48	徳利	残高 5.3	外面に緋襷状の痕跡が見られる。	回転ナデ 施釉	回転ナデ ナデ	にぶい赤褐色 赤褐色	密 ◎		
49	土鍋	口径 (16.4) 残高 2.6	やや内傾気味の胴部に屈曲して開く口縁を持つ。端面は平らに仕上げる。	施釉	施釉	灰褐色 にぶい赤褐色	密 ◎		
50	碗	残高 1.7	磁器染付碗。	施釉	施釉	青白色 青白色	精良 ◎		
51	碗または鉢	残高 3.0	肥前系。口縁部は緩く外方に折れ曲がる。内面は白土による刷毛目文様を施す。	施釉	施釉	にぶい黄褐色 にぶい黄色・淡黄色	密 ◎		
52	碗	底径 (6.0) 残高 4.2	染め付けの広東碗。やや高めの高台に、開き気味に直線的な体部を持つ。内面に１条の圏線が巡る。波佐見。	施釉	施釉	明オリーブ灰色 明オリーブ灰色	密 ◎		
53	丸碗	口径 (9.6) 残高 5.4	京焼系。	施釉	施釉	灰白色・にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	密 ◎		
54	焙烙	口径 (23.9) 残高 2.1	土師質。ゆるく折れ曲がり下垂する口縁部。１孔のみ残存の内耳を持つ。	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	黄灰色・黒色 灰黄褐色	石・長（細粒） ◎		
55	甕	残高 6.0	陶器。内面に横方向の荒い削り痕を残す。	施釉	施釉	暗褐色 褐色	密（長・1） ◎		

表 15　出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ（㎝）	法量 幅（㎝）	法量 厚さ（㎝）	法量 重さ（ｇ）	備考	図版
2	磨石		砂岩	7.90	8.00	5.90	379.1		
16	挽臼	1/8	花崗岩	11.90	10.90	6.30	635.0	上臼	
17	素材剥片		サヌカイト	4.20	5.20	0.80	18.7		
18	素材剥片		サヌカイト	2.70	4.50	0.90	9.0		
19	素材剥片		サヌカイト	2.30	1.80	0.40	1.6		
20	素材剥片		サヌカイト	2.00	1.30	0.30	0.8		
32	挽臼	1/6	花崗岩	14.50	12.60	7.70	1142.0	上臼	
38	挽臼	1/6	花崗岩	14.30	15.50	6.80	1456.0	上臼	

第７章

南梅本長広（ながひろ）遺跡

－２次調査地－

第７章　南梅本長広遺跡２次調査地

１．調査の経緯

平成15年５月13日、松山市都市整備部道路建設課（以下、道路建設課）より、松山市道南北梅本線道路改良工事に伴う埋蔵文化財の確認調査申請が、松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。申請地は、松山市指定の埋蔵文化財包蔵地「No.107 播磨塚古墳群」と「No.142 水泥遺物包含地」に挟まれる埋蔵文化財包蔵未指定地である。申請地の所在する小野地区は、松山平野の東部に位置し、重信川の支流である小野川、悪社川及び内川によって形成された扇状地が広がる地域である。

東に近接する「播磨塚古墳群」内には、かつて多数の古墳が存在していたと言われている。近代には柑橘類の栽培適地として開墾、また陸上自衛隊松山駐屯地として当地周辺は造成・削平を受け、過去に存在したと考えられる古墳の大半が消滅している。現在では平成10年度に財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）によって発掘調査が行われた、「播磨塚天神山古墳」（6世紀前半の前方後円墳）と駐屯地内に横穴式石室（7世紀前半とされる）の一部が残っている。さらに、約２㎞東には東温市（旧重信町）に所在する、平成５年に重信町教育委員会によって調査された、「志津川古墳群（古墳後期）」や寛政11年頃に創業されたと言われる「西岡窯跡」などがある。また、申請地内では平成15年度埋文センターによって発掘調査された、14～15世紀代の中世集落関連遺跡である「南梅本上方遺跡」が所在する。平成16年には同センターによって「南梅本上方遺跡２次調査地」および「南梅本長広遺跡」が調査され（図２・３）、古墳時代～近代の集落関連遺跡が見つかっている。

今回の申請地は、悪社川北方に所在する既往調査地「南梅本長広遺跡」の北部に近接することからも、遺構が存在する可能性が高いと予想された。申請を受けた文化財課と埋文センターは協議の上、埋文センターが平成16年６月１日から６月３日の間試掘調査を実施した。

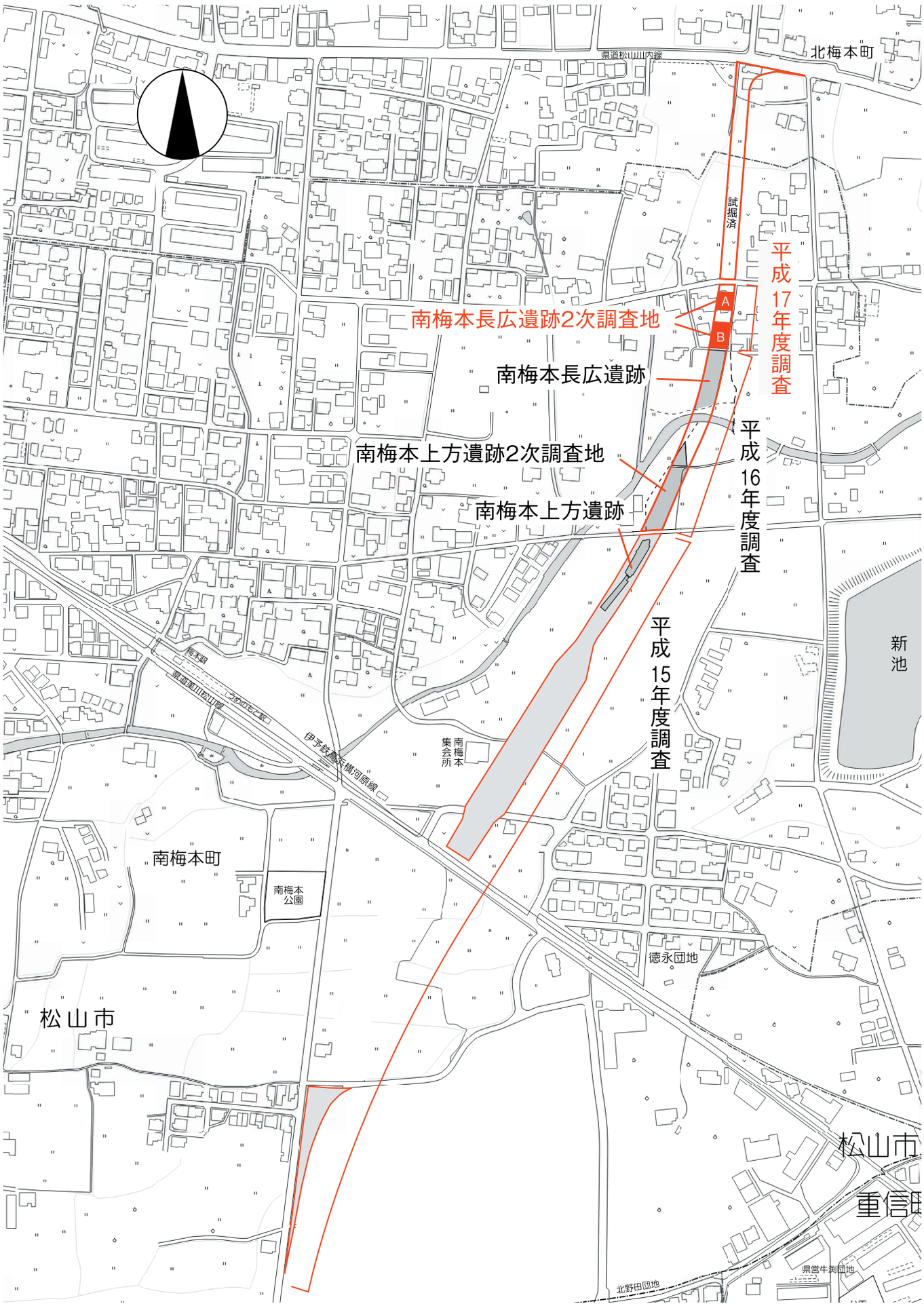
試掘調査では、申請地内に９本のトレンチを設定し、層序と遺構の有無を確認した。その結果、申請地内において、主に中世～近代の遺物を包含する土層や遺構（溝状遺構、柱穴、土坑、石列等）が検出された。6月16日付の当該試掘調査報告書を基に検討がなされ、遺跡を確認した区間については本格調査が必要と判断された。

以上の経緯を踏まえ、道路建設課、文化財課、埋文センターの三者は遺跡の取り扱いについて協議を行った。その結果、道路改良工事によって遺跡が失われる該当地について記録保存を目的とした本格調査を実施することになった。当該地の遺跡名称は、申請地南に「南梅本長広遺跡」が隣接することから、申請地を「南梅本長広遺跡２次調査地」とした。調査は埋文センターが調査主体となり、同年８月１日より本格調査を開始した。

発掘調査（屋外調査）は、平成17年８月１日～平成17年９月30日の間に実施した。調査区を設定し、掘削を実施した対象地は以下の通りである。

南梅本長広遺跡２次調査地　　370.150㎡（対象面積）
　　A区　　86.904㎡（実施面積）
　　B区　　141.995㎡（実施面積）

発掘調査に先立ち、遺跡の調査地内掘削計画を検討した。その結果重機での掘削時の排土は調査対象地南の路線用地内で排土処理を行い、追手返しを行なうこととした。調査区内での調査部分は２ヵ所に指定されるこ



第 94 図　調査地位置図 1

S＝1／1000

第 95 図　調査地位置図２

とから、調査では便宜上、調査区北部を「Ａ区」、調査区南部を「Ｂ区」と呼称した。

調査事務所は松山市都市整備部道路建設課の協力により、調査地よりやや離れた調査対象地北方の当該路線建設用地内に設置し、発掘機材等の搬入を行った。平成17年８月１日には、まず対象地である長広遺跡２次調査地の周囲を丸杭とトラロープを用いて安全対策を施した。次に調査区範囲の線引きを実施した。その後、重機と不整地運搬車を用いて調査区の表土（耕作土）掘削と排土移動を開始する。重機（バックフォー）及び不整地運搬車は１日・２日・３日と使用した。その後は、２日より人員を配置し、Ａ区より遺構検出を開始し、順次Ｂ区に移動し遺構検出に努めた。８月10日には調査対象地内に基準点を設け、順次調査区内に測量杭を設置した。８月18日には高所作業車による遺構の検出状況を撮影する。その後、順次遺構の精査と掘り下げ、遺構の測量を開始する。Ｂ区南端部より、調査区東西に渡って石列２条とその下層に石敷が検出された。その図化に相当の時間を要し、また調査期間が短いこともあり、遺構完掘状況写真の撮影には間に合わないことが予想され、よって石列遺構の完掘写真は調査終了前に撮影することとした。９月20日には高所作業車を使用し、遺構の完掘写真を撮影する。９月27日には予定通りＢ区石列遺構群の完掘状況を撮影し野外調査を終了した。９月28日より重機による調査区の埋め戻しと事務所から発掘機材の搬出を開始、30日にはすべての作業を完了する。

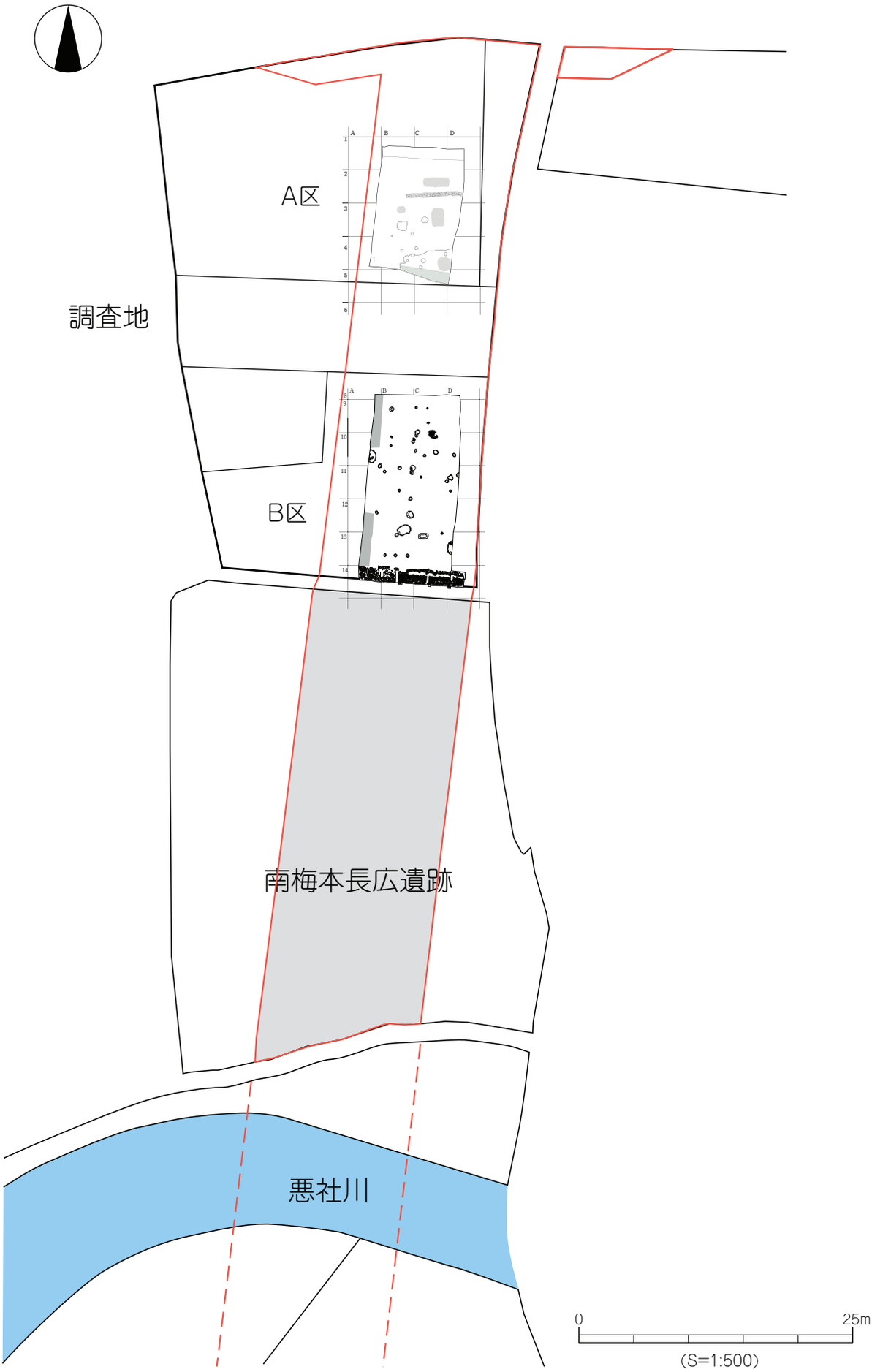
【参考文献】

松山市教育委員会 1997「松山市埋蔵文化財包蔵地地図」

吉岡和哉　2001「播磨塚天神山古墳」松山市文化財調査報告書 83

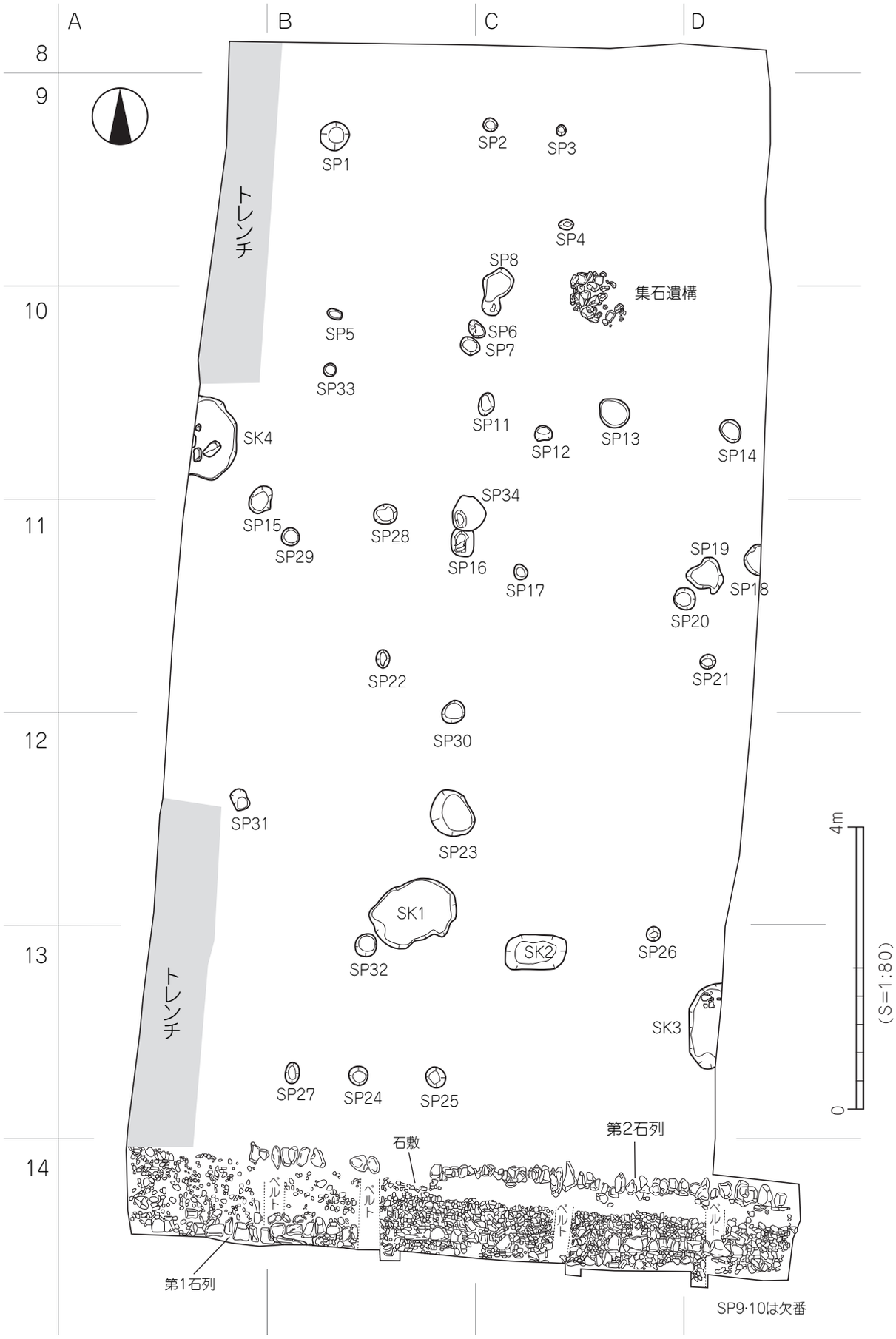
武正良浩　2003「南梅本上方遺跡」調査概要報告書

小笠原善治　2004「南梅本上方遺跡２次調査地・南梅本長広遺跡」調査概要報告書



第 96 図　遺構配置図

第 97 図　Ａ区遺構配置図



第 98 図　B 区遺構配置図

２．層位（第 100・101 図）

調査地は松山平野東部にあって、石手川の支流である小野川により形成された、比較的小規模な扇状地の南方扇側部付近にあり、標高 76m に立地する。Ａ調査区は調査地内北方に位置し、表土面より 1m 程度の掘り下げにて、基盤相当面より各遺構を検出した。

Ａ調査区の基本層序は、第Ⅰ層造成土、第Ⅱ層灰黄褐色土（明黄褐色土粒含む）、第Ⅲ層灰黄褐色土（明黄褐色土粒を多く含む）、第Ⅳ層黒褐色土（小礫含む）、第Ⅴ層明黄褐色砂質土（小～中礫混含む）である。

第Ⅰ層　造成土　－旧所有者家屋基礎の造成土及び現代攪乱層。

第Ⅱ層　灰黄褐色 10YR5/2 土（明黄褐色 10YR7/6 土粒含む）－旧耕作層、調査区全体に薄く分布する。

第Ⅲ層　灰黄褐色 10YR5/2 土（明黄褐色 10YR7/6 土粒を多量に含む）－整地層。調査区全体に広く分布する。

第Ⅳ層　黒褐色 10YR3/1 土（小礫含む）－小礫を含んだ包含層。

第Ⅴ層　明黄褐色 2.5Y7/6 砂質土（小～中礫混含む）　－基盤層相当で、ここより常時湧水がある。

Ｂ調査区の基本層序は、第Ⅰ層耕作土、第Ⅱ層灰黄褐色土（明黄褐色土粒含む）、第Ⅲ層灰黄褐色土（明黄褐色土粒を多く含む）、第Ⅳ層黒褐色土（小礫含む）、第Ⅴ層明黄褐色砂質土（小～中礫混含む）である。

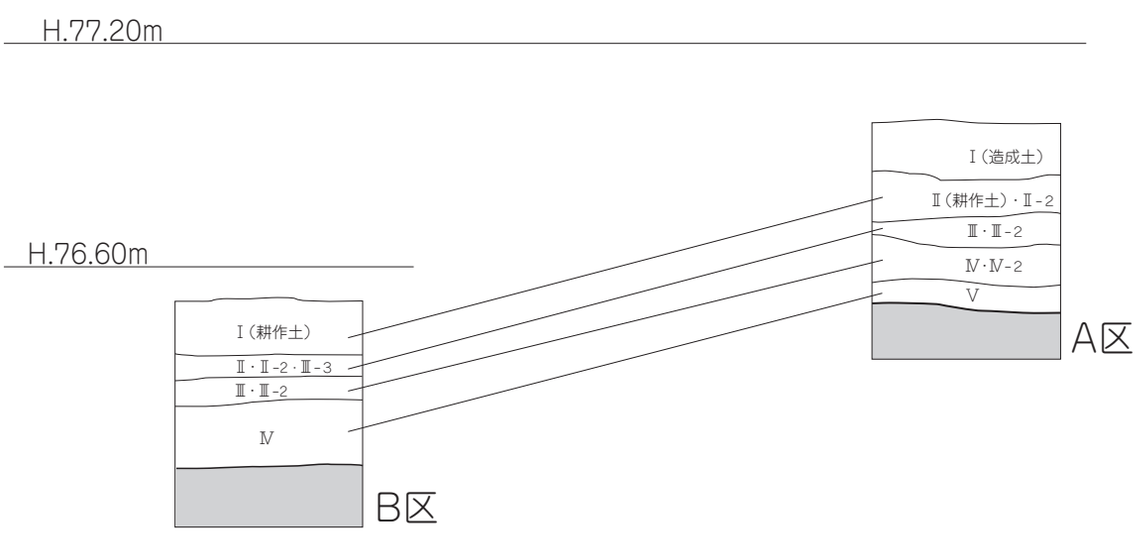
第Ⅰ層　耕作土

第Ⅱ層　灰黄褐色10YR7/2土に明黄褐色2.5Y7/6土粒含む　－整地層。調査区全体に広く分布する。

第Ⅲ層　黒色7.5YR2/1土　－遺物の極小片を含む包含層（やや柔らかい）。

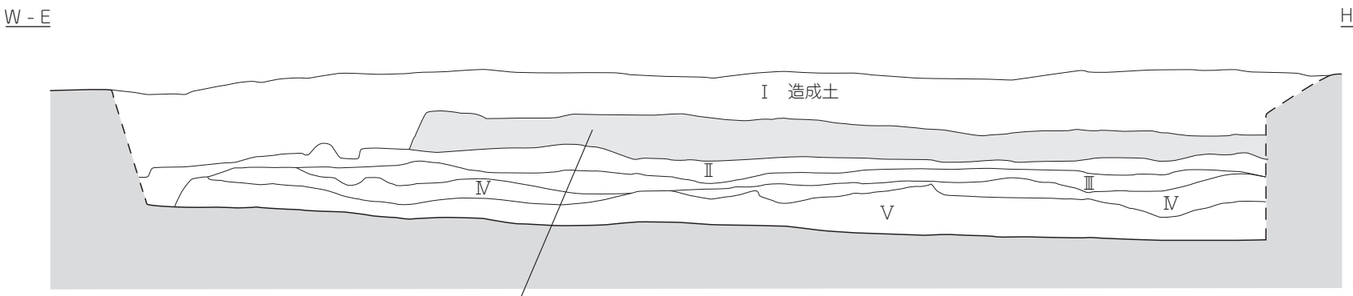
第Ⅳ層　浅黄色2.5Y7/3土　－基盤相当層で、この層より常時湧水が見られる。

【参考文献】
農林水産省農林水産技術会議事務局 監修「新版標準土色帳」(1989 年版)

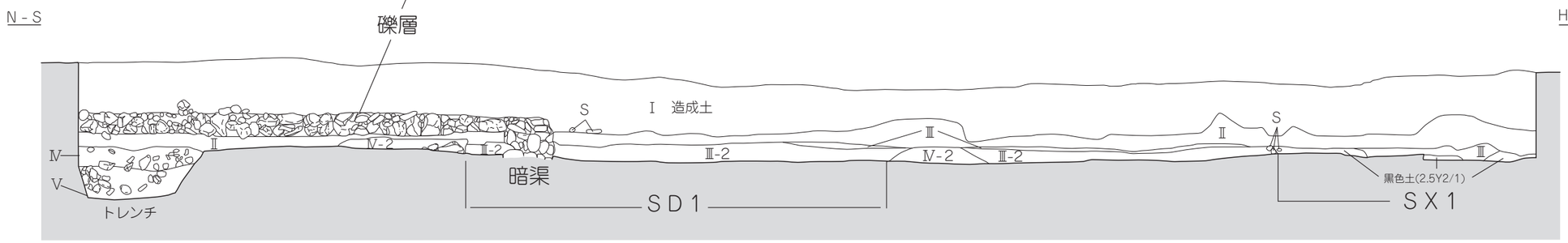


第 99 図　調査区土層柱状図

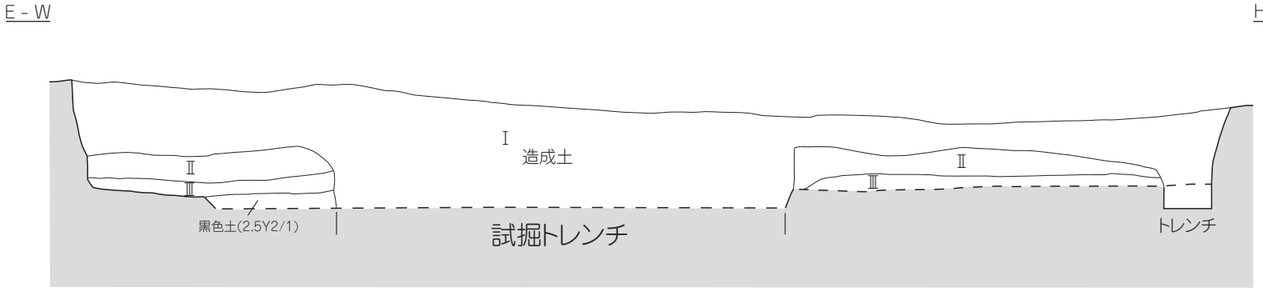
第Ⅰ層　造成土　－旧所有者家屋基礎の造成土及び現代攪乱層。
第Ⅱ層　灰黄褐色 10YR5/2 土（明黄褐色 10YR7/6 土粒含む）
－旧耕作層、調査区全体に薄く分布する。
Ⅱ－２　黒褐色 10YR3/1 土に、明黄褐色 10YR7/6 の粒を含む
第Ⅲ層　灰黄褐色 10YR5/2 土（明黄褐色 10YR7/6 土粒を多量に含む）
－整地層。調査区全体に広く分布する。
Ⅲ－２　明黄褐色 10YR7/6 土に、灰黄褐色 10YR5/2 を帯びる。
第Ⅳ層　黒褐色 10YR3/1 土（小礫含む）
－小礫を含んだ包含層。
Ⅳ－２　黒褐色 10YR3/1 土に、灰黄褐色 10YR5/2 土混じり。
第Ⅴ層　明黄褐色 2.5Y7/6 砂質土（小～中礫混含む）
－基盤層相当で、ここより常時湧水がある。



A区　北壁土層図

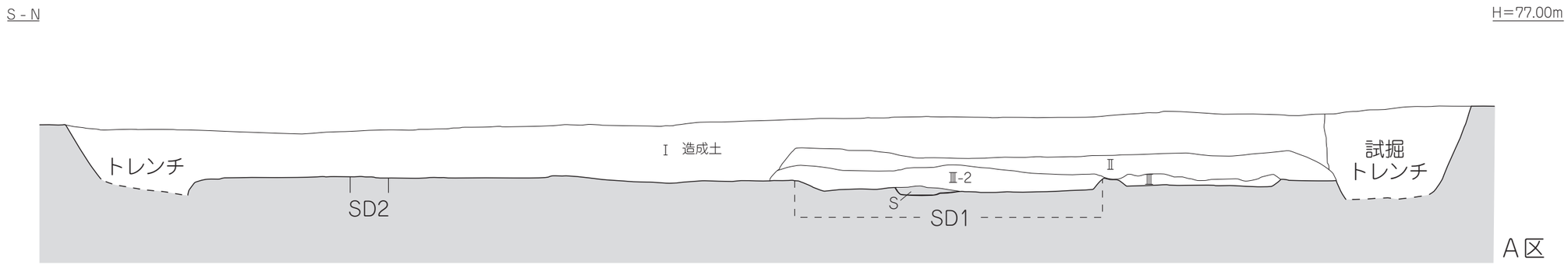


A区　東壁土層図



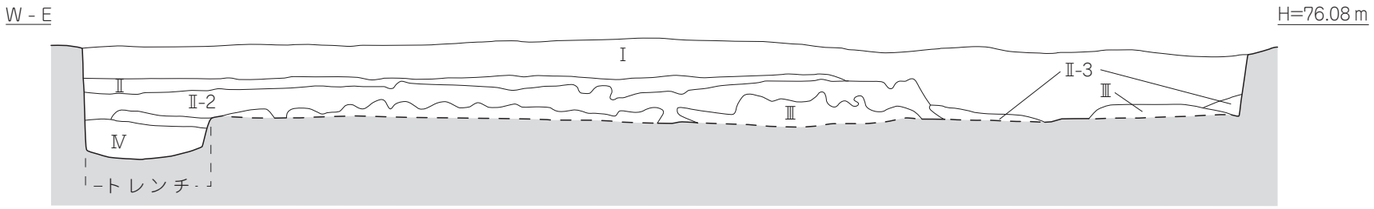
A区　南壁土層図

0　2m
（S=1:40）

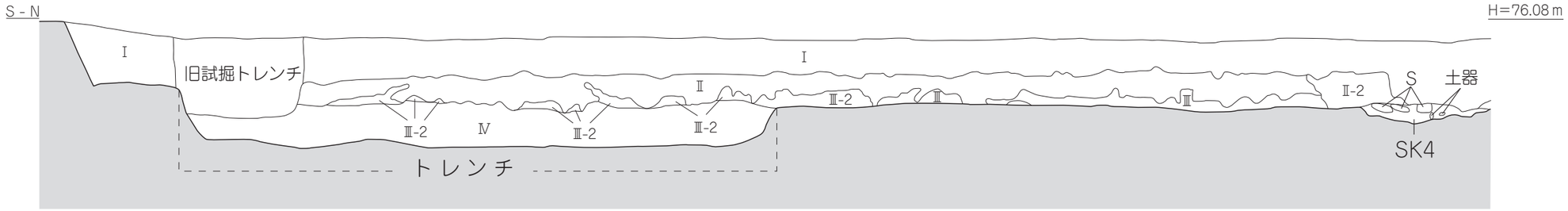


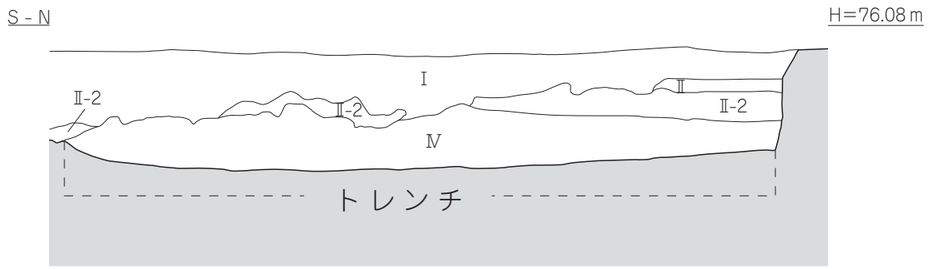
A区　西壁土層図

第 100 図　A区土層図



B区　北壁土層図





B区　西壁土層図

第Ⅰ層　耕作土

第Ⅱ層　灰黄褐色10YR7/2土に明黄褐色2.5Y7/6土粒含む　－整地層。調査区全体に広く分布する。

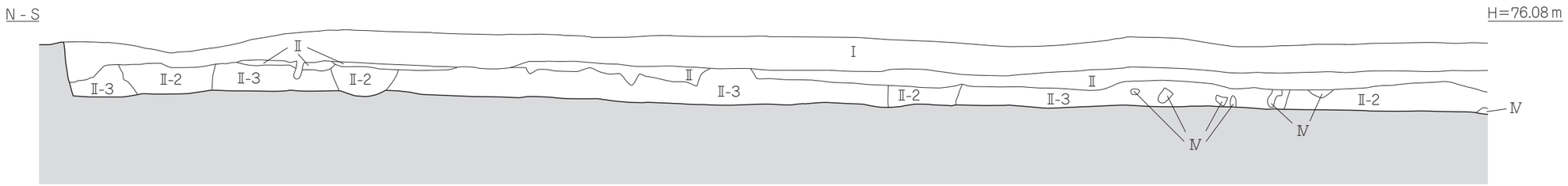
Ⅱ-2　黒色10YR1.7/1土に少量Ⅲ-3層の土が混じる。

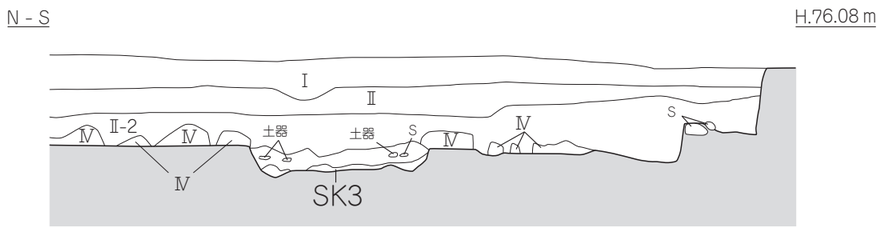
Ⅱ-3　灰褐色10YR4/1土に黒褐色10YR3/1土に黒褐色と浅黄色2.5Y7/3を帯びる（やや柔らかい）。

第Ⅲ層　黒色7.5YR2/1土　　－遺物の極小片を含む包含層（やや柔らかい）。

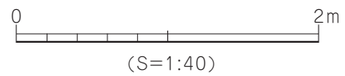
Ⅲ-2　暗褐色10YR3/3土

第Ⅳ層　浅黄色2.5Y7/3土　　－基盤相当層で、この層より常時湧水が見られる。





B区　東壁土層図



第101図　B区土層図

３．遺構と遺物

長広遺跡２次調査地では、各調査区において以下の遺構の検出した。

Ａ区：土坑（ＳＫ）１ 基、溝（ＳＤ）４ 条、性格不明遺構（ＳＸ）１基、柱穴 10 基である。遺構の所属時期は、主に中世～近世を中心とする遺構群が大半である。

Ｂ区：土坑（ＳＫ）４ 基、柱穴 32 基、石列２条及び石敷遺構１条、集石遺構１基である。遺構の所属時期は、縄文時代、弥生時代、古墳時代～古代、そして中世～近世と各期の遺構が検出されたが、主に中世～近世を中心とする遺構群が大半である。

以下、調査区別・遺構別に説明を加える。

〔１〕Ａ区の遺構と遺物

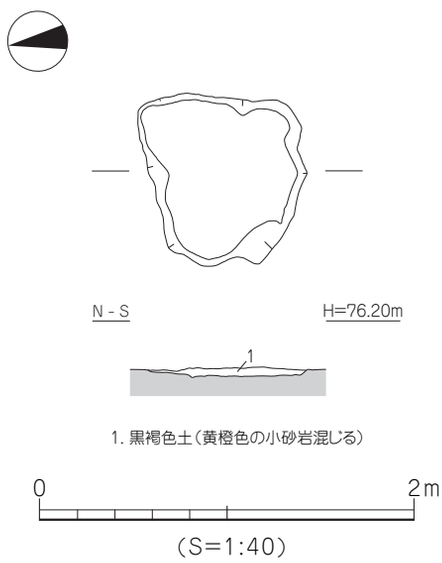
Ａ区において、遺構はＳＫ１基、ＳＤ４条、ＳＰ 10 基、ＳＸ１基が確認された。各遺構からは出土遺物が少なく、また小片が多く図化可能なもののみ掲載した。

１）土坑（ＳＫ）

ＳＫ１（第 102 図）

調査区中央に位置する。平面形態は不整形な方形を呈し、遺構の規模は0.90m×0.84m、深さ5㎝、面積は0.63㎡を測る。断面形状は皿状で、埋土は黒褐色土である。遺物の出土は見られない。

時　期　時期を比定できる遺物はないが、層位と埋土から中世～近世とする。



第 102 図　ＳＫ１測量図

２）溝（ＳＤ）

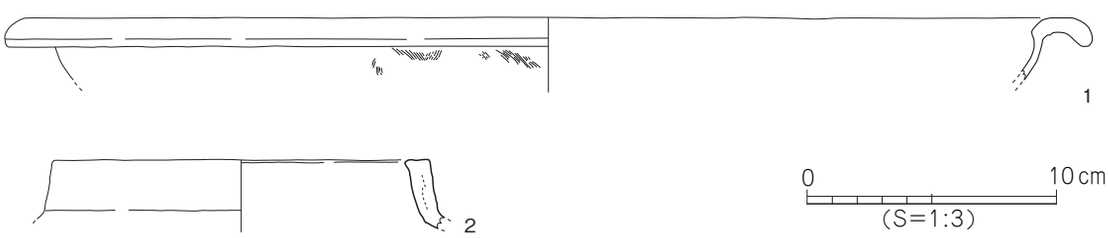
ＳＤ１（第 104 図）

調査区中央を東西方向に横断する比較的浅い溝である。溝の規模は長さ 7.75m、幅 2.28～ 3.00m、深さ２㎝～ 17㎝を測り、断面形状は皿状を呈する。埋土は黒褐色土＋灰黄褐色土(明黄褐色土粒混じり）である。遺物は埋土中より弥生土器、須恵器、土師質土器、陶器片が出土した。

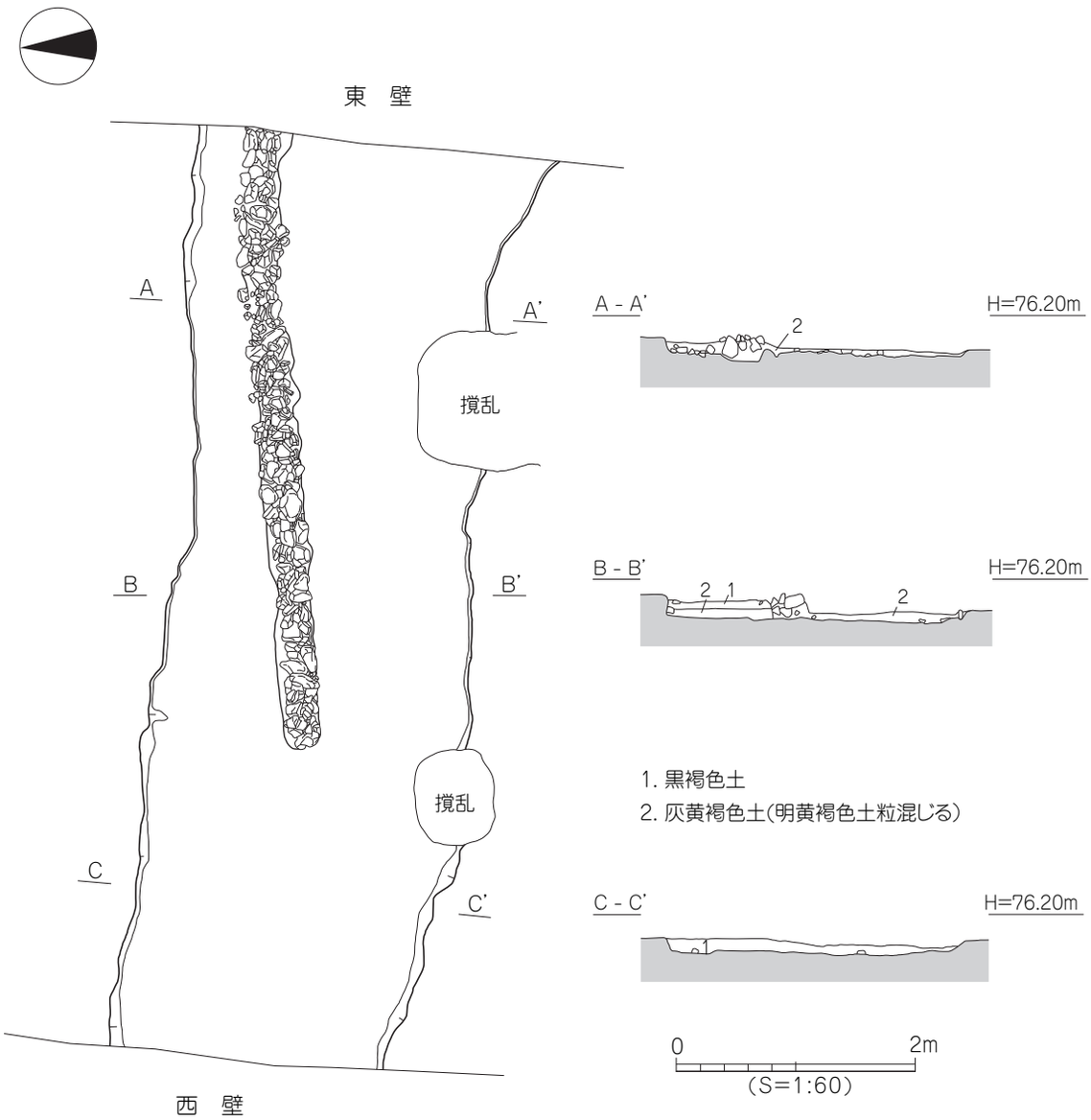
出土遺物（第 103 図、図版 58）

１は焙烙、口縁は水平に伸び端部は下垂する。内外ともにナデ。２は弥生土器の口縁部片か？ 器種不明

時　期　出土遺物から中世～近世と考える。



第 103 図　ＳＤ１出土遺物実測図



第 104 図　ＳＤ１測量図

ＳＤ２（第 105 図）

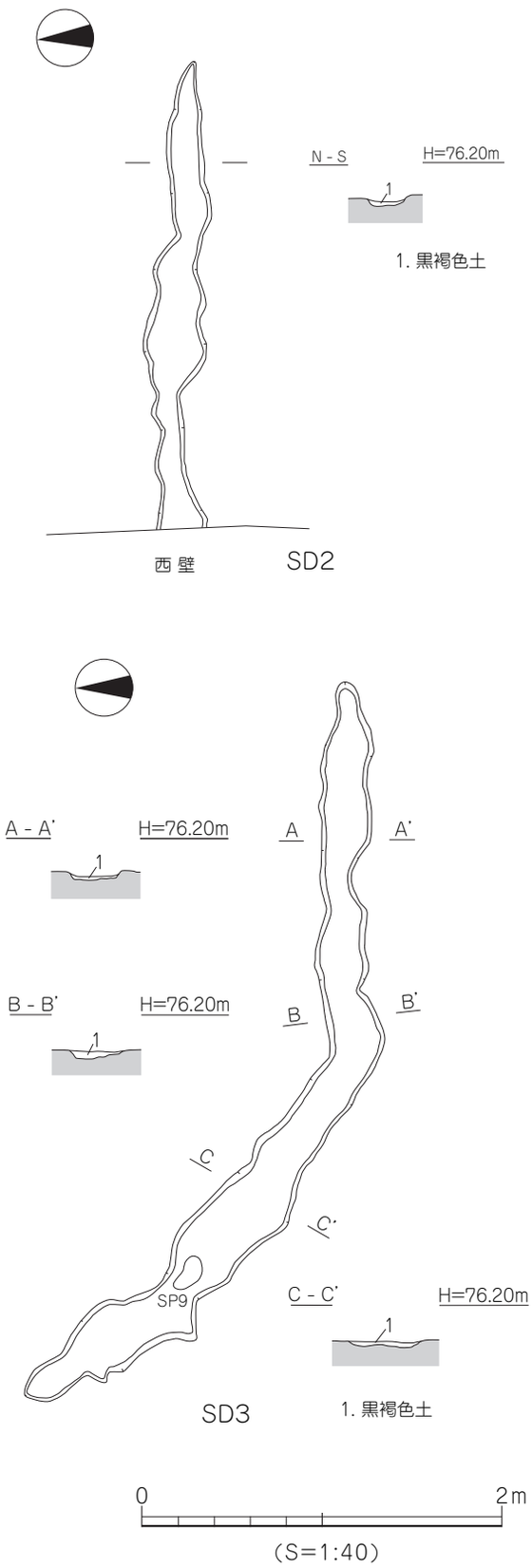
調査区南西部に位置し東西に走る比較的小規模な溝で、西端は調査区外に延びる。溝の規模は長さ 2.62m、幅 0.13 ～ 0.36m、深さ３㎝を測り、断面形状は皿状を呈する。埋土は黒褐色土である。遺物の出土は見られなかった。

時　期　時期を比定できる遺物はないが、層位と埋土から中世～近世とする。

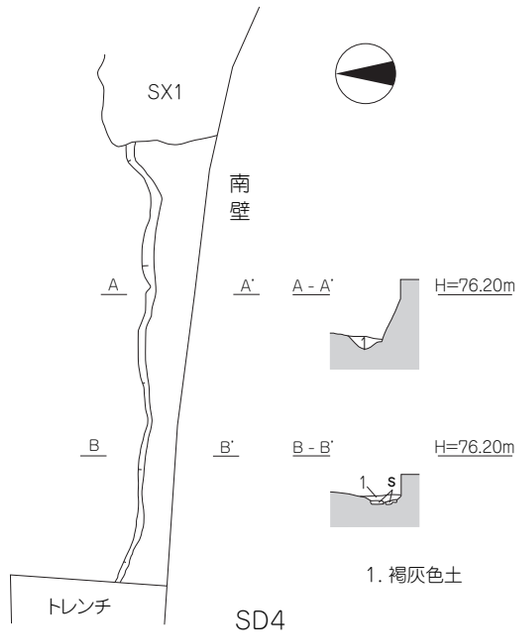
ＳＤ３（第 105 図）

調査区南西部に位置し東西－南東－北西に折れて走る比較的小規模な浅い溝である。溝の規模は長さ 4.74m、幅 0.13 ～ 0.45m、深さ１～３㎝を測り、断面形状は皿状を呈する。埋土は黒褐色土である。遺物の出土は見られなかった。

時　期　時期を比定できる遺物はないが、層位と埋土から中世～近世とする。



第105図　ＳＤ２・３・４測量図



ＳＤ４（第105図）

調査区南西部に位置し東西に走る比較的小規模な浅い溝で、ＳＸ１に切られ、西端は調査区外に延びる。溝の規模は長さ2.40m、幅0.16～0.47m、深さ２～６㎝を測り、断面形状は舟底状を呈する。埋土は褐灰色土である。遺物の出土は見られなかった。

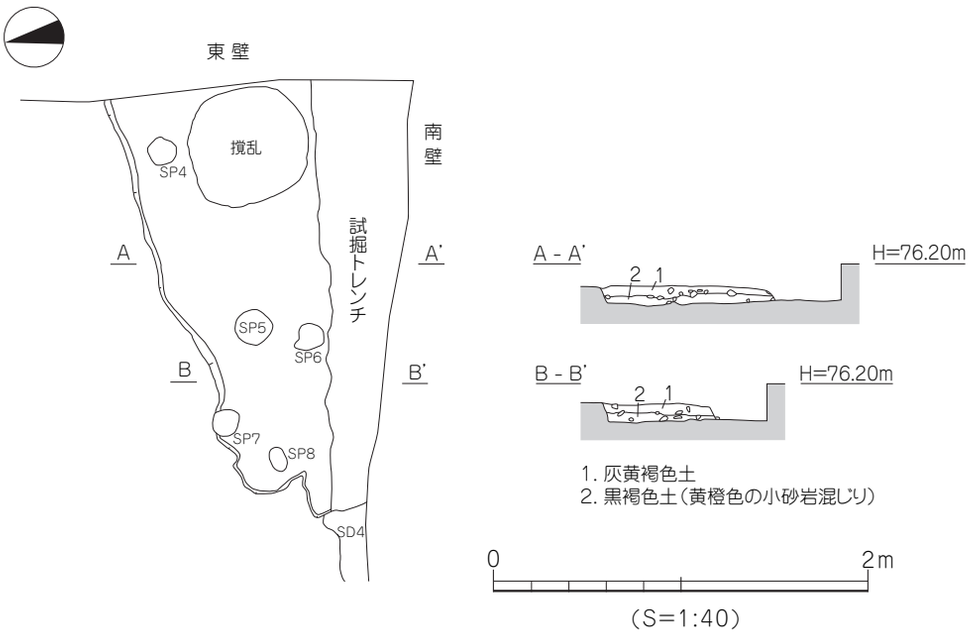
時　期　時期を比定できる遺物はないが、層位と埋土から中世～近世とする。

３）性格不明遺構（ＳＸ）

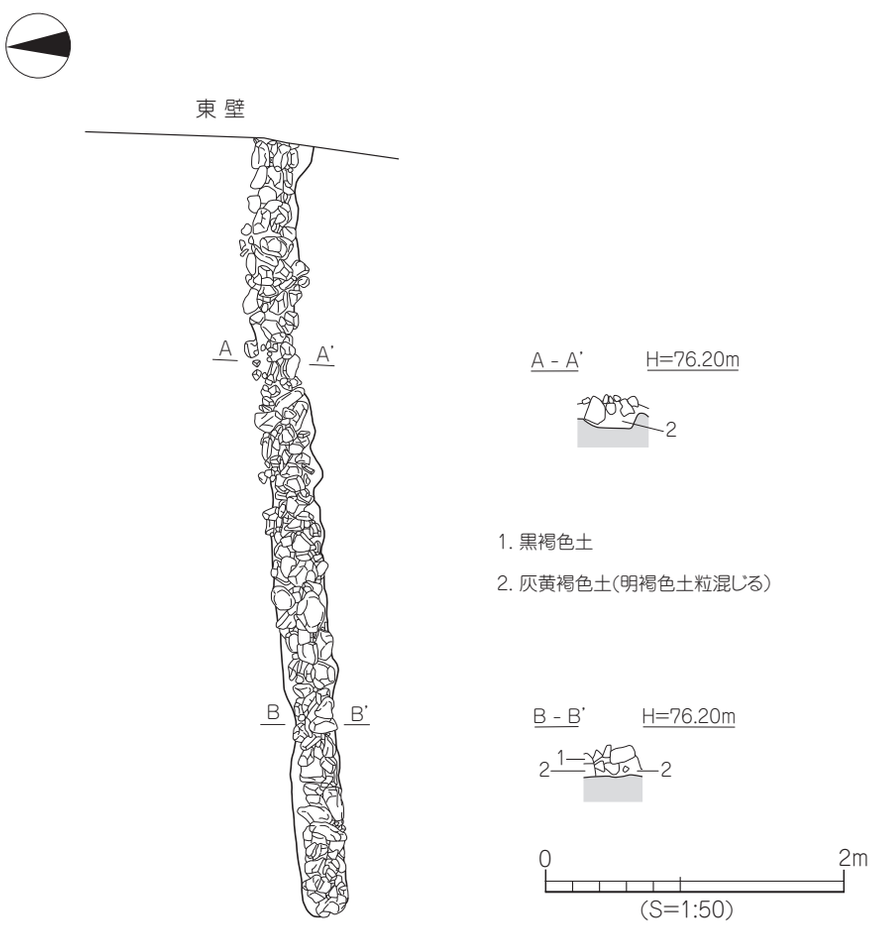
ＳＸ１（第106図）

調査区南東隅に位置し、ＳＤ４を切る。遺構の規模は長径0.90m、短径0.84m、深さ５㎝を測る。遺構の平面形状は南東部が調査区外に広がるため不明ではあるが検出部分は不整形である。断面形状は皿状を呈する。埋土は灰黄褐色土、黒褐色土（黄橙色の小砂岩混じり）である。遺物の出土は見られなかった。調査中は常時ではないが、高い気温にもかかわらず割と湿った状態が多く、湧水が見られるときもあった。

時　期　時期を比定できる遺物の出土はないが、層序及び埋土から中世～近世と考える。



第 106 図　ＳＸ１測量図



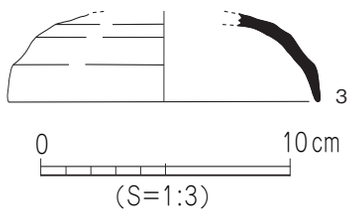
第 107 図　石列（暗渠）測量図

4）石列遺構

石列（暗渠）（第 107 図、図版 54）

調査区中央に位置し東西に走り、東端は調査区外に延びる。遺構の規模は検出長 5.17m、幅 0.38m、深さ 22 ㎝を測る。埋土は黒褐色土、灰黄褐色土に明黄褐色土粒が混じる。礫は８㎝～ 25 ㎝程度の角の取れた角礫を配置している。遺構からは、備前焼の甕形土器胴部片１点が、石列内に挟まった状況で出土した。

時　期　層位と出土遺物から近世と考える。



第 108 図　柱穴出土遺物実測図

5）柱穴（SP）

ＳＰ７

調査区南部中央に位置し、ＳＸ１に切られるＳＰ７は、規模が 0.29 m × 0.28 m、深さ 13 ㎝を測る。平面形態は円形を呈し、埋土は黒色（N1.5/0）土である。出土遺物は須恵器坏蓋片１点が出土している。

出土遺物（第 108 図、図版 58）

３は須恵器の坏蓋である。天井部からややなだらかな弧を描きながら口縁部に下がり、口縁端部は尖り気味に丸い。

時　期　埋土と出土遺物から古墳時代後期後半と考える。

その他の柱穴からは遺物の出土はないが、ＳＰ５～６はＳＰ７同様にＳＸ１に切られる。埋土はＳＰ７と同様に黒色（N1.5/0）土を呈し、埋土から言えばこれらも同時期と考えられる。

〔２〕Ｂ区の遺構と遺物

Ｂ区の調査では、土抗が４基、建物を構成しない柱穴が 32 基、集石遺構１基そして石列２条、石敷遺構１基が確認されている。遺構の所属時期不明なものもあるが、遺構の大半は中世～近世の遺物を含むものが多く検出されている。以下遺構・遺物の詳細を述べる。

1）土坑（ＳＫ）

ＳＫ１（第 109 図）

調査区南部中央に位置する。土坑の規模は長径 1.22 m、短径 0.85 m、深さ 20 ㎝を測る。平面形態は不整形な楕円形、断面形状は逆台形状を呈する。埋土は黒色土である。遺物の出土は見られなかった。

時　期　出土遺物もなく時期の比定は難しいが、埋土の状況から中世～近世とする。

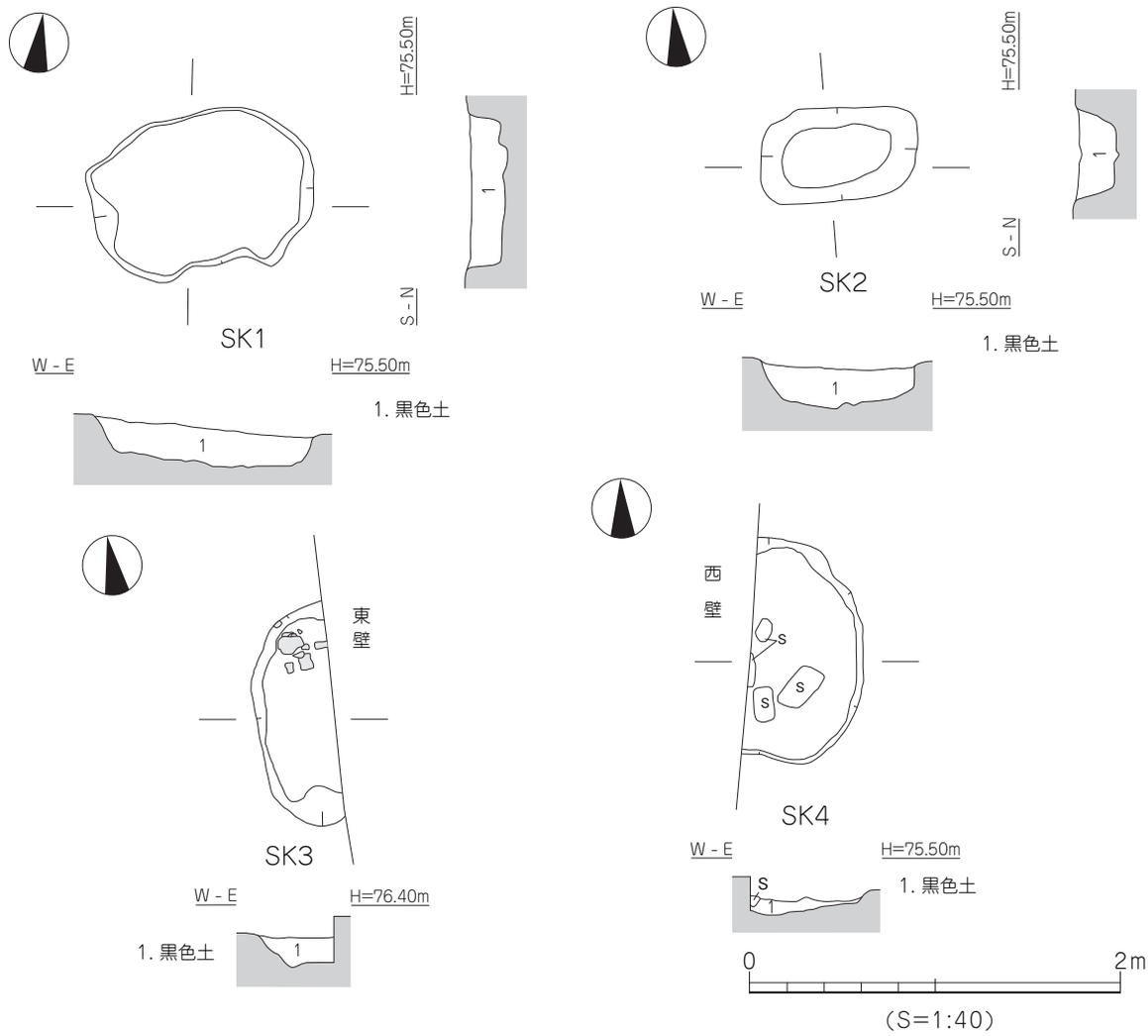
ＳＫ２（第 109 図）

調査区南部中央ＳＫ１の東に位置する。土坑の規模は長径 0.84 m、短径 0.50 m、深さ 21 ㎝を測る。平面形態は東西にやや長い隅丸の方形、断面形状は舟底状を呈する。埋土は黒色土である。遺物の出土は見られなかった。

時　期　出土遺物もなく時期の比定は難しいが、埋土の状況から中世～近世とする。

ＳＫ３（第 109 図、図版 57）

調査区南東部に位置し、東半は調査区外に展開する。土坑の規模は長径 1.21 m、検出短径 0.42 m、深さ



第 109 図　ＳＫ１・２・３・４測量図

16 ㎝を測る。平面形態はやや南北に長い楕円形、断面形状は舟底状を呈する。埋土は黒色土である。遺物は縄文土器及び石器素材の剥片が出土している。

出土遺物（第 110 図、図版 58）

４～ 14 は縄文土器。口縁から底部まで土器の全容を知れるものはない。15 ～ 18 はサヌカイト製の石器薄片である。４は深鉢の口縁部片。口縁部は内傾気味に立ち上がり外反し、端部は端面に指押さえによる浅い窪みを持つ。調整は内外面ともにナデ。外面に、おそらくは沈線３条１単位と思われる斜格子文が施され、その直下、頸部付近に段を有する。５は深鉢の口縁部片である。外反する口縁に端部は端面に指押さえによる浅い窪みを持つ。調整は内外面ともにナデ。外面にやや幅の狭い沈線４条１単位と思われる斜格子文が施されてある。６は深鉢の口縁部片である。外反する口縁部に端面は指押さえによる浅い窪みがやや広い間隔で施される。外面にはおそらくは斜格子文と思われる施文がなされる。調整は内外面ともナデ。７は小片のため器形を判断しがたいが深鉢と思われる。やや外反する口縁に、端面は半裁竹管による刺突文。外面にはごく浅い沈線によるやや幅広の斜格子文が施される。外面にミガキ調整、内面はナデられる。８は口縁部片で直立して立ち上がる口縁は端部で内傾し、端面には指押さえによる浅い窪みを持つ。調整は外面に条痕調整の後ナデ、内面はナデられる。９は口縁部の一部と思われ、器形は判断しがたいが深鉢と

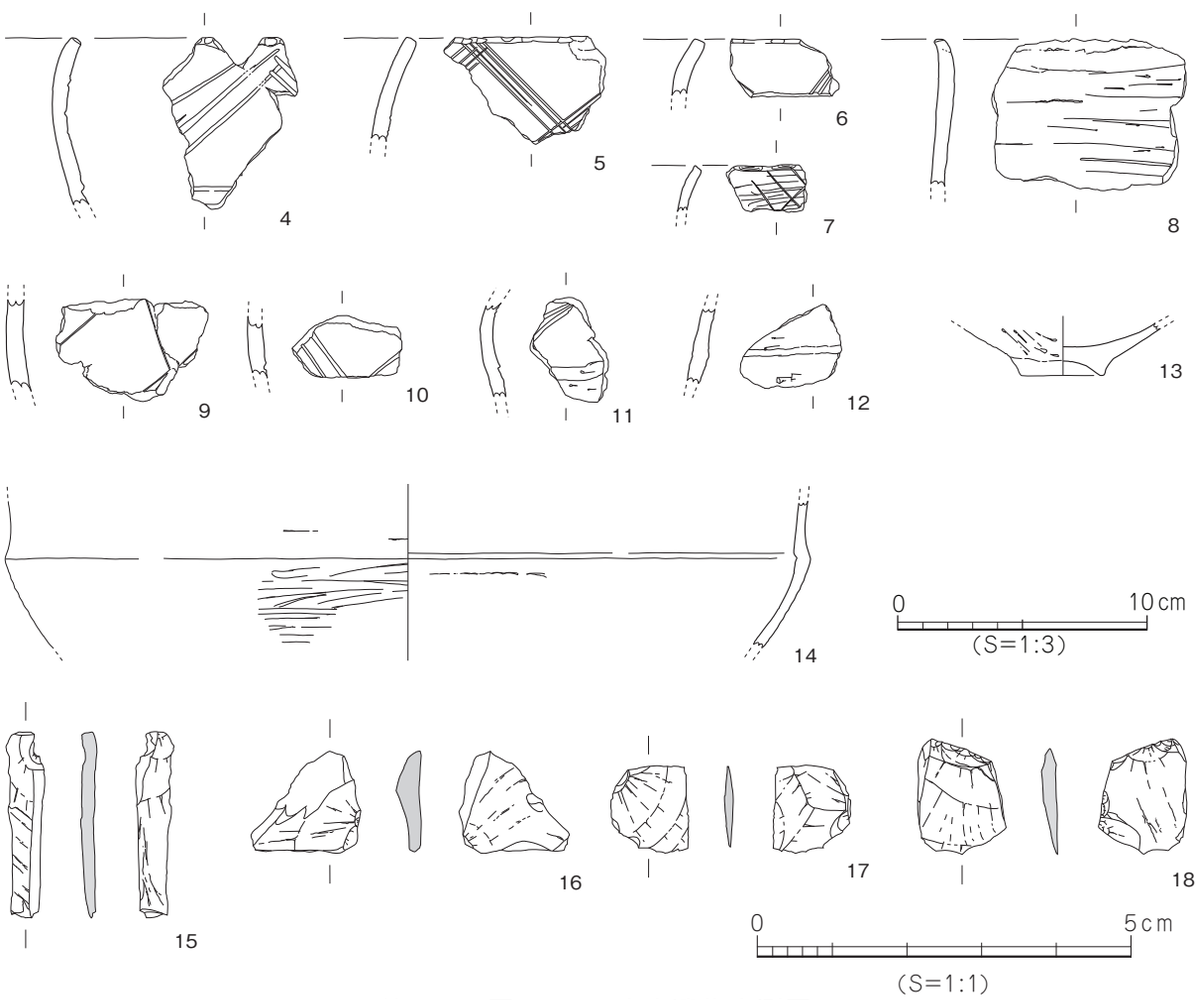
思われる。わずかに外反する口縁部、外面ミガキの後ナデ。内面はナデられる。外面にやや広い間隔で斜格子文が施される。10 は口縁部の一部、器形は判断しがたいが深鉢と思われる。外面に斜格子文。内外ともにナデ。11 は胴部～頸部片で、器形は判断しがたいが深鉢と思われる。調整は内面ナデ、外面頸部はナデ、胴部はケズリ。外面には斜格子文、直下に横方向にやや幅広の沈線。12 は胴部～口縁部片。調整は内面はマメツしており不明。外面は胴部ケズリ、頸部はケズリの後ナデ。頸部と胴部の境に浅い 1 条の沈線が施される。13 は深鉢の底部。内外ともにマメツして調整は不明。14 は浅鉢の胴部片である。胴部に稜を持ち、胴部から胴下半は緩やかにすぼみ、口縁部は内傾気味にくびれ外反する。端部は欠損し、内面には段を有する。調整は外面上半にミガキ、下半は条痕調整後ナデ。内面はナデられる。15 ～ 18 は、サヌカイト製の素材剥片である。

時　期　出土遺物から縄文晩期と考える。

ＳＫ４（第 109 図）

調査区中央北西に位置し、西半は調査区外に展開する。土坑の規模は長径 1.18 m、検出短径 0.60 m、深さ８cmを測る。平面形態は南北にやや長い不整形な楕円形で、断面形状は皿状を呈する。埋土は黒色土である。遺物は弥生土器小片が出土している。

時　期　出土遺物から弥生時代と考えるが遺物が小片のため、詳細な時期の設定はできない。



第 110 図　SK3 出土遺物実測図

２）石製施設遺構

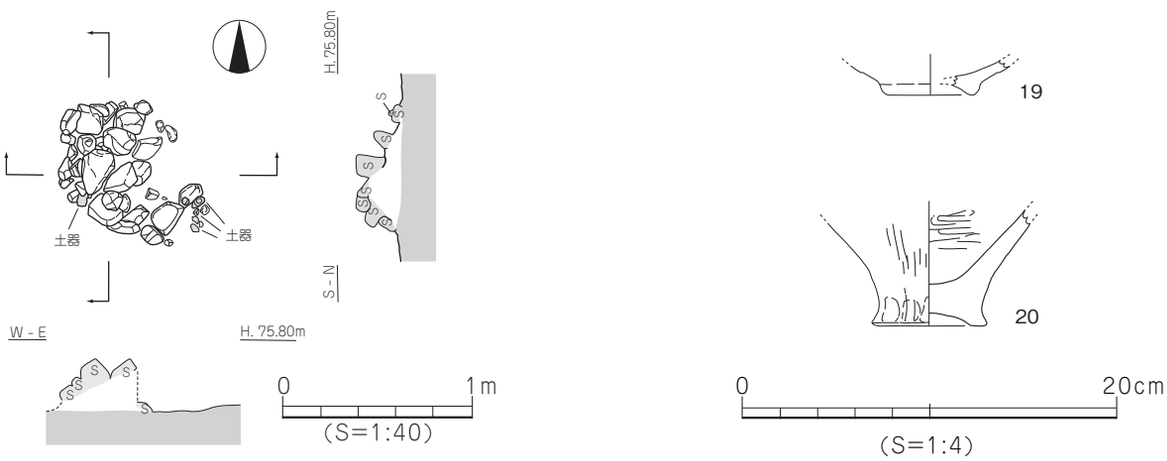
集石遺構（第 111 図、図版 54）

調査区北部中央やや東に位置する。遺構の規模は長軸 0.96m、短軸 0.30m を測り、拳大～人頭大の円礫をやや円形に配置している。石積みの高さは 28cm を測る。石積みの床面は平坦で、特段遺構等は検出はなかった。遺構の周辺からは縄文土器・弥生土器の底部片他が出土しているが、集石遺構は第Ⅱ層からの構築であり、埋土観察からも遺物による時期を比定し得る可能性は低い。

出土遺物（第 111 図、図版 59）

19 は縄文土器深鉢の底部片。やや低い底部で断面は「ハ」の字状を呈する。内外面ともにナデ。20 は弥生土器甕形土器の底部片。やや低いくびれの上げ底で、底部接地面は平坦。外面はミガキ・ナデ、内面はナデ。

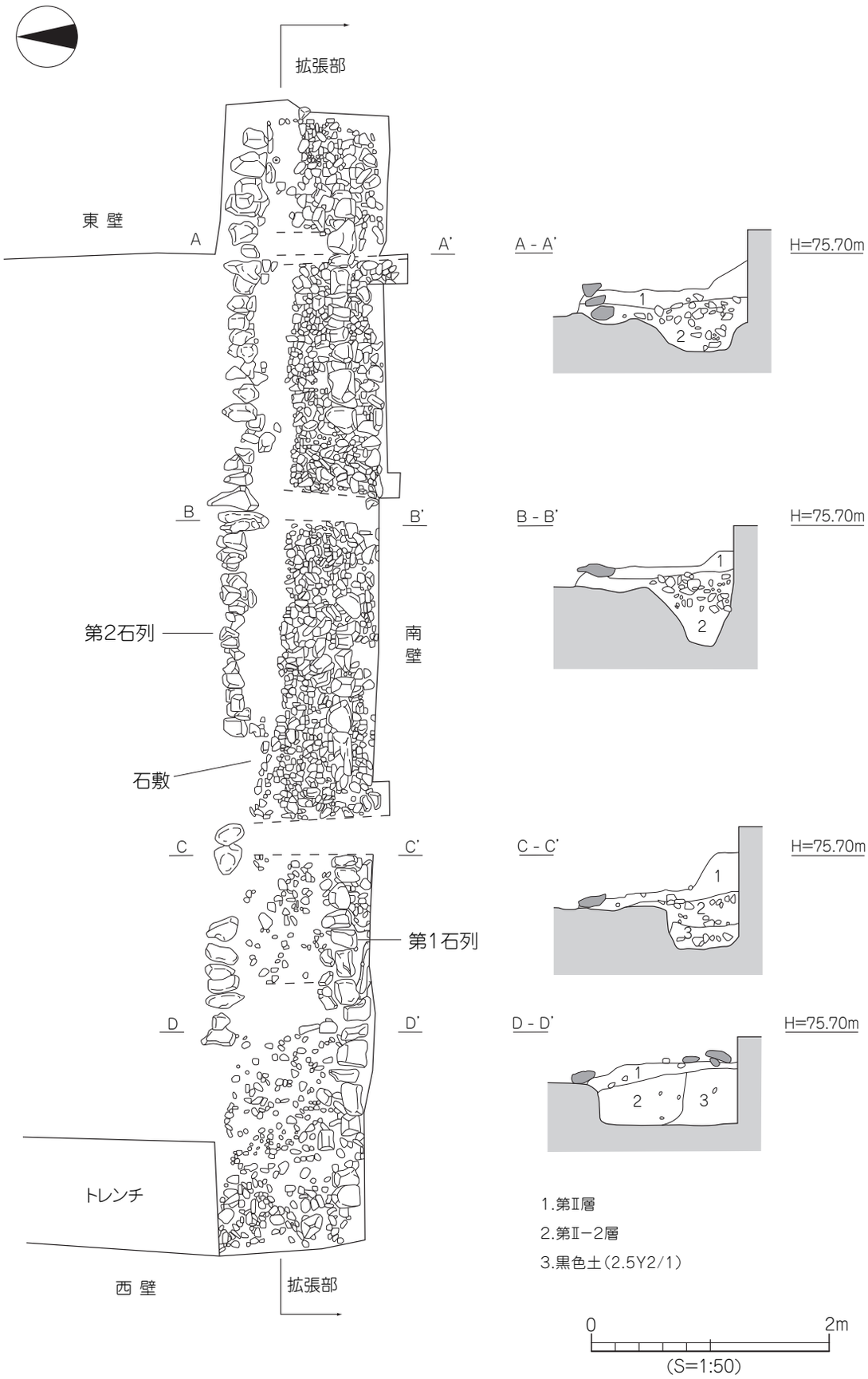
時　期　出土遺物は遺構に伴うと考えられる可能性は低く、遺構検出層と埋土から近世と考えられる。



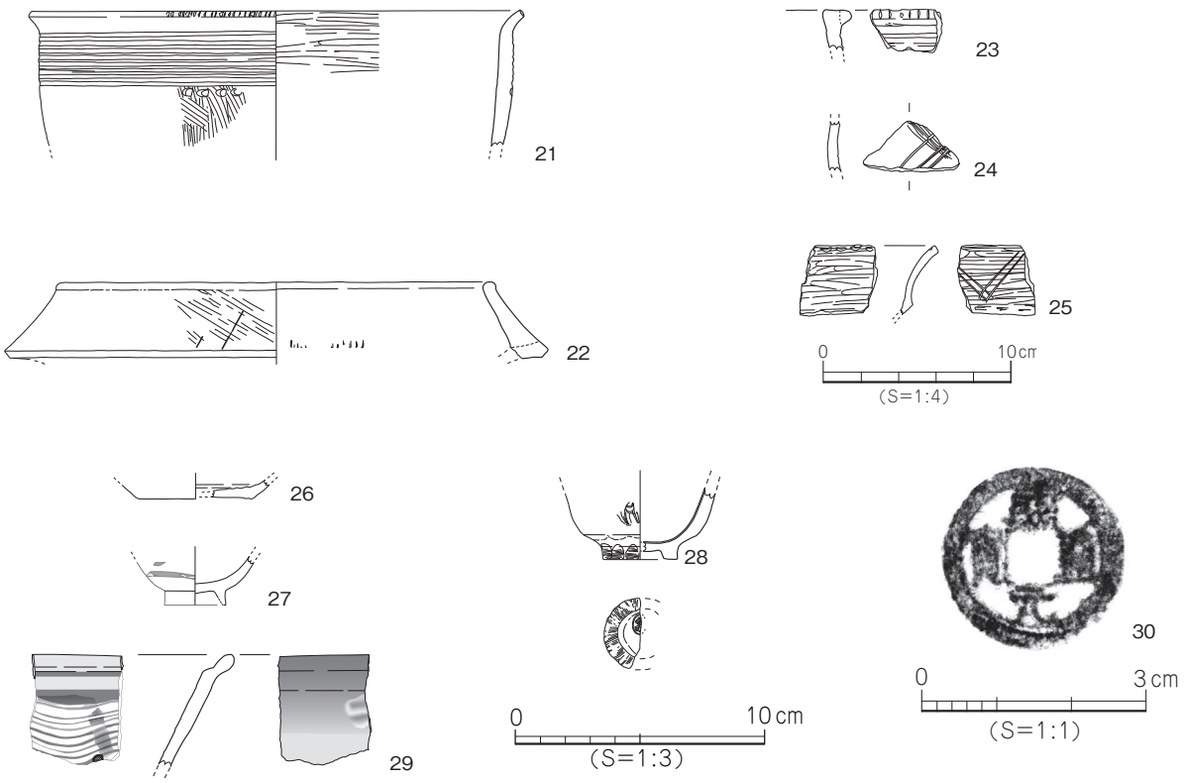
第 111 図　集石測量図・周辺出土遺物実測図

石列および石敷遺構（第 112 図、図版 55）

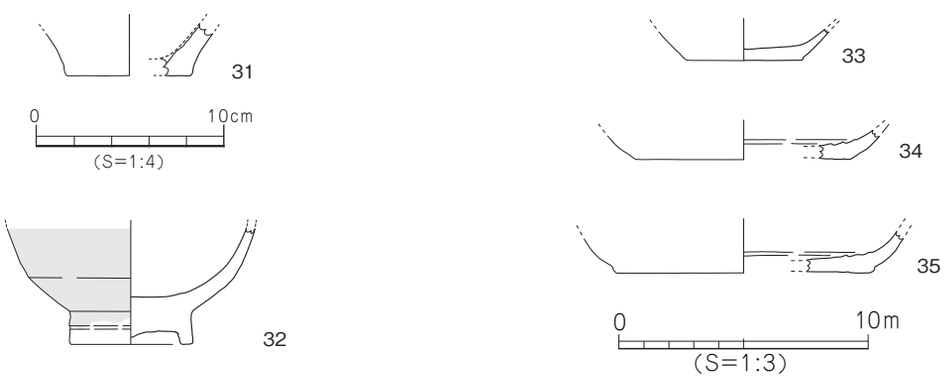
調査区南端部に位置する。石列は東西方向に高低差を持って２条検出し、南側を第１石列、北側を第２石列とした。また第１石列の下、第２石列底辺とほぼ同レベルで、玉砂利状の敷石を確認した。石列の規模は第１石列が検出長約 9.0m、幅 0.10 ～ 0.25 m、深さ 0.14m 前後を測る。第２石列が検出長約 7.70m、幅 0.14 ～ 0.30m、深さ 10 ㎝～ 30 ㎝を測る。敷石の規模は、東西検出長 9.60m、南北検出長 0.40m ～ 1.10m、深さ 0.2m ～ 0.28m を測る。東から中央部付近までは、第２石列より南に 20 ㎝～ 25 ㎝の間は敷石が存在せず、敷石は調査区外南部にも展開するものと考えられる。ただし、南に隣接する既往調査「南梅本長広遺跡」では、この敷石の延長と考えられる遺構は確認されていないことから、遺構自体は大規模なものではなく幅が１m～２m程度の規模で東西に長く展開するものと思われる。石列は、両石列とも東西に平行を保ちながら、やや北に振る東西方向に走る。第２石列は石材の長辺を南北方向に向け、小口を比較的南辺に揃えるように配置される。第１石列はそれに対し、石材の長辺を東西方向に置く場合もあり、南北・東西方向がやや混在している。ただし、第２石列と同じくやはり小口を比較的南辺に揃えるように配置される傾向は同様である。また、第１石列下、敷石の下部には溝状の掘り込みが確認された。掘り込みは、検出幅 0.52 ～ 1.14m、深さ約 0.20 ～ 0.30m を測る。断面形状は逆台形状を呈する。出土遺物は第２石列上層より、初鋳年 621 年の「開元通宝」が出土。その他第１石列および敷石、掘り込みからは、縄文



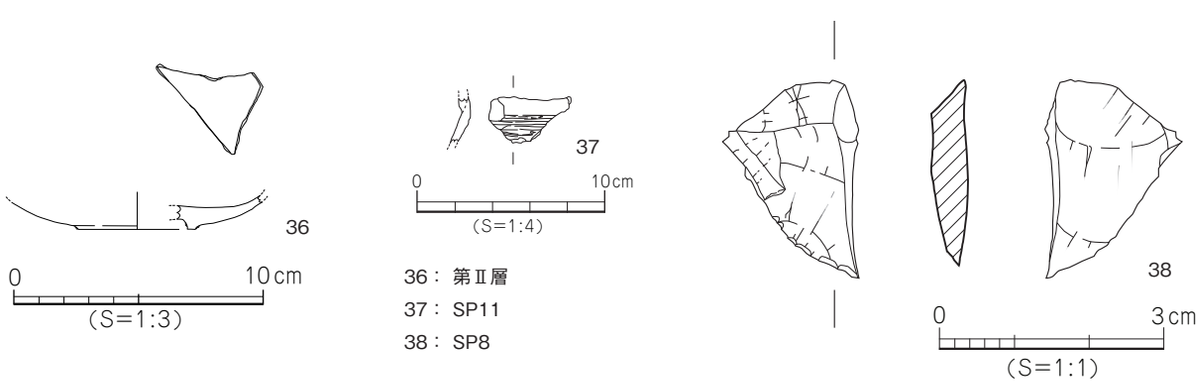
第 112 図　石列・石敷測量図



第 113 図　石列・石敷出土遺物実測図



第 114 図　石敷下出土遺物実測図



36：第Ⅱ層
37：SP11
38：SP8

第 115 図　SP ８・11・第Ⅱ層出土遺物実測図

土器口縁部片１点と弥生土器片、須恵器甕胴部・頸部片、土師皿片、および陶磁器片が出土している。

出土遺物（第 113 図、図版 59）

21 ～ 23 は弥生土器。21 は甕形土器の体部～口縁部片である。やや弱い折れ曲げ口縁に、端面刻目。口縁部直下には、８条のヘラ描き沈線文と刺突文が巡る。外面は頸部～胴部はヨコナデ、内面はミガキとナデ。弥生時代前期末。22 は弥生土器複合口縁壺の口縁拡張部片である。端部はやや肥厚し、口縁接合部分は外面が「コ」の字状を呈する。外面はマメツするがナデ、ハケメ、内面はヨコナデ。弥生時代後期前半。23 は甕形土器の口縁部片である。口縁端部は断面三角形の貼り付け口縁で、端面に刻目を持ち、口縁直下外面にヘラ描き沈線文。内外面ともにヨコナデ。弥生時代中期前葉。24・25 は縄文土器口縁部片。24 は破片のため器形は特定しがたいが深鉢と思われる。やや外反する。外面に２条または３条１単位の斜格子文が施される。外面ナデ、内面ヨコナデ。縄文時代晩期。25 は浅鉢である。「く」の字状の口縁部は外反し、端部は平坦に仕上げる。外面に２条１単位の斜格子文。内面口唇部には横半月形の刺突文と口縁部と胴部の境に１条の沈線を施す。調整は外面口縁部はミガキ、胴部は条痕。内面はミガキ。26 は土師皿の底部片である。底部回転糸切りで、内面にヘラ状工具により削られた段を有する。内外面とも回転ナデ。13 世紀以降。27 は陶器の小椀である。外面は被熱し変色する。底部上に圏線１条。近世。28 は京焼風陶器の徳利（？）の底部片である。内外面に施釉される。胴部に何らかの意匠が施されるが、判別できない。やや厚めの高台に端部は粗く削り出される。底部外面に印銘が見られるが、全容が不明で判読できない。17 世紀後半。29 は肥前系の鉢口縁部片である。口径の復元はできないがやや大きめの鉢であろう。外傾して立ち上がる体部、口縁は外方に一旦折れ曲がり段をなす。端部は先細りながら丸く仕上げる。内面は白土による波状の刷毛目文様に黄褐色の施釉。外面黒褐色の釉に一部白土がかかり、内外ともに透明釉が施される。18 世紀中頃。30 は開元通宝で、裏面は無文。初鋳年が 621 年。

時　期　遺構の時期は出土遺物から中世～近世である。

石敷遺構（第 112 図、図版 55）

調査区南部端に位置し、第１石列の下に設置される。遺構の規模は長さ 9.60 m、幅 0.40 ～ 1.10 m、深さ 10 ～ 28cm をはかり、敷かれる礫群東に向かってやや少なくなる傾向が見られる。石敷遺構と第２石列底部の比高差はほぼほぼ同レベルであり、土層観察からも石敷遺構が築かれた後に第２石列を構築、最終的に第１石列が組まれた事が理解できる。

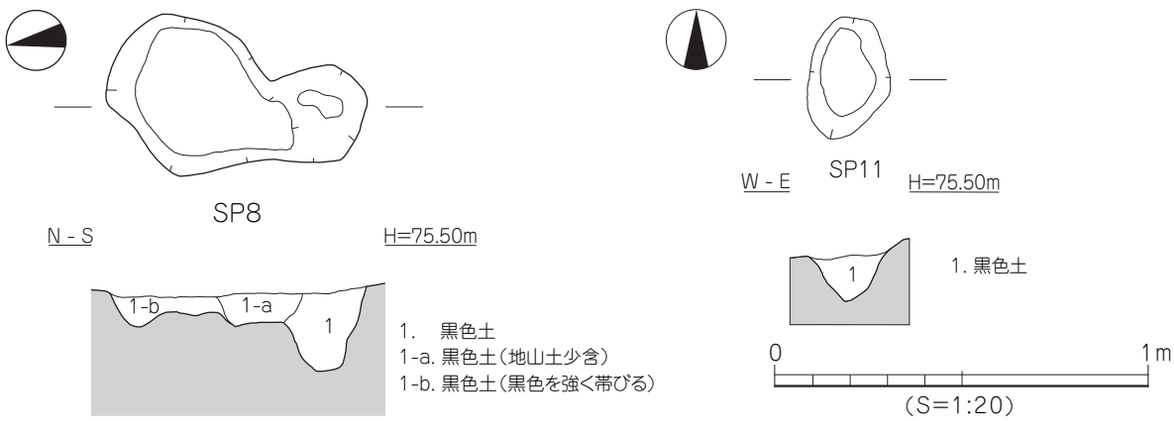
出土遺物（第 114 図、図版 59）

31 は弥生土器底部片である。底部は平底。32 は唐津碗の底部片である。内外ともに施釉されるが、外面は被熱し変色する。粗い高台はやや厚く、回転削り出しの露胎である。33 ～ 35 は土師皿で、回転糸切り。内面にヘラ状工具により削られた段を有する。内外ともに回転ナデ。33 は内外面ともに被熱痕があり、灯明皿、灰落としと考えられる。13 世紀以降。

時　期　出土遺物から中世～近世とする。

柱穴（SP）（第 116 図）

ＳＰ８は調査区北部集石遺構の西に位置する。柱穴の規模は長径 0.70 m、短径 0.21 m、深さ 20cm 内外を測り、平面形態は南北に長い不整形である。断面形状は舟底～逆台形状を呈し、埋土は黒色土である。遺物は埋土中より石器素材剥片が出土した。



第 116 図　SP ８・11 測量図

ＳＰ 11 は調査区北部集石遺構の南西に位置する。柱穴の規模は長径 0.33 m、短径 0.21 m、深さ 12cm 内外を測り、平面形態は円形である。断面形状は舟底状を呈し、埋土は黒色土である。遺物は埋土中より縄文土器浅鉢片、弥生土器細片が出土した。

出土遺物（第 115 図、図版 58・59）

36 は第Ⅱ層中第１石列上部からの出土の遺物で、染め付けの皿である。低い高台に砂目が付き、見込みには圏線１条。17 世紀代。37 はＳＰ 11 出土の縄文土器浅鉢の胴部片である。内傾する体部に、外面上半ナデ、下半は条痕が施される。内面はナデで段を持つ。38 はＳＰ８出土のサヌカイト製の素材剥片である。

時　期　ＳＰ 11 は出土遺物が小片が多く、詳細な設定はできず弥生時代とする。他のＳＰも埋土がＳＰ 11 と同様な土色を持つものが多く、柱穴群の多くは弥生時代の可能性がある。ただし、柱穴からの出土遺物が希薄であるため確定的ではない。

４．小結

今回の調査では、中世～近世を主な所属時期とする集落関連遺跡を確認した。Ａ区で見つかった暗渠は、おそらくは旧家屋建設時前のものとも考えられる。また、Ｂ区から確認された石列２条・敷石遺構は、石列の各トレンチの土層観察から、現時点ではおそらく同時構築物ではなく、若干の時期差を持って構築されたと考える。遺構の性格については遺構の全容が不明であるため明確ではないが、何らかの区画的なものまたは道路施設等の一部である可能性が考えられる。Ｂ区の集石遺構は、周辺地域で古くから大小の塚の存在が知られており、今回表土除去中にその存在を確認をしたこともあり、実質的なお塚以外のものが考えられる。その他、Ｂ区において検出された縄文時代晩期の遺物が出土したＳＫ３は、周辺地域での出土例が少ない中にあって資料価値は高く、周辺での調査に於いても検出例が増加する可能性を期待させる遺構である。今後の周辺地域での調査の積み重ねによる資料の追加を期待したい。

近世の出土遺物について、隣接する「南梅本長広遺跡」では東温市に所在する西岡古窯跡に関連する可能性を残す遺物の出土がある。今回の調査においても陶磁器片の出土があり、その関連について課題が残るとともに、今後周辺での調査が注目される。

以上のように「南梅本長広遺跡２次調査地」では、悪社川の北、河岸段丘上に展開する中世～近世の集落関連遺構・遺物が、南に隣接する南梅本長広遺跡に続き多く確認され、当時の集落経営構造の一端が解明された。今後周辺で行われる発掘調査の貴重なデータになるものである

遺物観察表　－凡例－

（1）以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。
遺物観察表は小笠原善治、金子育代が作成した

（2）遺構一覧表の出土遺物欄は遺物を略記した・
例）土師→土師器、須恵→須恵器

（2）遺物観察表の各掲載について

法　量　欄　（　）：復元推定値。

形態・施文欄　土製品の各部名称を略記した。
例）口→口縁部、頸→頸部、胴→胴部、底→底部

胎　土　欄　胎土欄では混和剤を略記した。
例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土、金→金雲母。
（　）中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。
例）砂・長（1～3）→「1～3mmの砂粒・長石を含む」である。

焼　成　欄　焼成欄は焼成具合を略記した。
例）◎→良好、○→良、△→不良。

表16　A区土坑一覧

土坑（SK）	地　区	平面形	断面形	規　模（m）長さ（長径）×幅（短径）×深さ	床面積（㎡）	埋 土	出土遺物	時 期	備　考
1	B・3	不整形	皿 状	0.90 × 0.84 × 0.05	0.63	黒褐色土		中世～近世	

表17　A区溝一覧

溝（SD）	地　区	断面形	規　模（m）長さ×幅×深さ	方 向	埋 土	出土遺物	時 期	備　考
1	A～D・2～3	皿 状	7.75 × 2.28 ～ 3.00 × 0.02 ～ 0.17	東 西	黒褐色土 灰黄褐色土	弥生・須恵 陶器 土師質土器	中世～近世	調査区外に延びる。
2	A～B・4	皿 状	2.62 × 0.13 ～ 0.36 × 0.03	東 西	黒褐色土		中世～近世	調査区外に延びる。
3	B～C・3～4	皿 状	4.74 × 0.13 ～ 0.45 × 0.01 ～ 0.03	東西 南東・北西	黒褐色土		中世～近世	
4	A～B・4～5	舟底状	2.40 × 0.16 ～ 0.47 × 0.02 ～ 0.06	東 西	褐灰色土		中世～近世	SX1に切られる。 調査区外に延びる。

表18　A区性格不明遺構一覧

性格不明遺構（SX）	地　区	平面形	断面形	規　模（m）長さ（長径）×幅（短径）×深さ	床面積（㎡）	埋 土	出土遺物	時 期	備　考
1	B～D・ 4～5	不整形	皿 状	0.90 × 0.84 × 0.05	0.63	灰黄褐色土 黒褐色土		中世～近世	SD4を切る。調査区外に展開する。

表19　A区石列遺構一覧

石列遺構	地　区	規　模（m）長さ（長径）×幅（短径）×深さ	埋 土	出土遺物	時 期	備　考
暗渠	B～D・2	5.17 × 0.38 × 0.22	黒褐色土 灰黄褐色土	陶 器	近 世	調査区外に延びる。

表 20　A区出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（㎝）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
1	焙烙	口径（41.9） 残高　2.5	口縁は水平に伸び端部は下垂する。	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ	黒褐色 灰黄褐色	密 ◎		
2	不明	口径（15.0） 残高　2.8	口縁部片か？	ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～2) ○		
3	坏蓋	口径（12.4） 残高　3.0	天井部から、ややなだらかに弧を描きながら口縁部に下がり、口縁端部は尖り気味に丸い。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 灰色	密 ◎		

表 21　B区土坑一覧

土坑（SK）	地区	平面形	断面形	規模（m）長さ（長径）×幅（短径）×深さ	床面積（㎡）	埋土	出土遺物	時期	備考
1	B・12～13	不整楕円形	逆台形状	1.22 × 0.85 × 0.20	0.87	黒色土		中世～近世	
2	C・13	隅丸方形	舟底状	0.84 × 0.50 × 0.21	0.38	黒色土		中世～近世	
3	D・13	楕円形	舟底状	1.21 × 0.42 × 0.16	0.43	黒色土	縄文・石器	縄文晩期	調査区外に展開する。
4	A・10	不整楕円形	皿状	1.18 × 0.60 × 0.08	0.63	黒色土	弥生	弥生	調査区外に展開する。

表 22　B区石製施設一覧

遺構名	地区	規模（m）長さ×幅×高さ	方向	埋土	出土遺物	時期	備考
集石	C・9～10	0.96 × 0.30 × 0.28	調査区北部		縄文・弥生	近世	
第１石列	A～D・14	9.00 × 0.10 ～ 0.25 × 0.14	東西		弥生・陶器	中世～近世	
第２石列	A～D・14	7.70 × 0.14 ～ 0.30 × 0.30	東西		縄文・弥生 土師・陶器 銭貨	中世～近世	
石敷	A～D・14	9.60 × 0.40 ～ 1.10 × 0.28	東西		弥生・土師 陶器	中世～近世	

表 23　B区 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（㎝）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
4	深鉢	残高　6.9	口縁端面には指押さえによる浅い窪みを持つ。沈線３条１単位と思われる斜格子文が施される。	ナデ	ナデ	淡黄橙色 黒褐色	石・長（1～3） ○		
5	深鉢	残高　4.2	外反する口縁端面には指押さえによる浅い窪みを持つ。沈線４条１単位と思われる斜格子文が施される。	ナデ	ナデ	黒褐色 黒色	石・長（1～3） 金ウンモ ○		
6	深鉢	残高　2.3	外反する口縁端面には指押さえによる浅い窪みを持つ。外面には斜格子文と思われる施文がなされる。	ナデ	ナデ	黒褐色・ 淡黄橙色 黒褐色	石・長（1） ◎		
7	深鉢	残高　1.9	やや外反する口縁端面には、半裁竹管による刺突文。外面にはごく浅い沈線による斜格子文が施される。	ミガキ	ナデ	褐色 黒色	石・長（1～3） 金ウンモ ◎		
8	深鉢	残高　6.1	直立して立ち上がる口縁は端部で内傾し、端面には指押さえによる浅い窪みを持つ。	条痕→ナデ	ナデ	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長（1～3） 金ウンモ ◎		
9	深鉢	残高　3.7	わずかに外反する口縁部。	ミガキ→ナデ	ナデ	灰黄褐色 黒褐色	石・長（1～2） ○		
10	深鉢	残高　2.5	口縁部。外面に斜格子文が施される。	ナデ	ナデ	橙褐色 暗灰黄色	石・長（1～2） 金ウンモ ◎		

B区 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（㎝）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
11	深鉢	残高　4.0	胴部～頸部片。外面には斜格子文、直下に横方向にやや幅広の沈線。	頸）ナデ 胴）ケズリ	ナデ	黄橙褐色 黒褐色	石･長（1～3） ◎		
12	深鉢	残高　3.4	胴部～口縁部。頸部と胴部の境に浅い1条の沈線が施される。	頸）ケズリ→ナデ 胴）ケズリ	マメツ	橙褐色 橙褐色	石･長（1～2） ○		
13	深鉢	底径　3.3 残高　2.1	窪み底の底部。	マメツ	マメツ	黒褐色 黒褐色	石・長（1） ◎		
14	浅鉢	残高　5.9	胴部に稜を持ち、口縁部は内傾気味にくびれ外反する。内面には段を有する。	ミガキ 条痕→ナデ	ナデ	茶褐色 黄茶褐色	石・長（1） ○		
19	深鉢	底径（4.5） 残高　1.8	やや低い底部で断面は「ハ」の字状を呈する。	ナデ ヨコナデ	ナデ	黄橙褐色 褐灰色	石･長（1～3） 金ウンモ ○		
20	甕	底径　5.5 残高　6.2	やや低いくびれの上げ底で、底部接地面は平坦に仕上げる。	ミガキ ヨコナデ 指頭痕	ミガキ ナデ	橙褐色 にぶい橙褐色	石･長（1～4） ◎	黒斑	
21	甕	口径（26.0） 残高　7.3	やや弱い折れ曲げ口縁に、端面刻目。外面口縁部直下に、8条のヘラ描き沈線文と刺突文が巡る。	ヨコナデ ハケ	ミガキ ナデ	にぶい赤褐色 茶褐色	石･長（1～3） ◎		
22	壺	口径（23.0） 残高　4.1	口縁端部はやや肥厚し、口縁接合部分の外面は「コ」の字状を呈する。	ハケ（4本/cm） ヨコナデ マメツ	ヨコナデ （工具痕）	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石･長（1～3） ◎		
23	甕	残高　2.2	口縁部外面に断面三角形の凸帯を貼り付ける。端面に刻目を持ち、口縁直下にヘラ描き沈線文を施す。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 橙色	石･長（1～3） ○		
24	深鉢	残高　2.7	やや外反する口縁部。外面に2条または3条1単位の斜格子文が施される。	ナデ	ヨコナデ	褐色 黒褐色	石･長（1～2） 金ウンモ ○		
25	浅鉢	残高　3.8	「く」の字状の口縁部は外反し、端部は平坦に仕上げる。外面に斜格子文、内面口唇部には横半月形の刺突文が施される。	口）・頸）ミガキ 胴）条痕	ミガキ	黒褐色 黒褐色	石・長（1） ◎		
26	坏	底径（6.0） 残高　1.0	内面にヘラ状工具により削られた段を有する。	回転ナデ 底）回転糸切り	回転ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長（1） ○		
27	小碗	底径（3.3） 残高　2.6	陶器。底部上に圏線1条巡らす。	施釉 マメツ	施釉	灰白色 灰黄色	密 ◎		
28	徳利？	底径（2.9） 残高　2.9	京焼風陶器。やや厚めの高台に端部は粗く削り出される。底部外面に印銘が見られる。	施釉 底）ケズリ→ナデ	施釉	褐灰色・ 浅黄橙色 灰黄褐色	密 ○		
29	鉢	残高　4.4	肥前系。外傾して立ち上がる体部、口縁部は外方に一旦折れ曲がり段をなす。端部は丸く仕上げる。	施釉 回転ナデ	施釉	暗褐色 暗褐色・ 灰オリーブ色	密（石・3） ◎		
31	甕	底径（6.6） 残高　2.2	平底の底部。	ナデ	剥離	橙色 橙色	石･長（1～3） ○		
32	碗	底径　4.8 残高　4.6	粗い高台はやや厚く、回転削り出しの露胎である。	施釉 底）工具による 回転ナデ	施釉	乳灰白色・ 黄橙色 乳灰橙色	密 ◎		
33	灯明皿 または 灰落とし	底径　4.6 残高　1.2	内面にヘラ状工具により削られた段を有する。被熱痕がある。	回転ナデ 底）回転糸切り	回転ナデ ナデ	橙色 橙色	石・長（細粒） ◎	黒斑	
34	坏	底径（8.6） 残高　1.2	内面にヘラ状工具により削られた段を有する。	回転ナデ→ナデ 底）回転糸切り	回転ナデ	淡黄橙色 淡黄橙色	密（石・5） ◎		

B区 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（㎝）	形態・施文	調整		色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
35	坏	底径（10.2） 残高　1.7	内面にヘラ状工具により削られた段を有する。	回転ナデ 底）回転糸切り	回転ナデ	淡黄橙色 淡黄橙色	石・長（1） ◎		
36	皿	底径（4.7） 残高　1.3	染め付けの皿である。低い高台に砂目が付き、見込みには圏線１条が巡る。	施釉	施釉	淡緑灰色 淡緑灰色	精良 ◎		
37	浅鉢	残高　2.5	内傾する体部。内面には段を持つ。	ヨコナデ 条痕	ナデ	褐色 にぶい赤褐色	石･長（1～2） ○		

表 24　B区 出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ（㎝）	幅（㎝）	厚さ（㎝）	重さ（g）		
15	素材剥片		サヌカイト	5.00	1.00	0.38	1.63		
16	素材剥片		サヌカイト	2.90	2.75	0.60	4.02		
17	素材剥片		サヌカイト	2.35	2.05	0.25	1.36		
18	素材剥片		サヌカイト	3.10	2.85	0.45	3.79		
38	素材剥片		サヌカイト	2.65	1.80	0.50	1.95		

表 25　B区出土遺物観察表　銭貨

番号	銭名	初鋳年	銭径 (mm)	孔径 (mm)	外縁 (mm)	内縁厚 (mm)	重量（g）	備考	図版
30	開元通寶	621	24.0	7.0	1.3	1.2	2.5		

第８章　自然科学分析

株式会社　古環境研究所

Ⅰ．南梅本上方遺跡１区・２区における樹種同定

１．はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

２．試料

試料は、１区と２区から採取された柱材 19 点、木片２点の合計 21 点である。試料の詳細を表 26 に示す。

３．方法

カミソリを用いて新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目）、接線断面（板目）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって 40 ～ 1000 倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

４．結果

表 26 に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

ツガ属　Tsuga　マツ科　（第 117 図－１）

仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞及び放射仮道管から構成される針葉樹材である。横断面：早材から晩材への移行は急である。放射断面：放射柔細胞の分野壁孔はスギ型でややヒノキ型の傾向を示し、１分野に２～４個存在する。放射仮道管が存在し、その壁には小型の有縁壁孔が存在する。わずかではあるが、樹脂細胞が存在する。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質より、ツガ属に同定される。ツガには、ツガ、コメツガがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で通常高さ 20 ～ 25 m、径 50 ～ 80cm である。材は耐朽、保存性中庸で、建築、器具、土木、薪炭などに用いられる。

マツ属複維管束亜属　Pinus subgen. Diploxylon　マツ科　（第 117 図－２・３）

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。横断面：早材から晩材への移行は急で、垂直樹脂道が見られる。放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質より、マツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属には、クロマツとアカマ

ツがあり、どちらも北海道南部、本州、四国、九州に分布する常緑高木である。材は水湿によく耐え、広く用いられる。

コウヤマキ　Sciadopitys verticillata Sieb. et Zucc.　コウヤマキ科　（第 118 図－４）

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。横断面：早材から晩材への移行は比較的ゆるやかで、晩材部の幅はきわめて狭い。放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、１～15 細胞高であるが多くは 10 細胞高以下である。

以上の形質よりコウヤマキと同定される。コウヤマキは福島県以南の本州、四国、九州に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ 30 m、径 80cm に達する。材は木理通直、肌目緻密で強靭、耐朽、耐湿性も高い。特に耐水湿材として用いられる。

アスナロ　Thujopsis dolabrata Sieb. et Zucc.　ヒノキ科　（第 118 図－５）

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。横断面：早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が存在する。放射断面：放射柔細胞の分野壁孔はスギ型からややヒノキ型を示し、1 分野に２～４個存在する。また放射柔細胞内に内容物が多い。接線断面：放射組織は単列で、樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりアスナロに同定される。アスナロは常緑高木で、本州、四国、九州に分布し、関東北部や木曽に比較的多い。日本特産の常緑高木で、通常高さ 40 m、径１ｍに達する。材は、耐朽、保存性が高く、建築など広く用いられる。特殊用途には輪島塗りなどの漆器木地がある。

ヤナギ属　Salix　ヤナギ科　（第 118 図－６）

横断面：小型で丸い放射方向にややのびた道管が単独あるいは２～３個放射方向に複合し、散在する散孔材である。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管相互の壁孔は交互状で密に分布する。放射組織は異性である。接線断面：放射組織は単列の異性放射組織型である。

以上の形質よりヤナギ属に同定される。ヤナギ属は落葉の高木または低木で、北海道、本州、四国、九州に分布する。

樹皮　bark

師部柔細胞、師部放射柔細胞が見られる。樹皮と考えられるが、樹種の同定には至らなかった。

５．所見

分析の結果、柱材ではマツ属複維管束亜属 14 点、コウヤマキ２点、アスナロ１点、ヤナギ属１点、樹皮１点、木片ではマツ属複維管束亜属１点、ツガ属１点が同定された。最も多い樹種はマツ属複維管束亜属であり、全体の 71％を占めている。

マツ属複維管束亜属には、土壌条件の悪い岩山や二次林を形成するアカマツと、砂地の海岸林を形成するクロマツとがある。どちらも水湿に良く耐える良材である。コウヤマキとアスナロは、温帯に分布する常緑高木で、耐湿性に特に優れる良材である。ツガ属は、暖温帯から冷温帯にまたがる温帯の中間域のやや痩せた尾根上に生育する針葉樹である。ヤナギ属は湿地や河辺などの水辺に多い落葉

広葉樹であり、比較的大きな材がとれるが、建築材としてはあまり用いられない。いずれも温帯ないし温帯下部の暖温帯に分布する樹種であり、当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能であったと考えられる。

文　献

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.

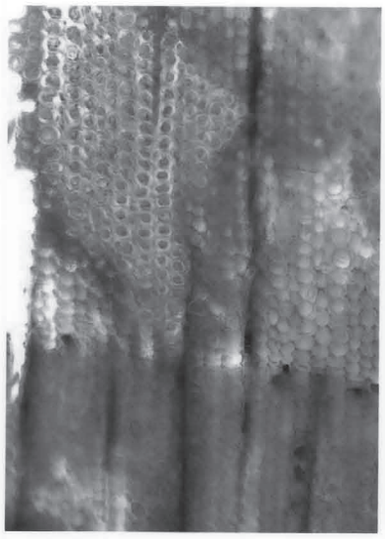
島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p.296

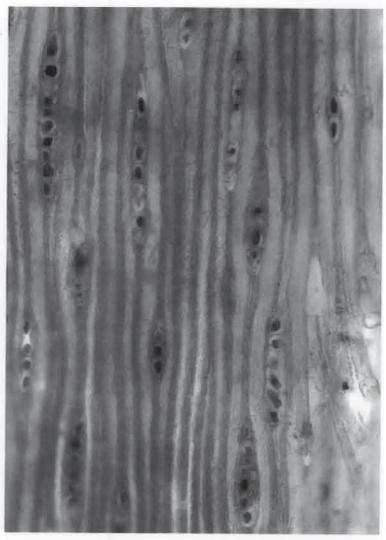
山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成，植生史研究特別第１号，植生史研究会，p.242

表 26　南梅本上方遺跡における樹種同定結果

No.	種類	出土遺構・層位	結果 (学名 / 和名)	
1	柱材	1 区　SP23	Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属
2	柱材	1 区　SP106	Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属
3	柱材	1 区　SP88	Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属
4	木片	1 区　SX2	Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属
5	柱材	1 区　SP4	Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属
6	柱材	1 区　SP79	Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜鳳
7	柱材	1 区　SP79	Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束直属
8	柱材	1 区　SP23	Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属
9	柱材	1 区　SP111	Sciadopitys verticillata Sieb. et Zucc.	コウヤマキ
10	柱材	1 区　SP106	Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属
11	柱材	1 区　SP112	Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属
12	柱材	1 区　SP18	bark	樹皮
13	柱材	1 区　SP111	Sciadopitys verticillataSieb. et Zucc.	コウヤマキ
14	柱材	1 区　SP32	Pinus subgen.Diploxylon	マツ属複維管束亜属
15	柱材	1 区　SP26	Pinus subgen.Diploxylon	マツ属複維管束亜属
16	柱材	1 区　SP137	Pinus subgen.Diploxylon	アツ属複維管束亜属
17	柱材	1 区　SP138	Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属
18	木片	2 区　出土遺構不明	Tsuga	ツガ属
19	柱材	2 区　SP157	Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属
20	柱材	2 区　SP158	Salix	ヤナギ属
21	柱材	2 区　SP159	Thujopsis dolabrata Sieb. et Zucc.	アスナロ

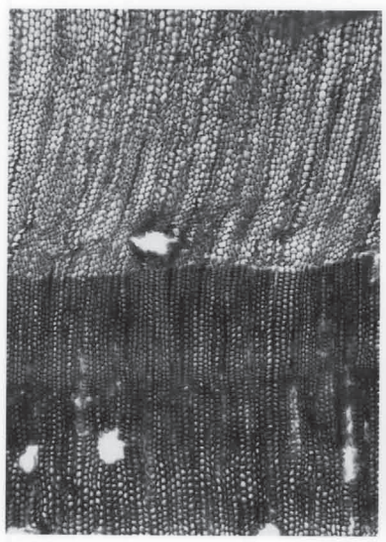
南梅本上方遺跡の木材　Ⅰ

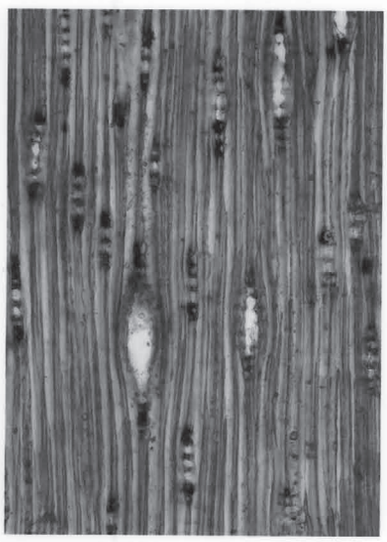




横断面 ―――― ： 0.2mm　放射断面 ―――― ： 0.1mm　接線断面 ―――― ： 0.2mm

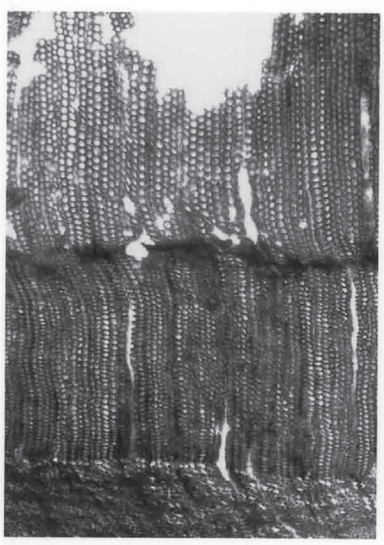
1．18　木片　ツガ属

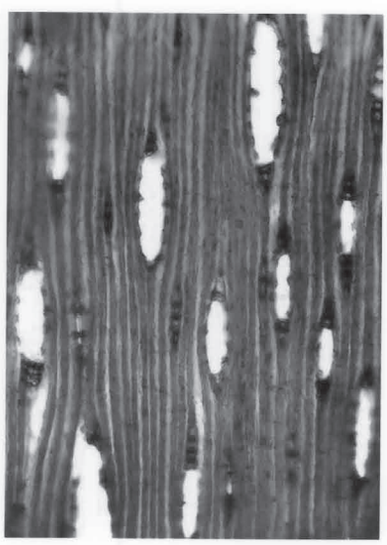




横断面 ―――― ： 0.5mm　放射断面 ―――― ： 0.05mm　接線断面 ―――― ： 0.2mm

2．14　柱材　マツ属複維管束亜属



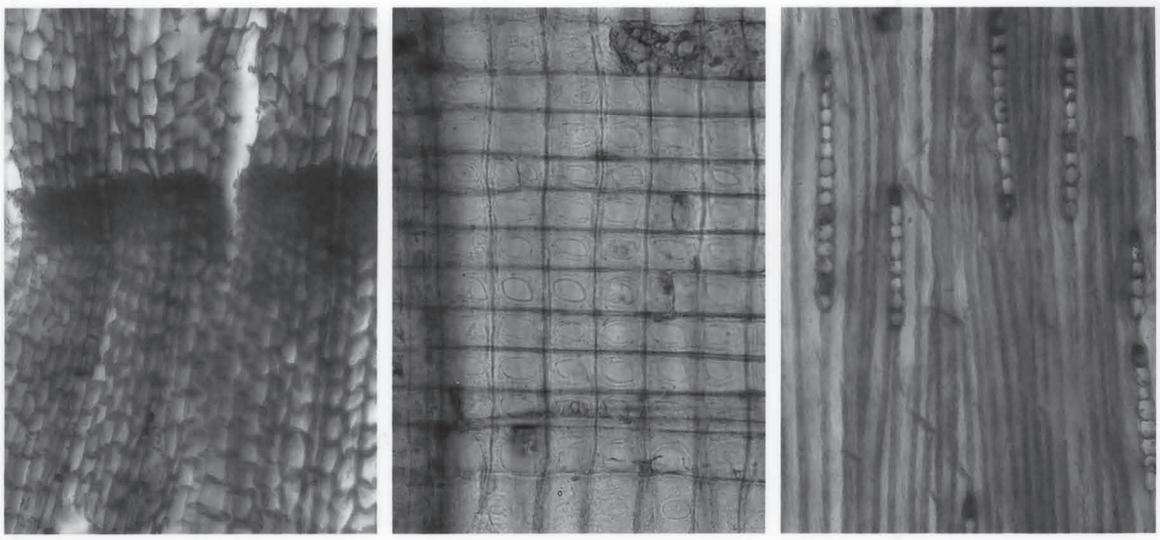


横断面 ―――― ： 0.5mm　放射断面 ―――― ： 0.05mm　接線断面 ―――― ： 0.2mm

3．16　柱材　マツ属複維管束亜属

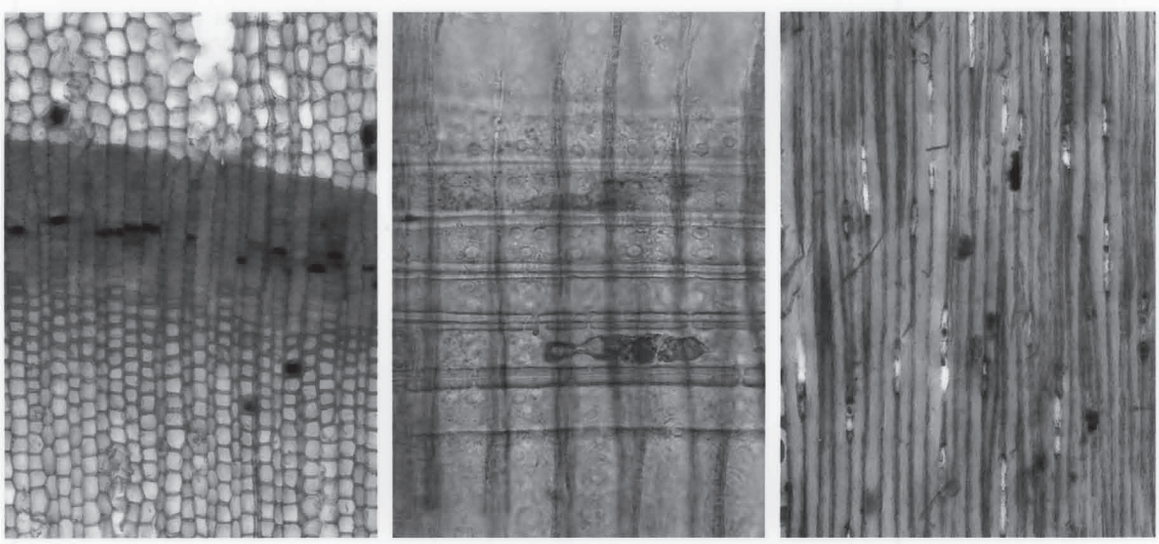
第 117 図　南梅本上方遺跡における樹種同定結果（1）

南梅本上方遺跡の木材 Ⅱ



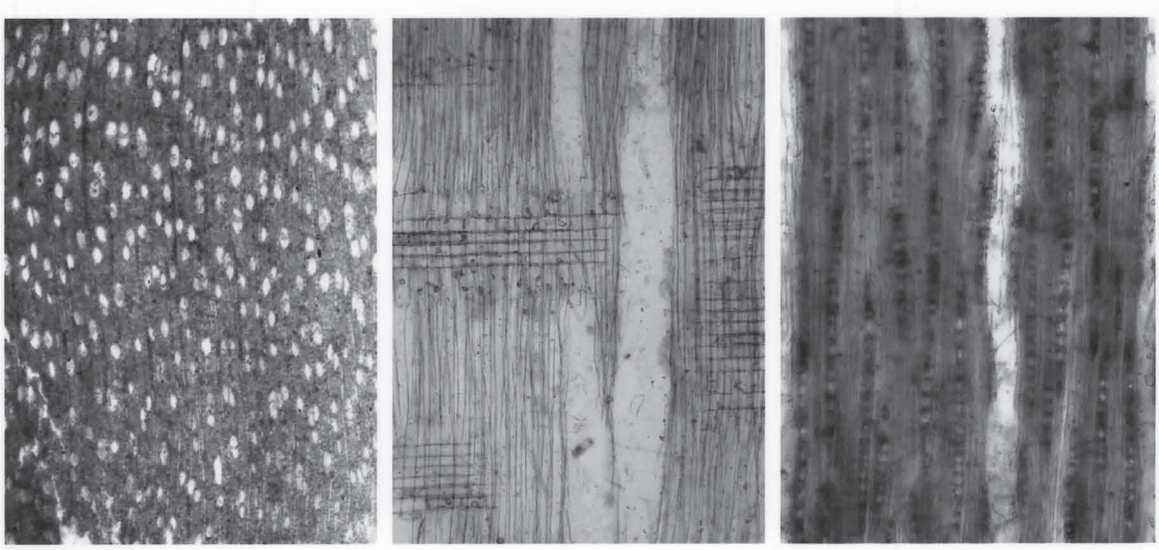
横断面 ━━━━━ : 0.2mm　放射断面 ━━━━━ : 0.1mm　接線断面 ━━━━━ : 0.2mm

4．13　柱材　コウヤマキ



横断面 ━━━━━ : 0.2mm　放射断面 ━━━━━ : 0.05mm　接線断面 ━━━━━ : 0.2mm

5．21　柱材　アスナロ



横断面 ━━━━━ : 0.5mm　放射断面 ━━━━━ : 0.2mm　接線断面 ━━━━━ : 0.2mm

6．20　柱材　ヤナギ属

第 118 図　南梅本上方遺跡における樹種同定結果（2）

Ⅱ．南梅本上方遺跡１区・２区における種実同定

１．はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。

２．試料

試料は、中世の遺構から採取された試料№１（１区 SP98)、№２（２区包含層、褐灰色)、№３（２区）の計３点の種実である。

３．方法

同定は、肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって行った。

４．結果

樹木１分類群が同定された。主要な分類群を写真に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記載する。

〔樹木〕

モモ　Prunus persica Batsch　核（完形）・核（破片）　バラ科

黄褐色～黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。完形のもののサイズ（長さ×幅×厚さ）は、26.07mm ×18.55mm ×13.97mm、19.70mm ×15.72mm × 12.50mm である。

５．結果と所見（第 119 図）

分析の結果、各試料ともモモ核と同定された。このうち、№１と№２は完形、№３は破片である。モモは食用となる栽培植物であり、稲作とともに伝来したと考えられる。モモ核は、弥生時代から古墳時代、古代にかけて、西南日本を中心に多くの遺跡から出土している。

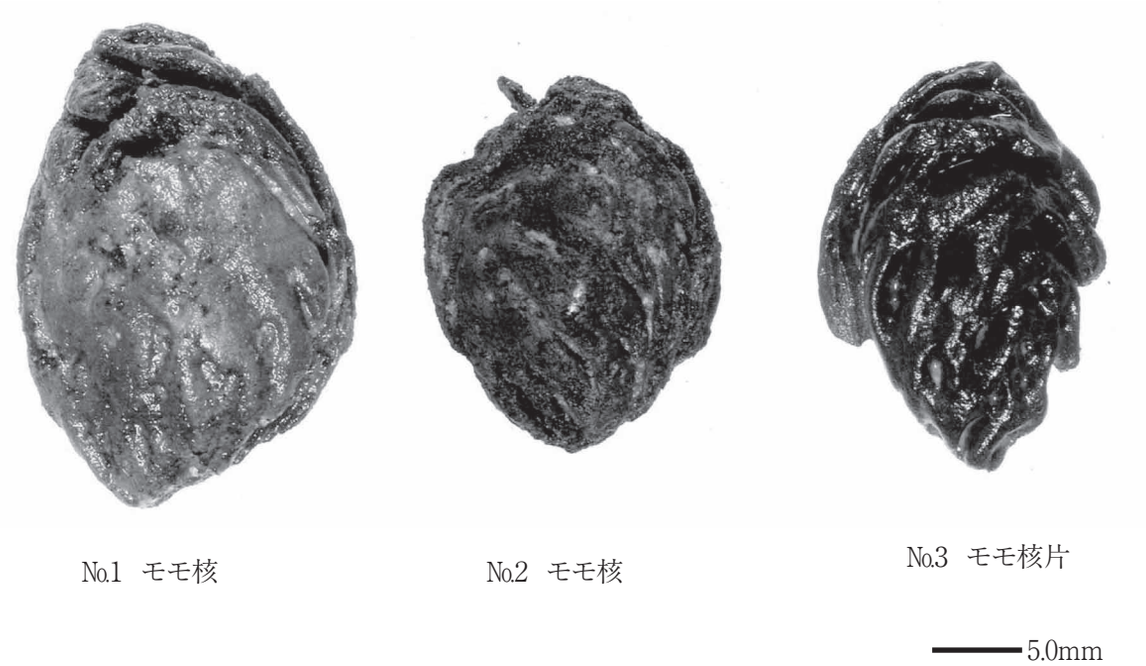
文献

金原正明（1996）古代モモの形態と品種．月刊考古学ジャーナル No.409，ニューサイエンス社，p.15-19.

南木睦彦（1991）栽培植物．古墳時代の研究第４巻生産と流通Ⅰ，雄山閣出版株式会社，p.165-174.

南木睦彦（1993）葉・果実・種子．日本第四紀学会編，第四紀試料分析法，東京大学出版会，p.276-283.

南梅本上方遺跡の種実



第 119 図　南梅本上方遺跡における種実遺体

Ⅲ．植物珪酸体（プラント・オパール）分析

１．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（SiO_2）が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。

２．試料

分析試料は、中世の掘立柱建物址１（P3）、１区 SP26、１区 SP26 №３の下から採取された試料１～試料３の３点である。

３．分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて、次の手順で行った。

１）試料を 105℃で 24 時間乾燥（絶乾）

２） 試料約１ｇに対し直径約 40 μｍのガラスビーズを約 0.02g 添加（電子分析天秤により 0.1mg の精度で秤量）

３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理

４）超音波水中照射（300W・42KHz・10 分間）による分散

５）沈底法による 20 μｍ以下の微粒子除去

６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成

７）検鏡・計数

同定は、400 倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１ｇ中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0 と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}g）をかけて、単位面積で層厚１cm あたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。イネの換算係数は 2.94、ヨシ属（ヨシ）は 6.31、ススキ属（ススキ）は 1.24、メダケ節は 1.16、ネザサ節は 0.48、チマキザサ節・チシマザサ節は 0.75、ミヤコザサ節は 0.30 である（杉山，2000）。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

４．分析結果（第 120・121 図）

（１）分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表 27 および第 120 図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ、イネ（穎の表皮細胞由来）、ムギ類（穎の表皮細胞）、キビ族型、ヨシ属、シバ属、ススキ属

型（おもにススキ属）、ウシクサ族Ａ（チガヤ属など）、ウシクサ族Ｂ（大型）

〔イネ科ータケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

〔イネ科ーその他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

〔樹木〕

ブナ科（シイ属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）、その他

（２）植物珪酸体の検出状況

分析の結果、イネおよびネザサ節型が多く検出され、ウシクサ族Ａ、メダケ節型、ヨシ属、シバ属、および樹木（照葉樹）のブナ科（シイ属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）なども検出された。また、試料１と試料２ではムギ類（穎の表皮細胞）も検出された。イネの密度は、試料３では 9,500 個 /g と高い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている 5,000 個 /g を上回っている。また、試料１と試料２でも 5,000 個 /g 前後と高い値である。ムギ類（穎の表皮細胞）の密度は 1,000 個 /g 未満と低い値であるが、穎（籾殻）が栽培地に残されることは稀であることから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。おもな分類群の推定生産量によると、各試料ともイネが優勢であり、次いでネザサ節型も多くなっている。

５．植物珪酸体分析から推定される植生と環境

中世の遺構埋土の堆積当時は、周辺でイネやムギ類の栽培が行われており、そこから何らかの形で遺構内にこれらの植物珪酸体が混入したと推定される。調査区周辺は、メダケ属（おもにネザサ節）を主体としてススキ属やチガヤ属なども生育するイネ科植生であったと考えられ、部分的にヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたと推定される。また、遺跡周辺にはシイ属、イスノキ属、クスノキ科などの照葉樹林が分布していたと考えられる。

文献

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) －数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究 (5) －プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，p.73-85.

表 27　南梅本上方遺跡における植物珪酸体分析結果
検出密度（単位：× 100 個 /g）

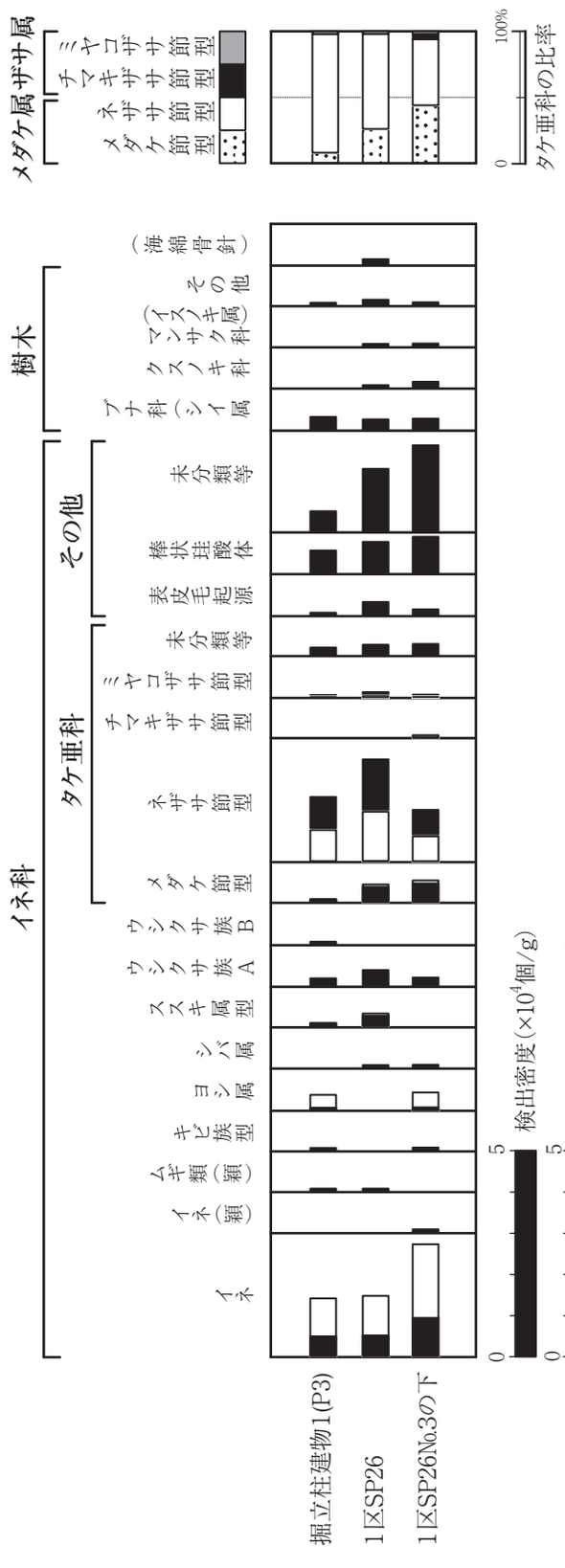
分類群	学　名	地点・試料 1	2	3
イネ科	Gramineae (Grasses)			
イネ	*Oryza sativa*	49	51	95
イネ籾殻 (穎の表皮細胞)	*Oryza sativa* (husk Phytolith)			7
ムギ類 (穎の表皮細胞)	*Hordeum-Triticum* (husk Phytolith)	6	6	
キビ族型	Paniceae type	6		7
ヨシ属	*Phragmites*	6		7
シバ属	*Zoysia*		6	7
ススキ属型	*Miscanthus* type	6	25	
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	18	38	20
ウシクサ族B	Andropogoneae B type	6		
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)			
メダケ節型	*Pleioblastus sect.* Nipponocalamus	6	38	47
ネザサ節型	*Pleioblastus sect.* Nezasa	160	253	128
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.			7
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	6	13	7
未分類等	Others	18	25	27
その他のイネ科	Others			
表皮毛起源	Husk hair origin	6	32	14
棒状珪酸体	Rod ɹ shaped	55	76	88
未分類等	Others	49	152	209
樹木起源	Arboreal			
ブナ科 (シイ属)	*Castanopsis*	31	25	27
クスノキ科	Lauraceae		6	14
マンサク科 (イスノキ属)	*Distylium*		6	7
その他	Others	6	13	7
(海綿骨針)	Sponge		13	
植物珪酸体総数	Total	436	764	722

おもな分類群の推定生産量（単位：kg / ㎡･cm）：試料の仮比重を 1.0 と仮定して算出

イネ	*Oryza sativa*	1.44	1.49	2.78
ヨシ属	*Phragmites*	0.39		0.43
ススキ属型	*Miscanthus* type	0.08	0.31	
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	0.07	0.44	0.55
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	0.77	1.21	0.62
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.			0.05
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	0.02	0.04	0.02

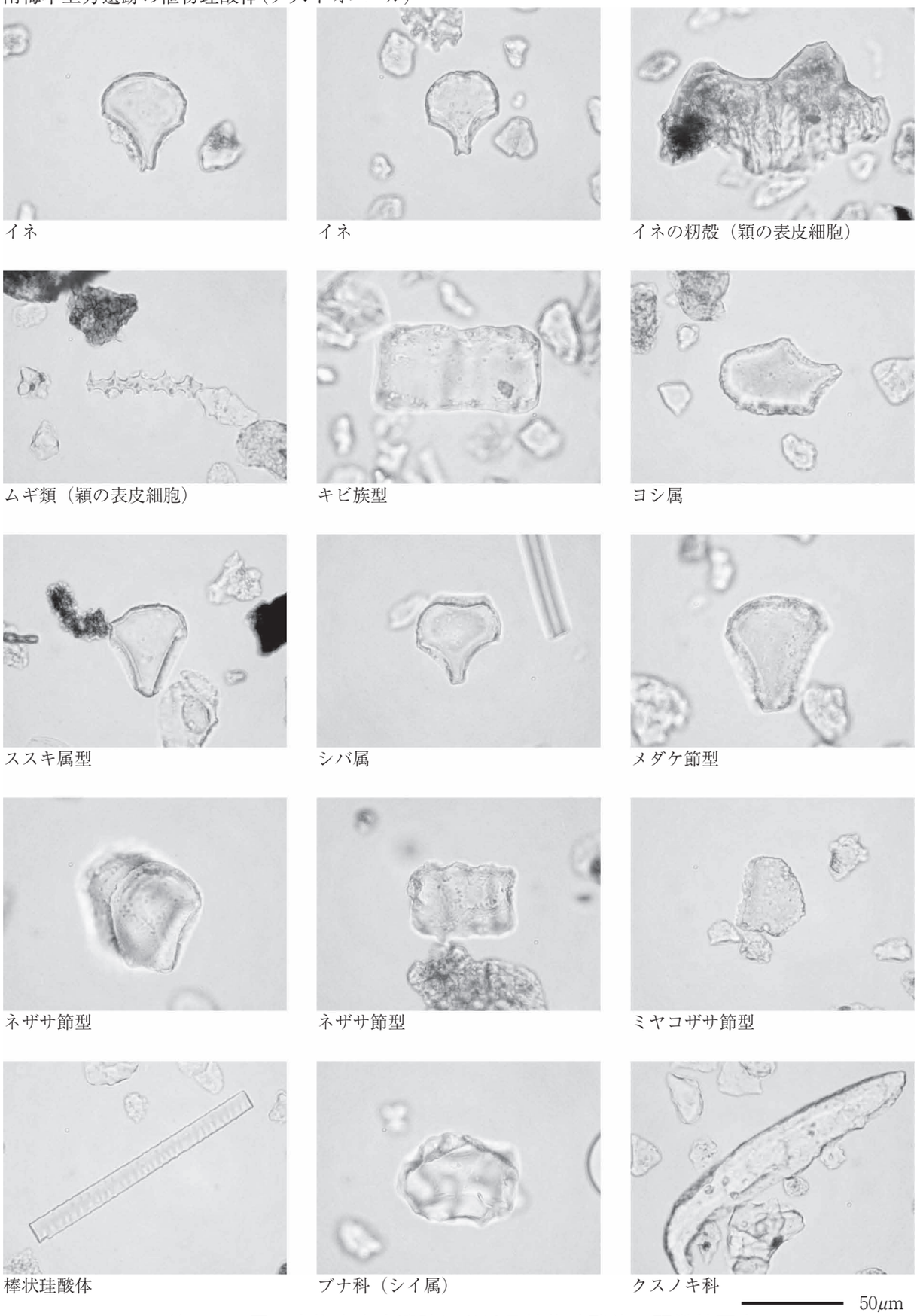
タケ亜科の比率（%）

メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	8	26	44
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	90	72	50
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.			4
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	2	2	2



第 120 図　南梅本上方遺跡における植物珪酸体分析結果

南梅本上方遺跡の植物珪酸体（プラント･オパール）



第 121 図　南梅本上方遺跡における植物珪酸体の顕微鏡写真

Ⅳ．花粉分析

１．はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

２．試料

分析試料は、中世の掘立柱建物址１（P3）、１区 SP26、１区 SP26 №３の下から採取された試料１～試料３の３点である。これらは、植物珪酸体分析に用いられたものと同一試料である。

３．方法

花粉の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

１）0.5％リン酸三ナトリウム（12 水）溶液を加えて 15 分間湯煎
２）水洗処理の後、0.5mm の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
３）25％フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置
４）水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す
５）再び氷酢酸を加えて水洗処理
６）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
７）検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 300 ～ 1000 倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。

４．結果（第 122 図）

（１）分類群

出現した分類群は、樹木花粉５、樹木花粉と草本花粉を含むもの１、草本花粉７、シダ植物胞子２形態の計 15 である。分析結果を表 28 に示し、花粉数が 100 個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

クリ、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、サンショウ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科

〔草本花粉〕

イネ科、カヤツリグサ科、ソバ属、アブラナ科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

（２）花粉群集の特徴

１）掘立柱建物址１（P3）

試料１では、樹木花粉のコナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、サンショウ属、草本花粉のイネ科、ソバ属が検出されたが、いずれも少量である。

２）１区 SP26

試料２では、樹木花粉のコナラ属コナラ亜属、樹木花粉と草本花粉を含むクワ科－イラクサ科、草本花粉のイネ科、ヨモギ属、アブラナ科、タンポポ亜科、キク亜科、カヤツリグサ科が検出されたが、いずれも少量である。

３）１区 SP26 №３の下

試料３では、樹木花粉のクリ、樹木花粉と草本花粉を含むクワ科－イラクサ科、草本花粉のイネ科、ソバ属、ヨモギ属、アブラナ科が検出されたが、いずれも少量である。

５．花粉分析から推定される植生と環境

中世の遺構埋土では、花粉があまり検出されないことから植生や環境の詳細な推定は困難であるが、イネ科、ヨモギ属、アブラナ科、タンポポ亜科、クワ科－イラクサ科などが生育する日当たりの良い人里の環境が示唆され、ソバやアブラナ科の栽培が行われていた可能性が考えられる。また、遺跡周辺にはカシ類（コナラ属アカガシ亜属）やクリなどが分布していた可能性が考えられる。花粉があまり検出されない原因としては、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられる。

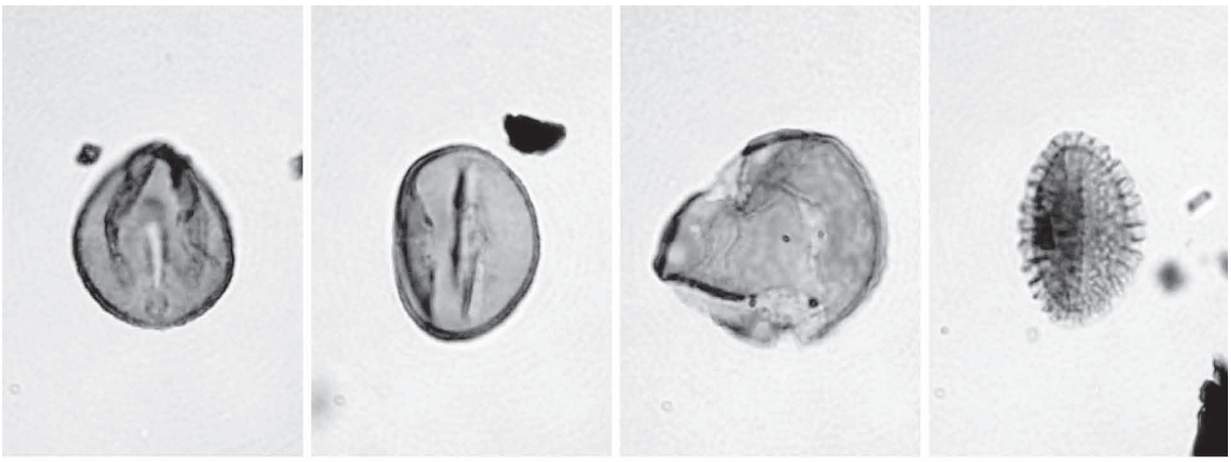
文　献

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第 10 巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.
島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，60p.
中村純（1973）花粉分析．古今書院，p.82-110.
中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第 13 集，91p.

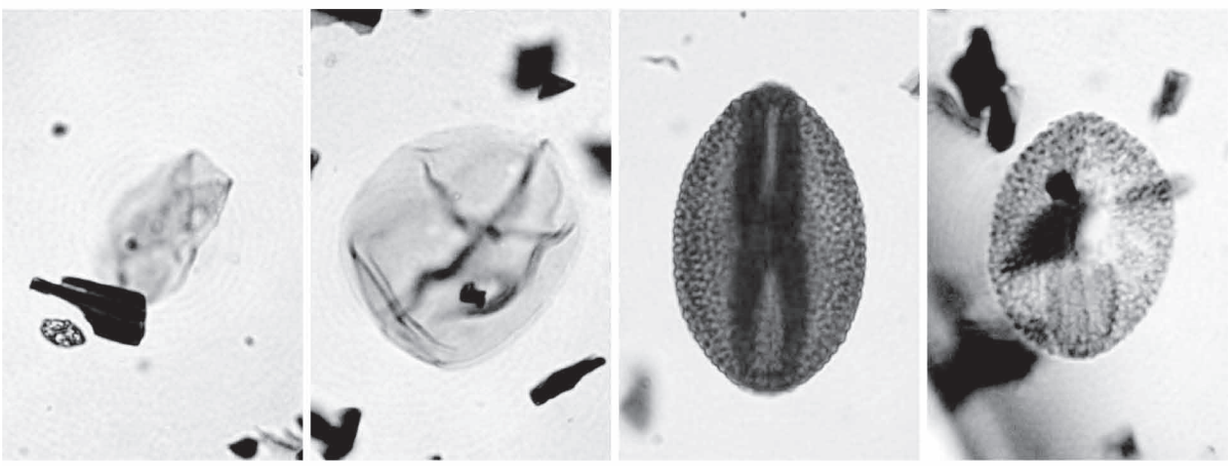
表 28　南梅本上方遺跡における花粉分析結果

分類群		1	2	3
学名	和名	掘立柱建物址 1 -P3	1 区 SP26	1 区 SP26 №3 の下
Arboreal pollen	樹木花粉			
Castanea crenata	クリ			1
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属		1	
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	3		
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属 - ケヤキ	1		
Zanthoxylum	サンショウ属	1		
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉			
Moraceae-Urticaceae	クワ科 - イラクサ科		3	2
Nonarboreal pollen	草本花粉			
Gramineae	イネ科	2	6	4
Cyperaceae	カヤツリグサ科		1	
Fagopyrum	ソバ属	1		2
Cruciferae	アブラナ科		3	1
Lactucoideae	タンポポ亜科		2	
Asteroideae	キク亜科		2	
Artemisia	ヨモギ属		6	2
Fern spore	シダ植物胞子			
Monolate type spore	単条溝胞子			3
Trilate type spore	三条溝胞子		2	
Arboreal pollen	樹木花粉	5	1	1
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	3	2
Nonarboreal pollen	草本花粉	3	20	9
Total pollen	花粉総数	8	24	12
Pollen frequencies of 1 cm^3	試料 1 cm^3 中の花粉密度	6.3 × 10	1.8 × 10 2	1.3 × 10 2
Unknown pollen	未同定花粉	1	2	2
Fern spore	シダ植物胞子	0	2	3
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)
Charcoal fragments	微細炭化物	(-)	(+)	(+)

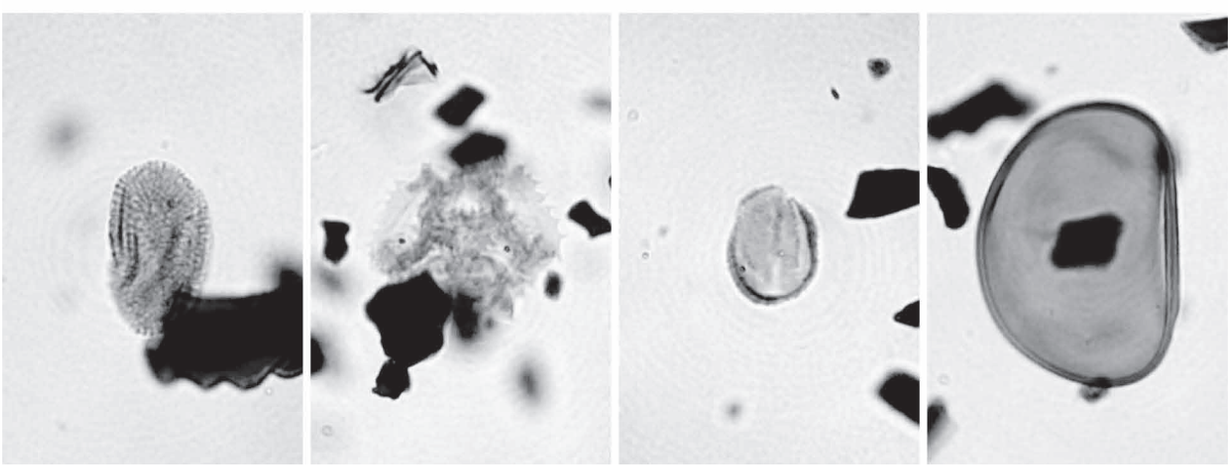
南梅本上方遺跡の花粉･胞子



1 コナラ属コナラ亜属　2 コナラ属アカガシ亜属　3 ニレ属−ケヤキ　4 サンショウ属



5 クワ科−イラクサ科　6 イネ科　7 ソバ属　8 ソバ属



9 アブラナ科　10 タンポポ亜科　11 ヨモギ属　12 シダ植物単条溝胞子

10μm

第 122 図　南梅本上方遺跡における花粉・胞子の顕微鏡写真

第9章　ま　と　め

今回の『市道南北梅本線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査』「南梅本上方遺跡」・「南梅本上方遺跡２次調査地」・「南梅本長広遺跡」・「南梅本長広遺跡２次調査地」の調査地では各期の遺構・遺物が検出された。各遺跡の主な所属時期が中世～近世が大半を占めるなか、縄文時代の遺構・遺物の検出など、貴重な資料を得ることとなった。今回行われた一連の発掘調査は、道路改良工事に伴う調査と言うこともあり断片的であるが、以下層序・時代ごとに調査成果と今後の課題をあげ、まとめとする。

（１）層　序

調査地は一体は小野川と悪社川に挟まれる扇状地に立地し、間近には悪社川の河岸段丘状に立地する。本報告の遺跡は悪社川を取り巻く環境に影響され、この河岸段丘の立地とあいまって当地における集落経営の状況が個々の遺跡によってみられる。

悪社川の南に位置する「南梅本上方遺跡」（以降上方１次）・「南梅本上方遺跡２次調査地」（以降上方２次）では、悪社川から南に向かって緩傾斜し、遺跡は標高約 71.60 ～ 72.15 m（比高差約 55 ㎝）に立地する。両遺跡ともに第Ⅶ層（灰色土・黄褐色土）上面にて遺構を検出している。両遺跡の層序は若干土色認識の違いはあるが、上方１次の第Ⅰ層をのぞいてほぼ合致するものと考えられる。遺構検出面の下層では、特に上方２次に礫層ないし礫群の検出が多く、上方１次では微砂・粗砂が相当層となる。平成 16 年６月および平成 17 年 12 月に行われた、悪社川と上方２次の中間に位置する場所での試掘調査では、耕作土層直下 20 ㎝～ 30 ㎝で礫層が確認されている。また、悪社川の北、長広遺跡との中間に位置する場所での試掘調査では、耕作土直下砂質が混じり、25 ㎝～ 30 ㎝下より礫層が出現する。この状況から本来の悪社川の河幅は永続的にではないにしろ、現在より北に２m～ 10 m、南に約 40 m程度はあったと考えられる。また、上方２次での検出遺構を概観すると、調査区北部において遺構の検出はなく、中央～南部にかけてのみ遺構が存在する。このことからも、上方２次遺跡調査区中央部付近が集落範囲の北限と考えられる。

次に、悪社川の北、段丘上に「南梅本長広遺跡」（以降長広１次）、「南梅本長広遺跡２次調査地」（以降長広２次）では、遺跡北部から悪社川に向かって傾斜し、遺跡の標高は約 76.50 ～ 74.80 m（比高差約 170 ㎝）に立地する。両遺跡の層序は若干土色認識の違いはあるが、ほぼ合致している。両遺跡ともに第Ⅱ層（長広２次Ｂ区）・第Ⅲ層（長広１次・長広２次Ａ区）に黄色または明黄褐色のブロックが多く含む層が調査区に広く分布する。その下層には砂層・砂礫層・礫層が続く。第Ⅱ層・第Ⅲ層はいくつかに分層され堆積状況から整地層と考えられる。この両遺跡の土層状況から、悪社川の北、段丘上では中世以降に砂礫層の地盤を幾度かの整地作業を繰り返す事により、集落の範囲内を修復または範囲拡張を行っていたと考えられる。

（２）縄文時代

長広２次では、縄文時代晩期の遺構１基（ＳＫ３）を確認した。遺構の東半は調査区外に展開するため全容は不明であるが、長径 1.22 m短径 0.85 mを測る、おそらくは楕円形状の土抗と考えられ、断面形状は舟底形を呈する。埋土は黒色土である。遺物は浅鉢と深鉢など 11 点、サヌカイト製の素材剥片が４点出土している。当地域周辺では検出例も少なく、縄文晩期に集落が展開していたことを知る貴重な資料であり、当地域の発掘調査の進展により検出例が増える可能性がある。今後の周辺調査による資料の積み重ねに期待したい。

(3) 弥生時代

長広１次で土抗３基、柱穴 16 基、性格不明遺構１基、長広２次では、土抗１基、柱穴１基である。遺構から弥生土器複合口縁壺破片や弥生土器の小片、細片ではあるが出土しており、当地において弥生時代後期後葉には集落が存在していたことを知る資料である。

(4) 古墳～古代

長広１次では、土抗３基、溝１条、長広２次では柱穴１基が確認されている。この地区が古墳時代～古代においても集落として機能していた貴重な資料である。

(5) 中世～近世

上方１次、上方２次では、概ね 13 世紀後半～ 14 世紀の包含層と、集落関連遺構･遺物を確認した。掘立柱建物跡は上方１次が４棟、上方２次では１棟検出している。なかでも、上方１次掘立１及び上方２次掘立１の柱穴群内から土師器皿（完形品含む）が出土し、建物の廃絶に伴う祭祀行為が両遺跡において行われている。これは中世集落内での建物廃絶時の祭祀行為の事例として貴重な成果である。愛媛県内ではこのような柱穴祭祀事例が 226 件報告され、中予では松山平野を中心に 118 件程度報告されている。今回の事例の追加により、松山平野南部での柱穴祭祀が平井町以東、南梅本町まで展開することになる。また、上方２次で検出された南北に走る長さ 10.7 m、最大幅 2.0 mの礫群は、水源へ通じる道路的な施設が想定される。時期は掘立１と近い時期であろう。

次に長広１次では、礫が廃棄された比較的大きな土抗（ＳＫ１）は、床面に小溝を持つ事が特徴である。小溝は高地から低地への比高差がみられる（比高差約 11 ㎝）。このような施設は平野内では類例がなく遺構の性格は不明ではあるが、小規模な農業用水等の貯水施設を考えることも可能かと思われる。そのほか同規模の円形土抗がペアで数基確認されている。土抗内部には礫が多く投棄されており、いくつかは内部に漆喰状の土層を確認している。ただし、どれも内部から遺物及び異臭は確認されなかった。このような形態の検出状況は類例に乏しく、遺構の性格は不明であるが、ＳＫ１等のような小規模な施設が考えられよう。今後の資料増加に期待したい。

長広２次では、Ｂ区南部に東西に設置された石列群がある。基盤面から最大約 50 ㎝ほどの堀込みの中に土、石を敷き詰め、一旦平坦にして構築した後、少し空間をあけ、石敷北に小口を南端に揃える第２石列。そして第Ⅱ層を挟んで敷石上に第１石列が、東西に設置される。この堀込みが為された敷石遺構と２条の石列は基本的には別遺構と考えたい。石列２条の性格については遺構の全容が不明であるため明確ではないが、何らかの区画的なものまたは道路施設等の一部が、縮小または移動されたのではないかと考える。そのほか、集石遺構については検出が比較的浅い土層中からの物でもあり、調査地周辺には大小多くのお塚が存在するが、調査結果からも実質的なお塚とは考えにくい。

近世の遺物については東温市に所在する西岡古窯跡に関連する可能性を残す遺物の出土があり、その関連について課題が残るとともに、今後周辺での調査に注目される。

参考文献

河野史知　2000「古市遺跡・下苅屋遺跡２・３次調査」『松山市文化財調査報告書 75』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
山之内志郎　2001「小野地区の遺跡」『松山市文化財調査報告書 81』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
吉岡和哉　2001「播磨塚天神山古墳」『松山市文化財調査報告書 83』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
重信町歴史民俗資料館編　2001「シンポジウム　記録」『重信町史談会 20 周年･歴史民俗資料館 15 周年「松山藩ゆかりの西岡焼き」出版記念』
武正良浩　2003「南梅本上方遺跡」調査概要報告書
小笠原善治　2004「南梅本上方遺跡２次調査地・南梅本長広遺跡」調査概要報告書
藤本清志ほか　2004「南斎院土居北遺跡・南江戸闘目遺跡 (2 次) 第 2 分冊 (考察・図版編)」『埋蔵文化財発掘調査報告書第 113 集』愛媛県埋蔵文化財センター
栗田茂敏　2006「番町遺跡」『松山市文化財調査報告書 109』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

写 真 図 版

写真図版データ

1．遺構は、主な状況については、４×５判や６×７判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、35mm 判で補足している。一部の撮影には高所作業車を使用した。

使用機材：

カメラ	トヨフィールド 45A	レンズ	スーパーアンギュロン　90mm 他
	アサヒペンタックス 67		ペンタックス 67　55mm 他
	ニコンニュー FM2		ズームニッコール 28 ～ 85mm 他
フイルム	白　黒　ネオパン SS・アクロス		
	カラー　RAPF		

2．遺物は、4 × 5 判で撮影した。

使用機材：

カメラ	トヨビュー 45G
レンズ	ジンマー S　240mm F5.6 他
ストロボ	コメット／ CA32・CB2400
スタンド等	トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド 101
フイルム	白黒　ネオパンアクロス

3．単色図版は、一部を除き、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

使用機材：

引伸機	ラッキー 450MD・90MS
レンズ	エル・ニッコール 135mm F5.6A・50mm F2.8N
印画紙	イルフォードマルチグレードⅣ　RC ペーパー

4．製　版	写真図版 カラー 200 線　白黒 175 線
印　刷	オフセット印刷
用　紙	マットコート 76.5kg

【参考】『理文写真研究』vol. 1 ～ 17 『報告書制作ガイド』

［大西朋子］

写 真 図 版

南梅本上方遺跡

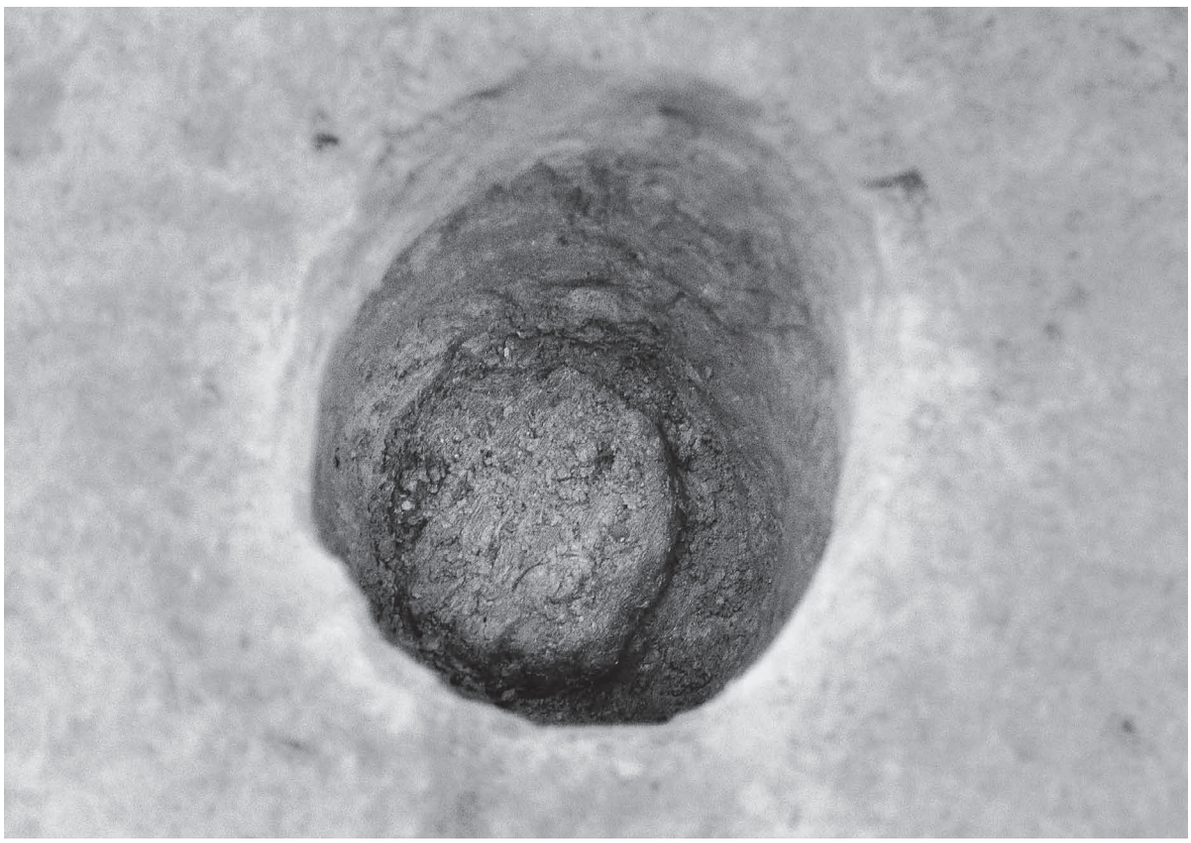
１．１区遺構検出状況　（北より ）

1．1区東壁土層　（北西より）

2．掘立1（掘立柱建物跡）検出状況　（南東より）

1．SP26　遺物出土状況（南西より）

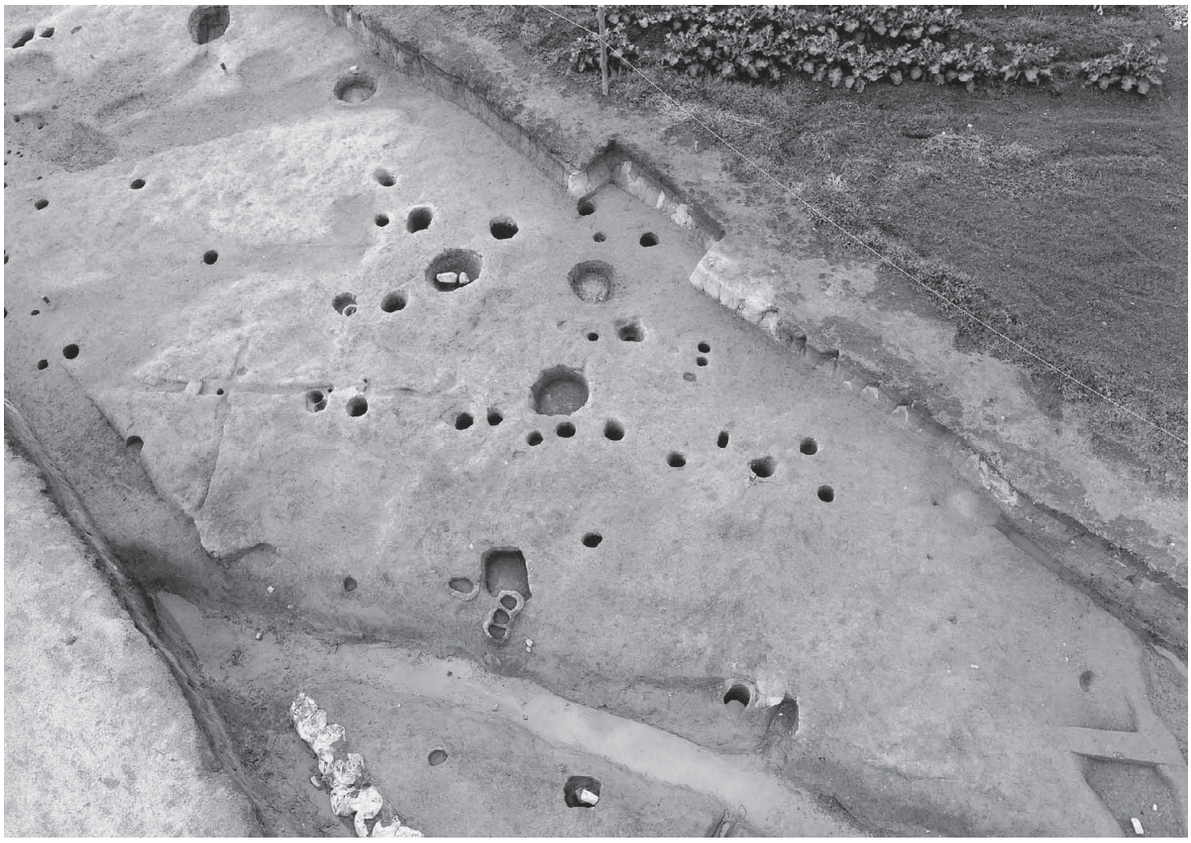
2．SP2（右）遺物出土状況（南より）



1．SP111　木製礎検出状況（北東より）

2．SP111　木製礎出土状況（北より）

１．１区完掘状況（北東より）



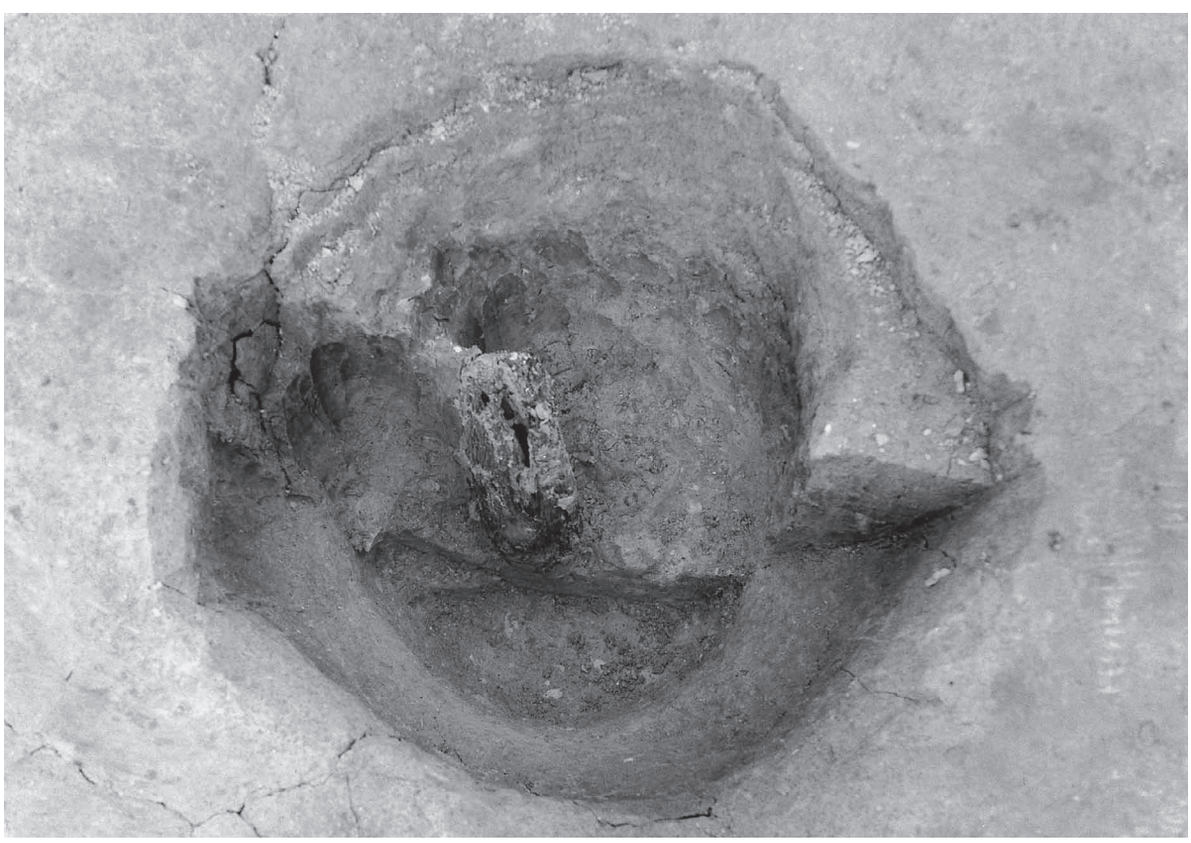
２．掘立１（掘立柱建物跡）完掘状況（北東より）

図版六

１．ＳＤ４完掘状況（北より）

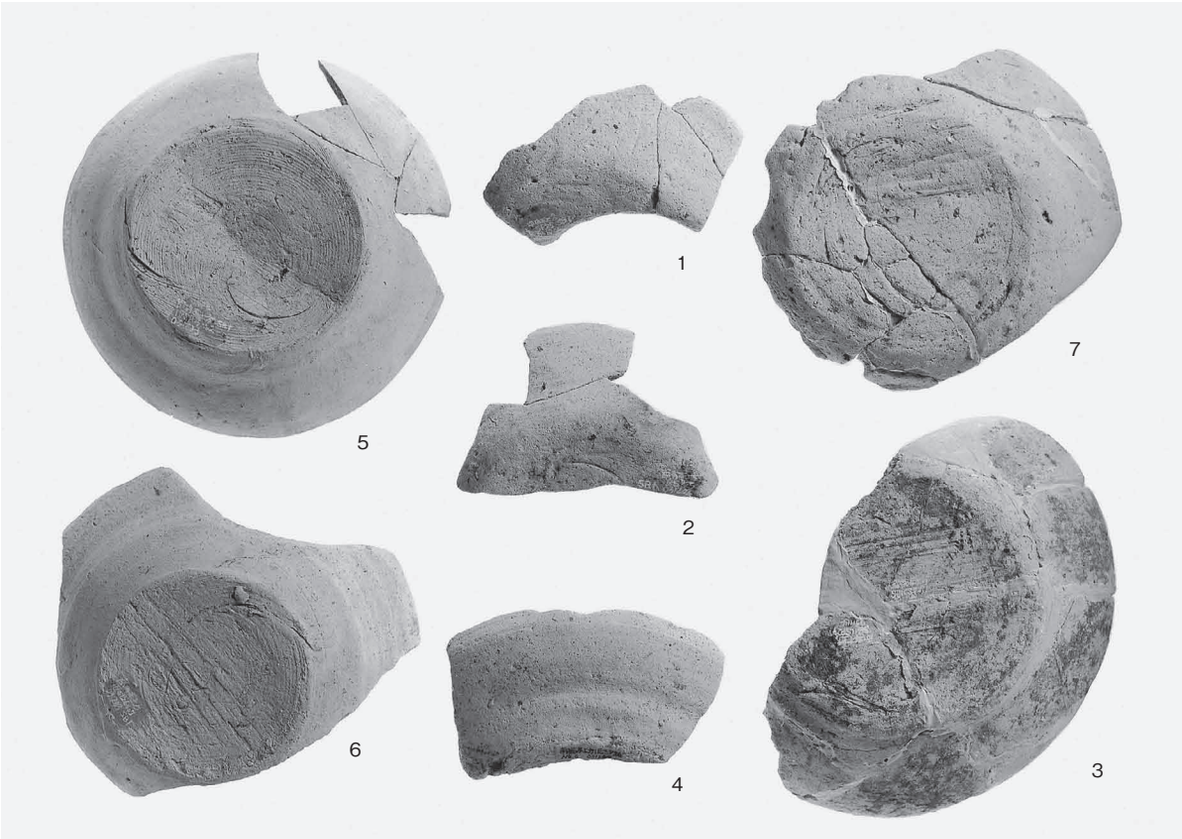
1．2区 遺構検出状況（北より）

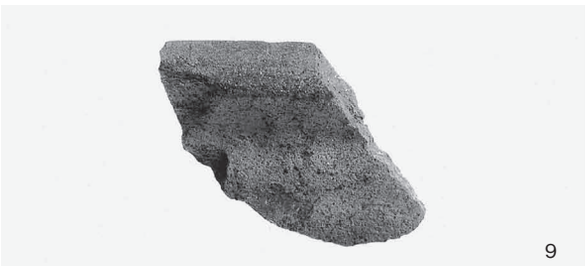
2．2区 完掘状況（北より）



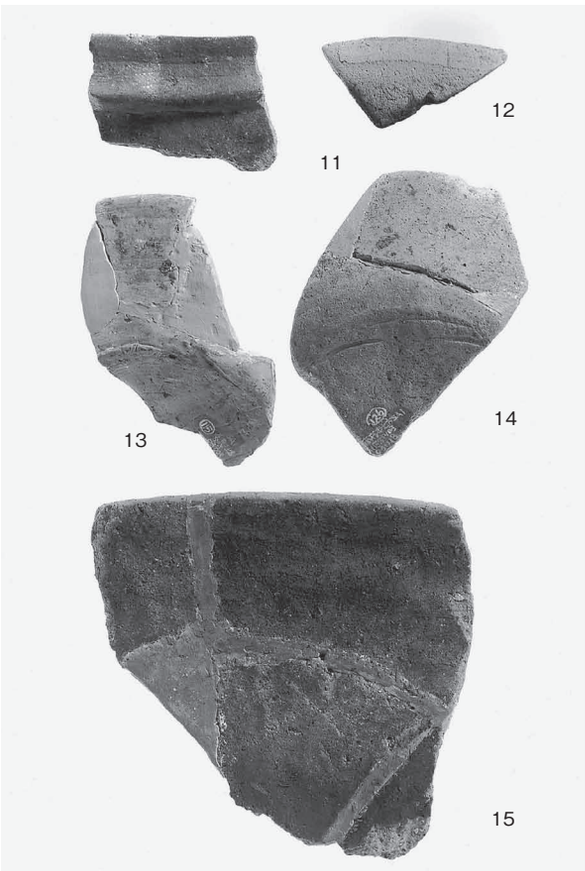
3． SP157　柱根出土状況（南より）

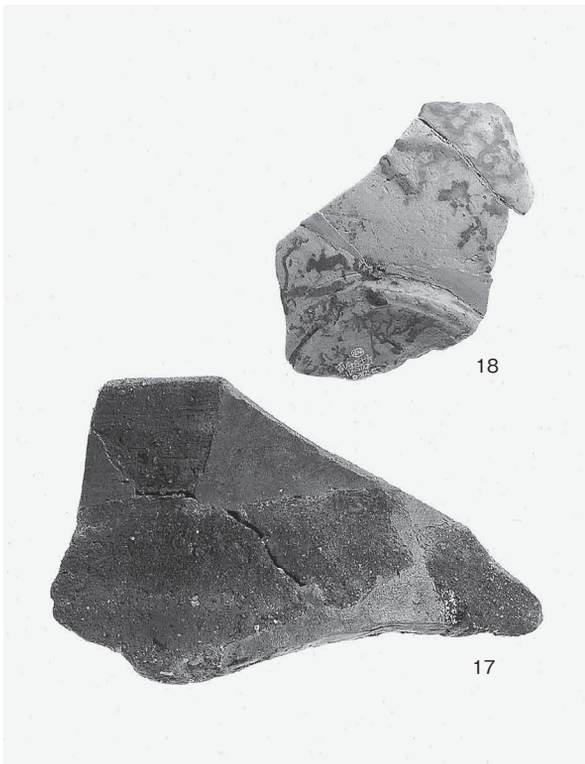
図版八

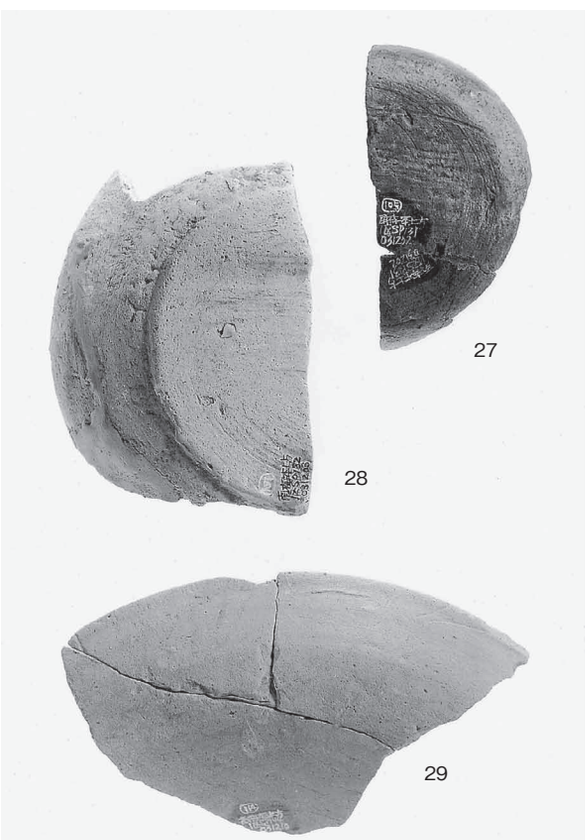


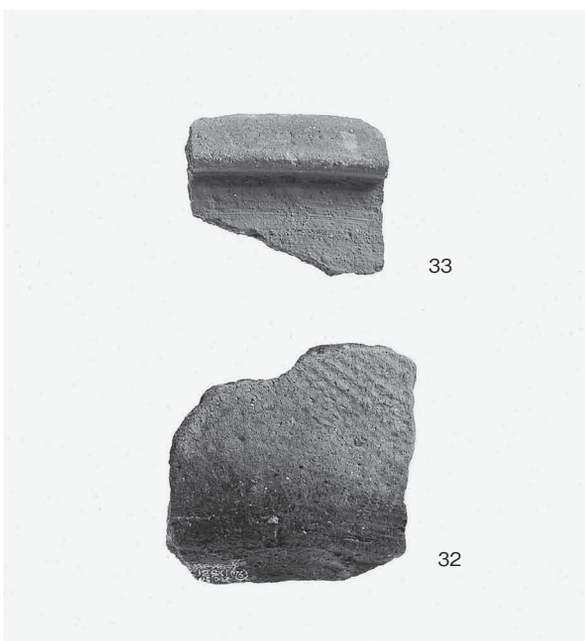


1. 掘立１出土遺物（１～７）、掘立２出土遺物（８・９）、掘立３出土遺物（10）

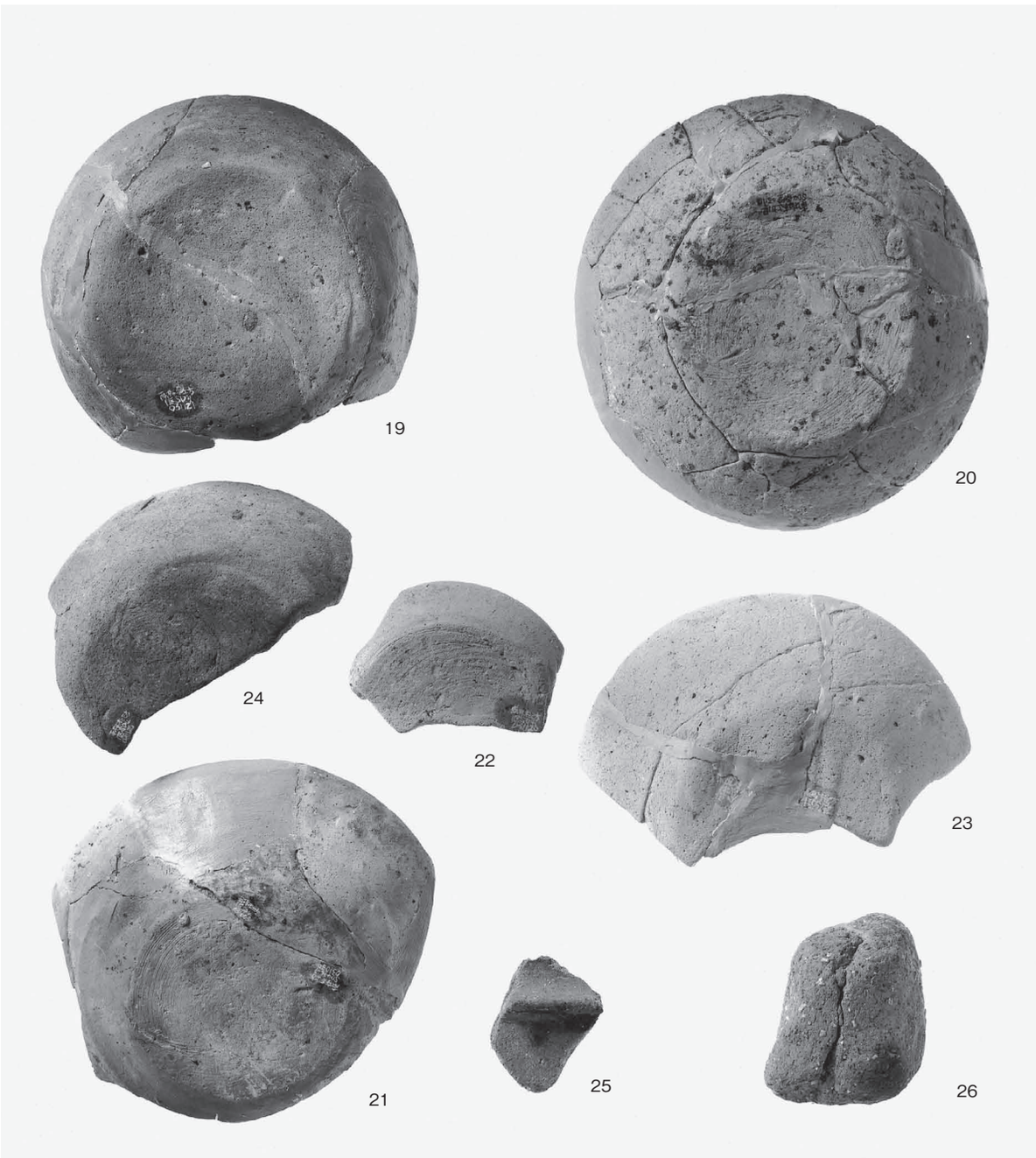




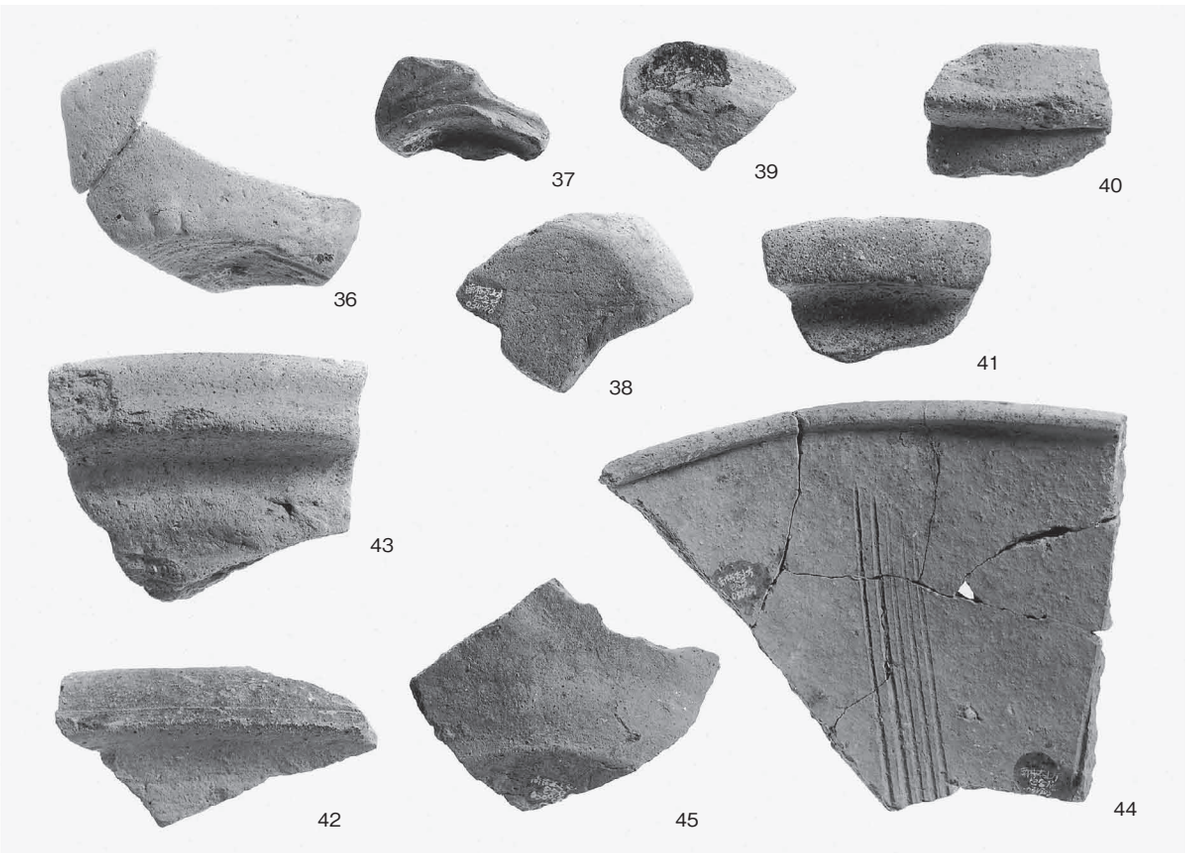


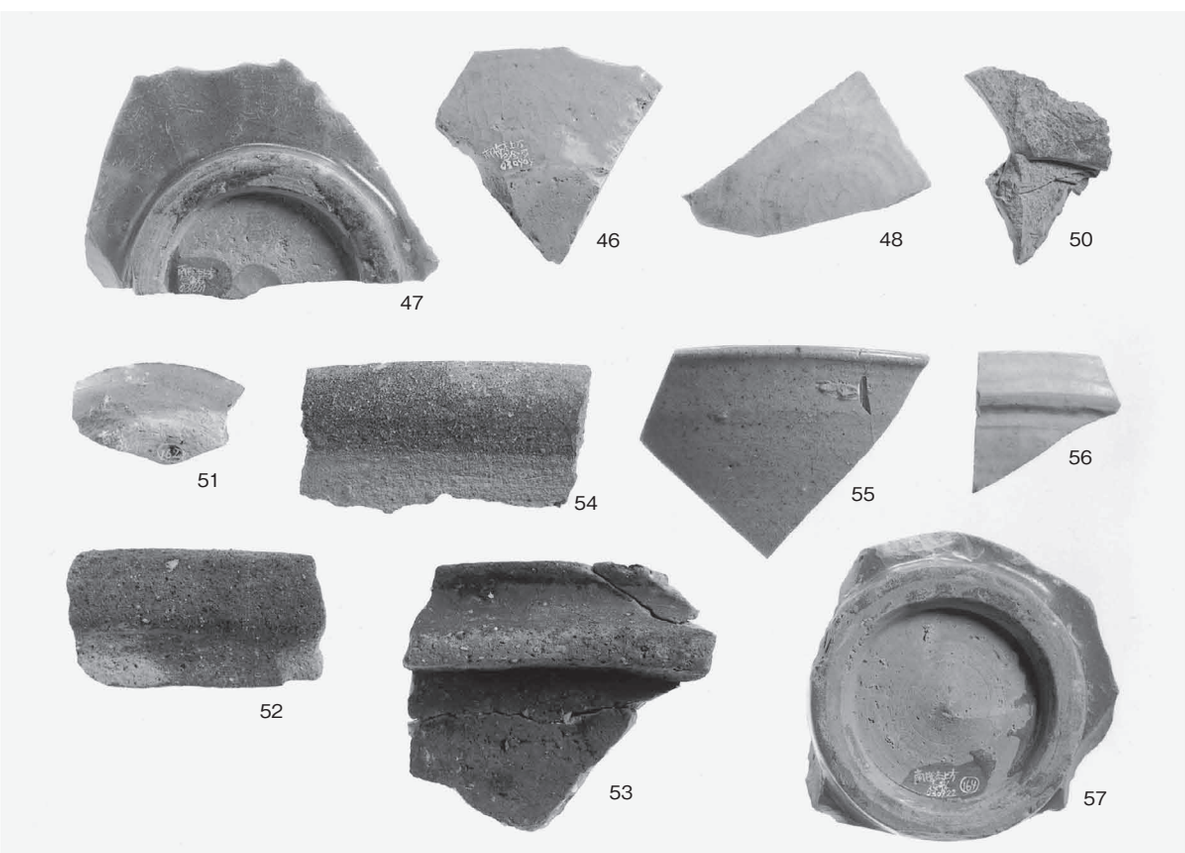


1．掘立４出土遺物（11・12）、ＳＡ１出土遺物（13～15）、ＳＤ２出土遺物（17・18）、ＳＰ 131 出土遺物（27）、ＳＰ 132 出土遺物（28）、ＳＰ 144 出土遺物（29）、ＳＸ１出土遺物（32･33）、ＳＸ３出土遺物（34）



1．ＳＤ４出土遺物（19～26）



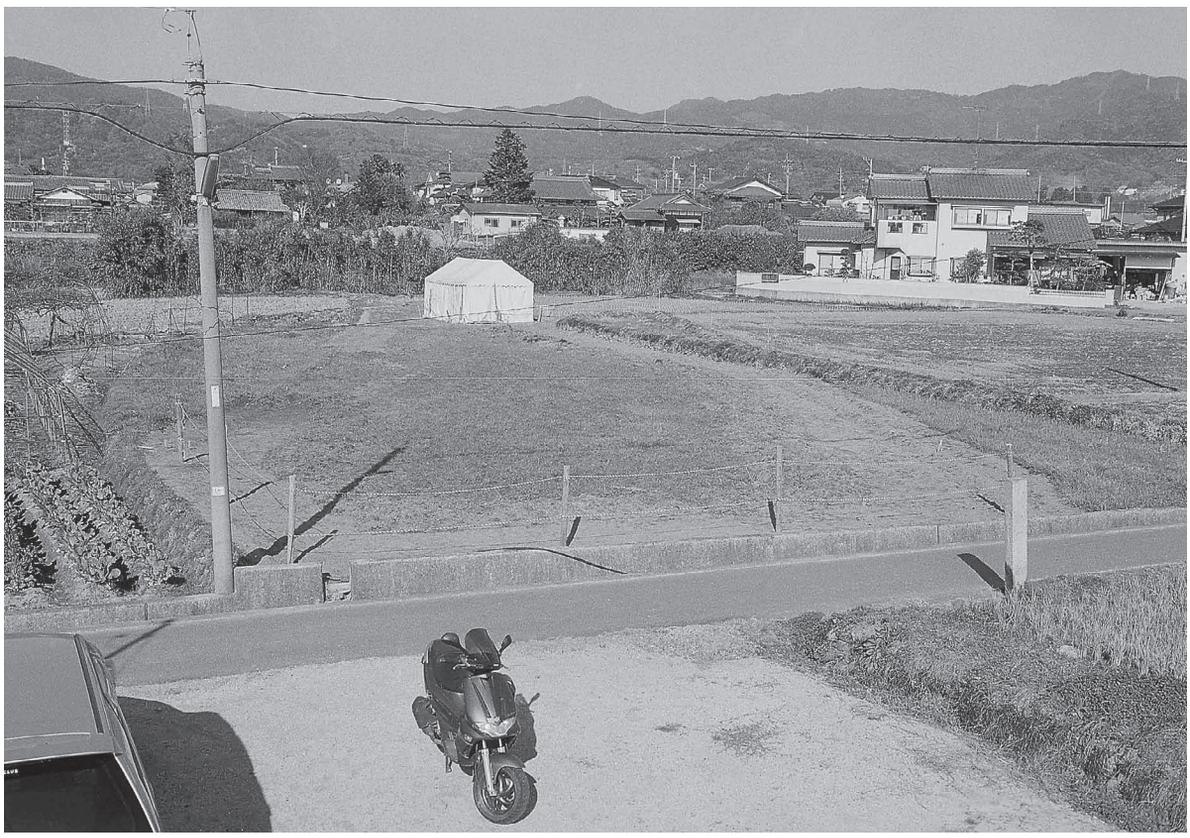


1．包含層出土遺物（36 ～ 48 ・50）、表土採集遺物（51 ～ 57）

1．ＳＰ 111 出土遺物（16）、ＳＰ 23 出土遺物（30）、ＳＰ 157 出土遺物（35）
ＳＫ４出土遺物（31）、表土採集遺物（58）

写 真 図 版

南梅本上方遺跡２次調査地

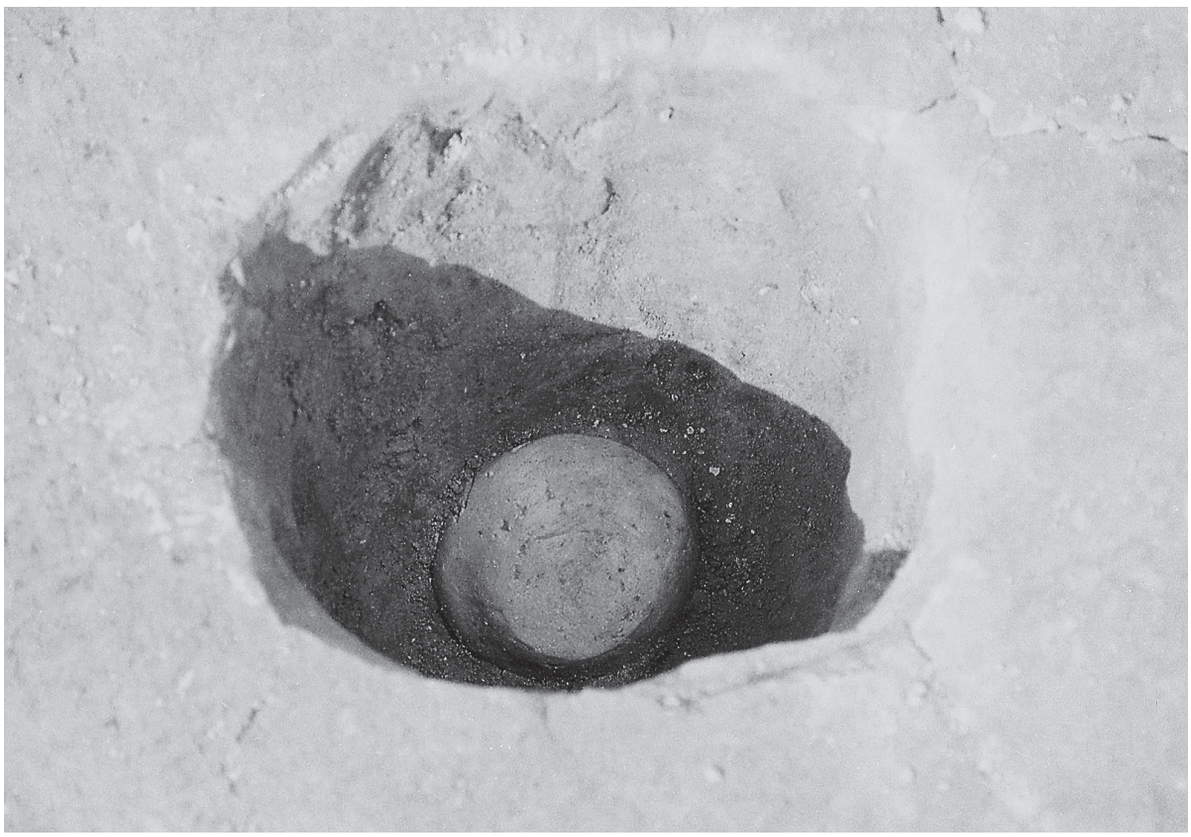


1．調査前調査地全景（南より）

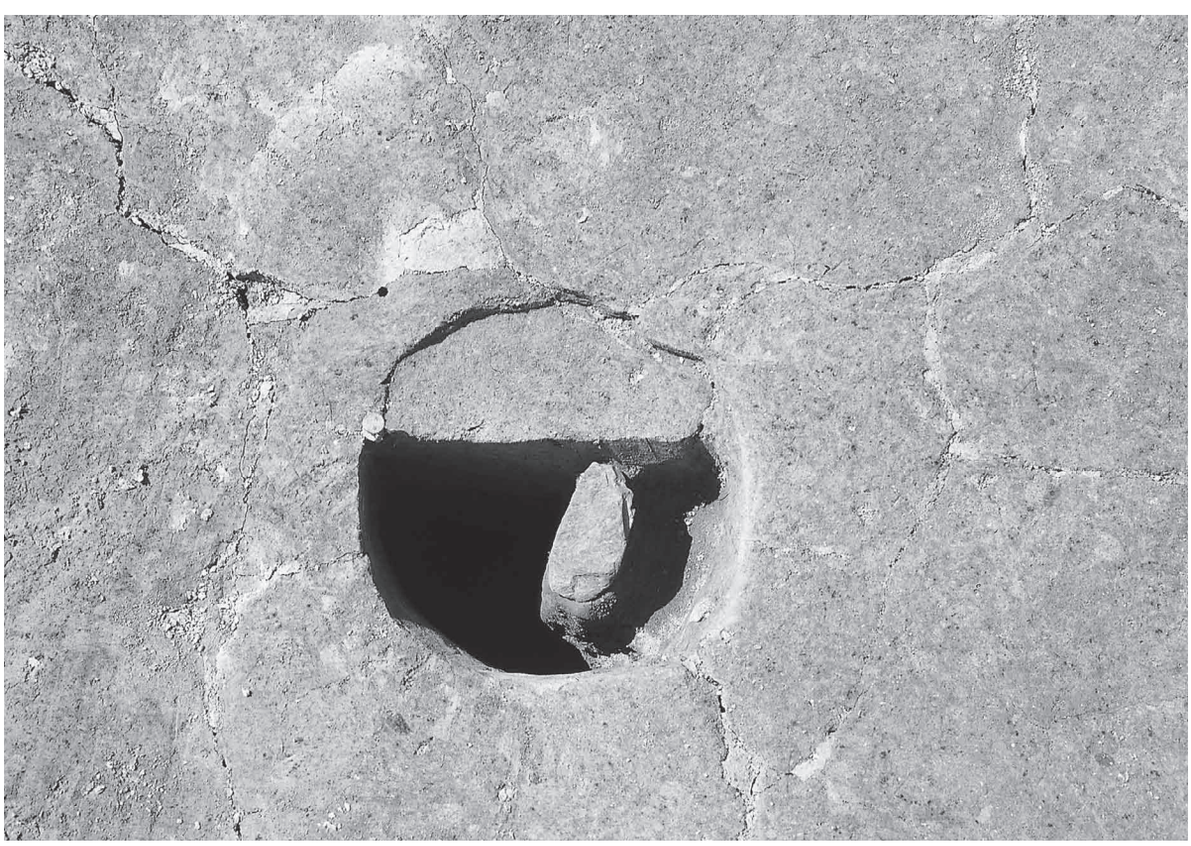
２．遺構検出状況（北より）

１．遺構完掘状況（南より）

2. 掘立１完掘状況（南より）



１．掘立１（SP2）遺物出土状況（南より）



２．掘立１（SP6）遺物出土状況（南より）

1．礫群検出状況（北より）

2．礫群完掘状況（南東より）

1. 西壁土層（東より）

2. 南西壁土層（北東より）

1．掘立１出土遺物（１・２）、礫群出土遺物（３）、遺構外出土遺物（４～８）

写 真 図 版

南梅本長広遺跡

1．調査地調査前風景（北より）

2．Ａ区遺構検出状況（北より）

1．Ａ区遺構検出状況（南東より）

2．Ａ区遺構検出状況（東より）

１．ＳＫ１検出状況（南西より）

２．ＳＫ１内礫群および小溝検出状況１（南西より）

1．SK1 内礫群および小溝検出状況２（東より）

2．SK1 掘り方状況（南西より）

1．SK1 内礫群半裁状況（南より）

2．SK1 完掘状況（西より）

1．SK2・3検出状況（西より）

2．SK4半掘状況（南より）

1．SK6・SD3 半掘状況（東より）

2．SK7 掘り下げ状況（東より）

1．SK11・12 半掘状況（南より）

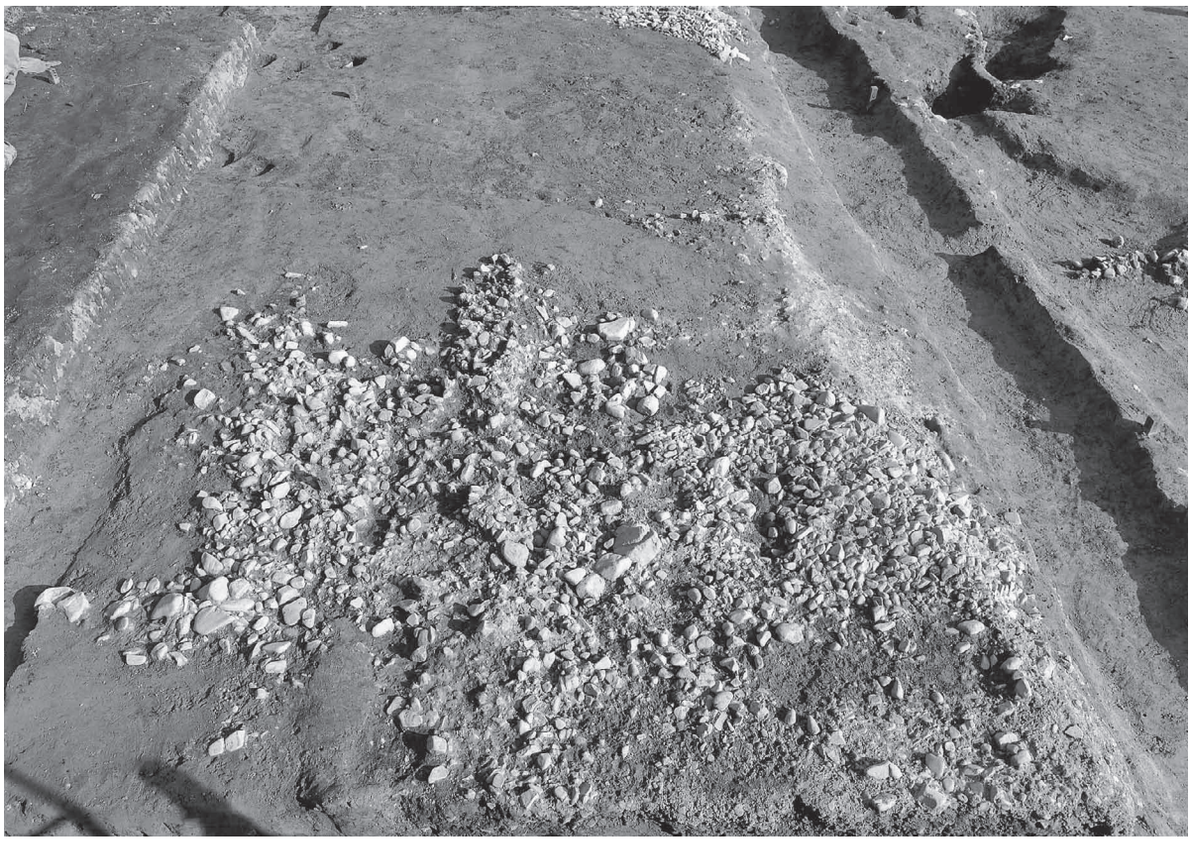
2．SK11・12 完掘状況（東より）

1．SK13 掘り下げ状況（西より）

2．SK14・15・18・19・39 検出状況（東より）

1．SK14・15・18・19・39 完掘状況（東より）

2．SK21 完掘・土層状況（南西より）



1．SX4 礫群検出状況（西より）

2．SX4 礫群除去後 SK22・23 検出状況（西より）

1．SK22・23 半掘状況（南西より）

2．SK22・23 完掘状況（東より）

1．SD1・2掘り下げ状況 1（東より）

2．SD1・2掘り下げ状況 2（東より）